茨城県教育財団文化財調査報告第405集

清水古墳群
神屋遺跡
神屋南遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
建設事業地内埋蔵文化財調査報告書

下　巻

平成28年3月

国土交通省関東地方整備局常総国道事務所
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第405集
清水古墳群
神屋遺跡
神屋南遺跡
下巻
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第405集

清水古墳群
神屋遺跡
神屋南遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
建設事業地内埋蔵文化財調査報告書

下　巻

平成28年3月

国土交通省関東地方整備局常総国道事務所
公益財団法人茨城県教育財団

目　　次

－下　巻－

第４章　神屋遺跡
　第３節　遺構と遺物
　　５　鎌倉・室町時代の遺構と遺物 …… 511
　　(1)　方形竪穴遺構 …… 511
　　(2)　地下式坑 …… 512
　　(3)　火葬施設 …… 514
　　(4)　粘土貼土坑 …… 515
　　(5)　土坑 …… 516
　　６　江戸時代の遺構と遺物 …… 518
　　(1)　道路跡 …… 518
　　(2)　土坑 …… 523
　　７　その他の遺構と遺物 …… 526
　　(1)　竪穴建物跡 …… 527
　　(2)　掘立柱建物跡 …… 527
　　(3)　墓坑 …… 528
　　(4)　土坑 …… 529
　　(5)　溝跡 …… 539
　　(6)　遺構外出土遺物 …… 541
第５章　神屋南遺跡 …… 551
　第１節　調査の概要 …… 551
　第２節　基本層序 …… 551
　第３節　遺構と遺物 …… 552
　　遺物包含層 …… 552
第６章　まとめ …… 571
付　章 …… 607
写真図版 …… PL 1 ～ PL102
抄　録
付　図

5　鎌倉・室町時代の遺構と遺物

当時代の遺構は，方形竪穴遺構１基，地下式坑１基，火葬施設１基，粘土貼土坑３基，土坑２基を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

(1)　方形竪穴遺構

第１号方形竪穴遺構（SK769）（第 409 図）

位置　調査Ｃ区のＤ４f0 区，標高 27 ｍほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状　長軸 2.92 ｍ，短軸 2.27 ｍの長方形である。長軸方向はＮ－３°－Ｅである。壁高は 59 ～ 72cmで，壁は外傾して立ち上がっている。

床　平坦で，硬化面は確認できなかった。

ピット　２か所。Ｐ１・Ｐ２は深さ 26cm・24cmで，配置から柱穴の可能性がある。

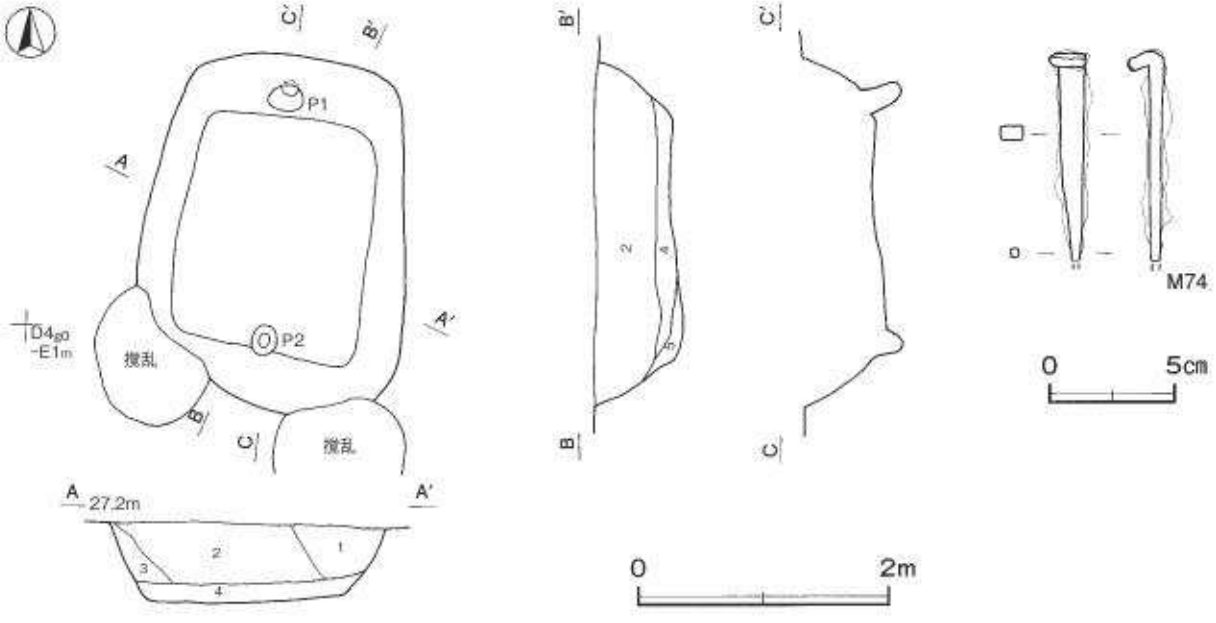
覆土　５層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

1　褐　　色　ロームブロック中量
2　黒 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
3　にぶい黄褐色　ロームブロック中量，焼土ブロック少量，炭化粒子微量
4　暗 褐 色　ロームブロック中量，焼土ブロック少量
5　暗 褐 色　ロームブロック少量

遺物出土状況　陶器片１点（端反皿），金属製品１点（釘）のほか，土師器片 18 点（坏５，甕 13），須恵器片５点（坏１，甕４）が出土している。M 74 は覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器や遺構の形状から，室町時代と考えられる。伴う遺物が少ないことや，床面が硬化していないことなどから，居住以外の用途が想定される。



第 409 図　第１号方形竪穴遺構・出土遺物実測図

第１号方形竪穴遺構出土遺物観察表（第 409 図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 74	釘	(8.4)	1.7	0.4 － 0.5	(17.1)	鉄	先端部欠損　断面長方形	覆土中	PL99

(2) 地下式坑

第1号地下式坑（SK516）（第410・411図）

位置　調査D区中央部のF 4d7区，標高28 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係　第125号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

軸長・軸方向　軸長は3.68 mで，軸方向はN－16°－Wである。

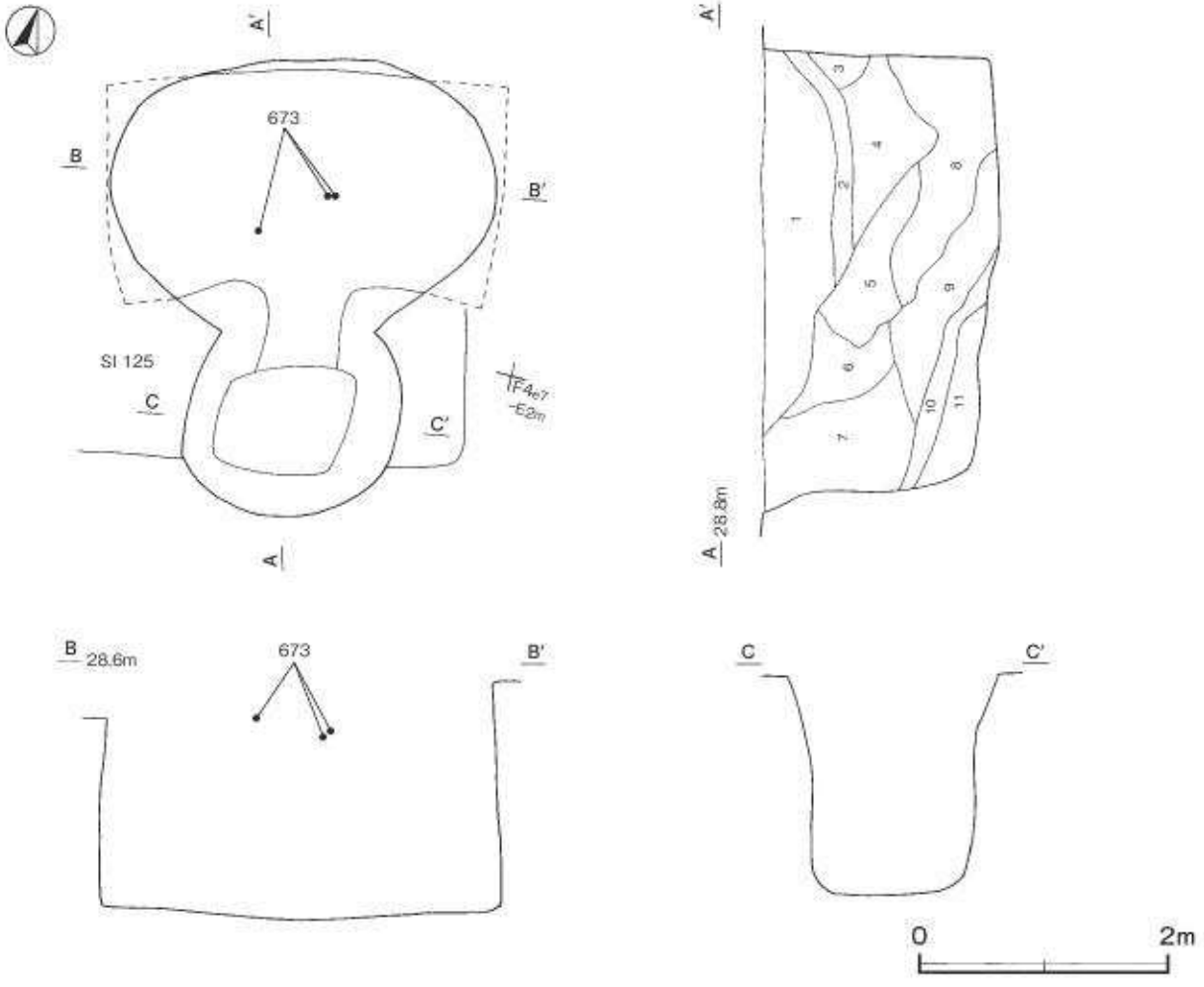
竪坑　主室南壁の南側に位置し，奥行1.50 m，横幅1.71 mの隅丸長方形である。主室との接続部は長さ0.65 mである。深さは1.76 mで，壁はほぼ直立している。接続部の天井部は崩落している。底面は平坦で，接続部で緩やかに下り主室に至っている。主室との高低差は14cmである。

主室　奥行1.72 m，横幅3.18 mの長方形である。天井部は崩落している。深さ1.90 mで，底面は平坦である。

覆土　11層に分層できる。第10・11層は竪坑側から流入した自然堆積層とみられる。第3～6・8・9層は，含有物と堆積状況から，壁及び天井部の崩落土と考えられる。第7層は，ロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。第1・2層は均質な黒褐色土が流入している堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

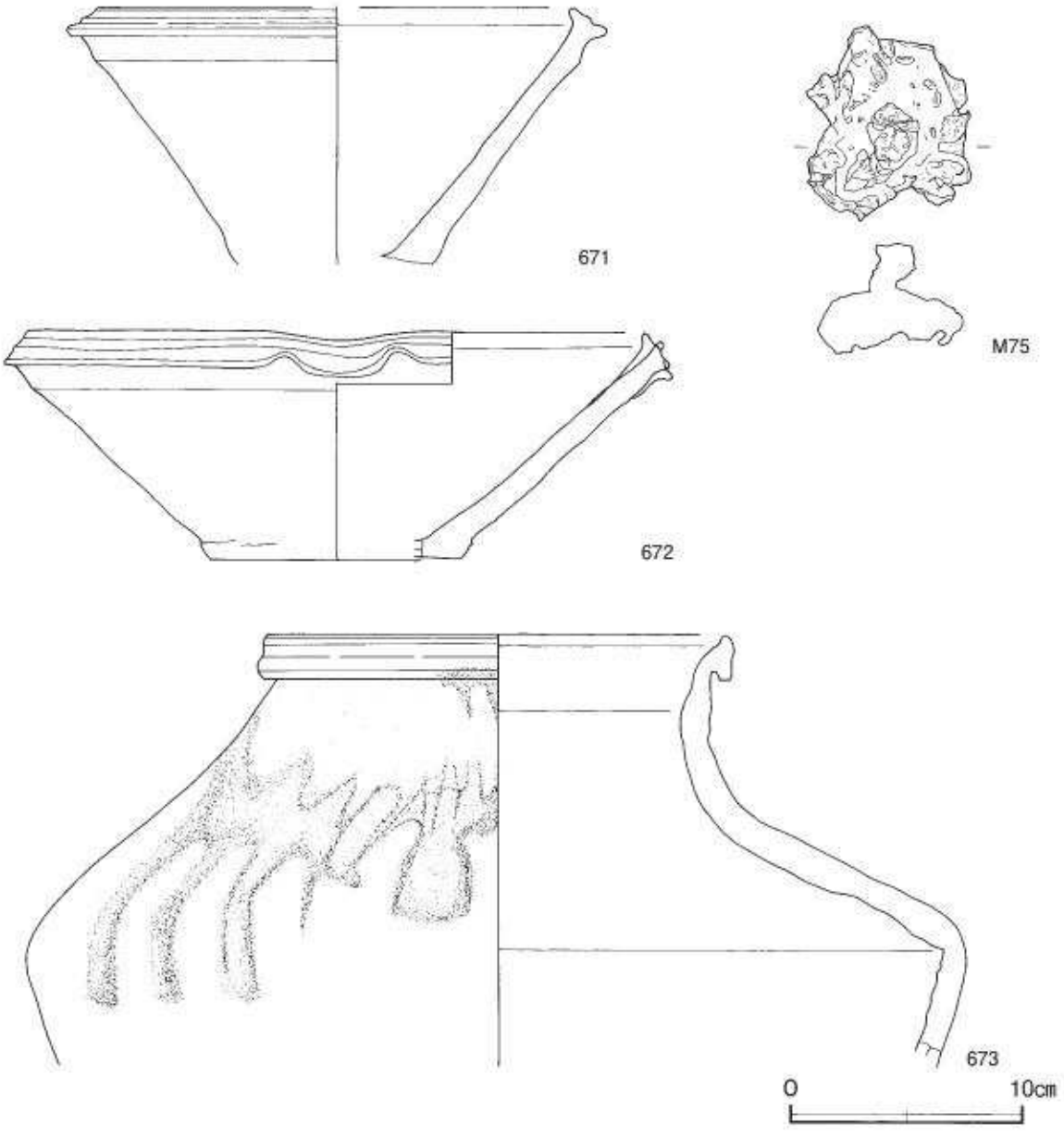
1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック多量
4　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子微量
5　にぶい黄褐色　ロームブロック少量
6　暗　褐　色　ロームブロック少量
7　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子微量
8　黄　褐　色　ロームブロック多量
9　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
10　極暗褐色　ローム粒子・炭化粒子微量
11　極暗褐色　ロームブロック・炭化粒子微量



第410図　第1号地下式坑実測図

遺物出土状況　陶器片 19 点（鉢 2，甕 17），粘土塊 6 点，鉄滓 1 点，雲母片岩 12 点のほか，土師器片 337 点（坏類 82，高台付椀 11，甕類 244），須恵器片 49 点（坏 18，高台付坏 2，蓋 1，甕 28）が，覆土中層から上層にかけて散在して出土している。671 ～ 673 はいずれも覆土上層（第 1 ・ 2 層）から出土していることから，廃絶後に流れ込んだものとみられる。

所見　時期は，出土土器 671 ～ 673 がいずれも天井部の崩落後に堆積した覆土上層から出土していることから，15 世紀後半には廃絶していたと考えられる。



第 411 図　第 1 号地下式坑出土遺物実測図

第 1 号地下式坑出土遺物観察表（第 411 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
671	陶器	鉢	[20.4]	(11.0)	－	長石・石英 にぶい黄橙	外・内面ナデ	－	常滑	覆土中 （上層）	10% 常滑 10 型式
672	陶器	片口鉢	[28.0]	9.4	[10.8]	長石・石英 灰黄褐	外・内面ナデ	－	常滑	覆土中 （上層）	10% 常滑 10 型式

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
673	陶器	甕	19.5	(18.6)	－	黒石・石英・白色粒子にぶい赤褐	外・内面ナデ	鉄釉	常滑	覆土上層	30%，PL77 常滑6b型式

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M75	鉄滓	8.3	7.1	4.8	154	砂鉄	着磁性なし　全体暗赤褐色　一部暗青灰色	覆土中	PL99

(3) 火葬施設

第1号火葬施設（SK514・534）（第412図）

位置　調査D区中央部のF 5e1区，標高28 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係　第102号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

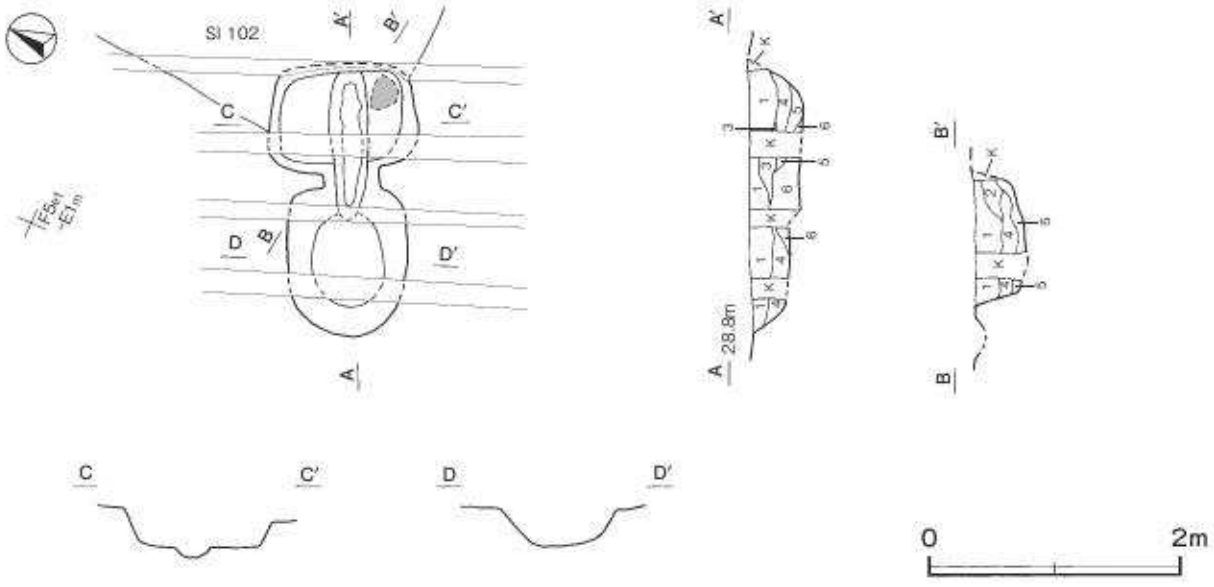
規模と形状　撹乱を受けているが，平面形は呂字形で，全長は2.18 mと推定できる。主軸方向はN－64°－Eである。焚口部の規模は奥行1.16 m，横幅0.94 m，確認面からの深さは33cmで，底面は燃焼部に向けて緩やかに下っている。通風溝の規模は，東西両端が撹乱を受けており，長さは1.28 mと推定できる。上幅0.44 m，下幅0.12～0.16 mである。確認面からの深さは42cmで，底面はほぼ平坦である。燃焼部の規模は，東端が撹乱を受けており，奥行は0.86 mと推定できる。横幅1.17 mの隅丸長方形で，主軸方向と直交している。確認面からの深さは33cmで，壁は外傾している。燃焼部の南東部で炭化材を確認した。

覆土　6層に分層できる。不規則な堆積状況や骨片等を含有していることから，埋め戻されている。

土層解説
1　暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
2　暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　極暗褐色　焼土粒子・炭化粒子・骨粉少量，ローム粒子微量
4　暗褐色　ロームブロック少量
5　暗褐色　ローム粒子・骨片微量
6　黒褐色　炭化物多量，焼土ブロック・骨片少量，ロームブロック微量

遺物出土状況　覆土下層から骨片と骨粉が，覆土中層から骨粉がそれぞれ出土している。そのほか，土師器片11点（坏7，甕4），須恵器片1点（甕）が出土している。

所見　時期は，遺構の形状から室町時代と考えられる。遺骸を火葬後に収骨しないまま埋葬した可能性がある。



第412図　第1号火葬施設実測図

(4) 粘土貼土坑

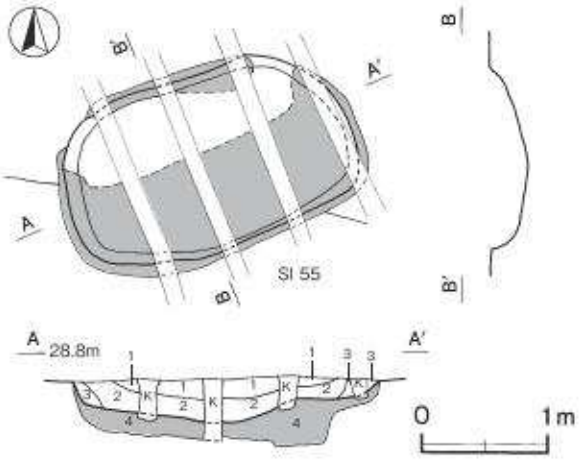
第1号粘土貼土坑（SK328）（第413図）

位置　調査D区中央部のF 5j1区，標高28 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係　第55号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状　掘方の規模は，長軸2.44 m，短軸1.53 mの隅丸長方形で，長軸方向はN－70°－Eである。深さは54cmで，北部及び北西部の一部を除き，底面と壁面に4～36cmの厚さで粘土が貼られている。粘土の内側は，長径2.30 m，短径1.36 mの楕円形で，深さは35cmである。底面は皿状で，壁は外傾している。

覆土　3層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。第4層は底面及び壁面に貼られた粘土層である。



第413図　第1号粘土貼土坑実測図

土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック少量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック少量
4　褐　灰　色　粘土ブロック多量，炭化粒子少量

遺物出土状況　陶器片2点（碗）のほか，土師器片35点（坏10，甕25），須恵器片2点（坏）が出土している。いずれも細片のため図示できない。

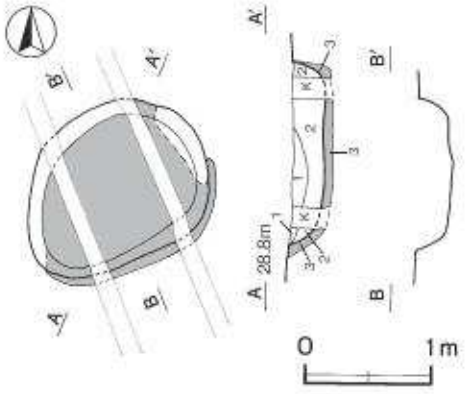
所見　時期は，出土土器や遺構の形状から，室町時代と考えられる。性格は，構造から水溜めの可能性があるが，詳細は不明である。

第2号粘土貼土坑（SK340）（第414図）

位置　調査D区中央部のF 4j0区，標高28 mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状　掘方の規模は，長径1.60 m，短径1.28 mの楕円形で，長径方向はN－41°－Eである。深さは34cmで，底面全体及び東部から南部にかけての壁面に，3～8 cmの厚さで粘土が貼られている。粘土の内側は，長径1.58 m，短径1.26 mの楕円形で，深さは28cmである。底面は平坦で，壁はほぼ直立している。

覆土　2層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示していることから，自然堆積である。第3層は底面および壁面に貼られた粘土層である。



第414図　第2号粘土貼土坑実測図

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・砂粒微量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量
3　褐　灰　色　粘土ブロック多量

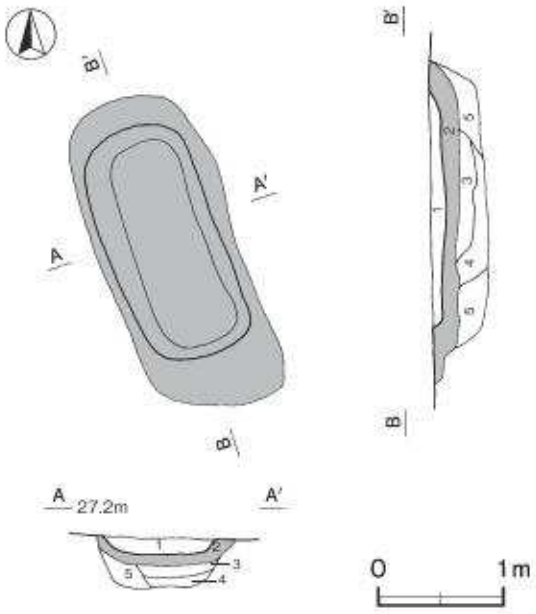
遺物出土状況　雲母片岩3点が出土している。

所見　時期は，他の第1・3号粘土貼土坑との位置関係や遺構の形状から，室町時代と考えられる。性格は，構造から水溜めの可能性があるが，詳細は不明である。

第３号粘土貼土坑（SK756）（第 415 図）

位置　調査Ｃ区のＤ５i1 区，標高 27 ｍほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状　掘方の規模は，長軸 2.62 ｍ，短軸 1.12 ｍの隅丸長方形で，長軸方向はＮ－ 20°－Ｗである。深さは 43cmで，底面から壁面にかけて全体を５～ 20cmの厚さで粘土が貼られている。粘土の内側は，長軸 1.86 ｍ，短軸 0.88 ｍの隅丸長方形で，深さは 13cmである。底面はほぼ平坦で，壁は外傾または緩やかに立ち上がっている。



第 415 図　第３号粘土貼土坑実測図

覆土　単一層である。均質な黒褐色土が堆積していることから，自然堆積とみられる。第２層は底面および壁面に貼られた粘土層，第３～５層は掘方への埋土である。

土層解説
1　黒　褐　色　炭化粒子微量
2　灰　白　色　粘土ブロック多量，ロームブロック・焼土粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量
4　にぶい黄褐色　ロームブロック中量
5　褐　　色　ロームブロック中量

遺物出土状況　陶器片２点（碗）が第１層中から出土している。いずれも細片のため図示できない。

所見　時期は，出土土器や遺構の形状から，室町時代と考えられる。性格は，構造から水溜めの可能性があるが，詳細は不明である。

表 17　鎌倉・室町時代粘土貼土坑一覧表

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	粘土の内側				掘方			覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)	底面	壁面	長径×短径(m)	深さ(cm)	断面			重複関係(古→新)
1	F5j1	N－70°－E	隅丸長方形	2.30 × 1.36	35	皿状	外傾	2.44 × 1.53	54	浅いU字状	人為	陶器	SI 55→本跡
2	F4j0	N－41°－E	楕円形	1.58 × 1.26	28	平坦	ほぼ直立	1.60 × 1.28	34	U字状	自然	雲母片岩	
3	D5i1	N－20°－W	隅丸長方形	1.86 × 0.88	13	ほぼ平坦	外傾緩斜	2.62 × 1.12	43	浅いU字状	自然	陶器	

(5)　土坑

第 317 号土坑（第 416 図）

位置　調査Ｄ区中央部のＦ５j8 区，標高 28 ｍほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状　長径 1.10 ｍ，短径 0.96 ｍの楕円形で，長径方向はＮ－ 59°－Ｅである。深さは 57cmで，底面はやや凹凸がある。壁は外傾している。

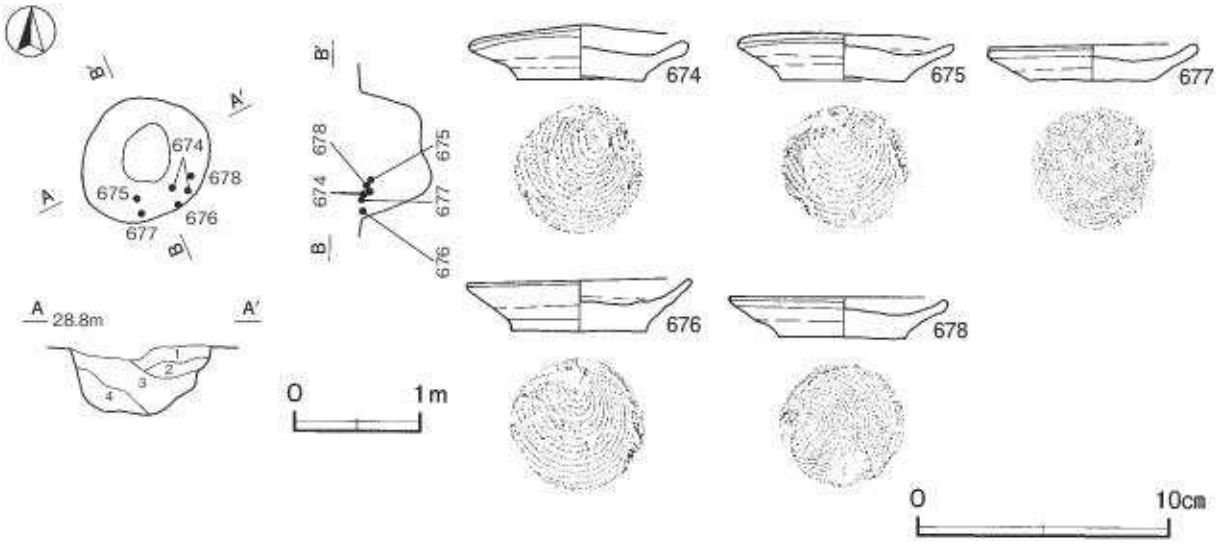
覆土　４層に分層できる。ロームや焼土のブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説
1　暗　褐　色　焼土粒子少量，炭化粒子微量
2　暗 赤 褐 色　焼土ブロック・炭化粒子中量
3　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量
4　黒　褐　色　ロームブロック中量

遺物出土状況　土師質土器片 109 点（小皿）のほか，縄文土器片３点（深鉢），土師器片 96 点（坏 26，高台付坏２，蓋１，高坏６，甕類 61），須恵器片５点（坏４，蓋１）が出土している。674 ～ 678 は，いずれも南東部から南部にかけて，覆土上層にあたる第１層中から出土している。破片が接合した 674・675・676 には２次焼成痕

がみられることや，破片の接合面が歪んでいること，覆土上層に焼土が含まれることなどから，別の場所で破砕され火熱を受けたものが，埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

所見　時期は，出土土器から13世紀代には廃絶していたと考えられる。覆土に焼土が含まれることから廃棄土坑の可能性もあるが，詳細は不明である。



第416図　第317号土坑・出土遺物実測図

第317号土坑出土遺物観察表（第416図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
674	土師質土器	小皿	7.9－8.5	2.1	5.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り	覆土上層	100%　PL77
675	土師質土器	小皿	8.0－8.5	1.9	5.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り	覆土上層	98%　PL77
676	土師質土器	小皿	8.9	2.2	5.3	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り	覆土上層	85%
677	土師質土器	小皿	8.2	1.5	5.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り	覆土上層	80%
678	土師質土器	小皿	8.5	1.6	5.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り	覆土上層	70%

第773号土坑（第417図）

位置　調査C区のD4c6区，標高27mほどの台地平坦部に位置している。

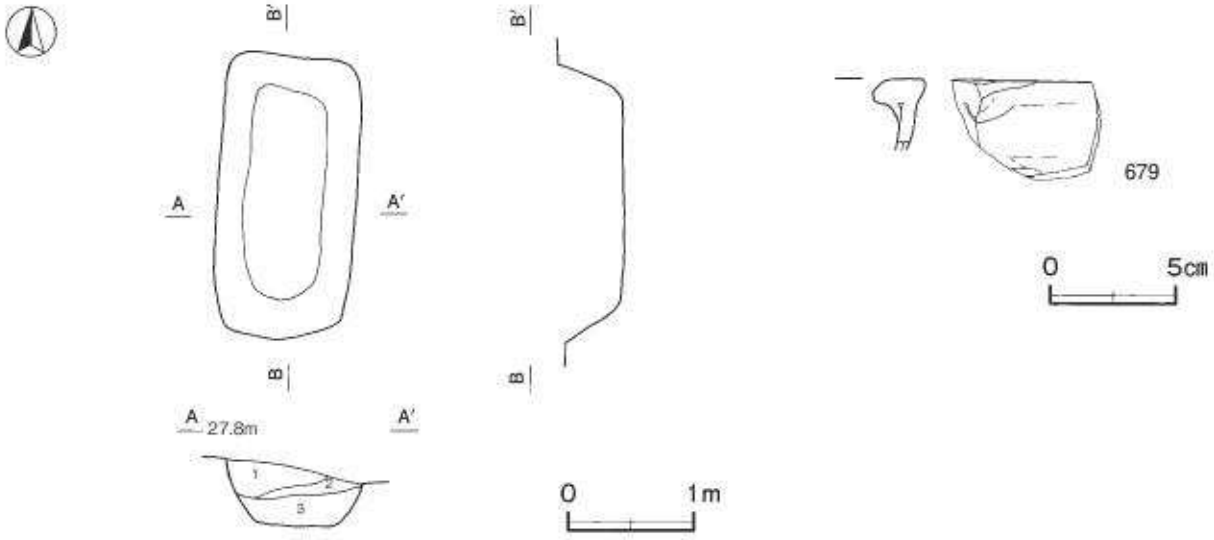
規模と形状　長軸2.23m，短軸1.10mの隅丸長方形で，長軸方向はN－5°－Eである。深さは49cmで，底面は平坦である。壁は外傾している。

覆土　3層に分層できる。ロームや焼土のブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説
1　暗褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子微量
2　にぶい黄褐色　ロームブロック中量
3　にぶい黄褐色　ロームブロック中量，焼土粒子少量

遺物出土状況　土師質土器片5点（鍋4，内耳鍋1）のほか，土師器片6点（甕）が出土している。679は覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器から15世紀代と考えられる。覆土に焼土が含まれることから廃棄土坑の可能性もあるが，詳細は不明である。



第 417 図　第 773 号土坑・出土遺物実測図

第 773 号土坑出土遺物観察表（第 417 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
679	土師質土器	内耳鍋	－	(4.0)	－	長石・石英・雲母・細礫	灰黄褐	普通	ナデ　内耳欠損	覆土中	5％

表 18　鎌倉・室町時代土坑一覧表

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径（m）	深さ（cm）					重複関係（古→新）
317	F 5 j 8	N－59°－E	楕円形	1.10 × 0.96	57	やや凹凸	外傾	人為	土師質土器	
773	D 4 e 6	N－5°－E	隅丸長方形	2.23 × 1.10	49	平坦	外傾	人為	土師質土器	

6　江戸時代の遺構と遺物

当時代の遺構は，道路跡 1 条，土坑 13 基を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

(1)　道路跡

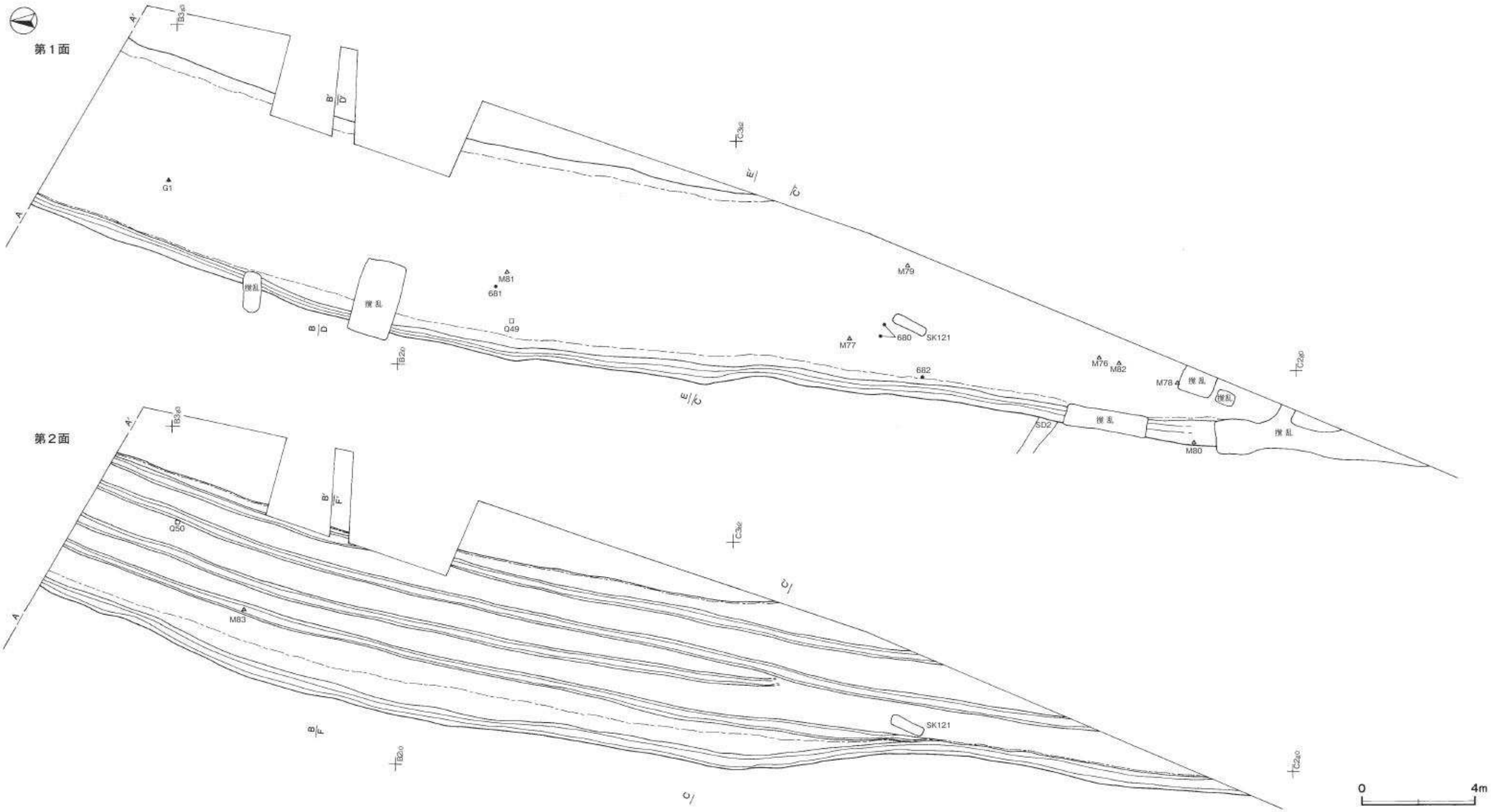
第 1 号道路跡（第 418 ～ 421 図）

位置　調査Ａ区北部から南部にかけてのＢ 2 f0 ～Ｃ 2 g9 区，標高 27 ｍほどの台地平坦部に位置している。

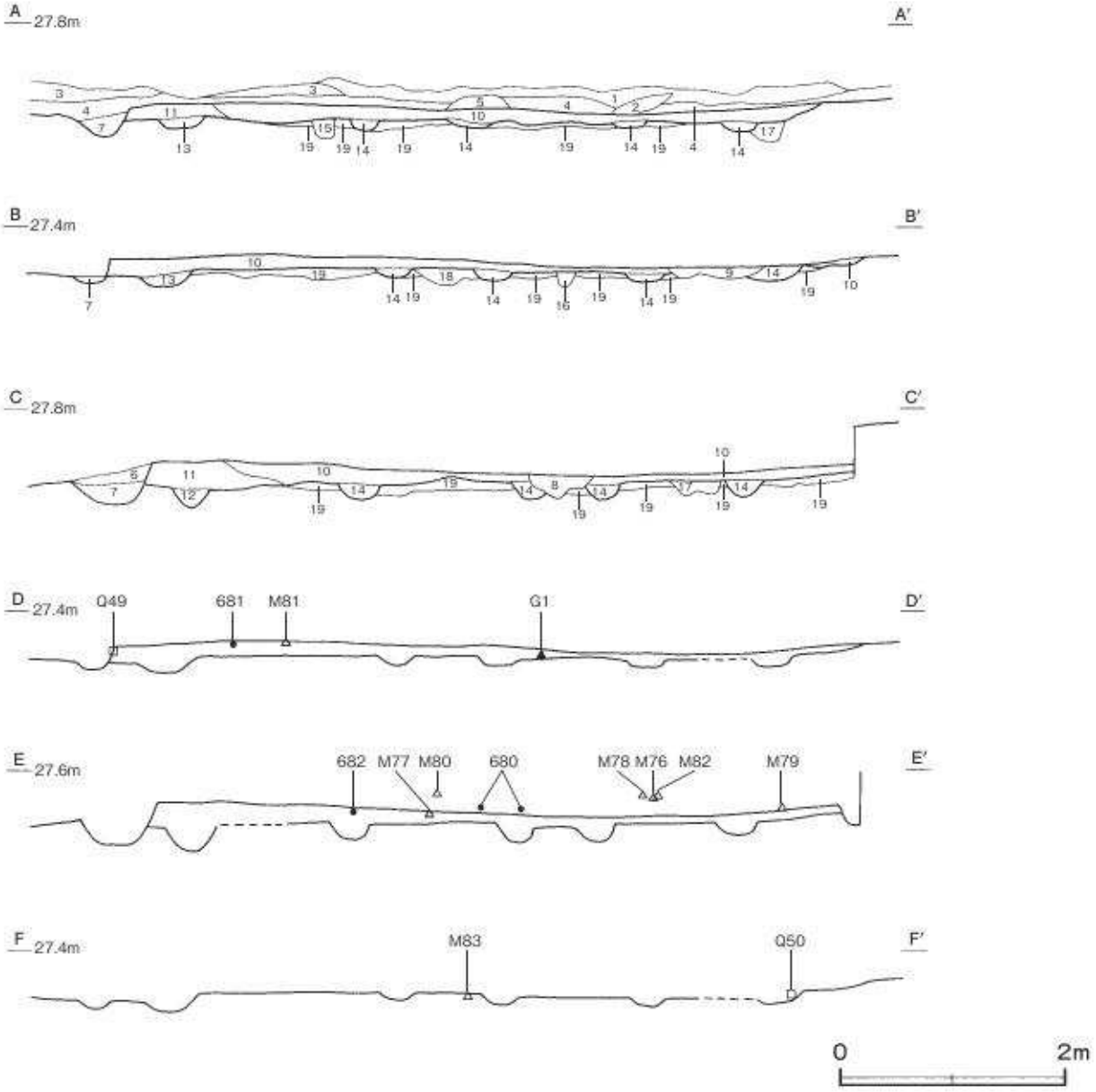
重複関係　第 11 号竪穴建物跡，第 239 ～ 249・251 ～ 257 号土坑，第 2 号溝跡を掘り込み，第 121 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　調査区域際のＣ 2 g9 区から北方向（Ｎ－11°－Ｅ）にほぼ直線状に延び，調査区域外に至っている。確認できた長さは 42 ｍほどである。路幅は 4.8 ～ 6.1 ｍで，掘方の断面形は逆台形を呈している。

覆土　19 層に分層できる。第 1 ～ 5 層は遺構廃絶後の堆積土である。第 10・11 層は硬化していることから，上面が第 1 面の路面として機能していた。第 8・9 層は路面の補修痕で，構築土と同様に硬化している。第 6・7 層は側溝の覆土である。第 19 層は硬化していることから，上面が第 2 面の路面として機能していた。第 15 ～ 18 層は路面の補修痕で，構築土と同様に硬化している。第 12・13 層は側溝，第 14 層は轍痕の覆土である。



第418図　第1号道路跡実測図(1)



第 419 図　第 1 号道路跡実測図 (2)

土層解説

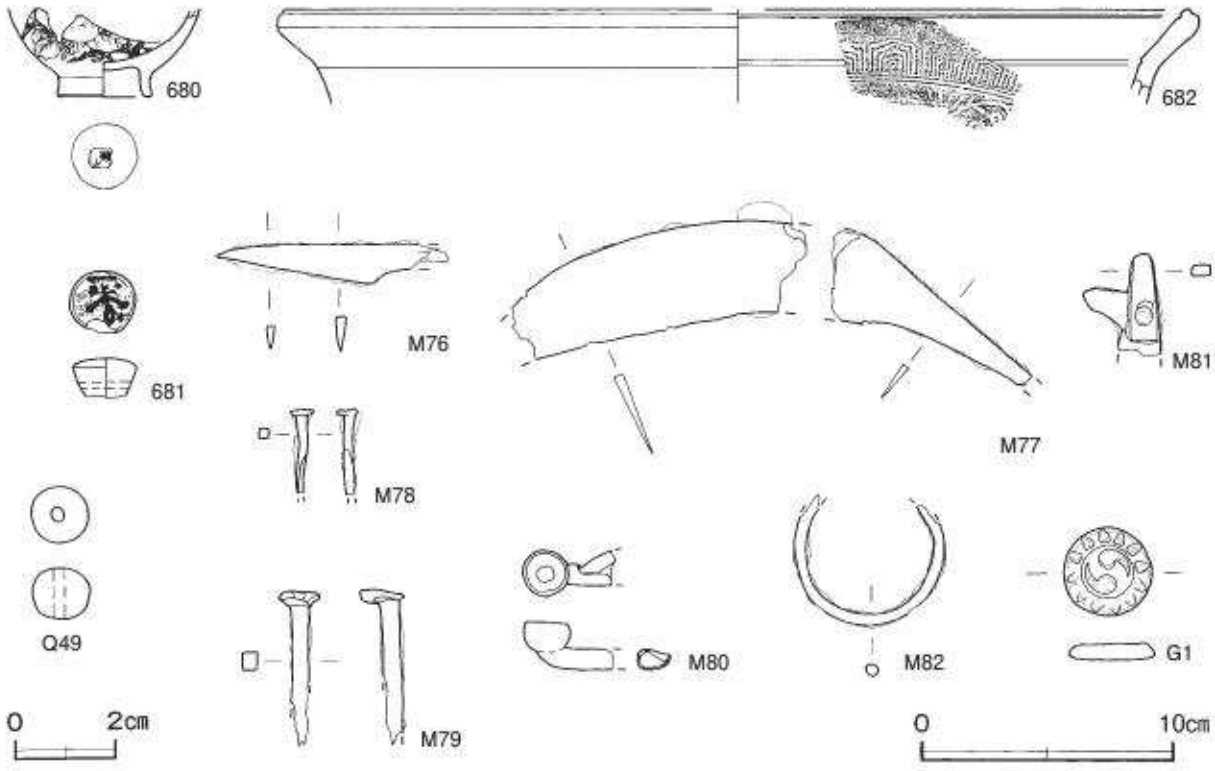
1　暗　褐　色　焼土ブロック・ローム粒子少量
2　暗　褐　色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子少量
3　暗　褐　色　ロームブロック中量
4　暗　褐　色　焼土粒子少量，ローム粒子微量
5　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック中量，炭化粒子微量
6　にぶい褐色　ロームブロック中量，炭化粒子少量
7　暗　褐　色　ロームブロック中量，粘土粒子少量
8　暗　褐　色　ロームブロック少量（締まり強）
9　暗　褐　色　粘土ブロック・ローム粒子少量（締まり強）
10　暗　褐　色　ローム粒子中量（締まり強）
11　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量（締まり強）
12　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子微量
13　暗　褐　色　ロームブロック少量
14　黒　褐　色　炭化物・ローム粒子少量
15　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量（締まり強）
16　暗　褐　色　ロームブロック微量（締まり強）
17　にぶい褐色　ロームブロック中量（締まり強）
18　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子微量（締まり強）
19　にぶい褐色　ローム粒子・炭化粒子微量（締まり強）

ア　第 1 面（第 420 図）

第 1 面で確認できた道路幅は 5.6 ～ 6.1 m で，北端から南端にかけて，第 2 面の上部に位置している。路面はローム粒子を含む暗褐色土（第 10・11 層）で構築されている。硬化面は全域で確認できた。

遺物出土状況　土師質土器片 12 点（擂鉢 1，甕 11），瓦質土器片 5 点（鍋 2，鉢 2，甕 1），陶器片 71 点（碗 9，蓋 4，擂鉢 12，香炉 3，甕類 43），磁器片 193 点（碗類 118，皿類 56，蓋 19），石製品 1 点（数珠玉），金属製品 13 点（刀子 2，鎌 2，釘 4，煙管 1，不明 4），ガラス製品 1 点（おはじき），瓦片 5 点（平瓦）のほか，縄文土器片 7 点（深鉢），土師器片 209 点（坏類 37，高台付椀 3，甕類 169），須恵器片 35 点（坏 3，高台付坏 1，甕類 31），土製品 1 点（土玉）が，構築土および覆土中の全域から出土している。680・682 は南部，681 は中央部の構築土中からそれぞれ出土している。

所見　機能していた時期は，構築土に混入している陶磁器の特徴から，17 世紀後半から 18 世紀前半頃で，路面の堆積土に混入している煙管の形式から，18 世紀後半までには廃絶したと考えられる。



第 420 図　第 1 号道路跡（第 1 面）出土遺物実測図

第 1 号道路跡（第 1 面）出土遺物観察表（第 420 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文　様・特　徴	釉薬	産　地	出土位置	備　考
680	磁器	碗	－	(3.5)	3.5	精緻・灰白	外面草花文　底部銘「麗山」	透明釉	肥前	第 1 面 構築土	20%
681	磁器	蓋	－	(1.6)	－	精緻・にぶい黄橙	つまみ部草花文　銘不明	灰釉	瀬戸・美濃	第 1 面 構築土	5%
682	陶器	大鉢	[36.0]	(3.8)	－	精緻・明褐	三島手	錆釉	唐津	第 1 面 構築土	5%

番号	器　種	径	厚さ	孔径	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
Q 49	数珠玉	1.1	1.0	0.2	1.76	滑石	十字　一方向からの穿孔	第 1 面 構築土	PL96

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
M 76	刀子	(9.2)	(1.6)	0.3－0.4	(17.6)	鉄	茎部欠損　片関　断面三角形	堆積土中	PL97
M 77	鎌	(20.6)	(6.5)	0.2－0.4	(53.7)	鉄	刃部・茎部欠損　断面三角形	第 1 面 構築土	
M 78	釘	(3.4)	0.9	0.3	(2.60)	鉄	先端部欠損　断面方形	堆積土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 79	釘	(6.1)	1.6	0.7	(18.9)	鉄	先端部欠損　断面方形	第1面構築土	
M 80	煙管	(3.6)	1.8	1.9	(7.80)	銅	雁首部　火皿径 1.65cm　外面緑青	堆積土中	古泉編年Ⅳ期 PL99
M 81	不明	(3.0)	1.1～3.0	0.4	(11.9)	鉄	鉄状の金具で留めている　断面長方形	第1面構築土	PL99
M 82	不明	(5.1)	6.0	0.5	(11.6)	鉄	環状　断面円形	堆積土中	PL99

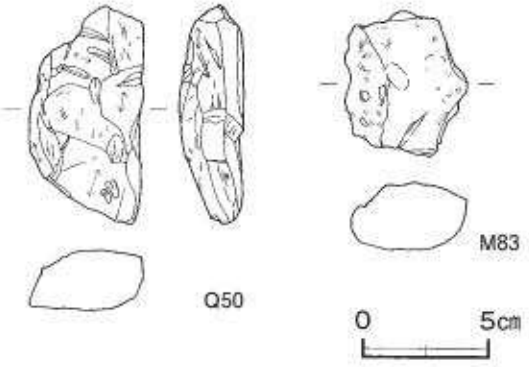
番号	器種	径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
G 1	おはじき	3.5	0.7	15.2	ガラス	青色　三角形状の文様 12 か所と中央に二つ巴文	第1面構築土	

イ　第2面（第 421 図）

第２面で確認できた道路幅は 4.8 ～ 4.9 ｍで，北端から南端にかけてローム層を掘り抜き，切り通し状になっている。路面は，ローム粒子を含むにぶい褐色土（第 19 層）で構築されている。硬化面は全域で確認できた。轍痕は２組確認し，轍痕の幅は 24 ～ 48cmで，対をなしている轍の間隔は 1.0 ～ 1.4 ｍほどである。

遺物出土状況　土師質土器片６点（甕），瓦質土器片２点（鍋，鉢），陶器片 38 点（碗４，蓋２，擂鉢６，甕類 26），磁器片 33 点（碗類 22，皿類 11），石器１点（砥石），金属製品７点（釘４，不明３），鉄滓１点のほか，土師器片 77 点（坏類 24，甕類 53），須恵器片７点（甕）が，構築土の全域から出土している。陶磁器片はいずれも細片のために図示できなかった。Q 50・M 83 は，いずれも北部の構築土中から出土している。

所見　機能していた時期は，第１面の構築状況から 17 世紀前半で，17 世紀後半には廃絶したと考えられる。その後第１面が構築されている。



第 421 図　第１号道路跡（第２面）出土遺物実測図

第１号道路跡（第２面）出土遺物観察表（第 421 図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 50	砥石	8.7	4.5	2.5	101	凝灰岩	砥面４面　他は破断面	第２面構築土	PL95

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 83	鉄滓	5.8	4.9	2.7	119	砂鉄	着磁性なし　暗青灰色	第２面構築土	

(2)　土坑

江戸時代の土坑は 13 基確認している。ここでは特徴ある１基について記述し，その他については一覧表と実測図を掲載する。

第 108 号土坑（第 422 図）

位置　調査Ａ区南部のＣ２d3 区，標高 27 ｍほどの台地平坦部に位置している。

重複関係　第 109・135 号土坑を掘り込んでいる。

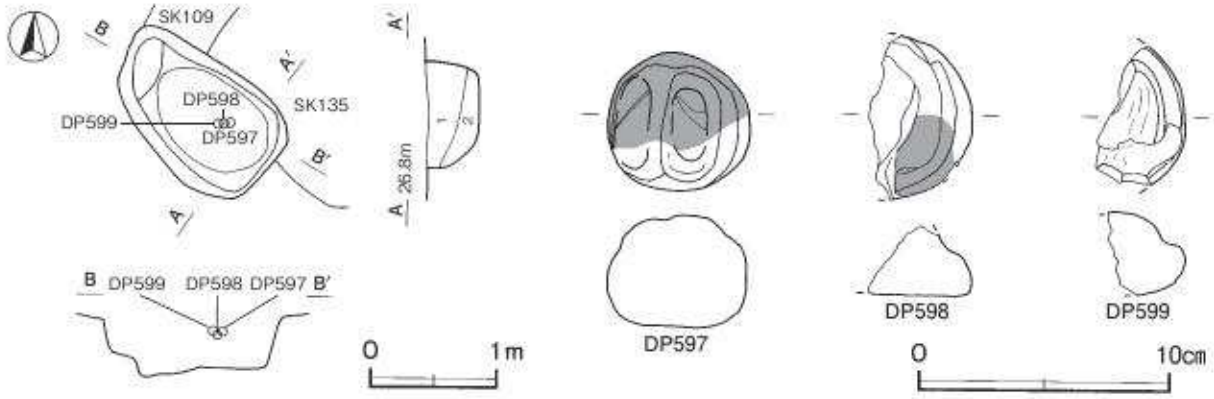
規模と形状　長軸 1.44 m，短軸 0.95 mの長方形で，長軸方向はN－53°－Wである。深さは 42cmで，底面は平坦である。壁は外傾している。

覆土　2層に分層できる。両層にロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子・粘土粒子少量　　2　暗　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　陶器片3点（碗），土製品3点（不明）が出土している。DP597 ～ DP599 は，いずれも中央部の覆土中層から出土しており，埋め戻しの段階で投棄されたものとみられる。

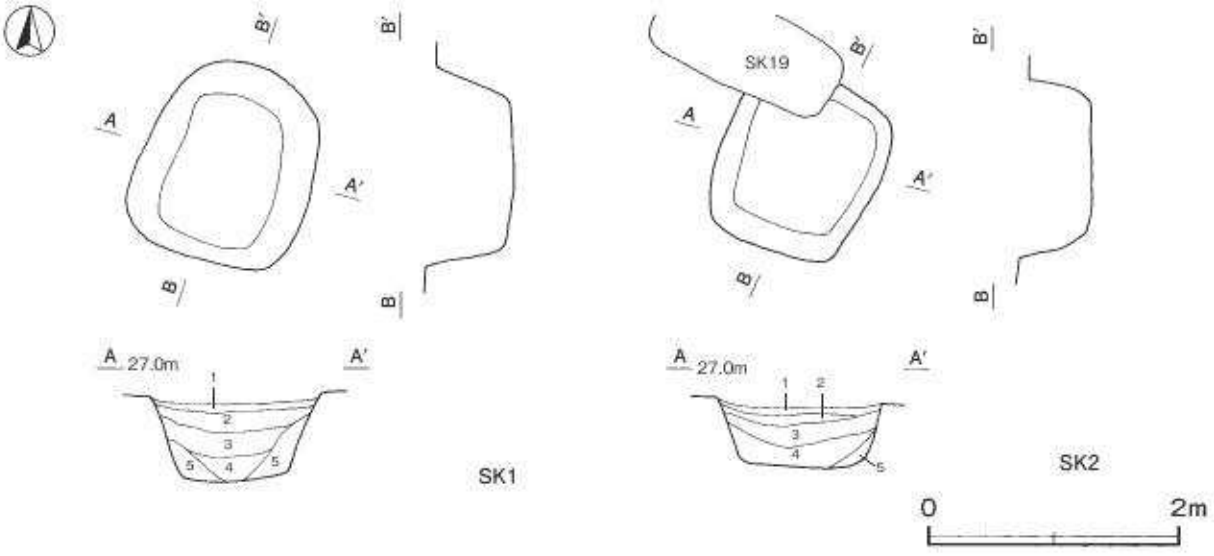
所見　時期は，出土土器や重複関係から，江戸時代と考えられる。性格は不明であるが，出土した土製品が陰物と想定できることから，何らかの祭祀的行為が行われたと考えられる。



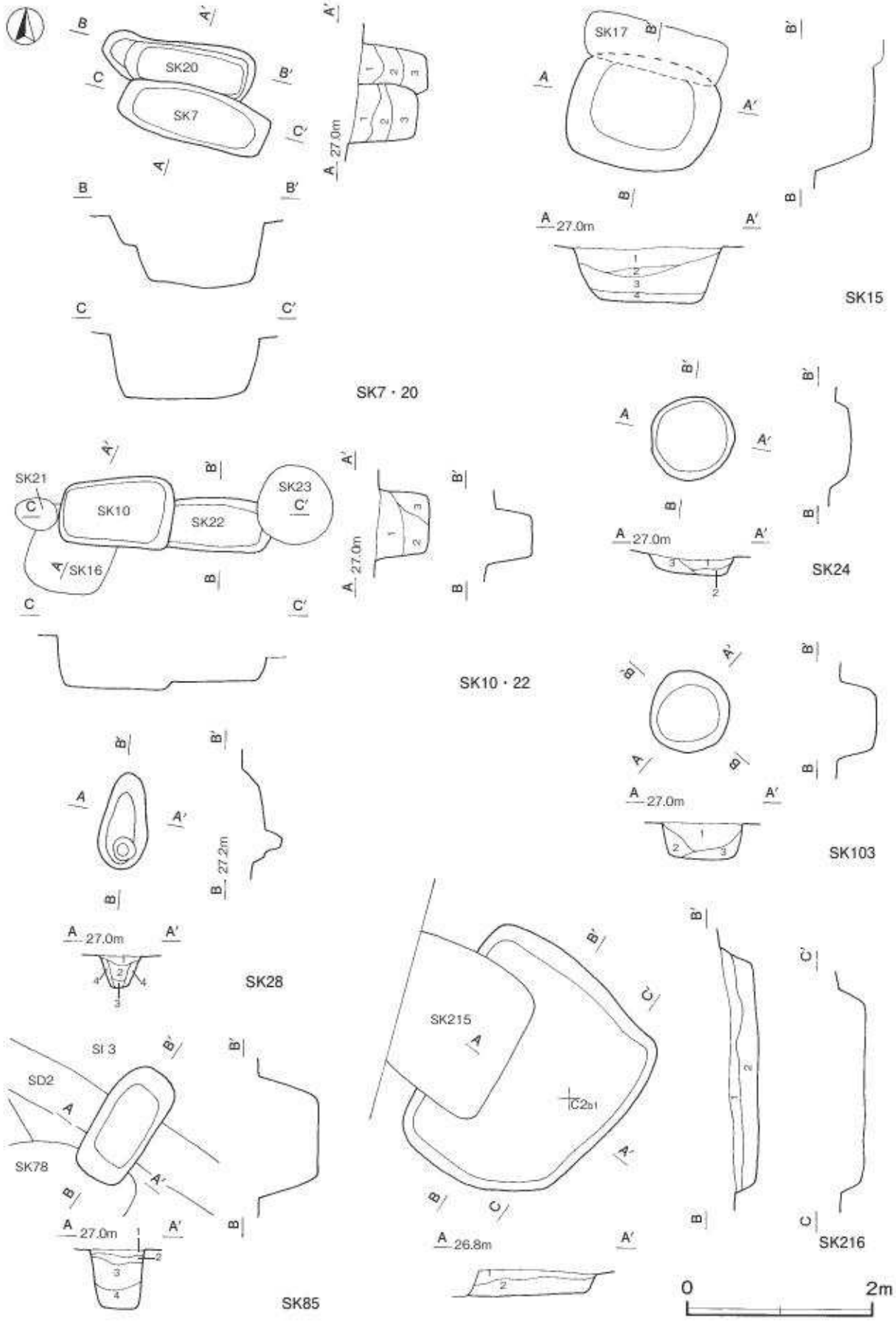
第 422 図　第 108 号土坑・出土遺物実測図

第 108 号土坑出土遺物観察表（第 422 図）

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
DP597	不明	5.4	5.6	4.4	107	長石・石英・雲母	にぶい橙	ナデ　陰物。	覆土中層	取付着 PL93
DP598	不明	(6.5)	(4.1)	(2.7)	(50.0)	長石・石英・雲母	にぶい橙	欠損　ナデ　陰物。	覆土中層	取付着
DP599	不明	(5.6)	(3.6)	(3.2)	(43.8)	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい黄橙	欠損　ナデ　陰物。	覆土中層	



第 423 図　江戸時代土坑実測図 (1)



第 424 図　江戸時代土坑実測図 (2)

第1号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化物微量
3　暗　褐　色　ロームブロック中量
4　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
5　極暗褐色　ロームブロック微量

第2号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化物少量
3　暗　褐　色　ロームブロック中量
4　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
5　極暗褐色　ロームブロック少量

第7号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量
3　暗　褐　色　ロームブロック中量

第10号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック多量，焼土粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量
3　褐　　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量

第15号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子中量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量
4　暗　褐　色　ロームブロック中量

第20号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量
3　黒　褐　色　ロームブロック中量

第24号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，粘土粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック少量
3　にぶい黄褐色　ロームブロック中量

第28号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量
3　褐　　色　ロームブロック中量
4　黒　褐　色　ローム粒子少量

第85号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック中量
2　褐　　色　ロームブロック多量
3　暗　褐　色　ローム粒子多量
4　黒　褐　色　ロームブロック少量

第103号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量
3　暗　褐　色　粘土粒子中量，ローム粒子微量

第216号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化物・焼土粒子微量

表19　江戸時代土坑一覧表

番号	位置	長軸（径）方向	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ（cm）	底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係（古→新）
1	B2f2	N－20°－E	隅丸長方形	1.59 × 1.40	70	平坦	外傾	人為	陶器	
2	B2g3	N－20°－E	隅丸長方形	1.43 × 1.26	58	平坦	外傾	人為	陶器	本跡→SK19
7	B2g5	N－75°－W	隅丸長方形	1.60 × 1.60	70	平坦	直立	人為	陶器	SK20→本跡
10	B2g7	N－87°－W	長方形	1.21 × 0.77	55	平坦	直立	人為	陶器，鉄製品	SK16・22→本跡
15	B2g5	N－75°－W	［方形・長方形］	1.58 ×（1.06）	57	平坦	外傾	人為	陶器	SK17新旧不明
20	B2g5	N－78°－W	隅丸長方形	1.65 ×（0.50）	74	平坦	外傾	人為		本跡→SK 7
22	B2g7	N－87°－W	［長方形］	（1.07） × 0.56	47	平坦	外傾	人為		本跡→SK10・23
24	B2g5	－	円形	0.91 × 0.88	18	平坦	外傾	人為	土師質土器	
28	B2i5	N－7°－E	楕円形	1.03 × 0.55	16	平坦	外傾 緩斜	人為	陶器	
85	C2b6	N－31°－E	隅丸長方形	1.34 × 0.63	64	平坦	外傾	人為	陶器	SI 3，SK78，SD 2→本跡
103	C2d4	－	円形	0.88 × 0.85	39	平坦	外傾	人為	土師質土器	
108	C2d3	N－53°－W	長方形	1.44 × 0.95	42	平坦	外傾	人為	陶器，土製品	SK109・135→本跡
216	C1a0	N－36°－E	不整長方形	2.64 × 2.32	24	平坦	外傾	人為	陶器，石製品	本跡→SK215

7　その他の遺構と遺物

今回の調査で，伴う遺物が出土していないことから，時期が明らかでない竪穴建物跡1棟，掘立柱建物跡1棟，墓坑1基，土坑585基，溝跡14条を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第138号竪穴建物跡（第425図）

位置　調査D区北部のE 4 g2区，標高28 mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状　長軸2.51 m，短軸2.47 mの方形で，主軸方向はN－58°－Eである。壁は高さ3 cmで，外傾して立ち上がっている。

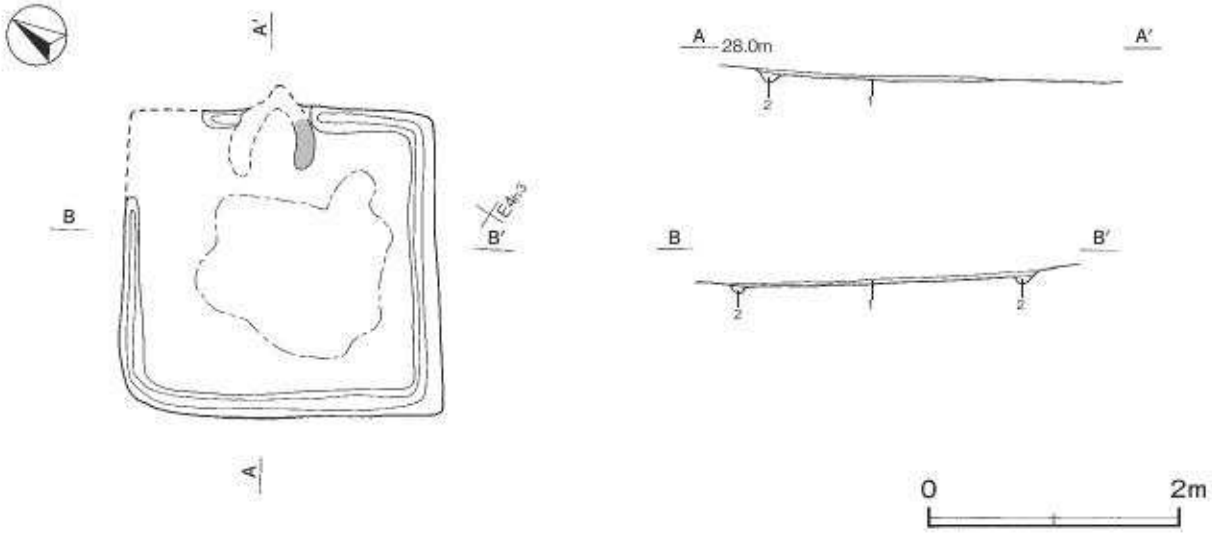
床　平坦で，中央部から東部にかけて踏み固められている。確認できた壁下には壁溝が巡っている。

竈　右袖部と火床面が遺存していることから，北東壁の中央部に付設されていたと推定できる。

覆土　2層に分層できる。薄いことから，堆積状況は不明である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量

所見　竈を有していることから，古墳時代後期から平安時代のいずれかの時期である。



第425図　第138号竪穴建物跡実測図

(2) 掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡（第426図）

位置　調査D区南部のG 5 b8～G 5 c9区，標高28 mほどの台地平坦部に位置している。

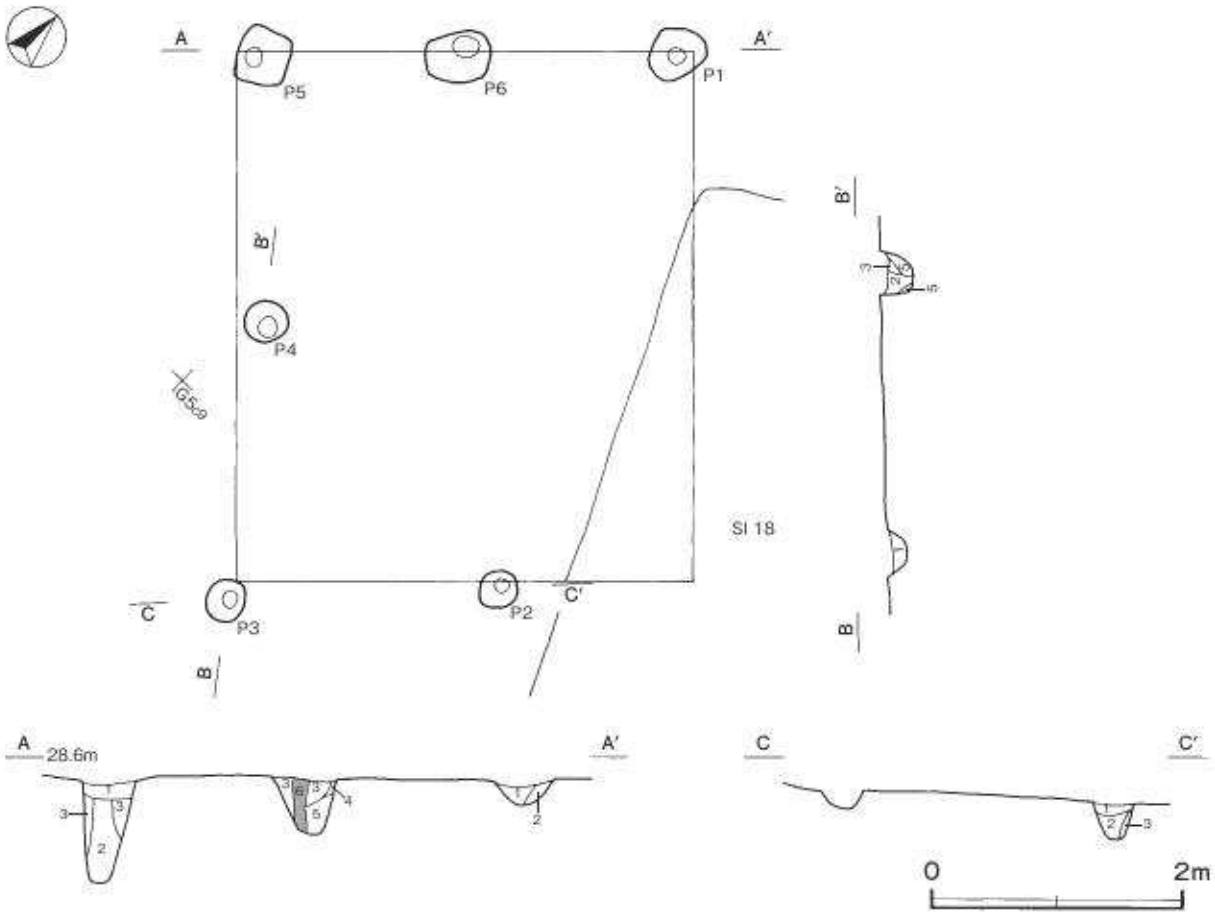
重複関係　第18号竪穴建物跡と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と構造　桁行2間，梁行2間の側柱建物跡で，桁行方向がN－43°－Wの南北棟である。規模は，桁行4.2 m，梁行3.6 mで，面積は15.12㎡である。柱間寸法は，桁行が2.1 m（7尺）で，梁行は1.8 m（6尺）～2.1 m（7尺）である。柱筋は，西平側でややばらつきが見られるほかは，ほぼ揃っている。

柱穴　6か所。平面形は円形または楕円形で，長径35～53cm，短径31～40cmである。深さは15～80cmで，掘方の壁はP 1・P 3は緩やかに立ち上がり，P 2は外傾，P 4～P 6は外傾またはほぼ直立している。第1・2層は柱抜き取り後の堆積層，第3～5層は埋土，第6層は柱痕跡である。

柱穴土層解説（各柱穴共通）
1　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック中量
4　にぶい黄褐色　ロームブロック中量
5　褐　　色　ロームブロック少量
6　黒　褐　色　ローム粒子少量

所見　土器が出土していないことや，重複関係が不明であることなどから，時期は不明である。

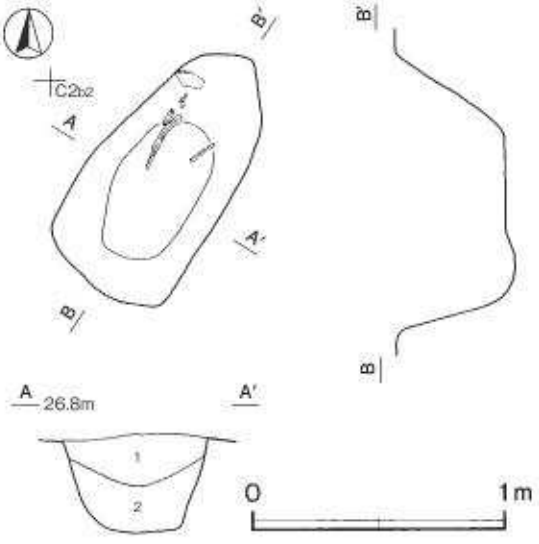


第 426 図　第２号掘立柱建物跡実測図

(3)　墓坑

第１号墓坑（SK179）（第 427 図）

位置　調査Ａ区南部のＣ２b2 区，標高 27 ｍほどの台地平坦部に位置している。



第 427 図　第１号墓坑実測図

規模と形状　長径 1.10 ｍ，短径 0.56 ｍの楕円形で，長径方向はＮ－ 34°－Ｅである。深さは 43㎝で，底面は平坦である。北西壁と南東壁は外傾して，北東壁と南西壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土　２層に分層できる。両層にロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック微量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量

遺物出土状況　人骨のほか，土師器片６点（坏２，甕４），鉄滓２点が出土している。

所見　人骨の出土状況から屈葬の可能性があるが，詳細は不明である。江戸時代以前と考えられるが，伴う土器が出土していないことから，明確な時期は不明である。

(4) 土坑（付図）

その他の土坑585基については，一覧表のみを掲載する。

表20　その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ（cm）	底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係（古→新）
3	B2g4	N－71°－W	長方形	1.20 × 0.68	65	平坦	外傾	人為	土師器	
4	B2h7	－	不整円形	1.28 × 1.21	56	平坦	外傾	人為	土師器	SD 1→本跡
5	B2j6	N－36°－E	不整楕円形	0.65 × 0.54	32	やや凹凸	外傾	人為	土師器	SI 7，SD 1→本跡
6	B2g4	N－70°－W	長方形	1.72 × 0.68	62	有段	外傾	人為	土師器	SK18→本跡
9	B2f9	N－42°－W	楕円形	0.89 × 0.64	28	皿状	緩斜	人為		
11	B2f0	N－38°－W	楕円形	1.30 × 0.52	38	平坦	外傾	人為		
13	B2f3	N－69°－W	長方形	1.98 × 0.97	90	平坦	直立 内傾	人為		SK14→本跡
14	B2f2	N－73°－W	[方形・長方形]	0.63 ×（0.43）	65	平坦	直立	－		本跡→SK13
16	B2g6	N－17°－E	隅丸方形	0.92 × 0.87	42	平坦	外傾	人為	土師器	本跡→SK10・21
17	B2g5	N－76°－W	長方形	1.57 × 0.53	62	平坦	直立	人為		SK15 新旧不明
18	B2g4	N－20°－E	長方形	1.52 × 1.30	52	平坦	外傾	－	土師器	本跡→SK 6
19	B2f3	N－66°－W	長方形	1.55 × 0.64	68	平坦	直立 外傾	－		SK 2→本跡
21	B2g6	N－82°－W	楕円形	0.46 × 0.35	25	平坦	外傾	人為	土師器	SK16→本跡
23	B2g7	－	円形	0.86 × 0.81	20	平坦	外傾	人為	土師器	SK22→本跡
25	B2g6	N－80°－W	長方形	1.16 × 0.50	54	平坦	内傾	人為	須恵器	
27	B2f0	N－75°－E	楕円形	0.76 × 0.37	26	平坦	緩斜	人為	土師器，須恵器	SD 3→本跡
30	B2i6	N－36°－E	楕円形	2.10 × 1.28	39	平坦	外傾 緩斜	人為		SD 1→本跡
32	B2h6	－	[円形・楕円形]	1.05 ×（0.60）	16	平坦	外傾	人為		本跡→SK33
33	B2h6	N－36°－W	不整楕円形	1.06 × 0.92	40	平坦	外傾	人為		SK32→本跡
34	B2g8	N－70°－E	長方形	1.04 × 0.46	25	平坦	外傾	人為		SK35→本跡
35	B2g8	N－62°－E	[長方形]	[1.34）×［0.68]	30	平坦	外傾	人為		本跡→SK34・36
36	B2g8	N－85°－W	長方形	1.28 × 0.78	42	平坦	直立 外傾	人為	土師器	SK35→本跡
42	B2g9	N－22°－E	長方形	1.20 × 0.82	80	有段	外傾	人為	土師器	
46	C2g4	N－82°－W	楕円形	0.68 × 0.48	22	平坦	外傾	人為		SI 6→本跡
48	E3e6	N－56°－W	楕円形	0.54 × 0.34	26	皿状	直立 外傾	自然	土師器	SI 13，SK72→本跡
49	B2h4	N－25°－E	方形	1.93 × 1.78	76	平坦	直立 外傾	人為	須恵器	SI 8→本跡
50	B2j6	N－0°	楕円形	1.04 × 0.84	19	平坦	外傾	不明		SI 7→本跡
51	C2f6	N－49°－W	楕円形	（0.55）× 0.53	36	平坦	外傾 緩斜	人為		本跡→SK52
52	C2f6	N－1°－E	楕円形	0.39 × 0.35	11	平坦	外傾	人為		SK51・53→本跡
53	C2f6	N－26°－E	[楕円形]	0.61 ×（0.46）	20	皿状	外傾 緩斜	自然		本跡→SK52
59	B2f9	N－45°－E	楕円形	0.70 × 0.55	25	皿状	緩斜	人為	土師器	
60	C2c5	N－48°－W	楕円形	0.56 × 0.40	32	皿状	外傾	人為	土師器	
61	C2a4	N－60°－W	長方形	1.42 × 0.74	51	平坦	直立 外傾	人為		SI 7，SK62 SD 2→本跡
62	C2a4	N－68°－W	長方形	2.09 × 0.91	33	平坦	外傾 緩斜	人為		本跡→SK61
63	B2h0	N－64°－W	楕円形	1.20 × 0.80	28	皿状	緩斜	人為		
64	B2b0	N－8°－E	楕円形	0.38 × 0.28	24	凹凸	直立 外傾	人為		
65	B2i9	－	円形	0.92 × 0.90	18	傾斜	緩斜	人為		
66	B2i9	－	円形	0.56 × 0.54	68	皿状	外傾	人為	土師器	
67	B2j9	N－4°－W	不定形	1.52 × 1.02	38	凹凸	緩斜	人為	土師器	
68	C2a8	N－88°－W	楕円形	1.16 × 0.78	42	凹凸	緩斜	人為	土師器	
69	C2c4	N－9°－W	楕円形	3.50 × 0.97	22	平坦	緩斜	人為		
70	C2a3	N－69°－W	長方形	1.82 × 0.67	50	平坦	外傾	－		SD 2→本跡
71	B2j3	N－60°－W	長方形	1.83 × 0.68	57	平坦	外傾	－		SD 2→本跡
73	C2h5	N－10°－W	不定形	1.14 × 0.92	68	皿状	外傾	人為		SK74→本跡
74	C2h5	N－72°－W	不定形	1.08 × 0.64	28	皿状	外傾 緩斜	人為		本跡→SK73
75	C2d6	N－44°－E	長方形	3.64 × 2.96	29	平坦	外傾 緩斜	人為	土師器，須恵器	
76	C2b6	－	円形	0.89 × 0.81	32	平坦	緩斜	自然	土師器	SI 3→本跡
77	C2a6	N－30°－W	楕円形	1.00 × 0.76	26	平坦	外傾	人為	土師器	SI 3・14→本跡
79	B2i6	N－56°－W	楕円形	0.86 × 0.50	42	皿状	外傾	自然	土師器	
80	C2a6	N－15°－W	楕円形	1.58 × 1.42	23	平坦	緩斜	人為	土師器	SI 3・14→本跡→SK81
81	C2a6	N－18°－E	楕円形	1.24 × 0.71	22	平坦	外傾	人為	土師器	SI 3・14，SK80→本跡
86	B2j6	N－26°－E	楕円形	0.80 × 0.71	47	皿状	緩斜	人為	土師器，須恵器	

番号	位置	長軸方向	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ（cm）	底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係（古→新）
89	B2j6	N－38°－W	楕円形	0.64 × 0.33	36	有段	外傾	自然	土師器	
90	B2j6	N－34°－W	楕円形	0.53 × 0.38	20	平坦	外傾	自然	土師器	
92	C2c6	－	円形	0.67 × 0.67	34	平坦	外傾	人為	土師器	
93	C2c6	－	円形	0.84 × 0.79	32	平坦	外傾	人為	土師器	
94	C2d6	－	円形	0.93 × 0.92	28	平坦	緩斜	人為		
95	C2b5	N－19°－W	楕円形	0.84 × 0.57	46	平坦	外傾	人為		
97	C2d6	N－35°－E	楕円形	1.56 × 1.25	37	平坦	緩斜	自然		
98	C2e6	N－16°－E	楕円形	0.94 × 0.77	30	皿状	緩斜	自然		
99	C2e7	N－32°－W	楕円形	1.03 × 0.93	56	平坦	外傾	自然	土師器	
100	C2e7	－	円形	0.93 × 0.88	38	平坦	外傾	自然		
104	C2e6	－	円形	0.73 × 0.67	18	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器	
105	C2e5	－	円形	0.70 × 0.67	32	有段	外傾	自然		
110	C2d5	－	円形	1.54 × 1.45	47	平坦	外傾 緩斜	自然		SK119→本跡
111	C2g6	N－39°－W	楕円形	(0.66)× 0.56	24	平坦	緩斜	自然		本跡→SK112
112	C2f6	N－55°－W	楕円形	1.02 × 0.71	56	平坦	外傾 緩斜	自然	土師器	SK111→本跡
114	C2f5	N－44°－W	不定形	0.78 × 0.42	43	凹凸	外傾	自然	土師器	SK113→本跡
115	C2f6	N－49°－E	楕円形	0.83 × 0.55	22	皿状	緩斜	自然		
116	C2g7	－	円形	0.49 × 0.45	34	平坦	外傾	自然		
117	C2f5	N－13°－W	不定形	1.16 × 0.96	52	皿状	外傾	人為		
119	C2d5	N－36°－E	[円形・楕円形]	[1.18]×[1.02]	50	平坦	外傾	自然	土師器	SK120→本跡→SK110
120	C2d4	－	[円形]	2.65 ×[2.62]	74	平坦	緩斜	－		本跡→SK119
121	C2c9	N－22°－E	長方形	1.22 × 0.37	58	平坦	直立 外傾	人為	土師器	SF 1→本跡
122	C2f5	N－48°－W	不定形	1.06 × 0.64	42	凹凸	外傾	人為	土師器	
123	C2f5	N－43°－W	不定形	1.18 × 0.80	34	皿状	外傾 緩斜	自然		
124	C2f5	－	不整円形	0.40 × 0.38	32	皿状	外傾	人為		
126	E3b7	N－30°－E	楕円形	1.02 × 0.71	58	平坦	外傾 緩斜	人為		SK125→本跡
128	C2f7	N－48°－W	長方形	1.08 × 0.51	43	有段	外傾	自然		SK129→本跡
129	C2f7	N－86°－E	隅丸楕円形	1.31 × 0.86	32	平坦	外傾 緩斜	人為	土師器	本跡→SK128
137	C2f5	N－56°－W	不整楕円形	0.78 × 0.68	32	傾斜	外傾 緩斜	人為		
138	C2f5	N－17°－E	楕円形	0.60 × 0.50	32	皿状	外傾	人為	土師器	
140	C2b5	[N－53°－W]	[隅丸方形・隅丸長方形]	1.09 ×(0.84)	35	平坦	外傾	自然		本跡→SD 2
141	C2f6	N－40°－W	長方形	2.46 × 1.53	83	平坦	外傾 緩斜	人為	土師器	SD 5 新旧不明
142	C2g6	N－64°－W	楕円形	1.10 × 0.54	77	平坦	直立 外傾	自然		
143	C2g6	N－46°－E	楕円形	1.02 × 0.86	49	平坦	外傾 内傾	自然	土師器	
144	C2g6	N－14°－E	楕円形	0.72 × 0.60	33	平坦	外傾 緩斜	人為		
145	C2f7	N－18°－W	楕円形	0.83 × 0.68	68	鍋底状	外傾 緩斜	人為		
146	C2f7	N－49°－W	[円形・楕円形]	1.30 ×(0.88)	76	鍋底状	外傾	自然		SK147 新旧不明
147	C2f7	N－47°－W	[円形・楕円形]	1.48 ×(0.90)	40	平坦	外傾 緩斜	自然		本跡→SD 5 SK146 新旧不明
150	B2h0	N－76°－E	楕円形	1.10 × 0.53	46	皿状	直立 緩斜	人為	土師器	
152	C2c6	－	[円形・楕円形]	0.62 ×(0.51)	16	平坦	外傾	自然		本跡→SD 2
154	C2b9	－	不整円形	0.84 × 0.78	24	皿状	外傾 緩斜	人為		
155	C2b9	N－72°－W	不定形	1.10 × 0.78	24	皿状	外傾	人為		
156	C2d9	－	円形	0.64 × 0.63	19	平坦	外傾	人為		SD 2→本跡
161	C2a2	－	円形	0.74 × 0.72	48	皿状	外傾	人為	土師器	
162	C2a1	N－56°－W	楕円形	0.68 × 0.48	20	平坦	外傾	人為	土師器	
163	C2d4	N－42°－W	楕円形	1.44 × 0.72	21	有段	緩斜	人為		
164	C2c4	N－19°－W	楕円形	0.90 × 0.80	40	皿状	外傾	人為	土師器	
165	C2c4	－	円形	0.54 × 0.50	58	皿状	直立 外傾	人為	土師器	
166	C2g5	－	不整円形	0.62 × 0.60	64	皿状	直立 外傾	自然	土師器	
167	C2g5	N－6°－W	楕円形	0.92 × 0.79	58	傾斜	外傾	人為	土師器	
168	C2a3	N－63°－W	楕円形	1.32 × 0.52	38	傾斜	外傾	人為	土師器	
169	C2b4	N－85°－E	楕円形	1.98 × 1.72	48	傾斜	外傾	人為		
170	C2g5	－	不整円形	0.72 × 0.68	48	平坦	外傾	自然		
171	C2b5	N－44°－W	楕円形	0.70 × 0.58	30	平坦	外傾	人為	土師器，銭貨	
172	C2b6	N－21°－W	楕円形	0.64 × 0.56	46	平坦	外傾	人為	土師器	
173	C2b3	N－87°－E	楕円形	1.28 × 0.88	40	平坦	外傾 緩斜	人為	土師器	
174	C2g6	N－34°－E	楕円形	0.44 × 0.38	22	皿状	外傾 緩斜	自然		
175	C2h6	N－27°－E	楕円形	0.46 × 0.38	30	皿状	外傾	人為		

番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ（cm）	底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係（古→新）
176	C 2h6	N－2°－W	楕円形	0.44 × 0.34	22	皿状	外傾	自然		
178	C 2g5	N－42°－W	楕円形	1.02 × 0.48	28	凹凸	緩斜	人為		
180	C 2b2	N－37°－E	隅丸方形	1.03 × 0.95	29	平坦	外傾 緩斜	自然		
181	C 2h6	－	円形	0.26 × 0.24	24	皿状	緩斜	人為		SK182→本跡
182	C 2h6	N－45°－W	楕円形	0.68 × 0.60	32	平坦	外傾	人為		本跡→SK181
183	C 2i5	N－55°－E	不定形	0.82 × 0.60	18	平坦	緩斜	人為		SK184→本跡
184	C 2i5	N－20°－W	不定形	0.86 × 0.46	32	平坦	外傾 緩斜	自然		本跡→SK183
185	C 2h6	N－15°－E	不定形	0.85 × 0.71	50	平坦	外傾	人為	陶器	
186	C 2g4	N－41°－E	楕円形	0.66 × 0.52	40	平坦	外傾	自然	土師器，須恵器	
187	C 2g3	N－46°－W	[円形・楕円形]	1.00 ×(0.58)	32	平坦	緩斜	自然		本跡→SK192
188	C 2g4	N－64°－W	楕円形	1.06 × 0.83	38	有段	外傾 緩斜	自然	土師器，須恵器	
189	C 2g4	－	円形	0.50 × 0.47	28	平坦	外傾	人為		
190	C 2f4	N－23°－W	不定形	1.05 × 0.77	36	皿状	外傾 緩斜	人為	土師器	
192	C 2g3	N－58°－W	不整楕円形	0.90 × 0.69	46	皿状	外傾 緩斜	自然		SK187→本跡
193	C 2f5	N－47°－W	不整楕円形	0.84 × 0.54	45	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器，鉄滓	
194	C 2f4	N－59°－W	楕円形	0.82 × 0.56	28	平坦	外傾	自然	土師器	
195	C 2f4	－	円形	0.52 × 0.49	47	平坦	外傾	人為	土師器	
196	C 2e4	－	円形	0.60 × 0.59	36	平坦	外傾	自然	土師器	
197	E 3c7	N－69°－E	隅丸長方形	(1.40) × 0.76	60	平坦	直立 緩斜	人為	土師器	
198	E 3a6	N－16°－W	長方形	1.22 × 1.08	32	平坦	直立 外傾	自然	土師器，須恵器	SI 12→本跡
199	C 2h5	N－35°－W	楕円形	0.68 × 0.60	48	傾斜	外傾 緩斜	人為		
201	E 3c7	－	円形	0.99 × 0.94	33	平坦	外傾	人為	土師器	
202	C 2b3	N－33°－W	[楕円形]	1.66 ×[1.50]	26	平坦	外傾	人為	土師器	本跡→SK203
203	C 2b4	N－32°－W	楕円形	1.18 × 0.88	22	平坦	外傾	人為		SK202→本跡
205	E 3a3	N－37°－W	楕円形	1.13 × 0.93	33	平坦	緩斜	人為	土師器	
206	C 2h6	－	不整円形	1.12 × 0.94	49	皿状	外傾 緩斜	人為	土師器	
207	C 2b1	N－57°－E	楕円形	0.68 × 0.60	28	皿状	外傾 緩斜	自然	土師器	
208	C 2b1	N－83°－E	楕円形	1.14 × 0.60	30	皿状	外傾 緩斜	人為	土師器	
209	E 3b7	N－73°－E	楕円形	1.13 × 0.86	62	皿状	緩斜	人為	土師器	
210	E 3c7	－	円形	1.18 × 1.17	35	平坦	外傾	人為	土師器	
211	E 3d7	N－14°－W	不整楕円形	0.88 × 0.69	17	平坦	直立	自然	須恵器	
212	E 3b6	－	円形	0.97 × 0.96	23	平坦	緩斜	人為		
213	E 3b6	N－66°－E	隅丸長方形	1.52 × 0.91	45	平坦	外傾 内傾	人為	土師器	SI 12,SK214→本跡
214	E 3b6	N－15°－W	不整楕円形	(0.98) × 0.73	19	平坦	外傾	人為	土師器	SI 12→本跡→SK213
215	C 1a0	N－30°－E	[方形・長方形]	1.62 ×(1.32)	28	平坦	外傾	人為	土師器	SK216→本跡
217	E 3a3	N－20°－E	楕円形	1.18 × 0.75	33	平坦	外傾 緩斜	自然		清水 TM 9，SD 7→本跡
218	C 2a2	N－44°－W	楕円形	1.30 × 0.92	40	傾斜	外傾	人為	土師器	
219	E 3f4	N－12°－W	楕円形	1.16 × 0.68	21	平坦	外傾	人為	土師器	清水 TM 9→本跡
220	E 3a6	N－23°－W	長方形	1.40 × 0.82	68	皿状	直立	自然		
221	E 3a6	N－20°－W	楕円形	0.92 × 0.80	12	平坦	緩斜	不明		
222	E 3a6	N－18°－W	楕円形	1.00 × 0.52	14	皿状	緩斜	人為		
223	E 3d4	N－25°－W	長方形	2.46 × 0.98	24	平坦	外傾	人為	土師器，土製品	清水 TM 9→本跡
224	D 3j6	N－18°－W	楕円形	1.10 × 0.62	16	皿状	緩斜	自然		
225	D 3j6	N－13°－W	長方形	1.16 × 0.70	38	皿状	外傾	人為	土師器	SD 7→本跡
226	D 3j4	N－50°－W	楕円形	1.08 × 0.64	44	皿状	外傾 緩斜	人為	土師器	
227	E 3a5	N－22°－W	楕円形	1.38 × 1.00	28	平坦	緩斜	自然	土師器，須恵器	SI12→本跡
228	C 1b0	N－34°－W	楕円形	0.86 × 0.68	58	皿状	外傾	自然	土師器，須恵器	
229	D 3j6	N－43°－E	[円形・楕円形]	1.73 ×(1.04)	37	平坦	緩斜	人為		本跡→SD 7
230	D 3j5	N－70°－E	楕円形	0.86 × 0.77	75	鍋底状	外傾	－	陶器	SD 7→本跡
231	B 2i2	－	不整円形	2.25 × 2.07	80	平坦	外傾 緩斜	人為		
232	D 3j4	N－90°	楕円形	0.95 × 0.86	13	平坦	外傾	人為	土師器	SD 7→本跡
235	D 3j3	N－20°－W	楕円形	1.38 × 0.89	31	平坦	外傾 緩斜	人為	土師器	
239	B 2j0	N－36°－W	楕円形	0.80 × 0.66	18	平坦	外傾	人為		本跡→SF 1
240	C 2a0	N－10°－E	楕円形	0.81 × 0.69	34	平坦	外傾 緩斜	人為		本跡→SF 1
242	B 3j1	N－2°－W	楕円形	0.52 × 0.40	22	皿状	外傾 緩斜	人為		本跡→SF 1
243	C 2b0	－	円形	0.53 × 0.53	8	平坦	緩斜	人為		本跡→SF 1
244	B 3g1	－	円形	0.42 × 0.40	30	平坦	直立 外傾	自然	土師器	本跡→SF 1
245	C 2d0	－	円形	0.52 × 0.48	9	平坦	外傾 緩斜	人為		本跡→SF 1

番号	位置	長軸方向	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ（cm）	底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係（古→新）
246	B2j0	N－12°－E	楕円形	0.68 × 0.60	18	平坦	外傾 緩斜	自然		本跡→SF 1
247	C2a0	－	円形	0.66 × 0.63	25	平坦	外傾	人為		本跡→SF 1
248	C3a1	－	円形	0.82 × 0.80	38	平坦	直立	人為	須恵器	本跡→SF 1
249	C2c0	N－1°－E	楕円形	0.56 × 0.43	16	平坦	外傾	人為		本跡→SF 1
251	C2b0	N－26°－W	楕円形	1.64 × 1.25	53	平坦	外傾 緩斜	自然		本跡→SF 1
252	B2j0	N－39°－W	楕円形	0.83 × 0.58	41	平坦	外傾	人為	土師器	本跡→SF 1
253	B3h1	N－5°－E	不整楕円形	2.28 × 1.95	65	平坦	外傾 緩斜	－		本跡→SF 1
254	B3h1	－	円形	0.57 × 0.53	36	平坦	外傾	－	土師器	本跡→SF 1
255	B3g1	N－75°－E	楕円形	1.02 × 0.55	42	やや凹凸	外傾	－	土師器	本跡→SF 1
257	C2b0	N－19°－E	楕円形	0.50 × 0.43	8	平坦	外傾	人為		本跡→SF 1
261	G6a8	N－68°－E	楕円形	1.33 × 1.17	32	平坦	緩斜	人為		SD10 新旧不明
262	G6b6	N－60°－E	長方形	2.34 × 1.10	68	平坦	直立	人為	土師器，須恵器	
263	G6a7	N－62°－E	[方形・長方形]	1.27 ×(0.17)	31	平坦	直立	人為	土師器，須恵器	本跡→SK264
264	G6a7	N－58°－E	長方形	2.08 × 0.67	34	平坦	直立	人為		SK263→本跡
265	F6i5	－	円形	0.88 × 0.83	38	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器	SK266→本跡
266	F6i5	N－84°－E	楕円形	2.18 × 1.51	67	平坦	外傾	人為	縄文土器，土師器，須恵器	SK267→本跡→SK265
267	F6i5	－	円形	1.83 × 1.77	35	平坦	外傾	人為	縄文土器，土師器，須恵器，土師質土器	本跡→SK266
268	F6h4	－	円形	1.01 × 1.00	27	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器	
269	F6f5	－	円形	0.66 × 0.61	44	平坦	外傾	人為	土師器	
270	F6h5	N－80°－W	楕円形	1.60 × 0.89	50	有段	外傾	自然	土師器，須恵器	
271	G5d8	－	円形	1.26 × 1.22	47	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，須恵器	
272	G5e8	－	円形	1.23 × 1.14	36	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，陶器	
273	G5e8	N－61°－E	楕円形	1.68 × 1.27	55	平坦	ほぼ直立	人為		
275	G5b7	N－12°－W	長方形	1.34 × 0.50	73	平坦	直立	人為		本跡→SB 1
276	G5b8	N－14°－W	長方形	1.60 × 0.66	110	平坦	直立	人為		SB 1・3→本跡
277	G6a7	N－64°－E	長方形	1.62 × 1.46	18	平坦	外傾	人為	土師器	SI 21→本跡
278	G5c8	N－70°－E	長方形	2.36 × 0.72	102	平坦	直立	人為		SB 1→本跡
279	G5g5	N－72°－E	長方形	(0.72)× 0.60	72	平坦	直立	人為	土師器	SK283 新旧不明
280	G5g6	N－70°－E	長方形	1.61 × 0.57	54	平坦	直立	人為	縄文土器，土師器，須恵器	SI 37→本跡
281	G5g6	N－67°－E	長方形	1.43 × 0.53	45	有段	ほぼ直立	人為	縄文土器，土師器	SI 37→本跡
282	G5g6	N－77°－E	長方形	1.52 × 0.60	53	平坦	直立	人為	縄文土器，土師器	SI 37→本跡
283	G5g5	N－72°－E	長方形	1.52 × 0.59	37	平坦	ほぼ直立	不明		SK279 新旧不明
284	G5c8	N－76°－E	[長方形]	[1.65]× 0.72	66	平坦	直立	人為	土師器	SK285 新旧不明
285	G5c8	N－20°－W	長方形	1.56 × 0.60	103	平坦	直立	人為	土師器	SK284 新旧不明
286	G5f8	N－54°－E	長方形	5.17 × 1.45	97	平坦	直立	人為		
289	G6c3	N－3°－W	楕円形	1.26 × 1.10	43	平坦	外傾	自然	土師器，須恵器	
290	G6c3	N－23°－E	楕円形	1.18 × 1.04	17	平坦	外傾	自然	土師器	
292	G5a4	－	円形	1.10 × 1.08	(20)	平坦	外傾	人為	縄文土器，土師器	SI 36→本跡
293	G5c7	N－14°－W	[長方形]	1.47 ×[0.65]	90	平坦	直立	人為	土師器	SI 23→本跡
294	G5a4	N－83°－E	楕円形	1.23 × 0.98	(21)	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	SI 36→本跡
295	G5a4	N－8°－W	[楕円形]	0.95 ×[0.80]	(28)	平坦	ほぼ直立 外傾	人為	土師器，須恵器	SI 36→本跡 SK448 新旧不明
297	G5a4	N－25°－W	楕円形	1.08 × 0.92	(43)	平坦	外傾	人為	縄文土器，土師器，須恵器	SI 36→本跡
298	F5j8	N－6°－E	楕円形	0.96 × 0.75	35	平坦	外傾	人為		SB 3→本跡
300	G5a5	N－78°－E	[長方形]	[1.12]× 0.98	16	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器，土師質土器	SI 32・51→本跡
302	G6c4	N－3°－W	方形	0.56 × 0.53	52	平坦	直立	人為		SI 29, SD13→本跡
303	G5c2	－	[円形・楕円形]	0.54 ×(0.50)	72	平坦	直立	人為		SI 35→本跡
305	G5a7	N－62°－E	長方形	0.92 × 0.51	45	平坦	ほぼ直立	不明		SK305→本跡→SB 3
306	G5b2	N－62°－E	[楕円形]	[1.07]×[0.93]	25	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	SI 38→本跡
307	G6c4	－	円形	0.27 × 0.26	63	皿状	直立	人為		SI 29→本跡→SD13
308	G5b8	N－20°－E	楕円形	0.70 × 0.47	43	有段	ほぼ直立	自然	土師器，須恵器，陶器	
309	G5b7	N－27°－E	楕円形	0.78 × 0.68	30	平坦	外傾	自然	縄文土器，須恵器	
311	G5a3	－	[円形]	0.50 ×[0.48]	36	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，須恵器	SI 38→本跡
313	G6c4	－	円形	0.26 × 0.25	25	皿状	ほぼ直立	人為		SI 29, SD13 新旧不明
314	G5b3	N－7°－E	楕円形	0.72 × 0.62	37	平坦	ほぼ直立 外傾	人為	土師器，須恵器	SI 36→本跡
315	F5b5	N－28°－W	[不整楕円形]	[0.92]×[0.63]	31	平坦	外傾	人為	縄文土器，土師器，須恵器	本跡→SI32・33
316	F5j8	N－38°－E	不整楕円形	1.92 × 1.05	38	平坦	外傾	人為	土師器	
318	G5a7	N－66°－E	長方形	1.20 × 0.51	62	平坦	ほぼ直立	不明	土師器	SB 3→本跡
323	F5j3	－	[円形]	1.04 ×[1.00]	34	皿状	ほぼ直立	人為	土師器，土師質土器	

番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ（cm）	底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係（古→新）
324	F5j3	N－73°－E	楕円形	[0.82]×0.73	36	皿状	ほぼ直立	人為	土師器，須恵器	
325	F5j3	－	[円形・楕円形]	(0.36)×0.34	10	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	本跡→SK326
326	F5i4	N－56°－E	楕円形	1.16×0.96	64	皿状	ほぼ直立	人為	土師器，須恵器	SK325→本跡
327	F4f0	－	円形	0.82×0.77	32	皿状	外傾	自然	土師器，須恵器	SI 58→本跡
329	F5i3	N－23°－W	長方形	2.09×1.34	14	平坦	ほぼ直立	自然	土師器，須恵器，陶器	SI 56→本跡
330	F5j7	N－4°－E	楕円形	1.75×0.97	60	平坦	緩斜	人為	縄文土器，土師器	SK331→本跡
331	F5j7	－	円形	0.99×0.97	33	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器	本跡→SK330
333	F5i7	N－7°－W	楕円形	0.91×0.65	66	平坦	外傾	人為	土師器	SB 4 新旧不明
334	F5i7	N－7°－W	隅丸長方形	0.67×0.53	36	平坦	外傾	人為	土師器	SB 4 新旧不明
337	F5i8	－	円形	0.79×0.77	30	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，須恵器	SI 42→本跡
338	F5i3	N－66°－W	楕円形	1.06×0.90	36	平坦	ほぼ直立	人為		SI 56→本跡
341	F4i0	N－26°－W	楕円形	1.16×0.90	30	平坦	直立	人為	土師器	SI 61→本跡
342	F5h7	－	円形	0.41×0.40	36	皿状	直立	人為	縄文土器，土師器	SI 63→本跡
343	F4i0	N－46°－W	楕円形	0.31×0.26	26	皿状	外傾	自然		SI 59・61→本跡
344	F5h7	N－13°－W	楕円形	0.96×0.55	38	平坦	外傾	人為	縄文土器，土師器	SI 63，SB 4→本跡
345	F5h8	N－30°－E	楕円形	1.02×0.71	36	平坦	外傾	人為	縄文土器，土師器，須恵器，陶器	SB 4 新旧不明
346	F5h8	－	円形	0.89×0.89	26	平坦	外傾	人為	土師器	
347	F5j8	－	円形	1.06×1.00	34	皿状	外傾	人為	土師器，須恵器	SI 42→本跡→SB 4
348	F5h9	－	円形	0.93×0.87	59	皿状	ほぼ直立	人為	縄文土器，土師器，須恵器	
349	F6i4	－	円形	1.00×0.99	40	平坦	外傾	人為	縄文土器，土師器，須恵器	SI 41→本跡
350	F6j4	－	円形	1.03×1.00	42	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，須恵器	SI 41→本跡
351	F5i9	N－53°－E	楕円形	1.10×0.76	26	平坦	外傾	人為		
353	F5h9	N－65°－E	楕円形	1.05×0.75	45	平坦	緩斜 ほぼ直立	人為	土師器，須恵器	
354	G6a3	N－30°－W	楕円形	0.80×0.70	18	平坦	外傾	人為	土師器	本跡→SI25
359	F6j4	N－42°－W	不定形	1.12×0.98	46	平坦	ほぼ 直立	人為	縄文土器，土師器	SI 41→本跡
360	F5h8	－	円形	0.54×0.50	30	平坦	ほぼ直立	人為	縄文土器，土師器	
363	F5h8	N－48°－W	楕円形	1.01×0.88	49	皿状	外傾	人為	土師器，須恵器	
364	F5g1	N－26°－W	長方形	1.77×1.03	22	平坦	外傾	人為	土師器	SI 62→本跡
366	F5i8	N－40°－E	楕円形	0.78×0.63	113	皿状	ほぼ直立	人為	土師器	SB 4 新旧不明
369	F5i8	N－40°－E	[円形・楕円形]	0.80×(0.54)	(30)	平坦	ほぼ直立	人為		SI 42→本跡→SB 4
370	F6i4	N－34°－E	[円形・楕円形]	0.80×(0.58)	16	平坦	外傾	自然	土師器，須恵器	本跡→SK371 SI 41 新旧不明
371	F6i5	N－89°－E	楕円形	1.00×0.90	24	平坦	ほぼ直立	人為	縄文土器，土師器	SK370→本跡 SI 41 新旧不明
372	F6i4	－	円形	1.02×0.98	42	平坦	ほぼ直立 外傾	人為	土師器，須恵器	SI 41 新旧不明
373	F6j5	N－5°－W	楕円形	(1.04)×0.82	26	平坦	ほぼ直立	人為		本跡→SK402 SI 41 新旧不明
375	F6h4	N－5°－W	楕円形	0.66×0.54	16	平坦	外傾	自然	土師器	SI 41 新旧不明
376	F6i3	N－55°－E	楕円形	0.98×0.82	32	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，須恵器	SI 41 新旧不明
377	F6h3	N－21°－W	楕円形	1.38×1.02	32	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	本跡→SK381
378	F6h3	N－30°－E	楕円形	0.35×0.31	29	皿状	ほぼ直立	人為		
379	F6h4	N－6°－E	楕円形	0.42×0.38	66	皿状	ほぼ直立	人為		
380	F6h4	－	円形	0.86×0.84	40	皿状	外傾	人為	土師器	
381	F6h3	N－56°－W	楕円形	0.90×0.80	46	皿状	ほぼ直立 外傾	人為		SK377→本跡
382	F6i3	N－75°－E	円形	0.56×0.52	24	平坦	直立	人為		
383	F6i3	N－10°－W	[円形・楕円形]	0.56×[0.50]	20	平坦	ほぼ直立	人為		SK384→本跡→SK408
384	F6i3	N－10°－W	[円形・楕円形]	(0.86)×0.82	32	平坦	外傾	人為		本跡→SK383・408
385	F6i3	N－60°－W	楕円形	0.45×0.40	36	皿状	ほぼ直立	人為		
386	F6h3	N－46°－E	楕円形	0.64×0.38	32	平坦	ほぼ直立	自然	土師器	
387	F4g0	－	円形	0.72×0.70	42	皿状	ほぼ直立 外傾	人為		SI58→本跡
388	F6i3	N－30°－W	楕円形	0.66×0.54	18	平坦	外傾	人為	縄文土器，土師器，須恵器	SI 41 新旧不明
389	F6i4	－	円形	0.80×0.74	32	平坦	外傾	人為	土師器	SI 41 新旧不明
390	G5a0	N－10°－E	楕円形	0.57×0.51	66	皿状	ほぼ直立	人為		SI 46→本跡
392	F5i8	N－5°－W	楕円形	0.82×0.70	(50)	平坦	ほぼ直立	人為	縄文土器，土師器	SI 42→本跡
393	F5i9	N－28°－E	楕円形	0.41×0.30	(35)	皿状	直立	人為	土師器	SI 42→本跡
394	F5i8	－	円形	0.73×0.68	(18)	平坦	外傾	人為	土師器	SI 42→本跡
395	F5i8	－	円形	0.25×0.24	(17)	皿状	ほぼ直立	人為		SI 42→本跡
396	G6a5	N－38°－W	不整楕円形	0.68×0.44	16	平坦	外傾	人為		本跡→SD11 SI 28 新旧不明
397	F5i8	－	円形	0.30×0.28	(17)	皿状	ほぼ直立	人為		SI 42→本跡

番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ（cm）	底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係（古→新）
399	F5i8	−	円形	0.41 × 0.39	(31)	平坦	直立	人為		SI 42→本跡
401	F6e4	N－15°－W	楕円形	0.87 × 0.65	22	平坦	外傾	人為		本跡→SK400
402	F6j4	N－3°－W	楕円形	0.82 × 0.72	36	平坦	直立	人為	土師器，須恵器	SK373→本跡 SI 41 新旧不明
403	F4f0	N－70°－W	楕円形	0.98 × 0.76	32	皿状	ほぼ直立 外傾	人為		SI 58→本跡
404	F6j4	N－38°－E	楕円形	0.34 × 0.28	42	皿状	直立	人為		SI 41 新旧不明
405	F5i9	−	円形	0.43 × 0.42	(30)	平坦	直立	人為	土師器	SI 42→本跡
406	F6j4	−	円形	0.96 × 0.88	22	平坦	外傾	人為	縄文土器，土師器，須恵器	本跡→SI 25 SI 41 新旧不明
408	F6i3	N－4°－W	楕円形	0.78 × 0.62	38	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	SI 41, SK383・384→本跡
409	F6e2	N－65°－E	長方形	2.33 × 1.80	36	皿状	緩斜	人為	縄文土器，土師器，須恵器	SI 50, SK410→本跡
411	F6e1	−	円形	0.41 × 0.38	20	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器	SK410→本跡
419	F6f3	−	円形	0.89 × 0.84	31	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器	
420	F6f4	−	円形	0.68 × 0.65	22	平坦	外傾	自然	土師器	
421	F6f4	−	円形	0.82 × 0.78	23	皿状	外傾 緩斜	自然	土師器	
422	F6f4	N－70°－W	楕円形	1.98 × 1.41	33	凹凸	緩斜	人為	縄文土器，土師器，須恵器	
423	F6f4	N－16°－E	楕円形	1.04 × 0.82	40	皿状	緩斜	人為	土師器	SK425→本跡
424	F6f3	N－42°－W	楕円形	0.89 × 0.63	30	皿状	緩斜	人為		SK425→本跡
425	F6f4	N－57°－E	楕円形	(0.95) × 0.75	41	皿状	緩斜	自然	土師器	本跡→SK423・424
427	F6f4	N－51°－W	楕円形	0.93 × 0.81	18	皿状	緩斜	自然	土師器	
428	F6f4	−	円形	0.64 × 0.59	34	皿状	緩斜	人為	土師器	
432	F5f7	N－10°－E	[円形・楕円形]	(0.83) × (0.45)	23	平坦	ほぼ直立 外傾	人為	土師器	SI 65→本跡
434	F6e3	N－14°－W	楕円形	2.58 × 0.86	67	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器	SI 49→本跡
436	F6c2	N－30°－W	楕円形	1.54 × 1.32	26	平坦	緩斜	人為	土師器	SI 81, SK437→本跡
437	F6c3	N－56°－E	楕円形	(1.20) × 1.04	56	皿状	外傾 緩斜	人為	土師器	本跡→SK436
439	F5h1	N－5°－E	長方形	1.65 × 1.03	13	平坦	外傾	人為	自然遺物	SI 62→本跡
441	F5f1	−	円形	0.92 × 0.86	63	平坦	ほぼ直立	人為		SI 60→本跡
442	F4g0	−	円形	0.87 × 0.81	58	平坦	直立	人為	土師器，須恵器	
443	F4a3	N－52°－E	楕円形	1.94 × 1.08	72	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	
444	F4i9	−	[円形・楕円形]	1.18 × (1.01)	16	平坦	外傾	人為	土師器	
446	F4h8	N－60°－E	[方形・長方形]	(1.00) × 0.99	23	平坦	外傾	人為	土師器	
447	F5g1	N－66°－E	楕円形	0.83 × 0.61	41	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，須恵器	SI 71→本跡
448	G5a4	N－32°－W	楕円形	1.15 × (0.66)	(38)	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器	SK295 新旧不明
449	F5g8	−	[円形・楕円形]	(0.45) × (0.24)	37	平坦	ほぼ直立	人為		SI 65→本跡
450	F4h8	N－77°－E	楕円形	1.70 × 1.50	15	平坦	外傾	自然	土師器，須恵器	
451	F6e4	N－56°－W	楕円形	2.01 × 0.84	38	皿状	外傾	人為	土師器，須恵器	
452	E5j7	N－50°－W	楕円形	0.90 × 0.72	40	皿状	外傾	人為	須恵器	SI 86→本跡
453	F5g3	N－72°－E	楕円形	1.10 × 0.92	56	有段	ほぼ直立	人為		SI 73→本跡
454	F6c2	N－77°－W	楕円形	0.92 × 0.80	(26)	平坦	外傾	人為	土師器	SI 81→本跡
456	F5a0	−	円形	0.45 × 0.42	(17)	皿状	外傾	人為		SI 96→本跡
457	F6c2	N－7°－E	楕円形	0.54 × 0.49	(20)	平坦	緩斜	人為	土師器	SI 81→本跡
458	E4j2	N－6°－W	楕円形	0.86 × 0.75	40	皿状	外傾	人為	土師器	SI 100→本跡
460	E5j7	N－75°－E	長方形	1.92 × 1.08	63	平坦	直立	人為	土師器，須恵器，瓦	SI 86→本跡
461	F5a7	N－16°－W	長方形	1.94 × 0.64	52	平坦	直立	人為		SI 86→本跡
462	F5a6	N－18°－W	長方形	2.88 × 0.84	58	平坦	直立	人為	土師器，須恵器，陶器	SI 87→本跡
463	F5d8	N－79°－E	長方形	1.72 × 0.57	54	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，須恵器，陶器	SI 92, SK476→本跡
464	F5b8	−	円形	0.99 × 0.97	38	平坦	外傾	自然	土師器	SI 95→本跡
465	F5c6	N－53°－E	楕円形	1.30 × 0.98	30	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，須恵器	
469	F4g7	−	円形	1.27 × 1.20	28	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器	
472	F5c8	N－23°－E	楕円形	1.00 × 0.82	58	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，須恵器	SI 92, SK468→本跡
473	F4f6	−	円形	1.09 × 1.06	16	平坦	外傾	人為		SK475→本跡
475	F4f6	−	円形	0.76 × 0.75	18	平坦	外傾	自然		本跡→SK473
476	F5d8	N－0°	隅丸長方形	1.27 × 1.09	34	平坦	外傾	人為	陶器	本跡→SK463
478	F5f7	N－12°－E	楕円形	0.88 × 0.76	21	平坦	外傾	人為		
479	F5b7	−	円形	0.88 × 0.83	28	平坦	ほぼ直立	人為		SI 88→本跡
480	F5a6	N－57°－E	楕円形	0.88 × 0.79	22	皿状	緩斜	自然	土師器，須恵器	SI 85→本跡
481	F5a6	N－44°－E	楕円形	1.00 × 0.69	20	皿状	緩斜	自然	土師器	SI 85→本跡
482	F5b6	N－2°－E	楕円形	1.46 × 1.22	55	皿状	緩斜	人為	土師器，須恵器	SI 85→本跡
483	F5b6	−	円形	0.93 × 0.92	37	平坦	外傾	人為	土師器	SI 85→本跡

番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ（cm）	底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係（古→新）
484	F5b6	−	円形	0.83 × 0.80	12	平坦	ほぼ直立	人為	須恵器	SI 85・88→本跡
485	F5a9	N－32°－W	楕円形	0.76 × 0.51	41	平坦	外傾	人為		SI 95→本跡
489	F4g6	N－6°－E	楕円形	1.12 × 0.93	36	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	SK766 新旧不明
490	F4f6	N－3°－E	楕円形	0.54 × 0.40	42	皿状	ほぼ直立	人為	土師器	SI 105→本跡
491	F5f6	N－10°－E	楕円形	1.05 × 0.80	30	平坦	外傾 緩斜	人為	土師器	SI 72→本跡
492	F5f6	−	円形	0.80 × 0.78	32	皿状	外傾	人為		SI 72→本跡
493	E5j0	N－0°	隅丸方形	1.33 × 1.27	43	有段	外傾	人為	土師器，須恵器	SI 96→本跡
494	F5a5	N－70°－E	長方形	2.11 × 1.08	53	平坦	内傾	人為	土師器，須恵器	
495	F5a4	N－72°－E	長方形	(1.03) × 0.63	14	平坦	外傾	人為		本跡→SK496
496	F5a4	N－68°－E	長方形	1.94 × 0.90	27	平坦	外傾	人為	土師器	SK495→本跡
497	E5j8	−	円形	1.08 × 1.05	59	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器	SI 95→本跡
498	E5j5	−	円形	1.32 × 1.30	36	皿状	緩斜	人為	土師器	
499	E5j5	N－70°－E	長方形	1.81 × 0.89	68	平坦	直立	人為	土師器	
501	F4f6	N－10°－E	楕円形	2.00 × 1.33	28	平坦	直立	自然	縄文土器，土師器，須恵器	
502	F5c6	N－54°－E	楕円形	0.90 × 0.81	34	平坦	直立	人為	土師器，須恵器	SI 90，SK647→本跡
504	F4f6	−	円形	0.84 × 0.81	39	有段	外傾	人為		
505	F5b6	N－8°－W	楕円形	0.78 × 0.67	(12)	皿状	緩斜	人為	土師器	SI 85→本跡
506	F5b6	N－21°－W	楕円形	0.96 × 0.74	(22)	平坦	外傾	人為	土師器	SI 85→本跡
507	F5b5	N－42°－W	楕円形	1.22 × 0.77	(57)	平坦	外傾	人為	土師器	SI 84・85→本跡
508	F4e6	N－22°－E	楕円形	0.67 × 0.60	26	平坦	外傾	人為		
509	F5a9	−	円形	0.88 × 0.83	(38)	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	SI 95→本跡
510	F5e6	−	円形	0.58 × 0.58	28	平坦	外傾	人為	土師器	SI 90→本跡
511	F5e6	N－3°－W	楕円形	0.82 × 0.68	24	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器	
513	F5b6	N－34°－W	楕円形	0.95 × 0.78	(28)	平坦	外傾	人為	土師器	SI 85→本跡
515	F4e6	−	円形	0.46 × 0.44	34	皿状	外傾	人為		
517	F4e6	−	円形	1.03 × 1.01	31	平坦	外傾	人為		
518	F4e6	−	円形	0.54 × 0.54	25	平坦	外傾	人為		
519	E5j4	N－46°－E	楕円形	1.35 × 0.94	35	平坦	外傾	自然	土師器	SK541→本跡
520	E5j4	N－69°－E	長方形	1.22 × 0.68	63	平坦	直立	人為	土師器，陶器	
522	F4c8	N－10°－W	[楕円形]	0.67 ×[0.52]	45	平坦	外傾	人為	土師器，鉄滓	SI 126→本跡
523	E5j5	N－38°－W	楕円形	0.68 × 0.52	18	平坦	緩斜	人為	土師器	
524	E5j5	−	円形	0.67 × 0.62	16	平坦	緩斜	自然		
525	E5j6	−	円形	0.70 × 0.65	19	平坦	外傾	自然	土師器	
527	E5i6	−	円形	1.18 × 1.11	32	平坦	外傾	自然	土師器，須恵器	
528	F5b8	N－80°－W	楕円形	1.22 × 0.96	35	有段	緩斜	人為	土師器，須恵器，鉄滓	
529	F5b8	N－17°－W	長方形	1.54 × 0.59	80	平坦	直立	人為	土師器	
530	F5d6	N－38°－E	楕円形	0.76 × 0.68	14	平坦	外傾	自然	土師器	SI 90→本跡
532	F5f6	N－82°－W	不整楕円形	1.54 × 0.86	33	有段	外傾	人為	土師器	
535	F4f5	N－86°－E	長方形	2.12 × 0.86	114	平坦	直立	人為	土師器	本跡→SI 105
536	E5j8	N－21°－W	[楕円形]	1.30 ×[1.07]	48	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，須恵器，礎器	本跡→SK557
537	E5j8	N－18°－W	長方形	(0.92) × 0.50	80	平坦	直立	人為	土師器，須恵器	本跡→SK557
538	E5j8	N－41°－E	楕円形	1.67 × 1.24	53	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，須恵器，礎器	
539	E5j7	N－59°－E	楕円形	1.35 × 0.95	55	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，須恵器	
541	E5i4	N－22°－E	楕円形	2.20 × 1.40	50	平坦	外傾	自然	土師器	本跡→SK519
542	F6f3	−	円形	0.59 × 0.57	14	平坦	外傾	人為	土師器	SI 48→本跡
543	E5i8	N－64°－E	長方形	1.09 × 0.95	34	平坦	外傾	人為		
544	F5c6	−	円形	0.60 × 0.57	26	平坦	直立	自然	土師器	SI 91→本跡
545	F4b5	N－52°－E	楕円形	0.84 × 0.74	22	平坦	外傾	人為		SI 122→本跡
546	F5c7	−	円形	0.48 × 0.44	23	平坦	ほぼ直立	自然	土師器	SI 91→本跡
547	F5h6	N－90°	楕円形	1.18 × 0.84	(36)	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	SI 104→本跡
549	F4b4	N－76°－E	楕円形	1.13 × 0.92	34	皿状	外傾	人為	土師器	
550	F4b4	N－84°－W	楕円形	1.51 × 1.23	36	平坦	外傾	人為	土師器	
551	F4a8	N－5°－W	楕円形	1.89 × 0.92	22	平坦	外傾	人為		
552	E5i6	N－23°－W	長方形	1.30 × 0.90	20	平坦	外傾	人為		
554	E5i6	−	[不定形]	1.54 × (0.50)	30	皿状	緩斜	人為		本跡→SK553
556	F5c3	−	円形	0.76 × 0.71	32	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	SI 93→本跡→SK570・572
557	E5j8	N－75°－E	長方形	1.73 × 0.62	118	平坦	直立	人為		SI 86，SK536・537→本跡
558	F5c7	N－73°－E	長方形	1.52 × 1.00	62	平坦	ほぼ直立	自然	土師器，須恵器	SK91，SK560→本跡

番号	位置	長軸方向	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ（cm）	底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係（古→新）
560	F5c8	N－18°－E	[長方形]	[2.02]×1.42	43	平坦	ほぼ直立	自然	縄文土器，土師器，須恵器	本跡→SK558･561
561	F5b8	N－85°－W	楕円形	1.64×1.07	59	平坦	ほぼ直立	人為	縄文土器，土師器，須恵器	SK560･563→本跡
562	F5b8	－	円形	0.78×0.72	35	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	
564	F5b8	－	円形	0.90×0.87	32	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器	本跡→SK563･565
565	F5b8	－	円形	0.76×0.73	27	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，須恵器	SK564→本跡
566	F5b8	－	円形	0.37×0.35	31	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，須恵器	
567	F5d7	N－46°－E	楕円形	1.33×1.20	68	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，須恵器	
568	F5d9	N－78°－E	[円形･楕円形]	0.46×(0.35)	15	平坦	直立	人為		本跡→SK569
569	F5d8	N－66°－E	楕円形	0.97×0.74	26	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，須恵器，鉄製品	SK568→本跡
572	F5c3	－	[円形･楕円形]	(0.32)×0.30	54	平坦	直立	人為		SI 93，SK556→本跡→SK570
573	F5a2	N－89°－E	楕円形	1.13×1.00	35	平坦	ほぼ直立	人為		SI 99→本跡
574	F4d9	N－5°－E	楕円形	2.24×1.56	32	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器，陶器	
576	F5d8	N－71°－E	長方形	2.00×0.73	56	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	SB 8，SK577･581→本跡
577	F5e8	－	[円形･楕円形]	0.38×(0.23)	12	平坦	外傾	人為	土師器	本跡→SK576
579	F5e7	N－17°－E	楕円形	(0.86)×0.76	52	皿状	ほぼ直立	人為		本跡→SK596
580	F5e3	N－27°－W	[楕円形]	1.31×[0.88]	86	皿状	直立	人為	土師器，須恵器，陶器	SI 113→本跡
581	F5d9	N－8°－E	長方形	0.69×0.47	16	平坦	外傾	人為		
582	F5d9	N－66°－E	楕円形	0.90×0.42	27	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	
583	F5d8	N－24°－W	楕円形	0.52×0.40	40	有段	直立	人為		
585	F5c9	N－12°－W	[円形･楕円形]	1.16×(0.70)	22	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器	本跡→SB11
587	F5b6	－	円形	0.87×0.81	(35)	平坦	外傾	人為	土師器	SI 104→本跡
588	F5b9	N－75°－E	[円形･楕円形]	(0.50)×0.47	43	平坦	ほぼ直立	人為		本跡→SB10
590	F5c9	N－65°－W	楕円形	0.46×0.33	27	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	
591	F5d8	－	[円形･楕円形]	1.30×(0.73)	72	皿状	外傾	人為	土師器，須恵器	本跡→SK576
592	F5b0	N－52°－W	楕円形	1.17×0.99	44	平坦	外傾	人為		SB 9→本跡
594	F5e7	N－43°－E	長方形	1.13×1.00	26	平坦	外傾	人為	土師器	
595	F5f5	N－10°－E	楕円形	1.02×0.78	40	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	SI 72・90→本跡
596	F5e7	N－71°－W	楕円形	0.98×0.74	42	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	SK579→本跡
597	F5e6	N－28°－E	楕円形	1.22×0.82	32	平坦	ほぼ直立 外傾	人為	土師器	
598	F5f6	－	円形	0.90×0.82	30	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，須恵器	
600	F5e6	N－31°－E	楕円形	0.80×0.59	(20)	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	SI 90→本跡
601	F5d6	N－26°－E	楕円形	0.70×0.56	(9)	平坦	外傾	人為	土師器	SI 90→本跡
602	F5e6	N－13°－E	楕円形	0.76×0.58	(20)	皿状	外傾	人為	土師器	SI 90→本跡
603	F5e5	N－44°－W	[円形･楕円形]	0.78×(0.56)	(22)	皿状	ほぼ直立	人為	土師器	SI 90→本跡→SK555
604	F5d6	N－85°－W	楕円形	0.82×0.60	(16)	平坦	外傾	人為		SI 90→本跡
605	F6d2	N－55°－E	不整楕円形	1.48×1.16	62	有段	外傾	自然	土師器	SI 112→本跡
606	F6e1	N－43°－E	隅丸長方形	1.53×1.06	37	有段	外傾	自然	土師器	SI 112→本跡
607	F5f5	－	円形	0.90×0.88	(10)	平坦	外傾	人為		SI 72→本跡
608	F5d7	N－3°－W	楕円形	1.12×0.82	60	有段	ほぼ直立	人為	土師器	
609	F5c7	N－1°－W	楕円形	0.71×0.64	44	平坦	直立	人為	土師器	SK610→本跡
610	F5c7	N－75°－E	楕円形	0.70×0.53	22	平坦	ほぼ直立	人為		本跡→SK609
611	F5c7	N－80°－W	楕円形	0.82×0.60	(32)	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	SI 91→本跡
612	F5c7	－	円形	0.72×0.70	(23)	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，土師質土器	SI 91→本跡
613	F5c7	－	[円形･楕円形]	0.40×(0.34)	(32)	皿状	ほぼ直立	人為	土師器	SI 91→本跡→SK626
614	F5c7	N－31°－W	楕円形	0.78×0.61	(18)	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	SI 91→本跡
615	F5c6	N－83°－W	楕円形	0.95×0.72	44	皿状	直立	人為	土師器	SI 91→本跡
616	F6b2	N－81°－W	楕円形	0.83×0.66	24	ほぼ平坦	外傾	自然	土師器	
618	F6b1	－	円形	1.04×0.98	16	皿状	外傾	自然	土師器	
620	F6b1	N－5°－E	楕円形	1.05×0.85	53	皿状	外傾	人為	土師器	SK619→本跡
622	F4e5	N－13°－E	楕円形	2.12×1.54	32	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，須恵器	SI 125，SK500→本跡
625	F5c7	N－42°－E	楕円形	1.10×0.92	73	皿状	外傾	人為	土師器	SI 91→本跡
626	F5c7	－	円形	0.98×0.90	38	平坦	外傾	人為		SI 91，SK613→本跡
627	F5c7	－	円形	0.40×0.38	(20)	平坦	外傾	人為	土師器	SI 91→本跡
628	F5c7	N－46°－W	楕円形	0.53×0.40	(26)	平坦	外傾	人為		SI 91→本跡
629	F5c6	N－60°－E	楕円形	0.45×0.34	22	平坦	ほぼ直立	人為		SI 91→本跡
630	F5c6	N－27°－W	楕円形	0.39×0.35	18	平坦	ほぼ直立	人為	縄文土器，土師器，須恵器	
631	F5d7	N－3°－E	楕円形	0.86×0.61	62	平坦	直立	人為	土師器	SI 90→本跡

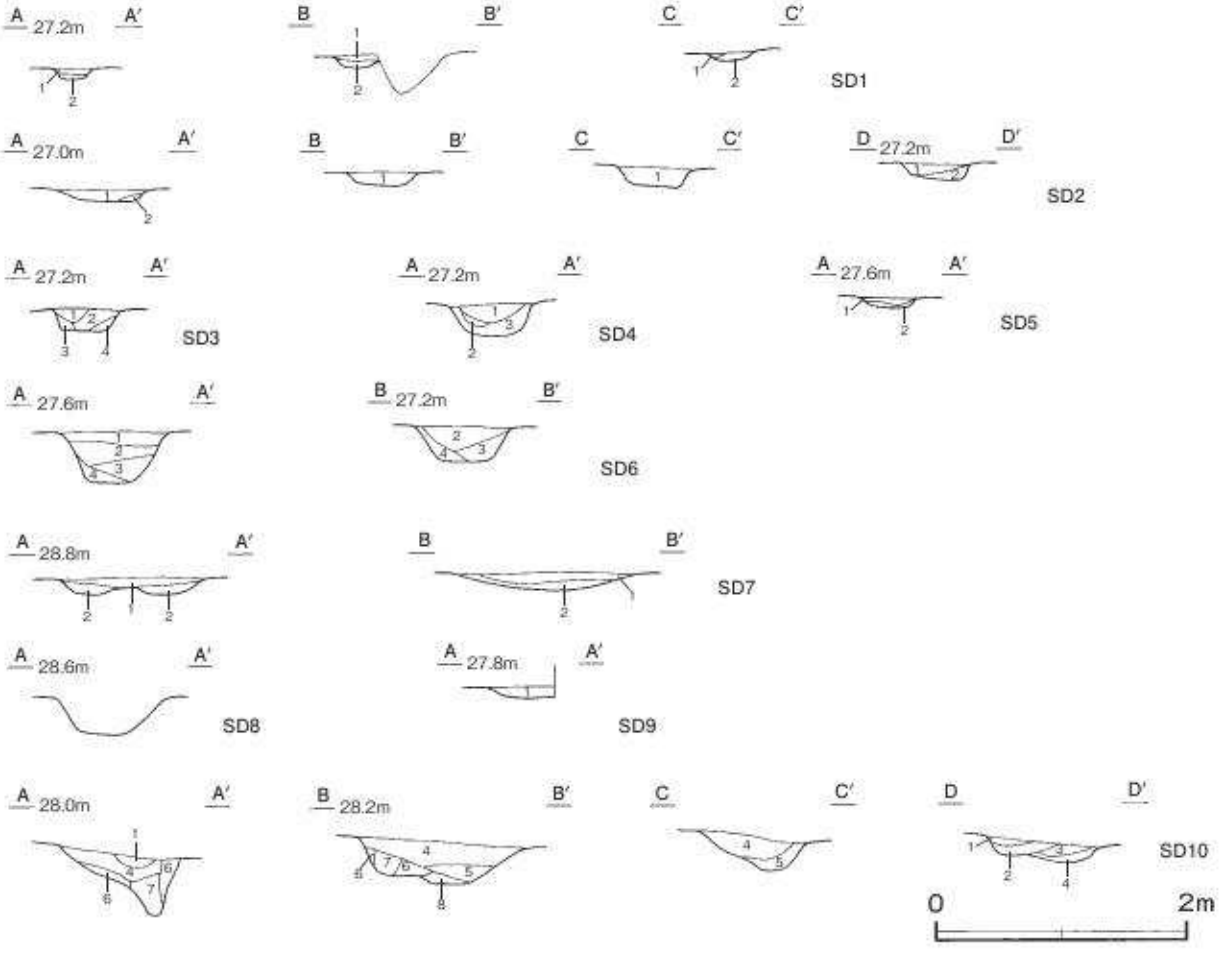
番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ（cm）	底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係（古→新）
633	F 5c6	N－53°－E	楕円形	0.74 × 0.65	(12)	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	SI 91→本跡
634	F 5c7	－	円形	0.92 × 0.90	47	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	SI 91→本跡
636	F 5d6	N－57°－E	楕円形	1.06 × 0.86	(26)	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器	SI 90→本跡
637	F 6b1	N－12°－W	[円形・楕円形]	1.05 ×(0.57)	30	平坦	外傾	－		SK688→本跡→SK617
638	F 5a9	N－59°－E	隅丸長方形	0.86 × 0.76	30	平坦	ほぼ直立 外傾	人為		
639	E 5j9	－	[円形・楕円形]	0.92 ×(0.84)	48	平坦	外傾	人為		本跡→SK640
640	E 5j9	N－16°－W	楕円形	1.43 × 1.00	32	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器	SK639→本跡
641	F 4e0	N－85°－W	楕円形	1.07 × 0.73	50	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	SI 108→本跡
642	F 5e0	N－45°－W	楕円形	1.41 × 1.04	30	平坦	緩斜	人為	土師器，須恵器	SI 112→本跡
643	E 5j9	－	円形	0.70 × 0.68	35	平坦	外傾	人為	土師器	
645	F 4e0	N－10°－E	不整楕円形	1.03 × 0.80	32	傾斜	外傾	人為	土師器，須恵器	
646	F 5d4	N－37°－W	楕円形	0.84 × 0.58	(18)	平坦	直立	人為		SI 90→本跡
647	F 5c6	－	[円形・楕円形]	0.86 ×(0.84)	14	平坦	外傾	人為		SI 90→本跡→SK502
654	F 5d0	N－78°－W	楕円形	0.75 × 0.42	(37)	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	SI 112→本跡
655	F 6e1	－	円形	0.36 × 0.33	(29)	平坦	ほぼ直立	人為		SI 112→本跡
656	F 6e1	N－54°－E	楕円形	0.85 × 0.72	(22)	平坦	緩斜	人為	土師器	SI 112→本跡
658	F 5e0	N－52°－E	長方形	1.28 × 0.86	(52)	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，須恵器，土師質土器，礎器	SI 112→本跡
659	F 5b1	－	円形	1.10 × 1.03	(23)	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，須恵器	SI 115→本跡
662	F 5d0	N－64°－W	長方形	0.78 × 0.42	(23)	有段	外傾	人為		SI 112→本跡
665	F 5d0	N－60°－E	楕円形	0.76 × 0.53	(5)	平坦	緩斜	人為		SI 112→本跡
666	F 5e0	－	円形	0.42 × 0.39	(18)	平坦	外傾	人為	土師器	SI 112→本跡
667	F 4d7	N－27°－W	[楕円形]	1.15 ×[0.85]	26	平坦	ほぼ直立 外傾	自然	土師器，須恵器	
669	F 6c1	N－27°－E	楕円形	0.76 × 0.67	(14)	平坦	緩斜	人為		SI 112→本跡
670	F 6d1	N－76°－W	長方形	0.54 × 0.47	(15)	平坦	外傾	人為		SI 112→本跡
671	F 6d1	－	円形	0.65 × 0.61	(17)	平坦	外傾	人為	土師器	SI 112→本跡
672	F 5e0	N－63°－W	楕円形	1.17 × 0.60	(34)	有段	外傾 緩斜	人為	縄文土器，土師器，須恵器	SI 112→本跡
673	F 6d1	－	円形	0.40 × 0.37	(7)	平坦	緩斜	人為	土師器	SI 112→本跡
674	E 5h1	N－77°－E	楕円形	1.48 × 1.18	44	平坦	緩斜	人為	土師器，須恵器	SI 118→本跡
675	F 4d4	N－73°－E	楕円形	1.84 × 0.97	48	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，須恵器	
676	F 4d4	N－77°－E	長方形	2.27 × 0.68	41	平坦	直立	人為	土師器	
678	F 4a2	－	円形	1.81 × 1.75	15	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器	
680	E 5g7	N－22°－W	長方形	1.74 × 0.99	46	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器，礎器	
682	E 5f6	－	[円形・楕円形]	0.87 ×(0.80)	75	有段	直立 外傾	人為		
683	E 5b4	N－15°－E	楕円形	1.25 × 1.06	33	平坦	外傾	人為	縄文土器，土師器，須恵器，鉄滓	
684	E 5b1	N－11°－W	楕円形	1.05 × 0.85	24	平坦	外傾 緩斜	人為		
685	E 5j3	N－8°－E	[円形・楕円形]	1.37 ×(0.84)	38	平坦	外傾	自然	土師器	本跡→SK686 SK693 新旧不明
686	E 5j2	－	円形	0.76 × 0.76	19	平坦	外傾	人為		SK685→本跡
687	E 5c4	N－56°－E	不整楕円形	0.88 × 0.81	26	平坦	緩斜	人為		SI 131→本跡
688	F 4c9	N－72°－W	長方形	1.47 × 1.05	45	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，鉄滓	SK699→本跡
689	F 4c9	－	円形	0.98 × 0.93	38	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，須恵器，土師質土器	
690	E 4f0	－	円形	1.33 × 1.23	27	平坦	外傾	人為	縄文土器，土師器，須恵器，陶器，鉄滓	
691	E 5g6	N－60°－W	楕円形	1.16 × 0.92	76	有段	直立 外傾	人為	土師器，自然遺物	
692	E 5j2	N－4°－E	楕円形	1.05 × 0.84	27	平坦	外傾	自然	土師器，須恵器	本跡→SK693
693	E 5j2	N－19°－W	長方形	(1.50) × 0.44	19	平坦	ほぼ直立	自然	土師器，須恵器	SK692→本跡 SK685 新旧不明
694	E 5j3	N－57°－W	不整円形	1.47 × 1.07	56	有段	ほぼ直立	人為	土師器	
695	F 6b1	N－65°－W	楕円形	0.70 × 0.56	18	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器	
696	E 4i1	－	円形	1.54 × 1.41	20	平坦	外傾	人為	縄文土器，土師器	
697	E 5f6	N－79°－E	長方形	1.29 × 0.60	(20)	平坦	外傾	人為	土師器	SI 116→本跡
698	F 6b1	N－14°－W	楕円形	1.54 × 1.40	17	皿状	外傾	人為	土師器	本跡→SK637
699	F 4c9	－	[円形・楕円形]	0.94 ×(0.27)	42	平坦	ほぼ直立	人為		本跡→SK688
701	F 6a1	－	円形	0.86 × 0.79	14	平坦	外傾	人為	土師器	
703	E 6j1	N－42°－E	楕円形	0.92 × 0.82	22	平坦	外傾	人為		
704	E 6j1	－	円形	0.54 × 0.51	40	皿状	外傾	－	土師器	
705	E 5j0	－	円形	0.98 × 0.90	20	平坦	外傾	人為		SK706→本跡
706	E 5j0	N－30°－W	[円形・楕円形]	(1.10) ×(0.95)	43	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	本跡→SK705・707
707	E 5j0	N－13°－E	楕円形	0.80 × 0.53	32	皿状	外傾	自然	土師器	SK706→本跡
708	E 5j0	N－25°－W	[円形・楕円形]	1.76 ×(0.72)	33	平坦	外傾	人為	土師器	本跡→SK709・733

番号	位置	長軸方向	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ（cm）	底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係（古→新）
709	E5j0	N－88°－E	楕円形	1.31 × 0.85	37	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器	SK708·733→本跡
710	E5j0	N－20°－E	楕円形	0.42 × 0.32	20	平坦	外傾	自然		SK711→本跡
711	E5j0	－	円形	0.82 × 0.78	21	平坦	外傾	人為		本跡→SK710
712	F4g9	－	［方形·長方形］	(1.32)×(0.70)	18	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器	SI 77→本跡→SI 129
714	F5c8	－	円形	1.22 × 1.17	50	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器	SK715·716→本跡
715	F5c9	N－13°－E	［円形·楕円形］	0.96 ×(0.54)	33	平坦	外傾	人為		SK716→本跡→SK714
716	F5c9	N－10°－W	楕円形	(0.60) × 0.50	22	平坦	外傾	人為		本跡→SK714·715
717	E5j9	N－29°－W	楕円形	1.34 × 0.92	23	平坦	外傾	人為		SK718→本跡
718	E5j9	［N－6°－W］	［円形·楕円形］	1.18 ×(0.97)	53	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，須恵器	本跡→SK717
719	E5i9	［N－7°－E］	［円形·楕円形］	1.52 ×(1.13)	46	平坦	ほぼ直立 外傾	人為	土師器，須恵器，鉄滓	本跡→SK734
720	E5j8	N－69°－E	楕円形	1.20 × 1.00	69	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，須恵器	SK735→本跡
721	E5i7	－	円形	0.86 × 0.83	40	平坦	直立 外傾	人為	土師器	本跡→SK737
724	E3i0	N－46°－E	楕円形	(1.64) × 1.12	30	平坦	直立	人為		
725	E5i7	－	不整円形	1.08 × 1.02	38	平坦	外傾	人為	土師器	
726	E5j0	－	円形	0.87 × 0.80	42	有段	外傾	人為		
727	E5i7	－	円形	0.48 × 0.44	15	平坦	外傾	人為		
729	E5i6	－	円形	0.67 × 0.61	24	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器	
730	E5h6	N－15°－E	楕円形	0.82 × 0.60	20	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器	
731	E5h6	N－64°－E	楕円形	(0.60) × 0.48	17	平坦	外傾	人為	土師器	本跡→SK732
733	E5j0	－	円形	0.74 × 0.72	26	平坦	外傾	人為		SK708→本跡→SK709
734	E5i8	N－28°－E	楕円形	0.95 × 0.85	55	平坦	外傾	人為	土師器	SK719→本跡
735	E5i8	－	円形	0.86 × 0.84	25	平坦	外傾	人為	土師器	本跡→SK720
736	E5h3	N－51°－W	楕円形	1.18 × 0.92	38	平坦	ほぼ直立 緩斜	人為		SI 117→本跡
737	E5h7	N－15°－W	長方形	4.40 × 1.02	65	平坦	ほぼ直立 外傾	自然	土師器，須恵器，礎器	SK721→本跡
738	F5c8	－	円形	0.63 × 0.58	24	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器	
740	F5c8	N－17°－W	楕円形	0.82 × 0.67	27	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器	
741	F5c8	N－12°－W	楕円形	0.53 × 0.43	20	平坦	ほぼ直立	人為		
745	E5h3	N－80°－W	隅丸長方形	0.86 × 0.53	22	平坦	緩斜	人為		
746	E5f4	N－16°－W	楕円形	0.69 × 0.53	36	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	
747	E5f4	N－76°－W	不整楕円形	0.92 × 0.67	33	平坦	外傾	人為	土師器	
748	F5e9	N－25°－W	楕円形	0.83 × 0.72	22	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器	
749	E5f4	N－34°－W	楕円形	0.48 × 0.40	37	平坦	ほぼ直立	人為		
752	F4e4	N－80°－E	長方形	1.85 × 0.81	75	平坦	直立	人為	土師器，礎器	SK753→本跡
754	F4d4	N－82°－E	隅丸長方形	2.27 × 1.36	47	平坦	直立	人為	土師器，須恵器，陶器，礎器，瓦	SK753·757→本跡
757	F4e4	－	［不定形］	(0.80)×(0.58)	28	平坦	直立	人為	土師器	本跡→SK753·754
758	F4e9	N－67°－W	楕円形	2.20 × 1.80	138	皿状	外傾 緩斜	人為	土師器，須恵器，鉄滓	SI 80→本跡→SI 79
760	F4b8	N－13°－W	楕円形	1.84 × 1.53	56	平坦	ほぼ直立	人為	縄文土器，土師器，須恵器，土製品	SK759·767→本跡
761	D5j1	－	円形	1.38 × 1.31	42	平坦	外傾	人為		
762	D4b9	N－74°－E	隅丸長方形	2.62 × 1.55	30	平坦	外傾	人為	土師器，鉄滓	SK763→本跡
763	D4b9	N－20°－W	［方形·長方形］	1.96 ×(1.53)	15	平坦	外傾	人為	土師器	本跡→SK762
764	F4b9	N－60°－W	楕円形	1.05 × 0.94	65	平坦	ほぼ直立	人為		SI 137→本跡
765	F4e5	－	［円形·楕円形］	1.16 ×(0.59)	15	平坦	外傾	人為	土師器	
767	F4b8	N－43°－E	楕円形	(1.63) × 1.26	50	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器，鉄滓	SI 126→本跡→SK760
768	D4i0	－	円形	0.95 × 0.90	37	皿状	外傾	自然	土師器，鉄滓	
771	D5g1	－	［円形·楕円形］	1.43 ×(1.40)	42	皿状	緩斜	人為		
772	D5h1	－	円形	0.89 × 0.87	50	平坦	外傾	自然		
774	E4f7	N－70°－E	不整楕円形	1.79 × 1.28	30	皿状	外傾	自然		
775	E4g8	N－70°－E	楕円形	1.68 × 1.13	(108)	不明	外傾	人為	土師器	
776	E4g7	N－32°－W	楕円形	1.46 × 1.17	89	平坦	ほぼ直立 外傾	人為		SK777→本跡
777	E4g7	N－38°－W	［円形·楕円形］	2.40 ×(1.29)	92	平坦	外傾	人為		本跡→SK776
778	E5f4	N－67°－E	長方形	1.70 × 0.93	48	平坦	緩斜	人為		
779	E4f6	－	円形	0.64 × 0.60	23	平坦	外傾	人為	土師器	
780	E4e6	－	［円形·楕円形］	0.62 ×(0.58)	54	傾斜	外傾	自然		
781	E4d9	［N－32°－W］	［不定形］	(2.72)×(1.45)	68	傾斜	ほぼ直立	自然	縄文土器	
782	E4d9	［N－28°－W］	［隅丸方形·隅丸長方形］	(1.28)×(1.16)	23	平坦	ほぼ直立	自然		
783	E4e6	N－10°－E	楕円形	0.71 × 0.60	62	平坦	ほぼ直立 外傾	人為		
784	E4f0	N－34°－W	楕円形	1.53 × 1.27	62	平坦	外傾	自然	土師器	

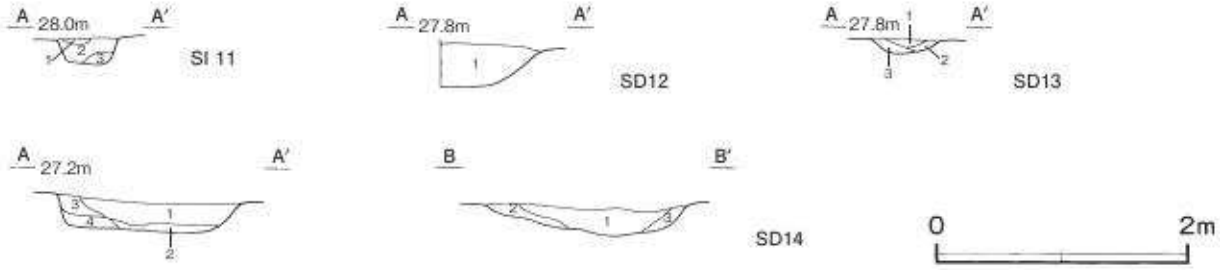
番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ（cm）	底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係（古→新）
785	E 4 f5	－	円形	0.82 × 0.76	7	平坦	外傾	自然	土師器，須恵器	
786	E 4 f5	N－2°－W	楕円形	0.86 × 0.78	17	平坦	外傾	自然		
787	E 4 f8	N－30°－E	楕円形	0.93 × 0.78	22	皿状	外傾	自然		
788	E 4 e8	N－65°－W	［楕円形］	［1.20］× 0.95	32	平坦	外傾	自然		
789	E 4 d9	N－25°－W	楕円形	0.48 × 0.41	60	平坦	ほぼ直立	人為		SI 133→本跡
790	F 5 h8	N－46°－E	長方形	0.80 × 0.64	64	平坦	ほぼ直立 外傾	人為		
791	E 5 f3	N－38°－E	楕円形	0.68 × 0.60	14	平坦	外傾	自然		
792	E 5 g3	－	円形	1.03 × 0.96	15	平坦	ほぼ直立 外傾	人為	縄文土器，土師器，須恵器	
793	E 5 b3	N－27°－E	楕円形	0.46 × 0.37	92	平坦	直立	人為		SI 134→本跡
795	F 6 h4	N－40°－E	楕円形	0.90 × 0.78	47	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	
797	F 6 f5	－	［円形・楕円形］	1.01 ×（0.90）	45	平坦	外傾	人為	土師器，須恵器，鉄滓	本跡→SK796
798	G 6 a6	N－81°－E	楕円形	1.10 × 0.58	61	平坦	直立	自然	土師器	
799	F 5 f0	N－81°－W	楕円形	0.87 × 0.55	47	平坦	直立	人為	土師器，須恵器	
800	F 6 c3	N－22°－E	［円形・楕円形］	1.08 ×（0.63）	37	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	
802	F 6 e5	－	［円形・楕円形］	0.75 ×（0.70）	43	平坦	ほぼ直立	人為	土師器，須恵器，土製品	
803	E 5 h9	N－42°－W	楕円形	1.18 × 1.02	51	平坦	ほぼ直立 外傾	人為	土師器	
804	F 6 j4	N－15°－W	楕円形	1.47 × 1.20	24	平坦	外傾	人為		

（5） 溝跡（第 428・429 図・付図）

その他の溝跡14条については，土層図と一覧表を掲載する。



第 428 図　その他の溝跡実測図（1）



第 429 図　その他の溝跡実測図 (2)

第１号溝跡土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック・焼土粒子微量

第２号溝跡土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック微量
2　暗　褐　色　ローム粒子微量

第３号溝跡土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量
2　黒　褐　色　ローム粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック少量
4　にぶい黄褐色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量

第４号溝跡土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量
3　にぶい黄褐色　ロームブロック中量，炭化粒子少量

第５号溝跡土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック微量
2　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量

第６号溝跡土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック微量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量
4　暗　褐　色　ロームブロック中量

第７号溝跡土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量
2　暗　褐　色　ロームブロック微量

第９号溝跡土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量

第 10 号溝跡土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　明　褐　色　ロームブロック中量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量
4　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量
5　黒　褐　色　ロームブロック少量
6　明　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子少量
7　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
8　暗　褐　色　ロームブロック中量

第 11 号溝跡土層解説
1　極暗褐色　ローム粒子・炭化粒子少量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量
3　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子微量

第 12 号溝跡土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量

第 13 号溝跡土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック微量

第 14 号溝跡土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　にぶい黄褐色　ロームブロック中量，焼土粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック微量
4　褐　　色　ローム粒子・炭化粒子微量

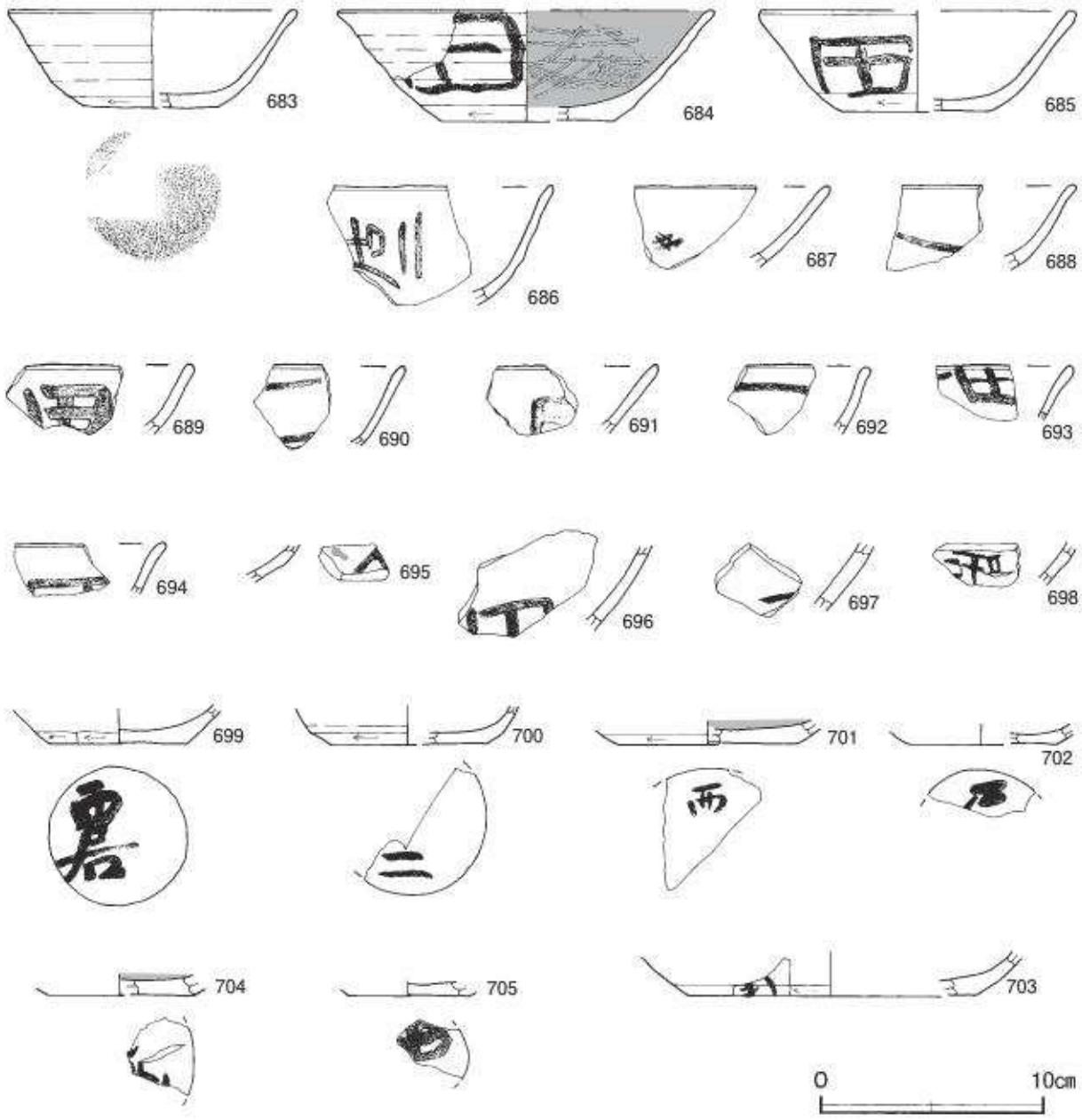
表 21　その他の溝跡一覧表

番号	位置	方向	平面形	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅 (m)	下幅 (m)	深さ(cm)					
1	B2h7－C2a5	N－34°－E	直線状	14.38	0.28－0.43	0.18－0.32	7－9	逆台形	外傾	自然	土師器，須恵器	本跡→SK 4・5・30
2	B2i1－C2d9	N－60°－W	直線状	(39.20)	0.48－0.83	0.30－0.54	8－13	逆台形	緩斜	自然	土師器，須恵器	SI 3，SK139・140・152→本跡→SK61・70・71・85・156
3	B3e1－B2f0	N－147°－W	直線状	3.06	0.39－0.55	0.18－0.42	11－18	逆台形	外傾	人為		本跡→SK27
4	B2j7－C2a7	N－34°－E	直線状	6.10	0.50－0.70	0.32－0.49	18－26	逆台形	外傾	人為	土師器	
5	C2f6－C2g7	N－50°－W	[L]字 直線状	6.40	0.28－0.45	0.16－0.33	8	逆台形	外傾	自然	礫	SK141・147→本跡
6	C2d4－C2g9	N－53°－W	直線状	(21.68)	0.42－0.92	0.10－0.35	10－35	逆台形	緩斜	人為	土師器，須恵器	本跡→SP 1，SK120・157
7	D3j6－E3a3	N－76°－E	[L]字 直線状	(14.35)	0.80－1.44	0.53－0.94	5－16	逆台形	外傾 緩斜	自然	土師器，須恵器， 土師質土器，陶器	清水 TM 9，SK229→本跡→SK217・225・230・232
8	D3j2－E3a2	N－18°－E	直線状	(2.50)	0.65－1.05	0.30－0.50	31	逆台形	外傾 緩斜	不明	土師器，土師質土器	
9	C2h9－C2j8	N－20°－E	直線状	(5.45)	0.45)－(0.73)	0.20－(0.32)	10－22	逆台形	緩斜	不明	陶器	

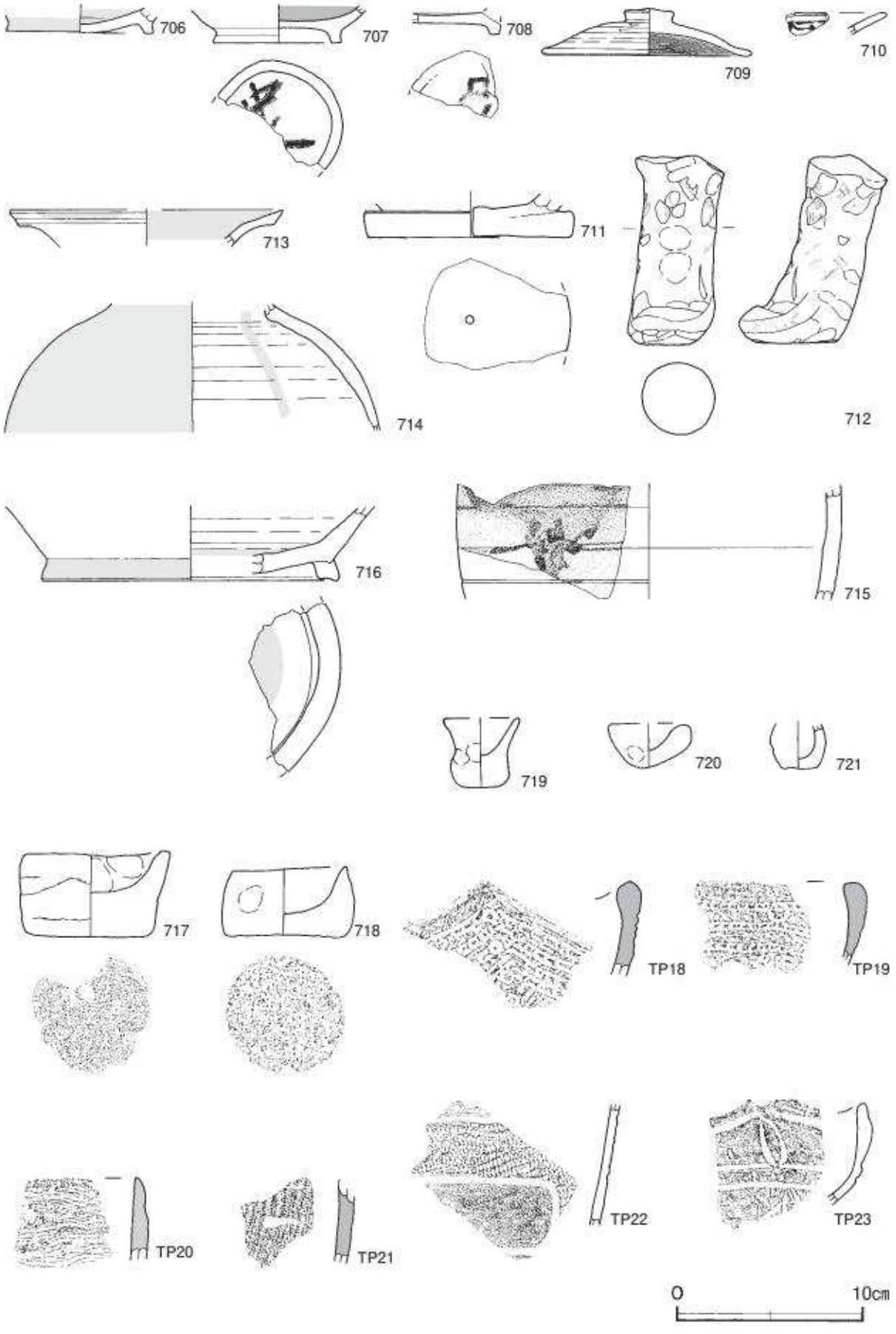
番号	位置	方向	平面形	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅 (m)	下幅 (m)	深さ(cm)					
10	F 6 j 8 － G 5 i 6	N － 63° － E N －110° － E	L 字状	(62.70)	0.44 － 2.04	0.12 － 1.00	28 － 55	U 字状	外傾 緩斜	人為	縄文土器, 土師器, 須恵器, 陶器, 土製品	SI 29 →本跡→ SK286
11	F 6 j 8 － G 6 a 4	N － 68° － E	直線状	(18.47)	0.38 － 0.75	0.26 － 0.53	12 － 21	逆台形	外傾	人為	縄文土器, 土師器, 須恵器	
12	G 6 c 5 － G 6 d 4	N － 72° － E	直線状	(5.70)	(0.80)	(0.35)	34	逆台形	緩斜	自然		SI 29 →本跡
13	G 6 c 5 － G 6 d 3	N － 67° － E	直線状	(6.20)	0.16 － 0.65	0.04 － 0.18	12	U 字状	緩斜	自然		SI 29, SK313 →本跡→ SK302・307
14	D 5 h 3 － D 4 i 9	N － 69° － E	直線状	(17.22)	1.32 － 2.26	0.43 － 0.88	17 － 29	逆台形	外傾	人為	土師器	

(6) 遺構外出土遺物（第 430 ～ 435 図）

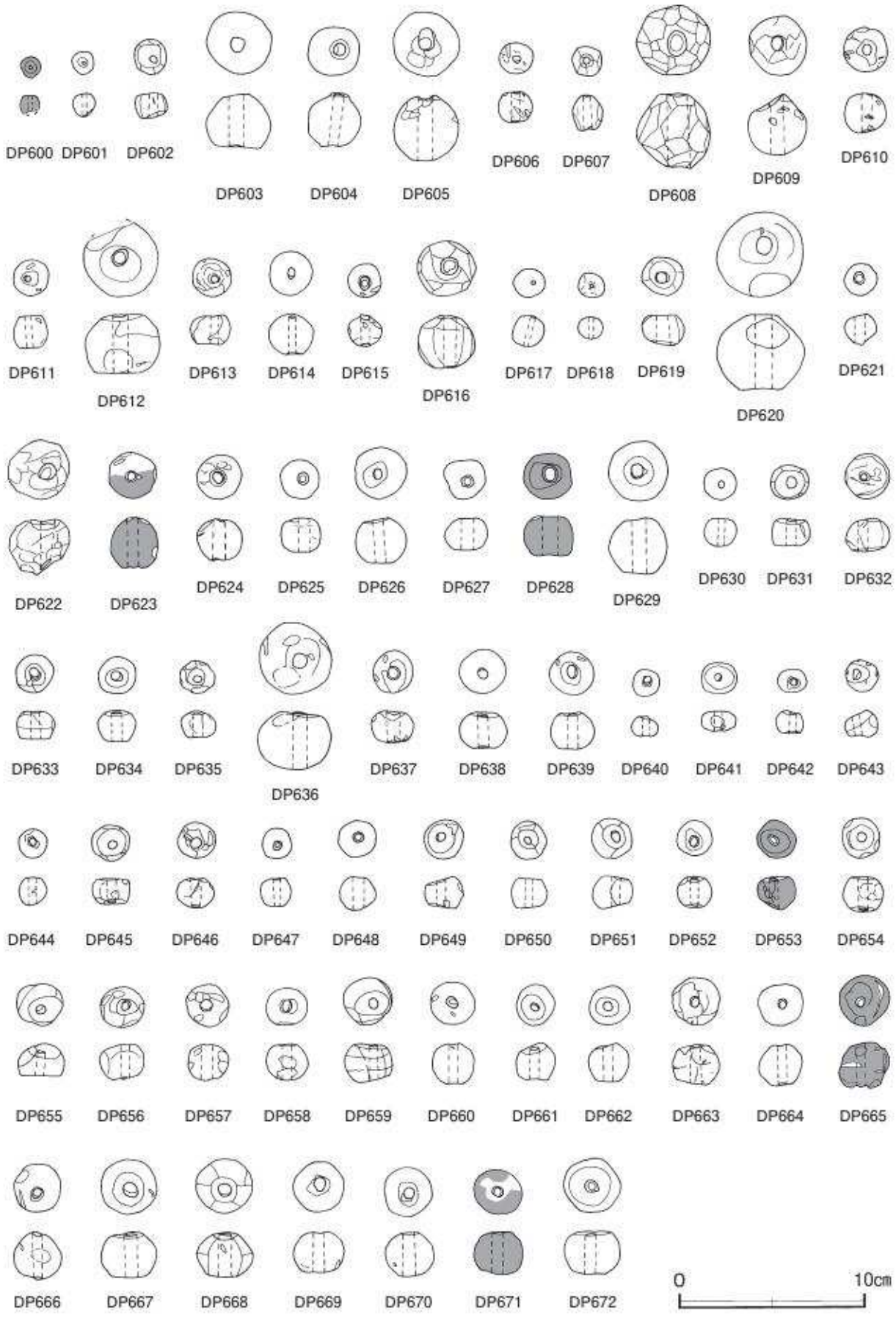
今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について，実測図と観察表を掲載する。



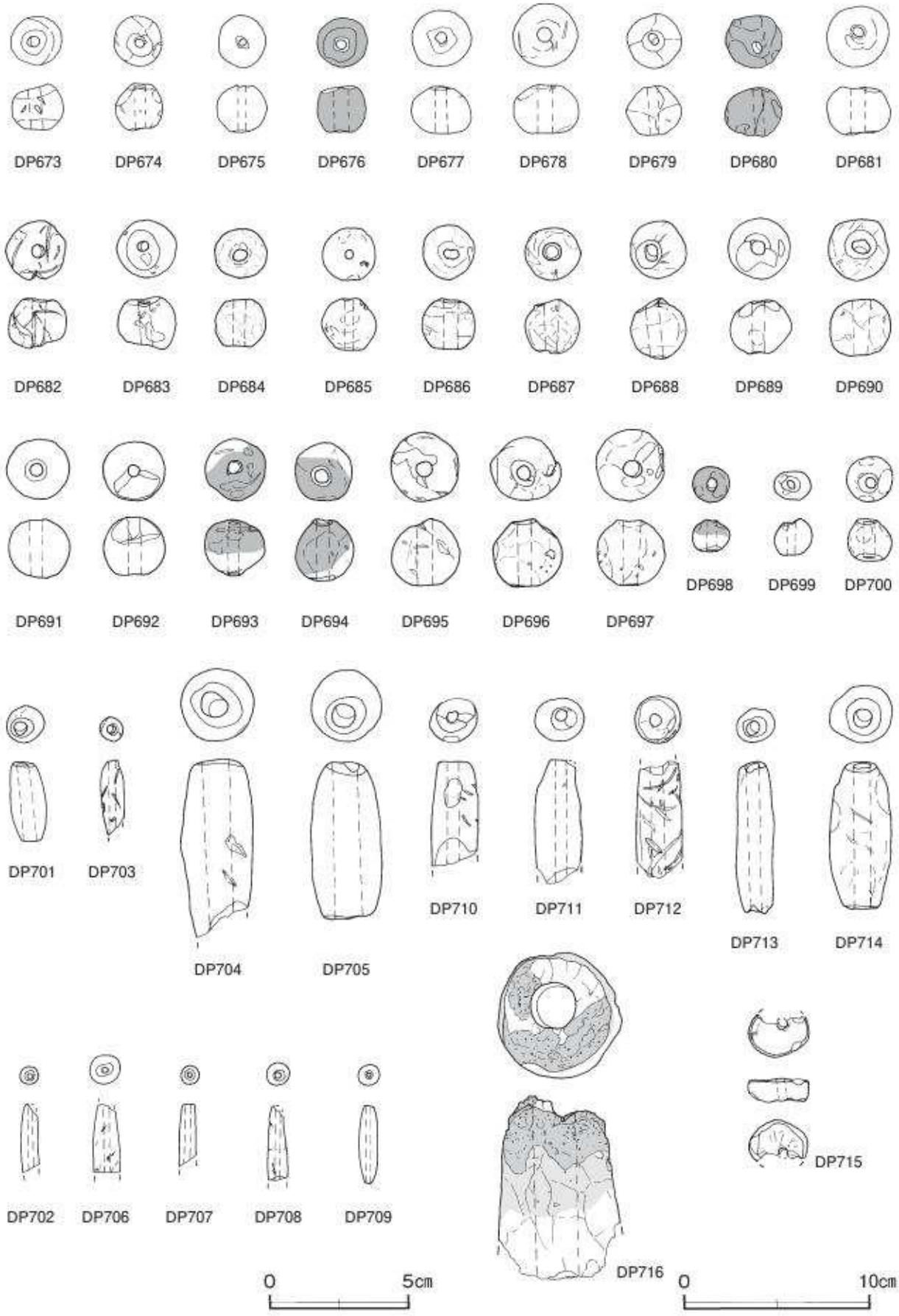
第 430 図　遺構外出土遺物実測図 (1)



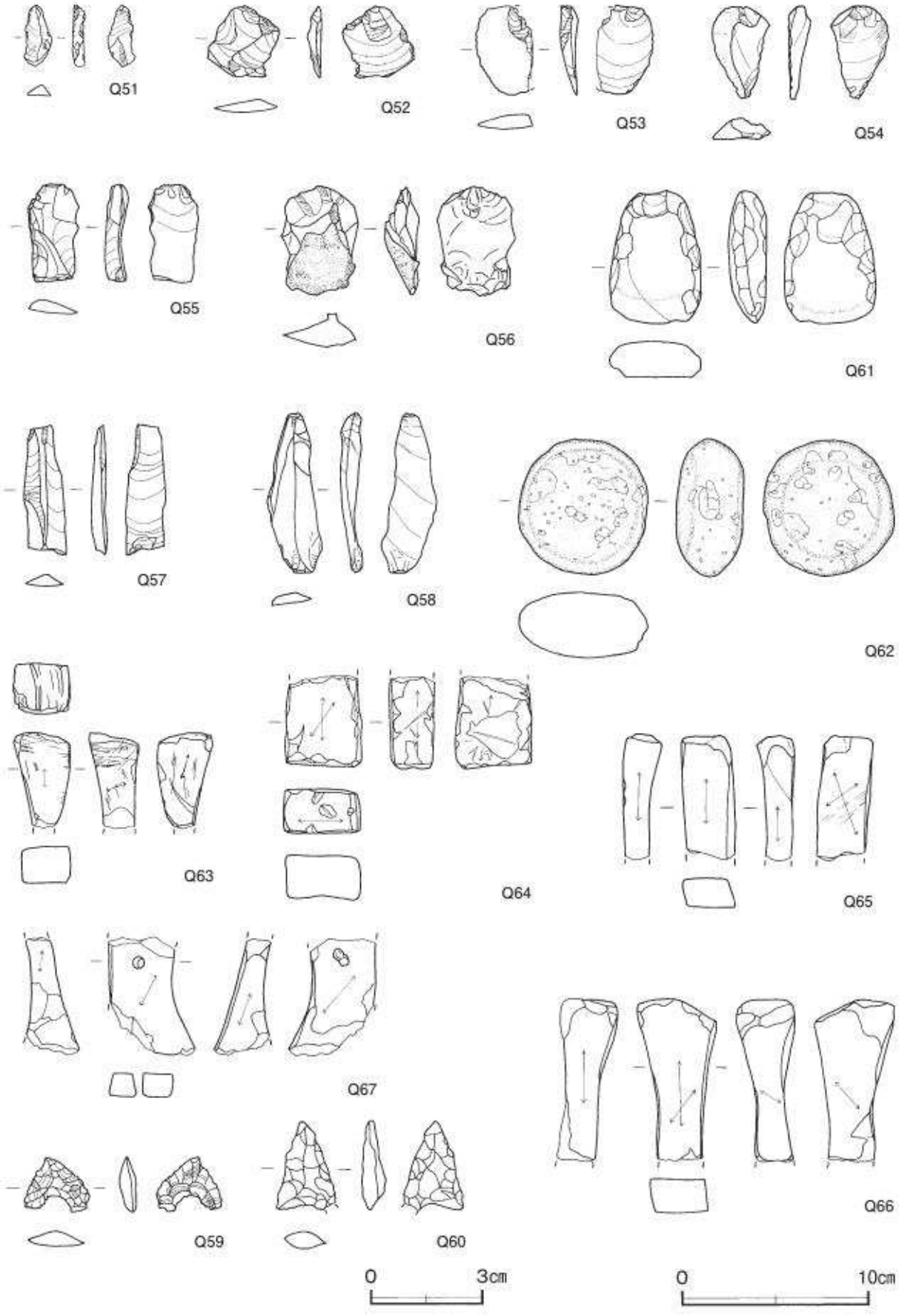
第 431 図　遺構外出土遺物実測図 (2)



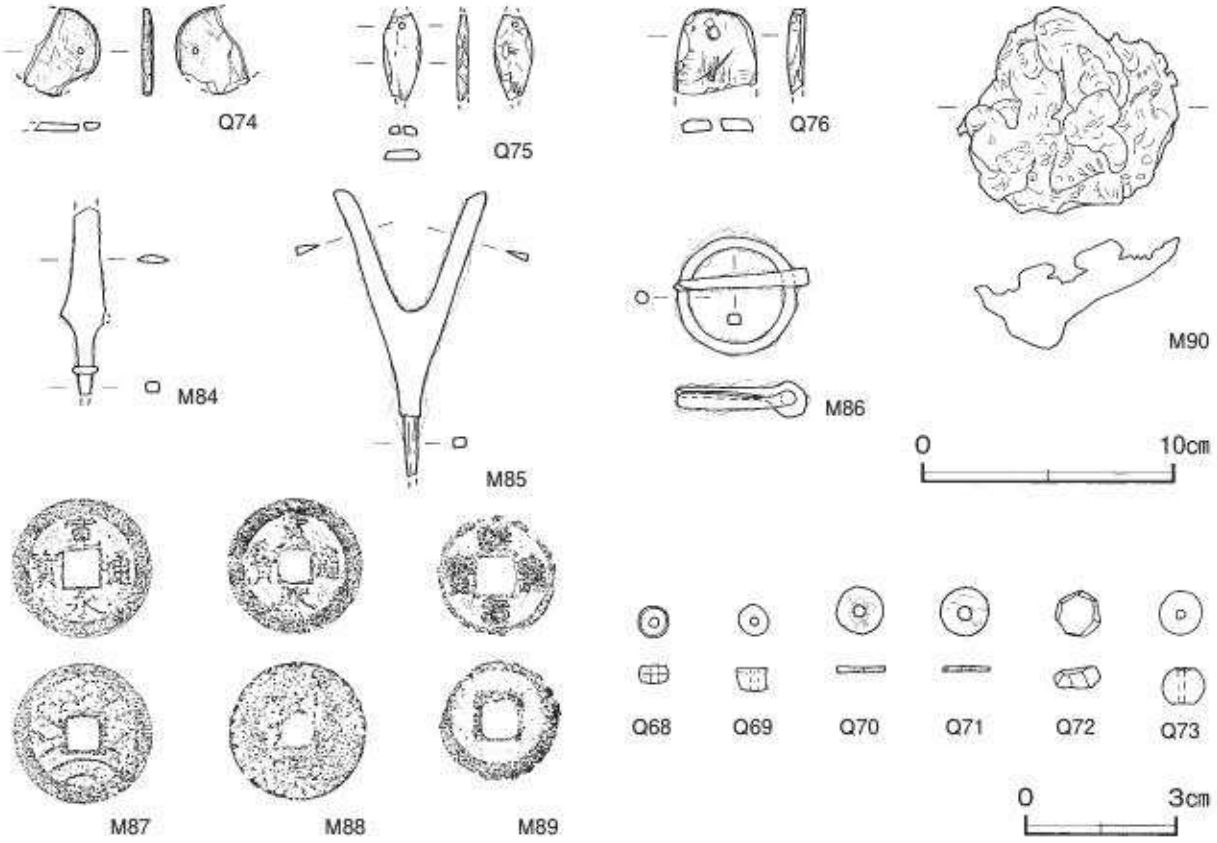
第 432 図　遺構外出土遺物実測図 (3)



第 433 図　遺構外出土遺物実測図 (4)



第 434 図　遺構外出土遺物実測図 (5)



第 435 図　遺構外出土遺物実測図 (6)

遺構外出土遺物観察表（第 430 ～ 435 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
683	土師器	坏	12.8	4.4	6.1	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部下端回転ヘラ削り　底部一方向のヘラ削り	表土	80%　PL77
684	土師器	坏	[16.5]	5.0	[7.8]	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り　内面ヘラ磨き　体部外面墨書「田₀」　底部回転ヘラ削り	表土	20%　PL82
685	土師器	坏	[13.7]	4.5	[6.6]	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端・底部回転ヘラ削り　体部外面墨書「田」　底部回転ヘラ削り	SI 112	20%　PL82
686	土師器	坏	－	(5.3)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部内面ヘラ磨き　黒色処理　体部外面墨書「居二₀」	表土	10%　PL82
687	土師器	坏	－	(3.6)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面墨書「井」	表土	10%　PL82
688	土師器	坏	－	(3.8)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内面ヘラ磨き　黒色処理　体部外面墨書「一₀」	SI 112	10%　PL82
689	土師器	坏	－	(3.1)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面墨書「田₀」	表土	5%　PL82
690	土師器	坏	－	(3.6)	－	長石・石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	体部外面墨書「□」	SK709	5%　PL82
691	土師器	坏	－	(3.1)	－	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面墨書「田₀」	表土	5%　PL83
692	土師器	坏	－	(3.1)	－	長石・石英	橙	普通	体部内面ヘラ磨き　黒色処理　体部外面墨書「一₀」	SI 46	5%　PL83
693	土師器	坏	－	(2.4)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き　黒色処理　体部外面墨書「□田₀」	表土	5%　PL83
694	土師器	坏	－	(2.3)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き　黒色処理　体部外面墨書「田₀」	表土	5%　PL83
695	土師器	坏	－	(1.7)	－	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	体部内面墨書「□」	表土	5%　油煙付着　PL83
696	土師器	坏	－	(4.8)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	体部内面ヘラ磨き　黒色処理　体部外面墨書「田₀」	表土	5%　PL83
697	土師器	坏	－	(3.1)	－	長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部外面墨書「□」	表土	5%　PL83
698	土師器	坏	－	(1.7)	－	長石・石英	橙	普通	体部外面墨書「居」	SK316	5%　PL83
699	土師器	坏	－	(1.7)	6.2	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り　底部回転ヘラ削り　底部墨書「西居」	表土	20%　PL83
700	土師器	坏	－	(1.3)	[7.0]	長石・石英・雲母	橙	普通	体部下端回転ヘラ削り　底部一方向のヘラ削り　底部墨書「二」	表土	10%　PL83
701	土師器	坏	－	(1.1)	[8.0]	長石・石英	橙	普通	体部下端回転ヘラ削り　内面ヘラ磨き　底部一方向のヘラ削り　底部墨書「西」	表土	5%　PL83
702	土師器	坏	－	(0.9)	[6.6]	長石・石英・黒色粒子	橙	普通	底部一方向のヘラ削り　底部墨書「居₀」	表土	5%　PL83
703	土師器	坏	－	(2.0)	[13.0]	長石・赤色粒子	橙	普通	体部下端回転ヘラ削り　底部一方向のヘラ削り　体部外面墨書「□」	SK463	5%　PL83

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
704	土師器	坏	−	(0.9)	[6.6]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部内面ヘラ磨き　底部二方向のヘラ削り　底部墨書「□」	表土	5％　PL83
705	土師器	坏	−	(0.6)	[5.4]	長石・石英	橙	普通	底部一方向のヘラ削り　底部墨書「□」	表土	5％　PL83
706	緑釉陶器	椀	−	(1.3)	[8.0]	精緻	灰オリーブ・にぶい橙	緻密	外・内面施釉　底部回転糸切り　丁寧な磨き	SI 42	5％　畿内産　PL100
707	土師器	高台付坏	−	(2.0)	[7.0]	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部内面ヘラ磨き　底部回転ヘラ削り　底部墨書「中□」	表土	20％　PL83
708	土師器	高台付坏	−	(1.2)	−	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き　底部墨書「居」	表土	5％　PL83
709	土師器	甕	11.0	2.5	−	長石・石英・針状物質	にぶい黄橙	普通	内面ヘラ磨き	UP 1	99％　PL77
710	土師器	皿	−	(1.2)	−	長石・石英	橙	普通	体部内面ヘラ磨き　黒色処理　体部外面墨書「田」	表土	5％　PL83
711	須恵器	擂鉢	−	(2.4)	[11.0]	長石・石英・針状物質	灰	普通	底部片　穿孔有り	表土	5％　木葉下窯
712	土師器	火舎香炉	−	(10.1)	−	長石・石英	浅黄橙	普通	脚部片　ナデ　指頭痕	表土	5％　PL77
713	灰釉陶器	瓶	[14.6]	(2.0)	−	精緻	灰黄・灰オリーブ	緻密	外・内面施釉	表土	5％　産地不明
714	灰釉陶器	瓶	−	(6.9)	−	精緻	灰白・灰オリーブ	緻密	外面施釉	表土	10％　PL100　黒笹90窯式
715	灰釉陶器	瓶	−	(6.2)	−	精緻	灰黄褐・灰オリーブ	緻密	外面施釉	表土	5％　黒笹90窯式
716	灰釉陶器	瓶	−	(4.0)	[15.8]	精緻	灰黄・灰オリーブ	緻密	底部・高台部釉付着　底部内面降灰	表土	5％　黒笹90窯式
717	土師器	手捏土器	7.9	4.7	6.4	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	ナデ　指頭痕　輪積痕	SK303	100％　PL77
718	土師器	手捏土器	6.1	3.8	6.3	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	ナデ　指頭痕	SK621	95％　PL77
719	土師器	手捏土器	[4.0]	3.7	2.9	長石・石英	橙	普通	ナデ　指頭痕	SI 32	80％
720	土師器	手捏土器	[4.0]	2.4	−	長石・石英・黒色粒子	にぶい褐	普通	ナデ　指頭痕	SK555	70％
721	土師器	手捏土器	−	(2.5)	1.5	長石・石英	にぶい黄褐	普通	ナデ	SI 115	50％

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP18	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子・繊維	にぶい黄橙	円形刺突文と半截竹管による連続刺突文	SI 18	関山式　PL84
TP19	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	明黄褐	円形刺突文と半截竹管による連続刺突文	表土	関山式　PL84
TP20	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子・繊維	にぶい赤褐	半截竹管状工具による横方向の条線文	表土	横房式　PL84
TP21	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子・繊維	にぶい褐	0段多条附加縄文	表土	黒浜式　PL84
TP22	縄文土器	深鉢	長石・石英・白色粒子	にぶい黄橙	単節縄文LRを沈線文で区画　区画内磨消	表土	加曽利B2式　PL84
TP23	縄文土器	浅鉢	長石・石英・赤色粒子	赤褐	楕円形と横方向の沈線文	表土	加曽利B2式　PL84

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP600	小玉	1.1	(1.0)	0.3	(1.06)	長石・石英	黒褐	欠損　ナデ　一方向からの穿孔	SI 75	煤付着
DP601	小玉	1.3	1.2	0.3	(1.61)	長石・石英	明赤褐	欠損　ナデ　一方向からの穿孔	表土	
DP602	土玉	1.8－2.0	1.4	0.5	4.51	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	SI 24	
DP603	土玉	3.5	3.0	0.8	34.3	長石・石英	橙	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	SI 24	
DP604	土玉	2.7－2.9	2.8	0.6	20.8	長石・石英	橙	ナデ　一方向からの穿孔	SI 53	
DP605	土玉	3.6	3.6	0.8	(42.5)	長石・石英	橙	欠損　ナデ　一方向からの穿孔	SI 54	
DP606	土玉	1.7－1.9	1.7	0.4－0.5	(4.67)	長石・雲母・赤色粒子	浅黄橙	欠損　ナデ　一方向からの穿孔　擦痕有り	SI 85	
DP607	土玉	1.7	1.9	0.4－0.5	4.54	長石・石英	にぶい黄橙	ナデ　一方向からの穿孔	SK133	
DP608	土玉	3.8－4.0	4.0	1.2－1.3	48.2	長石・石英・雲母	橙	ヘラ状工具による成形　二方向からの穿孔	SK227	
DP609	土玉	3.2	3.3	0.8	30.4	長石・雲母	橙	ナデ　一方向からの穿孔　片端部を成形	SK230	
DP610	土玉	2.4	2.1	0.5	12.2	長石・雲母・赤色粒子	橙	ナデ　一方向からの穿孔　片端部を平坦に成形　擦痕有り	SK262	
DP611	土玉	1.9－2.0	1.8	0.4	6.40	長石・石英	橙	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	SK267	
DP612	土玉	4.1	3.1	0.8	(53.8)	長石・石英	明赤褐	欠損　ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	SK270	
DP613	土玉	2.1	1.6	0.4	7.84	長石・石英	橙	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	SK281	
DP614	土玉	2.4	2.2	0.4	12.8	長石・石英	橙	ナデ　一方向からの穿孔　片端部を平坦に成形	SK306	
DP615	土玉	1.8	1.7	0.5	5.07	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	ナデ　一方向からの穿孔	SK310	
DP616	土玉	3.0－3.1	2.9	0.7	27.3	長石・石英	明赤褐	ナデ　一方向からの穿孔	SK312	
DP617	土玉	1.6－1.7	1.7	0.3	4.98	長石・石英	橙	ナデ　一方向からの穿孔	SK317	
DP618	土玉	1.4	1.2	0.3	2.50	長石・石英	にぶい黄橙	ナデ　一方向からの穿孔	SK328	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP619	土玉	21～22	1.6	06～08	7.49	長石・石英	橙	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	SK421	
DP620	土玉	46～48	4.1	0.9	82.6	長石・雲母・赤色粒子	明黄褐	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	SK422	
DP621	土玉	17～18	1.7	05～06	3.60	長石・石英	にぶい黄褐	ナデ　一方向からの穿孔	SK470	
DP622	土玉	3.3	3.1	06～09	26.1	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	ナデ　二方向からの穿孔　片端部を平坦に成形	SK470	
DP623	土玉	2.6	2.7	0.6	(17.2)	長石・石英	橙	一部欠損　ナデ　一方向からの穿孔	SK470	煤付着
DP624	土玉	24～25	2.3	06～08	15.7	長石	橙	ナデ　一方向からの穿孔　指頭痕	SK489	
DP625	土玉	2.1	1.9	0.6	8.91	長石・石英	橙	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	SK528	
DP626	土玉	2.8	2.5	05～06	17.5	長石・石英・雲母	橙	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	SK555	
DP627	土玉	21～24	1.7	0.7	8.14	長石・石英	橙	ナデ　一方向からの穿孔　片端部を平坦に成形	SK556	
DP628	土玉	25～27	2.0	0.8	15.1	長石・石英	黒褐	ナデ　一方向からの穿孔　片端部を平坦に成形	SK556	煤付着
DP629	土玉	3.2	3.0	0.8	30.0	長石・雲母	明赤褐	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	SK570	
DP630	土玉	1.7	1.6	0.4	5.02	長石	にぶい黄橙	ナデ　一方向からの穿孔	SK585	
DP631	土玉	19～21	1.5	0.5	5.80	長石・石英	にぶい黄橙	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	SK646	
DP632	土玉	24～25	1.8	0.5	9.47	長石・石英	橙	ナデ　一方向からの穿孔　片端部を平坦に成形　擦痕有り	SK685	
DP633	土玉	2.1	1.5	05～06	6.12	長石・石英	橙	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	SK718	
DP634	土玉	2.0	1.6	0.5	7.12	長石・雲母	明赤褐	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	SK732	
DP635	土玉	17～19	1.4	0.4	5.09	長石・石英・雲母	浅黄橙	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	SK795	
DP636	土玉	3.9	3.1	0.8	48.5	長石・石英・雲母	明赤褐	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形　指頭痕	SK795	
DP637	土玉	2.3	1.8	0.7	(8.57)	長石・雲母	橙	一部欠損　ナデ　一方向からの穿孔	SD10	
DP638	土玉	24～26	2.0	0.5	11.3	長石・石英	にぶい黄橙	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	SD10	
DP639	土玉	23～25	2.0	0.6	11.0	長石	橙	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	SD10	
DP640	土玉	1.5	1.1	0.4	2.51	長石・石英	橙	ナデ　一方向からの穿孔	表土	
DP641	土玉	17～20	1.1	0.4	3.81	長石・石英	明赤褐	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	表土	
DP642	土玉	13～16	1.2	0.4	2.50	長石・石英	赤褐	ナデ　一方向からの穿孔　片端部を平坦に成形	表土	
DP643	土玉	1.7	1.4	0.4	4.07	長石	浅黄橙	ナデ　一方向からの穿孔	表土	
DP644	土玉	1.6	1.6	0.4	3.43	長石・石英	にぶい橙	ナデ　一方向からの穿孔	表土	
DP645	土玉	2.0	1.4	0.5	(5.70)	長石・石英・雲母	橙	一部欠損　ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形　指頭痕	表土	
DP646	土玉	2.0	1.6	0.5	(5.66)	長石・雲母	橙	一部欠損　ナデ　一方向からの穿孔	表土	
DP647	土玉	16～17	1.6	03～04	4.42	長石・石英	にぶい黄褐	ナデ　一方向からの穿孔	表土	
DP648	土玉	20～21	1.8	0.6	6.82	長石・石英	明黄褐	ナデ　一方向からの穿孔	表土	
DP649	土玉	2.1	1.7	0.5	(6.93)	長石・石英	橙	一部欠損　ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	表土	
DP650	土玉	20～21	1.6	0.4	(7.30)	長石・石英	橙	一部欠損　ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	表土	
DP651	土玉	2.2	1.8	0.5	8.29	長石・石英	にぶい黄橙	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	表土	
DP652	土玉	1.9	1.7	0.5	6.14	長石	橙	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	表土	
DP653	土玉	20～22	1.8	0.5	7.92	長石・石英	黒褐	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	表土	煤付着
DP654	土玉	2.1	1.8	0.5	7.80	長石・石英	橙	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形　指頭痕	表土	
DP655	土玉	23～25	1.8	04～05	(8.93)	長石・石英	明赤褐	一部欠損　ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	表土	
DP656	土玉	22～24	1.9	04～05	10.1	長石・雲母	橙	ナデ　一方向からの穿孔　指頭痕	表土	
DP657	土玉	2.3	1.9	06～07	9.47	長石・雲母	橙	ナデ　一方向からの穿孔　指頭痕	表土	
DP658	土玉	20～22	2.0	0.5	9.12	長石・石英・雲母	橙	ナデ　一方向からの穿孔　片端部を平坦に成形	表土	
DP659	土玉	2.6	2.1	0.5	13.6	長石・石英	橙	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	表土	
DP660	土玉	23～24	2.2	0.5	11.2	長石・石英	橙	ナデ　一方向からの穿孔	表土	
DP661	土玉	21～22	2.0	0.5	9.27	長石・石英	暗赤灰	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	表土	
DP662	土玉	22～23	2.1	0.5	9.30	長石・石英	橙	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	表土	
DP663	土玉	2.6	2.2	05～06	(14.4)	長石・石英・雲母	にぶい褐	一部欠損　ナデ　一方向からの穿孔　片端部を平坦に成形	表土	
DP664	土玉	23～25	2.3	0.5	11.7	長石・石英	橙	ナデ　一方向からの穿孔	表土	
DP665	土玉	2.8	2.4	0.5	17.6	長石・石英	橙	ナデ　一方向からの穿孔　片端部を成形　擦痕有り	表土	煤付着

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP666	土玉	2.6	2.6	0.5	12.7	長石・石英・雲母	橙	ナデ　一方向からの穿孔　指頭痕	表土	
DP667	土玉	3.0	2.4	0.7－0.9	20.7	長石・石英	橙	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	表土	
DP668	土玉	3.0	2.4	0.7	20.7	長石・石英	にぶい橙	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	表土	
DP669	土玉	2.8	2.2	0.6－0.7	(15.3)	長石・石英・雲母	橙	一部欠損　ナデ　一方向からの穿孔　片端部を平坦に成形	表土	
DP670	土玉	2.6－2.7	2.4	0.6－0.9	16.7	長石・石英・雲母	橙	ナデ　一方向からの穿孔　片端部を平坦に成形	表土	
DP671	土玉	2.5－2.7	2.3	0.6	(14.6)	長石・石英	黒褐	一部欠損　ナデ　一方向からの穿孔	表土	煤付着
DP672	土玉	3.0	2.3	0.6	22.1	長石・石英	明赤褐	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	表土	
DP673	土玉	2.6－2.8	2.4	0.6－0.7	17.3	長石・石英	にぶい橙	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	表土	
DP674	土玉	2.6－2.7	2.6	0.6	16.0	長石・石英	橙	ナデ　一方向からの穿孔	表土	
DP675	土玉	2.6－2.9	2.6	0.4	19.2	長石・石英	にぶい褐	ナデ　一方向からの穿孔	表土	
DP676	土玉	2.6	2.5	0.7	18.0	長石・石英	黒	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	表土	煤付着
DP677	土玉	3.1－3.3	2.6	0.6－0.7	26.7	長石・石英	橙	ナデ　一方向からの穿孔　片端部を平坦に成形	表土	
DP678	土玉	3.5	2.6	0.8	31.2	長石・雲母	橙	ナデ　一方向からの穿孔　擦痕有り	表土	
DP679	土玉	3.0	2.7	0.4	21.9	長石・石英	橙	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	表土	
DP680	土玉	2.9－3.1	2.6	0.5－0.6	22.6	長石・石英	黒	ナデ　一方向からの穿孔　片端部を平坦に成形　指頭痕	表土	煤付着
DP681	土玉	3.4－3.5	2.6	0.8	33.3	長石・石英	にぶい黄橙	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	表土	
DP682	土玉	3.2	2.7	0.7	(24.3)	長石・石英	明褐	欠損　ナデ　一方向からの穿孔	表土	
DP683	土玉	3.2－3.3	2.9	0.7	(24.6)	長石・石英	橙	一部欠損　ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	表土	
DP684	土玉	2.7－2.9	2.6	0.8	18.8	長石・石英	橙	ナデ　一方向からの穿孔　片端部を平坦に成形	表土	
DP685	土玉	2.9－3.0	2.8	0.5	22.6	長石・石英	にぶい黄橙	ナデ　一方向からの穿孔　指頭痕	表土	
DP686	土玉	2.8－3.0	2.8	0.8	21.2	長石・石英	橙	ナデ　二方向からの穿孔　片端部を平坦に成形　指頭痕	表土	
DP687	土玉	2.8－3.0	2.8	0.6－0.7	22.3	長石・石英	にぶい橙	ナデ　一方向からの穿孔　片端部を平坦に成形　指頭痕	表土	
DP688	土玉	3.0－3.1	3.2	0.7	26.0	長石・石英・赤色粒子	橙	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	表土	
DP689	土玉	3.3	2.9	0.7	(28.1)	長石・石英	明赤褐	一部欠損　ナデ　一方向からの穿孔	表土	
DP690	土玉	3.2－3.3	3.0	0.6－1.1	30.4	長石・石英・雲母	橙	ナデ　二方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	表土	
DP691	土玉	3.3－3.4	3.1	0.6－0.7	32.9	長石・石英・雲母	橙	ナデ　一方向からの穿孔	表土	
DP692	土玉	3.2－3.3	3.1	0.7	(28.9)	長石・石英	明赤褐	欠損　ナデ　一方向からの穿孔　片端部を平坦に成形	表土	
DP693	土玉	3.3－3.4	3.0	0.5－0.8	30.0	長石・石英	にぶい橙	ナデ　二方向からの穿孔　指頭痕	表土	煤付着
DP694	土玉	3.1	3.4	0.7	31.5	長石・石英・雲母	橙	ナデ　一方向からの穿孔	表土	煤付着
DP695	土玉	3.7	3.6	0.9	(43.7)	長石・石英・雲母	橙	一部欠損　ナデ　一方向からの穿孔	表土	
DP696	土玉	3.5－3.8	3.7	0.7	42.5	長石・石英	橙	ナデ　一方向からの穿孔　片端部を平坦に成形	表土	
DP697	土玉	3.7－4.0	3.5	0.7－0.9	47.3	長石・石英	にぶい橙	ナデ　二方向からの穿孔　指頭痕	表土	
DP698	土玉	1.9	1.7	0.5	6.19	長石・雲母	浅黄橙	ナデ　一方向からの穿孔	表採	煤付着
DP699	土玉	1.6－2.0	2.0	0.4	5.84	長石・石英・赤色粒子	橙	ナデ　一方向からの穿孔	表土	
DP700	土玉	2.4	2.3	0.5－0.6	11.9	長石・石英・雲母	橙	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	表採	
DP715	紡錘車	3.3	1.3	(0.5)	(8.93)	長石・石英・雲母	にぶい橙	欠損　ナデ　一方向からの穿孔	SF 1	PL93

番号	器種	径	長さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP701	管状土錘	2.0	4.3	0.7	14.7	長石・石英	橙	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を平坦に成形	SK133	PL91
DP702	管状土錘	0.6	(2.5)	0.2	(0.90)	長石・石英	にぶい黄橙	欠損　ナデ　一方向からの穿孔	SK271	PL91
DP703	管状土錘	1.3	(4.0)	0.6	(4.93)	長石・赤色粒子	橙	欠損　ナデ　一方向からの穿孔	SK310	PL91
DP704	管状土錘	3.9	(9.5)	1.3－1.5	(133)	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	欠損　ナデ　一方向からの穿孔　片端部を成形	SK464	PL91
DP705	管状土錘	3.8	8.5	1.3－1.7	118	長石・石英・雲母	にぶい橙	ナデ　一方向からの穿孔　両端部を成形	SK653	PL91
DP706	管状土錘	1.0	(2.5)	0.2	(2.43)	長石・石英	浅黄橙	欠損　ナデ　一方向からの穿孔	SF 1	PL91
DP707	管状土錘	0.6	(2.2)	0.2	(0.93)	長石・石英・赤色粒子	橙	欠損　ナデ　一方向からの穿孔	表土	PL91
DP708	管状土錘	0.8	(2.7)	0.2	(1.54)	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	欠損　ナデ　一方向からの穿孔	表土	PL91
DP709	管状土錘	0.7	2.8	0.2	1.47	長石・石英	にぶい黄橙	ナデ　一方向からの穿孔	表土	PL91

番号	器種	径	長さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP710	管状土錘	2.5	(5.7)	0.6－0.7	(27.6)	長石・石英	橙	欠損　ナデ　一方向からの穿孔　片端部を平坦に成形	表土	PL91
DP711	管状土錘	2.3－2.5	(6.7)	0.6－0.7	(32.1)	長石・石英	橙	欠損　ナデ　一方向からの穿孔	表土	PL91
DP712	管状土錘	2.5	(6.3)	0.6－0.8	(34.4)	長石・石英	にぶい黄橙	欠損　ナデ　一方向からの穿孔　指痕有り	表土	
DP713	管状土錘	1.8－2.0	8.2	0.6－0.7	30.1	長石・石英・雲母	浅黄橙	ナデ　一方向からの穿孔	表土	PL91
DP714	管状土錘	3.1－3.4	8.0	0.9－1.0	81.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	ナデ　一方向からの穿孔　指頭痕	表土	PL91
DP716	羽口	6.6－6.8	(9.9)	2.4	(276)	長石・石英	にぶい赤褐	欠損　ナデ　先端部溶化　一部還元色	SK723	PL93

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 68	臼玉	0.6	0.4	0.2	0.21	滑石	全面磨磨　一方向からの穿孔	SI 52	PL96
Q 69	臼玉	0.6	0.4	0.2	0.31	滑石	全面磨磨　一方向からの穿孔	SI 44	PL96
Q 70	臼玉	1.0	0.1	0.2	0.16	安山岩	一方向からの穿孔	SI 32	PL96
Q 71	臼玉	1.0	0.1	0.2	0.14	安山岩	一方向からの穿孔	SI 32	PL96
Q 72	臼玉	0.9	0.4	－	0.51	滑石	周囲を削り出したのみの未製品	SI 14	PL96
Q 73	小玉	0.9	0.7	0.2	0.60	滑石	全面磨磨　一方向からの穿孔	SI 66	PL96

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 51	剥片	3.3	(1.5)	0.8	(2.26)	黒曜石	縦長剥片　剥離作業時に生じた残骸　自然面残存	SI 102	PL94
Q 52	剥片	3.9	3.9	0.8	7.12	瑪瑙	縦長剥片　剥離作業時に生じた残骸	表土	PL94
Q 53	剥片	4.8	3.0	0.9	11.9	玉髄	縦長剥片　剥離作業時に生じた残骸　自然面残存	SI 19	PL94
Q 54	剥片	5.0	3.1	1.2	10.6	玉髄	縦長剥片　自然面残存	SK291	PL94
Q 55	剥片	5.3	2.7	1.2	13.5	流紋岩	縦長剥片　二次加工を有する剥片	SK755	PL94
Q 56	剥片	5.8	4.2	1.8	35.0	瑪瑙	縦長剥片　剥離作業時に生じた残骸　自然面残存	表土	PL94
Q 57	剥片	(7.0)	(2.3)	(0.8)	(11.3)	頁岩	縦長剥片　周縁調整　両端部欠損　幅状に剥離	表土	PL94
Q 58	剥片	8.6	3.0	1.2	15.5	頁岩	縦長剥片　剥離作業時に生じた残骸	表土	PL94
Q 59	鏃	1.4	1.8	0.5	0.79	黒曜石	凹基無茎鏃	表土	PL94
Q 60	鏃	(2.4)	(1.6)	0.7	(1.54)	安山岩	凹基無茎鏃　基部欠損	表土	PL94
Q 61	磨製石斧	7.1	4.9	2.1	105	緑色凝灰岩	両面及び側面を調整　刃部に使用痕有り	SO 2	PL94
Q 62	磨石	7.3	7.0	3.6	247	安山岩	使用面２面　側面に敲打痕有り	SK548	PL94
Q 63	砥石	(5.2)	3.1	2.7	(45.6)	凝灰岩	砥面４面　他１面は破断面	表土	
Q 64	砥石	(5.0)	(4.2)	2.5	(88.1)	凝灰岩	砥面４面　他１面は破断面	表土	PL95
Q 65	砥石	(6.7)	2.9	2.1	(58.1)	凝灰岩	砥面４面　他２面は破断面	表土	PL96
Q 66	砥石	(8.7)	4.3	3.2	(117)	凝灰岩	砥面４面　他２面は破断面	SK109	PL96
Q 67	提砥石	(6.3)	(4.7)	(3.0)	(61.6)	凝灰岩	砥面４面　他１面は破断面　穿孔２か所　うち１か所は未貫通	表土	PL96
Q 74	有孔円板	3.5	(3.1)	0.4	(5.64)	滑石	欠損　穿孔１か所　孔径0.2cm	SO 2	PL97
Q 75	剣形品	(3.4)	1.5	0.4	(3.37)	滑石	欠損　全面研磨　穿孔１か所　孔径0.2cm	SI 60	PL97
Q 76	石製模造品	(3.4)	(3.2)	(0.7)	(9.65)	滑石	欠損　片面研磨　穿孔１か所　孔径0.5cm	表土	PL97

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 84	鏃	(7.5)	(1.8)	0.3－0.4	(12.3)	鉄	両丸造　先端部・茎部欠損　円形関	表土	PL98
M 85	鏃	(11.3)	6.0	0.3－0.5	(29.4)	鉄	雁股　茎部欠損　角関	SK560	PL98
M 86	引き手	4.7	5.3	1.3	(28.7)	鉄	丸環	SK562	PL99
M 90	板状津	8.3	8.8	4.4	230	砂鉄	着磁性なし　表面は暗赤褐色　裏面は暗青灰色	表土	

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鋳年	特徴	出土位置	備考
M 87	寛永通寶	2.81	0.65	0.14	4.65	真鍮	1769	四文銭　背十一波。	表土	PL99
M 88	寛永通寶	2.74	0.56	0.18	3.95	銅	1698	新寛永	SI 79	PL99
M 89	熙寧元寶	2.45	0.70	0.14	2.44	銅	1068	北宋銭　篆書	表土	PL99

第5章　神　屋　南　遺　跡

第1節　調　査　の　概　要

神屋南遺跡は，稲敷市の中央部に位置し，利根川左岸の標高10～28ｍの低地から台地縁辺部に立地している。調査区は，神屋遺跡が位置する台地の南斜面部にあたる。調査面積は1,492㎡で，調査前の現況は山林・雑種地である。

調査の結果，遺物包含層１か所を確認した。

遺物は，遺物収納コンテナ（60 × 40 × 20cm）に30箱出土している。主な遺物は，縄文土器（深鉢），弥生土器（広口壺），土師器（坏・高台付坏・高台付椀・皿・小皿・高台付皿・耳皿・盤・高坏・小鉢・火舎香炉・甕・小形甕・手捏土器），須恵器（坏・高台付坏・盤・鉢・甕），土製品（土玉・管状土錘・支脚・紡錘車），石器（磨製石斧・磨石・凹石・砥石），剥片などである。

第2節　基　本　層　序

調査区中央部のＨ６a5区にテストピットを設定して基本土層の観察を行った。観察結果は，以下のとおりである。

第１層は，黒褐色を呈する堆積土である。焼土粒子・炭化粒子を少量，ローム粒子・粘土粒子を微量含み，粘性は普通で，締まりは強く，層厚は62～66cmである。

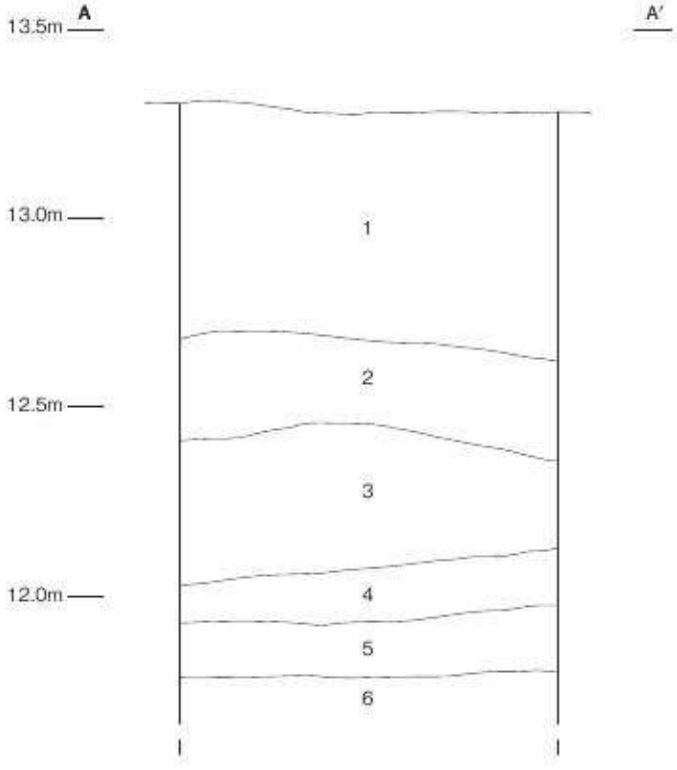
第２層は，暗褐色を呈する堆積土である。粘土ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は普通で，締まりは強く，層厚は24～28cmである。

第３層は，暗褐色を呈する堆積土である。ロームブロックを中量，炭化粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性・締まりともに普通で，層厚は26～42cmである。

第４層は，にぶい黄褐色を呈する堆積土である。焼土粒子を少量，ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒を微量含み，粘性・締まりともに強く，層厚は10～16cmである。

第５層は，にぶい黄褐色を呈する堆積土である。ロームブロックを少量，粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子を微量含み，粘性は普通で，締まりは強く，層厚は16～20cmである。

第６層は，にぶい黄褐色を呈する堆積土である。粘土粒子・砂粒を少量含み，粘性・締まりともに強い。層厚は下層が未掘のため不明である。



第436図　基本土層図

第3節　遺構と遺物

遺物包含層

遺物包含層1か所を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

第1号遺物包含層（第437～449図）

位置　調査区南東部のG6区南部からH6区北部，標高10.5～14.0mの緩斜面部に位置している。

規模　確認された範囲の上限は，標高14mのラインとほぼ一致し，南東・北西19.0m，南西・北東30.6mで，面積は448㎡である。標高差は3.5mである。

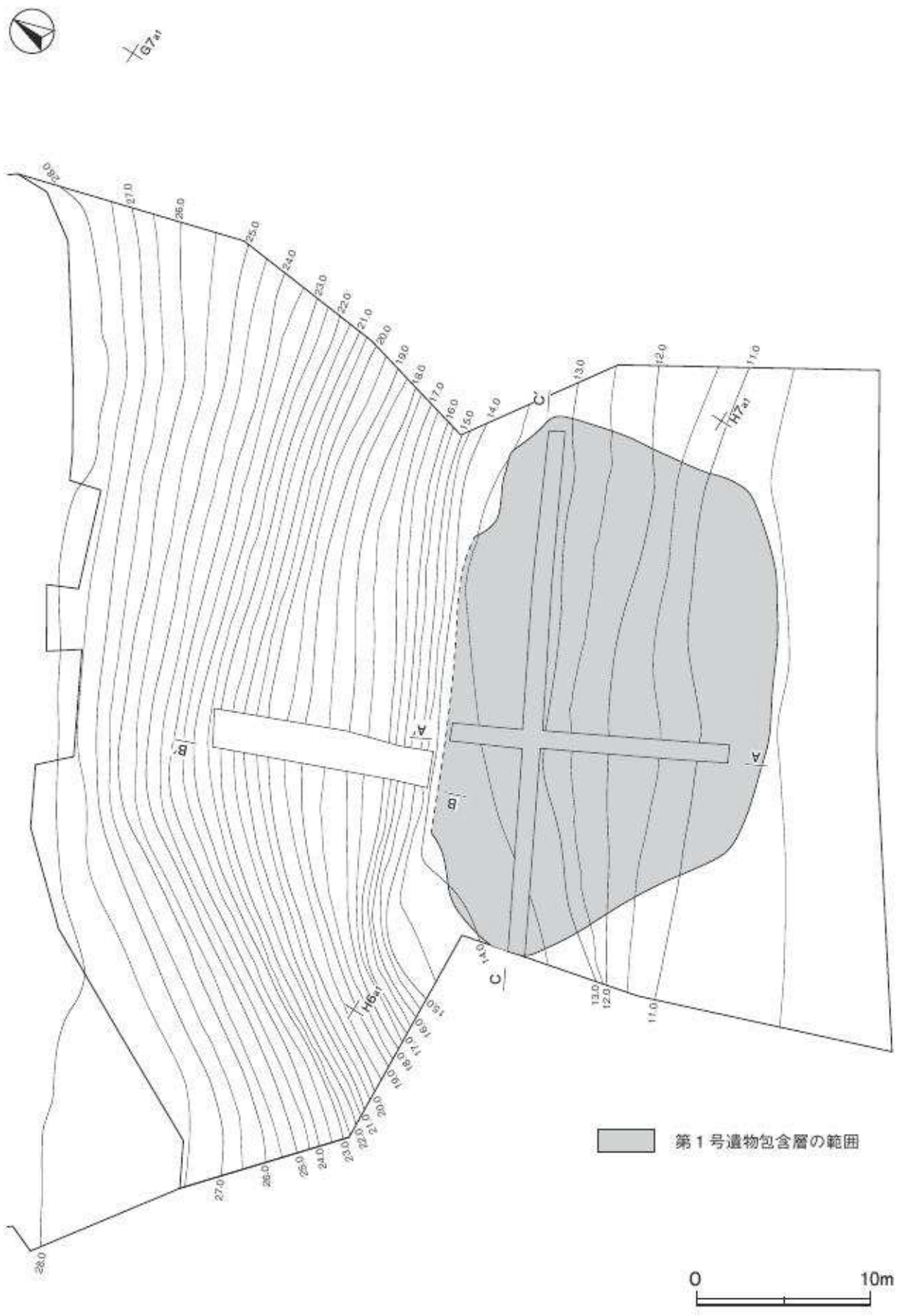
堆積状況　堆積土は25層に分層され，下・中・上層に大別される。下層の第23層の上面は，南東方向へ緩やかに傾斜しており，中・上層は北西側からの流入が認められる。下層の第13・15・19～25層は，にぶい黄褐色や明黄褐色を呈し，粘性の強い層である。中層の第6～12層は，暗褐色や褐色を呈している。上層の第1層は黒褐色を呈し，中央部での層厚は80cmほどである。テストピットやCトレンチにおける堆積土の色調の違いは，腐食土が緩斜面部に堆積していく過程でのグライ化の進行状況を示していると思われる。また，堆積土には，ほとんどの層に焼土粒子や炭化粒子などが含まれており，本跡の形成は，斜面部の表土層や投棄された土などの再堆積によるものと考えられる。

土層解説（各トレンチ共通）

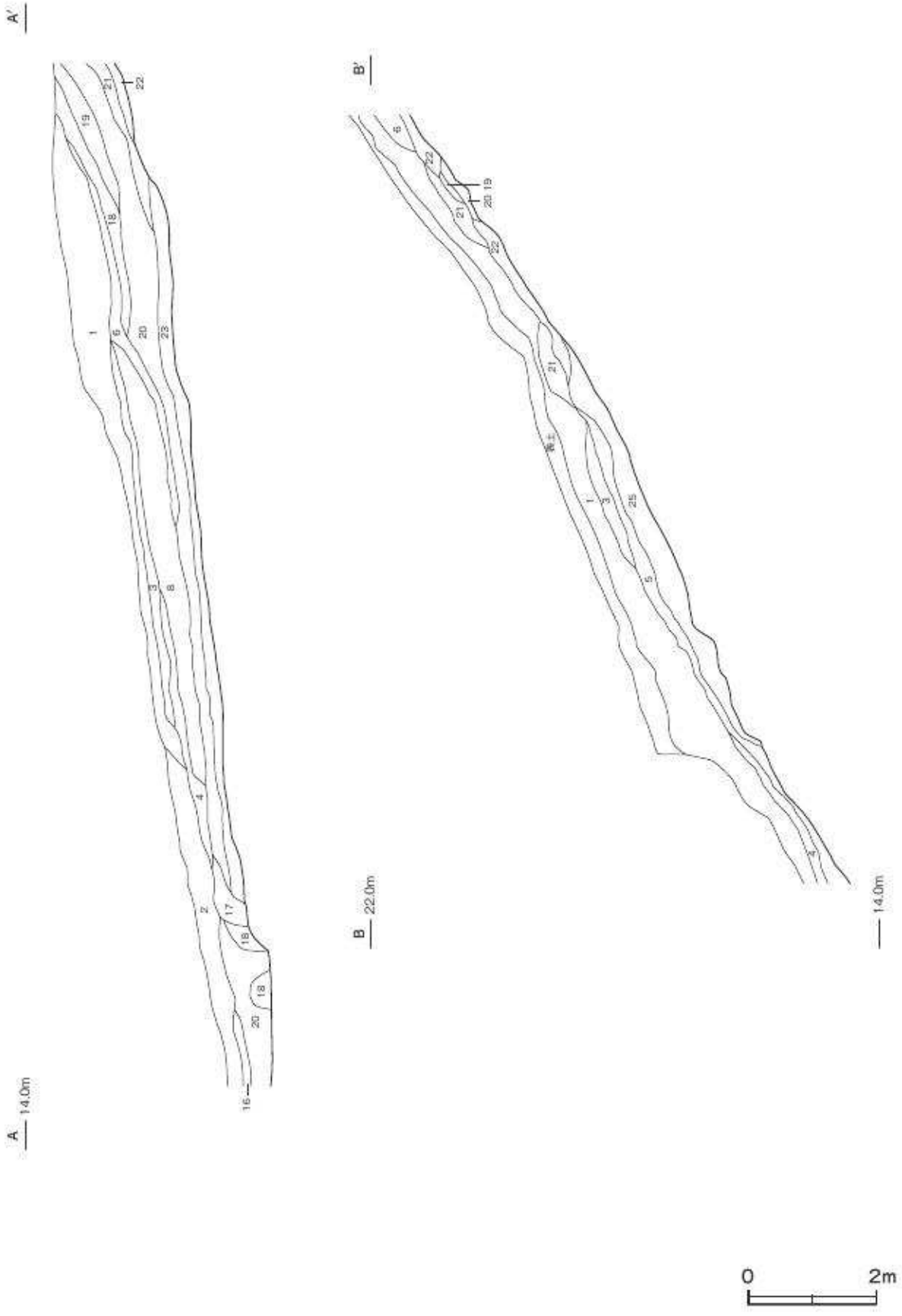
1　黒褐色　焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子・粘土粒子微量
2　褐色　ロームブロック中量，炭化粒子少量
3　暗褐色　焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
4　暗褐色　ローム粒子中量，焼土ブロック微量
5　暗褐色　粘土ブロック中量，焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
6　暗褐色　焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子中量，ロームブロック微量
7　暗褐色　粘土ブロック・焼土粒子微量
8　暗褐色　ロームブロック中量，炭化粒子少量，焼土粒子微量
9　褐色　ローム粒子少量，焼土ブロック微量
10　暗褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
11　褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
12　褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・粘土粒子微量
13　にぶい黄褐色　粘土ブロック多量，焼土ブロック・ローム粒子少量，炭化物微量
14　暗褐色　粘土ブロック中量
15　にぶい黄褐色　焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
16　赤褐色　粘土ブロック中量，焼土ブロック少量
17　暗緑灰色　ローム粒子・焼土粒子微量
18　赤褐色　焼土ブロック多量，炭化物少量，粘土粒子微量
19　にぶい黄褐色　粘土ブロック多量，焼土ブロック中量，炭化粒子少量
20　にぶい黄褐色　ロームブロック少量，粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
21　にぶい黄褐色　焼土ブロック・砂粒少量，炭化粒子微量
22　にぶい黄褐色　砂粒中量，焼土粒子・粘土粒子少量
23　にぶい黄褐色　砂粒・粘土粒子少量
24　明黄褐色　粘土ブロック中量，炭化粒子・砂粒少量，焼土粒子微量
25　明黄褐色　砂粒多量，ローム粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片41点，弥生土器片1点，土師器片11,868点，須恵器片1,865点，土師質土器片2点，陶器片94点，磁器片2点，土製品97点（土玉73，管状土錘18，羽口1，紡錘車4，支脚1），石器5点（磨製石斧2，磨石1，凹石1，砥石1），剥片5点，鉄滓16点が出土している。遺物は全面に散乱した状態で出土しており，崖下側からの出土が多い。層位ごとに見てみると，各層から出土し，上層からの出土がやや多い。土器はすべて破片で，ほとんどが摩耗している。下層からは10世紀代以前の遺物が，中層からは16世紀代以前の遺物が，上層からは18世紀代以前の遺物がそれぞれ出土している。各層ともに10世紀代の土器が多く，次に7世紀代の土器が多く出土している。

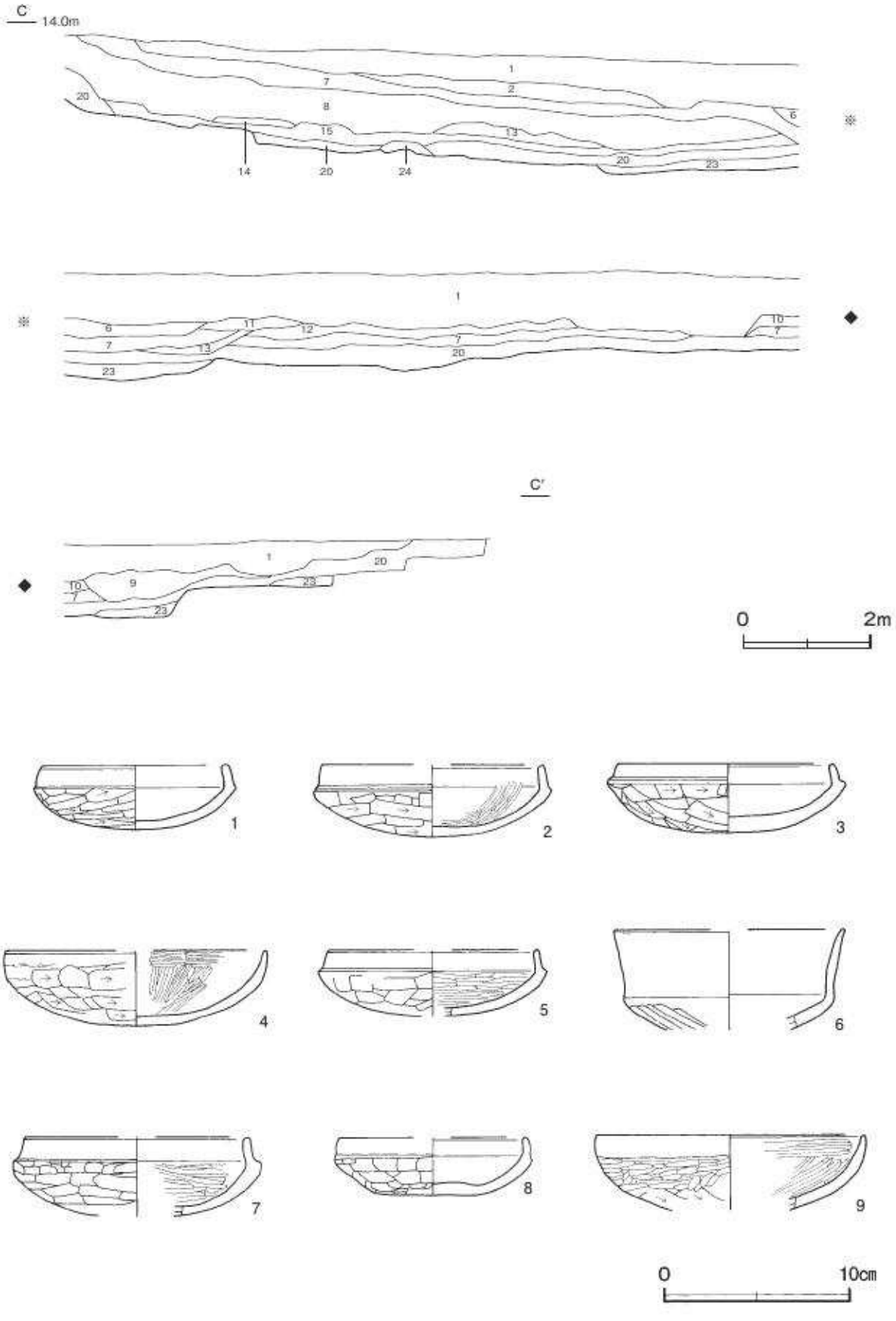
所見　出土した土器はすべて破片で，ほとんどが摩耗していることから，隣接して所在する神屋遺跡から投棄されたか，流入したものが緩斜面部に再堆積して形成された包含層と考えられる。時期は，各層の出土土器から，下層が10世紀代以降に，中層が16世紀代以降に，上層が18世紀代以降に堆積したものと考えられる。



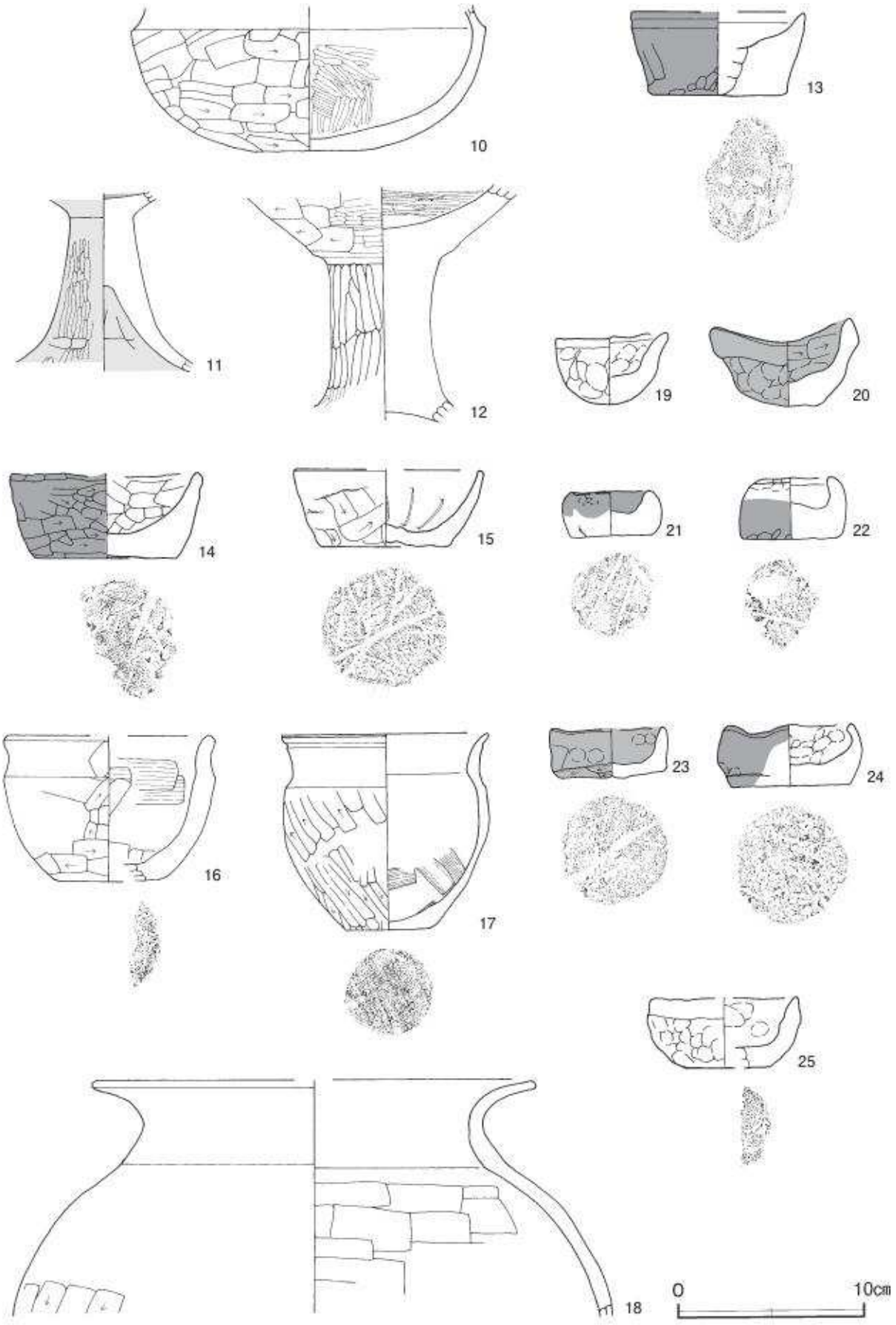
第437図　第1号遺物包含層実測図(1)



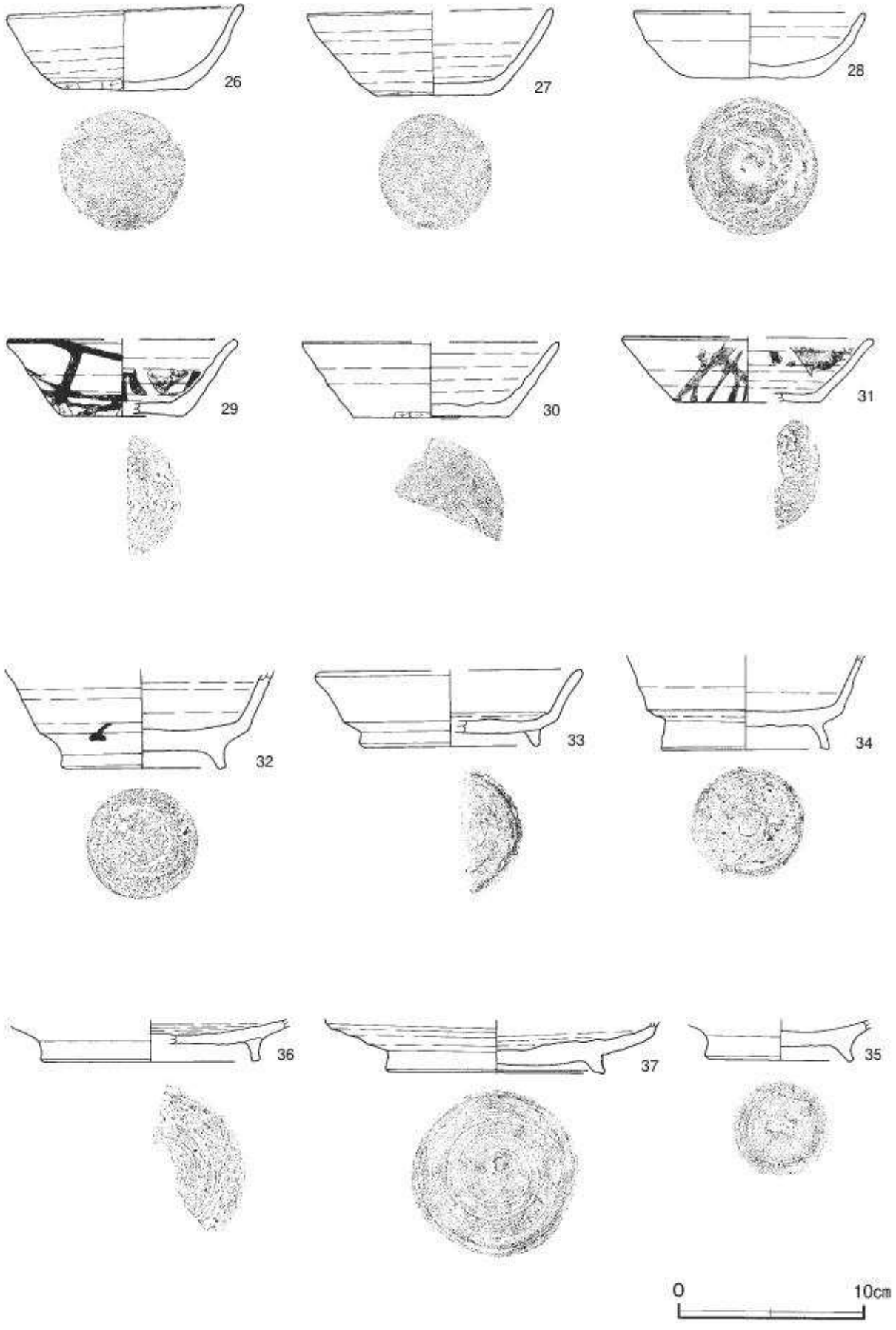
第 438 図　第 1 号遺物包含層実測図 (2)



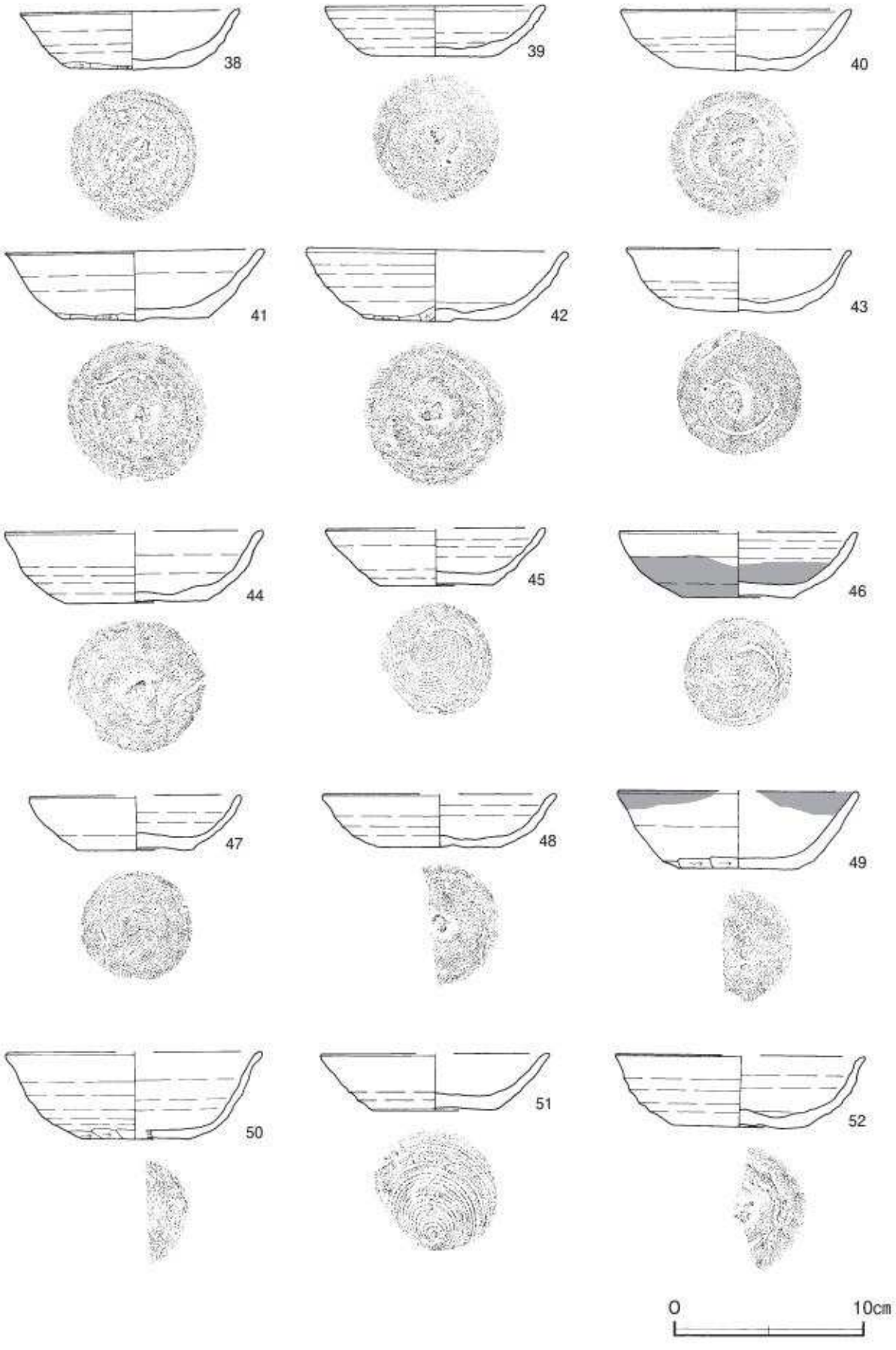
第 439 図　第 1 号遺物包含層・出土遺物実測図



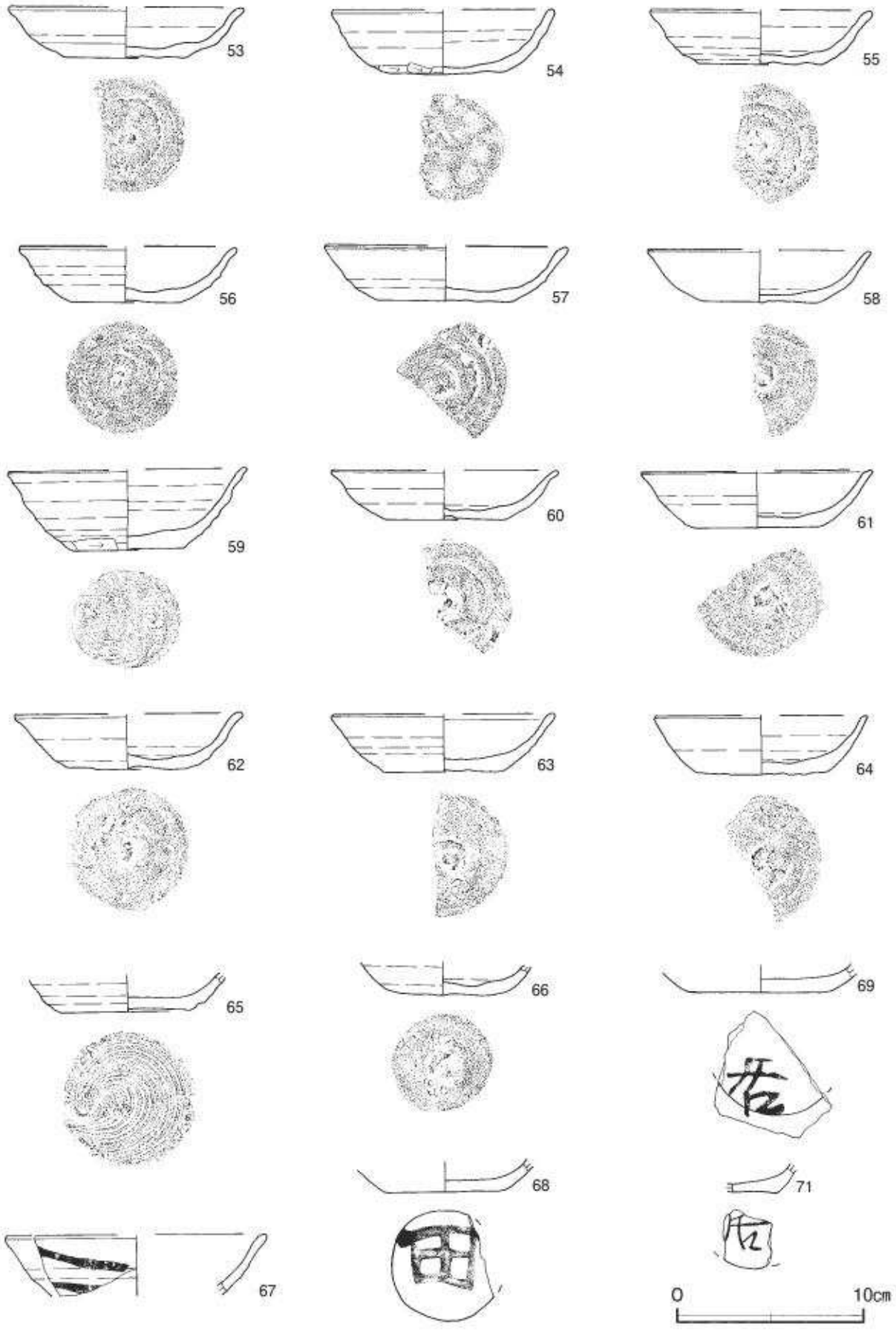
第 440 図　第 1 号遺物包含層出土遺物実測図 (1)



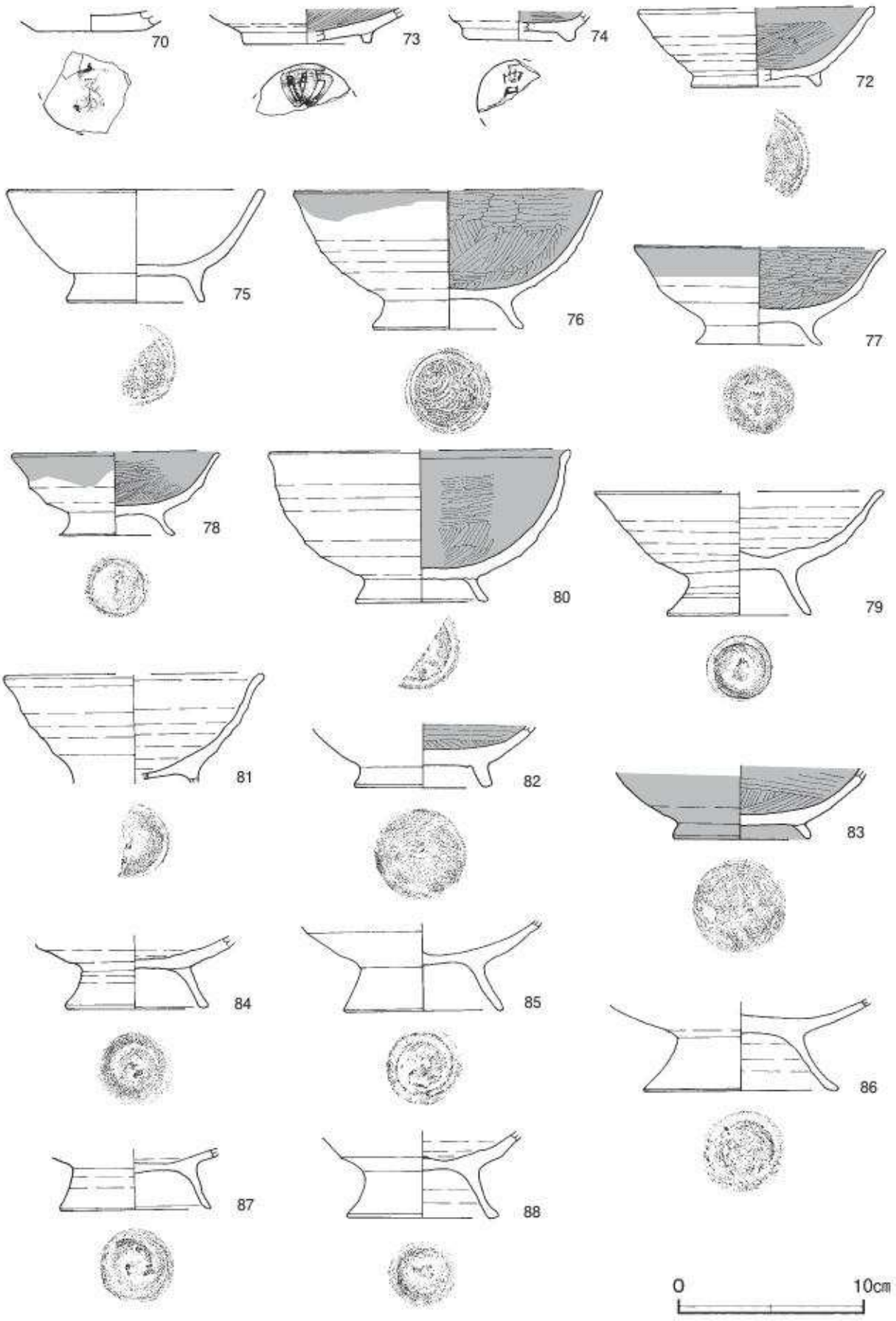
第 441 図　第 1 号遺物包含層出土遺物実測図 (2)



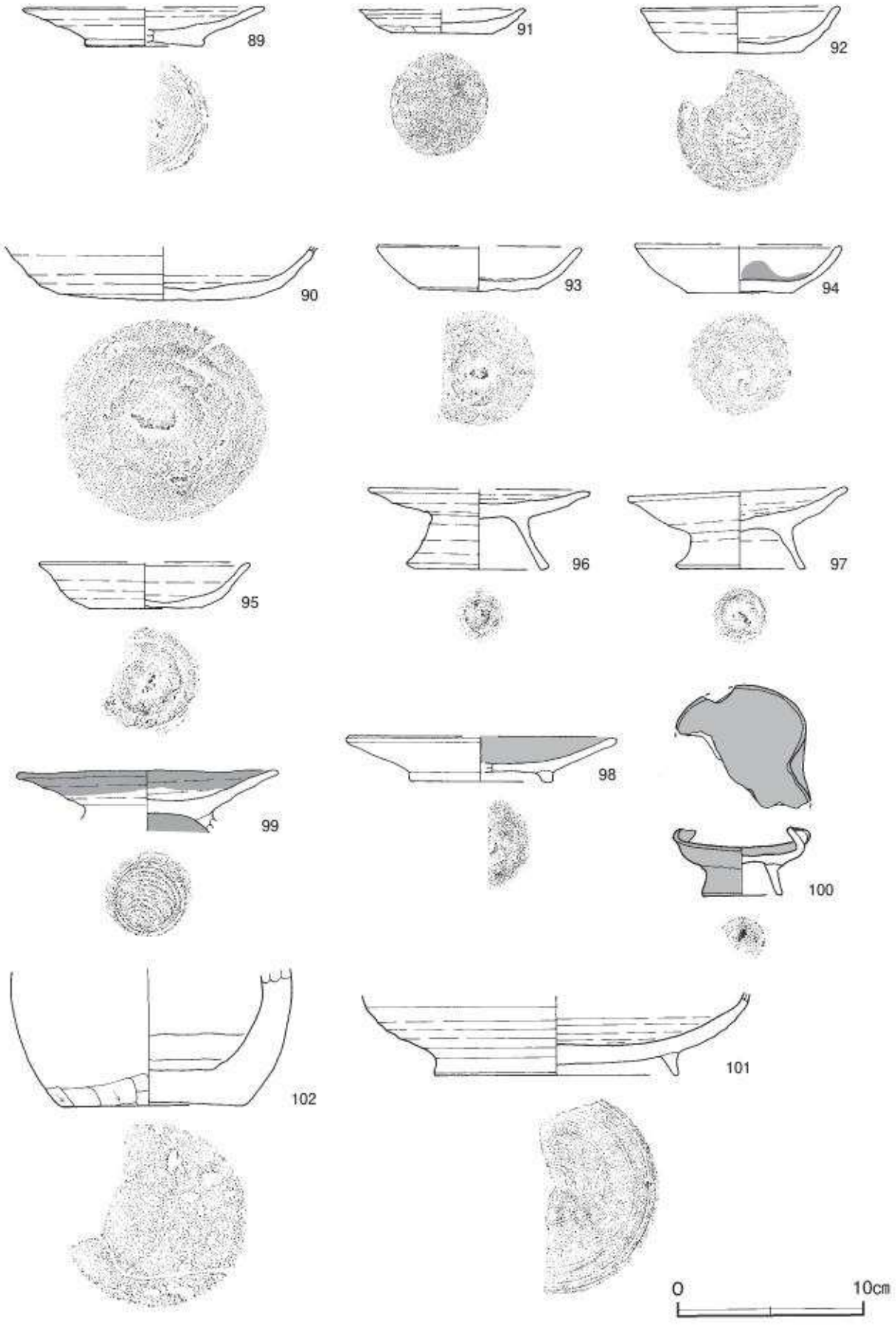
第 442 図　第 1 号遺物包含層出土遺物実測図 (3)



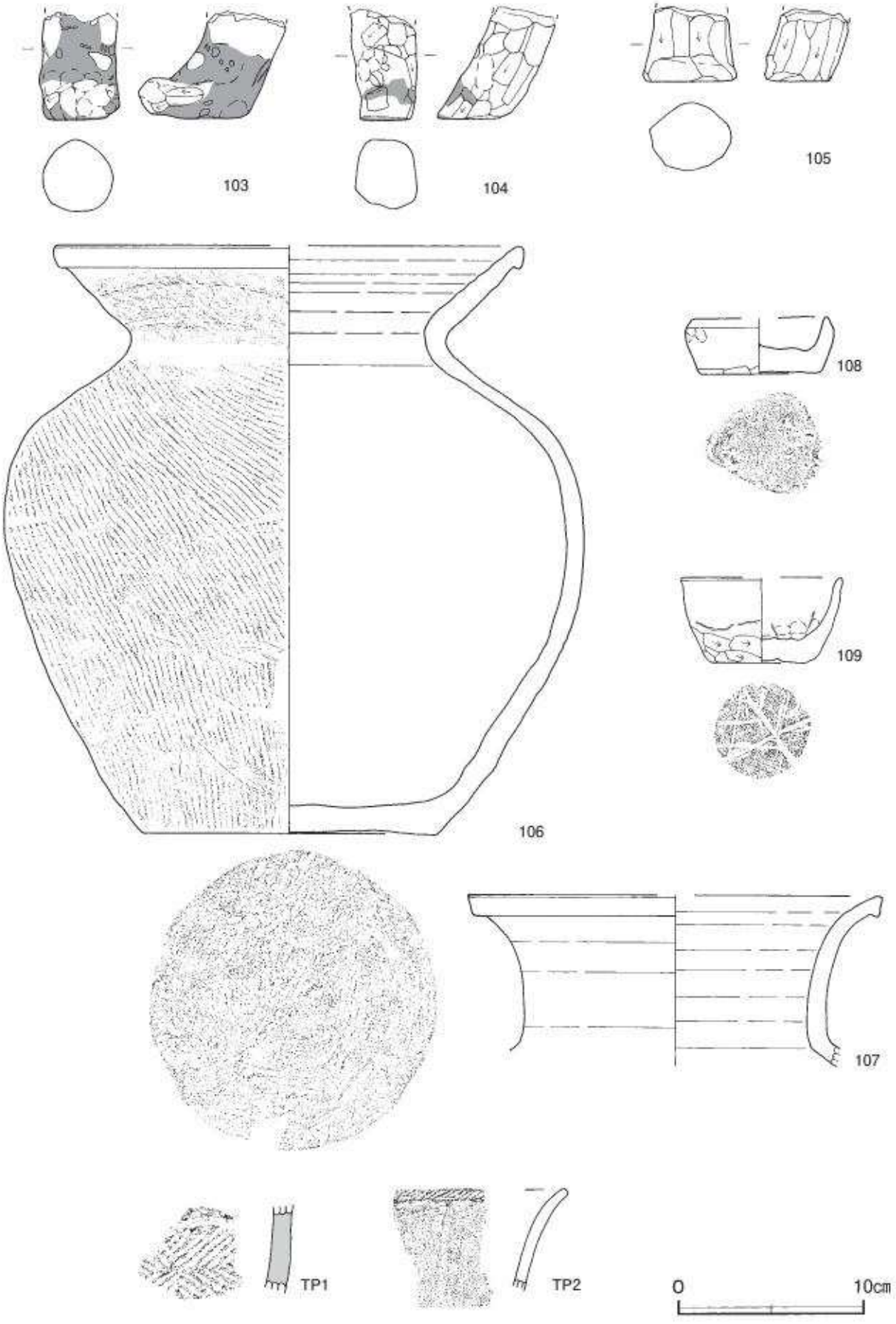
第 443 図　第 1 号遺物包含層出土遺物実測図 (4)



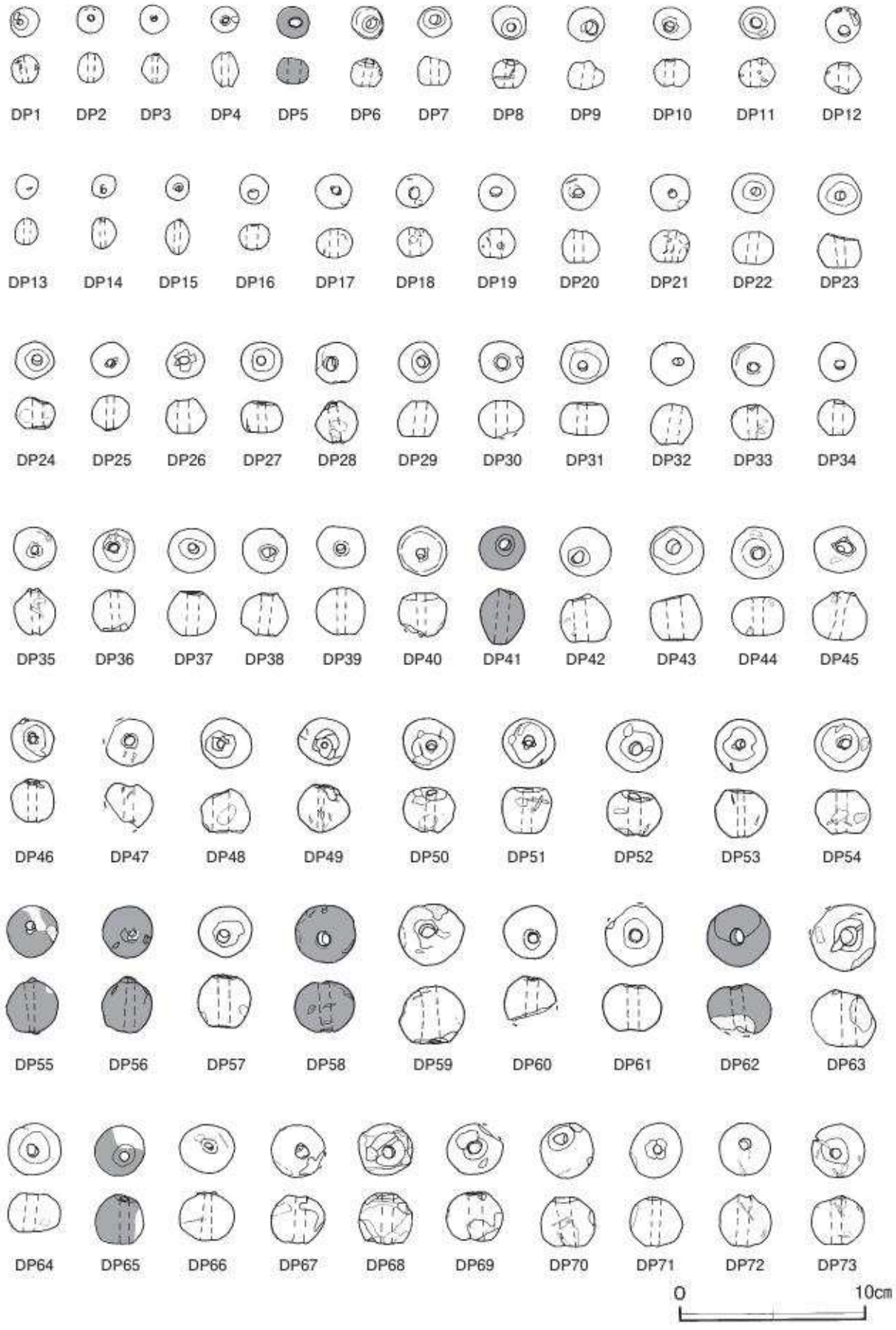
第 444 図　第 1 号遺物包含層出土遺物実測図 (5)



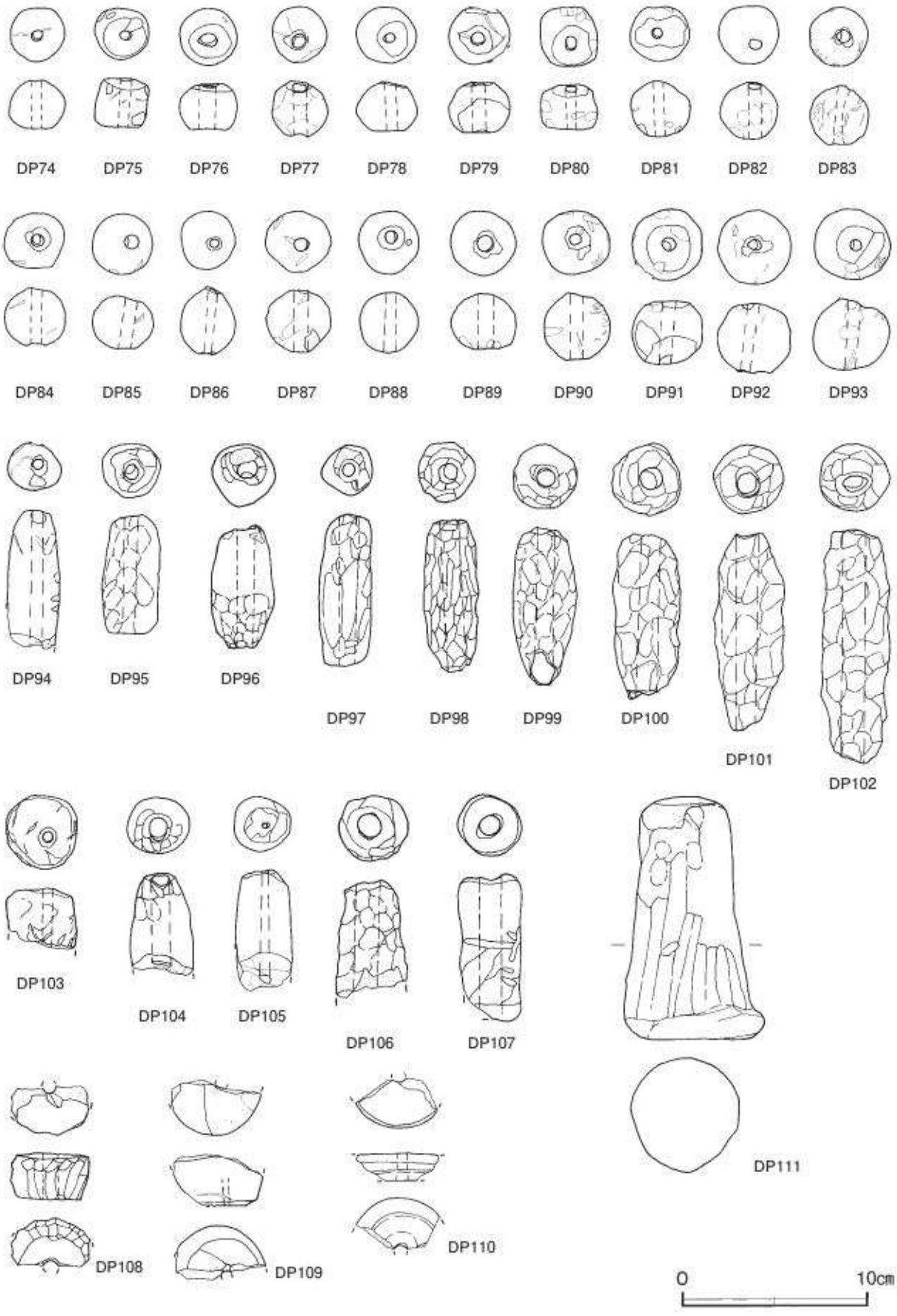
第 445 図　第 1 号遺物包含層出土遺物実測図 (6)



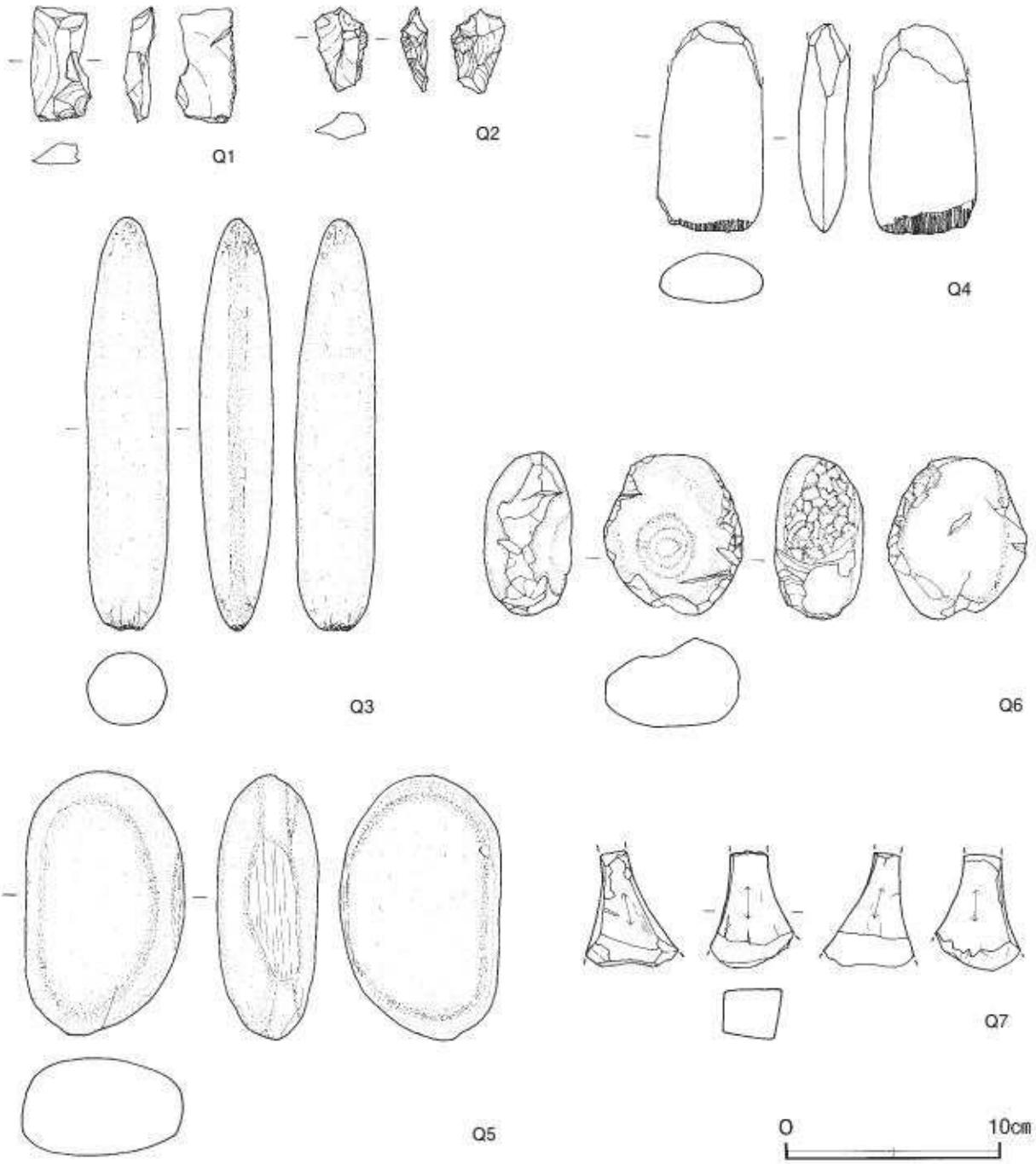
第 446 図　第 1 号遺物包含層出土遺物実測図 (7)



第 447 図　第 1 号遺物包含層出土遺物実測図 (8)



第 448 図　第 1 号遺物包含層出土遺物実測図 (9)



第 449 図　第 1 号遺物包含層出土遺物実測図 (10)

第 1 号遺物包含層遺物観察表（第 439 ～ 449 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	9.9	3.4	−	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面ナデ　体部外面ヘラ削り　内面ナデ	堆積土中層	95%　PL102
2	土師器	坏	[11.9]	3.9	−	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面ナデ　体部外面ヘラ削り　内面ヘラ磨き	堆積土中	90%　PL102
3	土師器	坏	11.7	3.7	−	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面ナデ　体部外面ヘラ削り　内面ナデ	堆積土下層	70%
4	土師器	坏	[14.0]	4.1	−	長石・石英・赤色粒子	灰褐	普通	口縁部外面ナデ　内面ヘラ磨き　体部外面ヘラ削り内面ヘラ磨き	堆積土中	60%
5	土師器	坏	[11.2]	3.6	−	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口縁部外・内面ナデ　体部外面ヘラ削り　内面ヘラ磨き	堆積土中	40%
6	土師器	坏	[12.4]	(5.3)	−	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面ナデ　体部外面ヘラナデ　内面ナデ	堆積土下層	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
7	土師器	坏	[12.0]	4.2	−	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面ナデ　体部外面ヘラ削り　内面ヘラ磨き	堆積土中	20%
8	土師器	坏	[10.0]	3.1	[5.4]	長石・石英・赤色粒子	灰褐	普通	口縁部外・内面ナデ　体部外面ヘラ削り　内面ナデ	堆積土中	20%
9	土師器	坏	14.4	(4.0)	−	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁部外面ナデ　内面ヘラ磨き　体部外面上半ヘラ磨き下半ヘラ削り　内面ヘラ磨き	堆積土下層	40%
10	土師器	坏	−	(7.8)	−	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面ナデ　体部外面ヘラ削り　内面ヘラ磨き	堆積土上層	40%
11	土師器	高坏	−	(9.6)	−	長石・石英・雲母	橙	普通	脚部外面ヘラ磨き　内面ヘラナデ　外・内面赤彩	堆積土中層	40%
12	土師器	高坏	−	(12.2)	−	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	坏部外面ヘラ削り一部ヘラ磨き　内面ヘラ磨き　脚部外面ヘラ磨き　中実柱状	堆積土下層	40%
13	土師器	小鉢	[9.2]	4.5	[7.6]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面ナデ　体部外面ヘラナデ　内面ナデ	堆積土中層	30%　煤付着
14	土師器	小鉢	[9.8]	4.6	[7.4]	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部刻り調整　体部外面ヘラ削り　一部指頭押圧　内面ヘラナデ　底部木葉痕	堆積土中層	40%　煤付着
15	土師器	小鉢	[9.9]	4.1	6.7	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ　底部擬似木葉痕	堆積土中	80%
16	土師器	小鉢	[11.0]	7.8	[5.4]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面ナデ　体部外面ヘラ削り　内面ハケ目　ヘラナデ	堆積土中層	40%
17	土師器	小形甕	11.0	10.5	4.5	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面ナデ　体部外面ヘラ削り　内面一部ハケ目	堆積土中層	60%　PL102
18	土師器	甕	[23.4]	(12.7)	−	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁部外・内面ナデ　体部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ	堆積土下層	20%
19	土師器	手捏土器	5.8	3.9	−	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外・内面指頭圧痕	堆積土中	100%　PL102
20	土師器	手捏土器	7.4	4.6	−	長石・石英	黒褐	普通	口縁部外面ナデ　内面ヘラ削り　体部外・内面指頭圧痕	堆積土中	100%　PL102
21	土師器	手捏土器	4.1	2.4	4.4	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外・内面ナデ　指頭圧痕　底部木葉痕	堆積土中層	90%　煤付着
22	土師器	手捏土器	3.5	3.3	5.4	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	体部外・内面ナデ　指頭圧痕　底部木葉痕	堆積土中層	80%　煤付着
23	土師器	手捏土器	[6.0]	2.7	5.8	長石・石英・赤色粒子	黒褐	普通	体部外・内面指頭圧痕　体部外面下端ヘラ削り　底部木葉痕	堆積土中	80%
24	土師器	手捏土器	6.6	3.3	6.4	長石・石英・雲母	赤褐	普通	体部外・内面指頭圧痕	堆積土中層	80%　煤付着
25	土師器	手捏土器	[7.6]	3.8	[4.4]	長石・石英・赤色粒子	黒褐	普通	体部外・内面指頭圧痕	堆積土中	50%
26	土師器	坏	12.4	4.6	6.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り　底部多方向のヘラ削り	堆積土中	90%　PL102
27	土師器	坏	[13.0]	4.5	6.2	長石・石英	橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り　底部多方向のヘラ削り	堆積土中	60%
28	土師器	坏	[12.2]	3.6	7.4	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土中	60%
29	須恵器	坏	[12.0]	4.1	[4.4]	長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り　底部多方向のヘラ削り　火襷有り	堆積土中	40%　橘数産。
30	須恵器	坏	[13.7]	4.1	[8.0]	長石・石英	灰白	普通	体部下端手持ちヘラ削り　底部多方向のヘラ削り	堆積土上層	30%　橘数産。
31	須恵器	坏	[13.2]	3.5	[7.8]	長石・石英	灰	普通	底部多方向のヘラ削り　火襷有り	堆積土中	30%　橘数産。
32	須恵器	高台付坏	−	(5.4)	8.4	長石・石英・雲母・細礫	灰黄	普通	底部回転ヘラ削り	堆積土下層	45%　面種付着　新治窯
33	須恵器	高台付坏	[14.0]	4.1	[9.2]	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ削り	堆積土下層	40%　橘数産。
34	須恵器	高台付坏	−	(5.1)	8.7	長石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土中	40%　橘数産。
35	須恵器	高台付坏	−	(2.2)	7.5	長石・石英・雲母	灰白	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土中	20%　新治窯
36	須恵器	蓋	−	(2.2)	[11.6]	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ削り	堆積土中	20%　橘数産。
37	須恵器	蓋	−	(2.8)	11.5	長石・石英・赤色粒子	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り	堆積土上層	70%　橘数産。
38	土師器	坏	11.6	3.2	6.6	長石・石英・雲母	橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り　底部回転ヘラ切り	堆積土下層	95%　PL102
39	土師器	坏	11.8	2.7	6.7	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	堆積土下層	80%　PL102
40	土師器	坏	12.0	3.4	6.6	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土中	80%
41	土師器	坏	13.5	3.7	7.7	長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り　底部回転ヘラ切り	堆積土下層	70%
42	土師器	坏	13.6	3.8	7.4	長石・石英・雲母	橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り　底部回転ヘラ切り	堆積土上層	70%
43	土師器	坏	[11.7]	3.3	6.6	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土中	60%
44	土師器	坏	[13.4]	3.8	7.0	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	堆積土中層	40%
45	土師器	坏	[12.6]	3.0	6.1	長石・石英・雲母	橙	普通	底部回転糸切り	堆積土上層	50%
46	土師器	坏	[12.4]	3.5	5.8	長石・石英・雲母	橙	普通	底部回転糸切り	堆積土下層	40%　煤付着
47	土師器	坏	[11.0]	2.9	6.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り	堆積土上層	40%
48	土師器	坏	[12.2]	2.8	6.6	長石・石英	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土中層	40%
49	土師器	坏	[12.6]	4.1	6.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り　底部一方向のヘラ削り	堆積土中	30%　煤付着
50	土師器	坏	[13.2]	4.6	[5.6]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り　底部一方向のヘラ削り	堆積土中	40%
51	土師器	坏	[12.0]	3.0	6.6	長石・石英・雲母	橙	普通	底部回転糸切り	堆積土上層	40%
52	土師器	坏	[13.2]	3.9	[7.2]	長石・石英・雲母・赤色粒子	浅黄橙	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	堆積土中層	30%
53	土師器	坏	[12.4]	2.7	6.8	長石・石英・雲母	橙	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	堆積土上層	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
54	土師器	坏	[11.8]	3.5	5.9	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り　底部指頭圧痕	堆積土中層	40%
55	土師器	坏	[11.8]	2.9	6.6	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	堆積土上層	30%
56	土師器	坏	[11.5]	3.0	5.9	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り後多方向のヘラ削り	堆積土上層	40%
57	土師器	坏	[12.8]	2.9	[7.0]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土上層	30%
58	土師器	坏	[11.8]	2.8	[6.2]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土中	40%
59	土師器	坏	[12.7]	4.3	5.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り　底部一方向の削り	堆積土中	60%
60	土師器	坏	[12.0]	2.7	6.6	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土中	40%
61	土師器	坏	[12.2]	3.0	6.8	長石・石英	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土中	40%
62	土師器	坏	[11.9]	3.0	6.5	長石・石英	橙	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土下層	60%
63	土師器	坏	[11.8]	3.1	6.4	長石・石英	橙	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土中	30%
64	土師器	坏	[11.3]	3.2	[7.0]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土中	40%
65	土師器	坏	－	(2.0)	7.4	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	堆積土中	90%
66	土師器	坏	－	(1.7)	5.3	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り	堆積土中	20%
67	土師器	坏	[14.0]	(3.2)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面墨書「二」	堆積土上層	5%
68	土師器	坏	－	(1.7)	6.0	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	底部回転ヘラ切り　墨書「田」	堆積土中	30%
69	土師器	坏	－	(1.5)	[7.3]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り　墨書「居」	堆積土中	20%
70	土師器	坏	－	(1.0)	[6.0]	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	底部回転ヘラ切り　墨書「家」	堆積土中	10%
71	土師器	坏	－	(1.7)	－	長石・雲母	にぶい褐	普通	底部回転ヘラ切り　墨書「居」	堆積土中	10%
72	土師器	高台付坏	[12.8]	4.2	[7.0]	長石・雲母	橙	普通	体部内面ヘラ磨き　底部回転ヘラ削り	堆積土中層	40%
73	土師器	高台付坏	－	(1.9)	[6.8]	長石・雲母	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き　底部墨書「西」	堆積土中	10%
74	土師器	高台付坏	－	(1.6)	[5.4]	長石・石英	橙	普通	体部内面ヘラ磨き　底部墨書「西□」	堆積土中	5%
75	土師器	高台付椀	13.5	6.1	[7.3]	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土中	90%
76	土師器	高台付椀	[16.4]	7.5	7.8	長石・石英	橙	普通	体部内面ヘラ磨き　底部回転糸切り	堆積土上層	40%
77	土師器	高台付椀	[13.4]	5.3	6.8	長石・石英・雲母	橙	普通	体部内面ヘラ磨き　底部回転ヘラ切り	堆積土上層	60%
78	土師器	高台付椀	[11.0]	4.5	6.9	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き　底部回転ヘラ切り	堆積土中層	50%
79	土師器	高台付椀	[15.6]	6.7	7.8	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土中	50%
80	土師器	高台付椀	[16.0]	8.2	7.0	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き　底部回転ヘラ切り	堆積土中	40%
81	土師器	高台付椀	[13.8]	(5.8)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土中	30%
82	土師器	高台付椀	－	(3.4)	7.3	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部内面ヘラ磨き　底部回転ヘラ切り	堆積土中	50%
83	土師器	高台付椀	－	(3.8)	7.4	長石・雲母	褐灰	普通	体部内面ヘラ磨き　底部高台貼り付け後磨き	堆積土中	30%
84	土師器	高台付椀	－	(3.9)	7.5	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土中	40%
85	土師器	高台付椀	－	(4.8)	8.6	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	底部回転ヘラ削り	堆積土下層	40%
86	土師器	高台付椀	－	(4.1)	[10.4]	長石・石英・雲母	橙	普通	底部回転ヘラ削り	堆積土中層	30%
87	土師器	高台付椀	－	(3.3)	[3.3]	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土中	30%
88	土師器	高台付椀	－	(4.7)	8.0	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土中	40%
89	土師器	皿	[12.8]	2.1	[6.2]	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	底部回転糸切り	堆積土中	30%
90	土師器	皿	－	(2.9)	11.0	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土中	40%
91	土師器	小皿	[8.7]	1.3	5.3	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部磨り調整　体部下端手持ちヘラ削り　底部多方向のヘラ削り	堆積土上層	70% 再利用
92	土師器	小皿	10.5	2.5	6.7	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土中	90%　PL102
93	土師器	小皿	[10.5]	2.4	6.4	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土中	40%
94	土師器	小皿	[11.0]	2.6	5.6	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土中	30% 煤付着
95	土師器	小皿	[11.0]	2.5	6.0	長石・石英	灰褐	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土中	40%
96	土師器	高台付皿	[11.8]	4.3	6.9	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土中	60%
97	土師器	高台付皿	11.7	4.4	6.8	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土中	60%
98	土師器	高台付皿	[14.0]	2.4	[7.6]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土下層	30%
99	土師器	高台付皿	13.7	(3.3)	－	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り	堆積土下層	60% 煤付着
100	土師器	耳皿	5.1～5.4	3.6	[4.2]	長石・石英・雲母	オリーブ黒	普通	底部回転ヘラ切り	堆積土中	40%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
101	土師器	盤	－	(4.3)	[13.0]	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	底部回転ヘラ削り	堆積土中	30%
102	須恵器	鉢	－	(7.3)	9.8	長石・石英	灰	普通	体部外面下端ヘラ削り　体部内面ヘラナデ 底部多方向の削り	堆積土中	10%
103	土師器	火舎香炉	－	(5.8)	－	長石・石英	赤	普通	脚部外面ヘラ削り　指頭圧痕	堆積土上層	5% 煤付着
104	土師器	火舎香炉	－	(6.1)	－	長石・石英・ 赤色粒子	橙	普通	脚部外面ヘラ削り　指頭圧痕	堆積土中	5% 煤付着
105	土師器	火舎香炉	－	(4.0)	－	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	脚部外面ヘラ削り	堆積土上層	5%
106	須恵器	甕	[25.0]	31.7	16.0	長石・石英・雲母	灰	普通	口縁部－体部外面斜位の平行叩き	堆積土下層	80%　PL102
107	須恵器	甕	[22.0]	(9.2)	－	長石・雲母	灰	普通	口縁部外－内面ロクロナデ	堆積土中	10%
108	土師器	手捏土器	[7.2]	3.0	6.4	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面指頭圧痕　下端ヘラナデ　体部内面ナデ	堆積土上層	30%
109	土師器	手捏土器	[8.5]	4.6	5.0	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面下端ヘラ削り　内面指頭圧痕　底部糸切未調整	堆積土上層	40%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP 1	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	にぶい褐	単節縄文 RL と LR の羽状縄文	堆積土下層	
TP 2	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	暗褐	口唇部刻み目　口縁部無文	堆積土下層	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 1	土玉	1.5－1.6	1.5	0.4	(3.34)	長石・石英	明赤褐	表面ナデ　一方向からの穿孔　一部剥離	堆積土下層	
DP 2	土玉	1.5	1.7	0.3－0.4	3.72	長石・石英	明赤褐	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土中層	
DP 3	土玉	1.5	1.5	0.2－0.3	3.78	長石	明赤褐	表面ナデ　一方向からの穿孔　立面形楕形	堆積土下層	
DP 4	土玉	1.4－1.5	1.9	0.4	3.78	長石・石英	赤褐	表面ナデ　一方向からの穿孔　立面形楕形	堆積土上層	
DP 5	土玉	1.7－1.8	1.4	0.6－0.7	3.96	長石・石英	黒褐	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土中層	煤付着
DP 6	土玉	1.6－1.7	1.5	0.6	(4.54)	長石・石英	明赤褐	表面ナデ　一部ヘラ削り　一方向からの穿孔	堆積土下層	
DP 7	土玉	1.6－1.9	1.5	0.6	4.63	長石・石英	明赤褐	表面ナデ　一部ヘラ削り　一方向からの穿孔	堆積土下層	
DP 8	土玉	1.8	1.8	0.5	4.95	長石・石英・雲母	明赤褐	上・底面平坦　表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土中層	
DP 9	土玉	1.9	1.5	0.6	4.96	長石・石英	にぶい橙	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土中層	
DP10	土玉	1.7－2.0	1.5	0.5	5.02	長石・石英	にぶい褐	上・底面平坦　表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土上層	
DP11	土玉	1.7－1.9	1.5	0.5－0.6	5.56	長石・石英	にぶい赤褐	上・底面平坦　表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土下層	
DP12	土玉	1.9	1.8	0.5－0.6	(5.61)	長石・石英	橙	表面ナデ　一方向からの穿孔　一部剥離	堆積土下層	
DP13	土玉	1.2－1.3	1.5	0.3－0.4	2.58	長石・石英	にぶい褐	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土中	
DP14	土玉	1.3－1.4	1.7	0.3	3.07	長石・石英	明赤褐	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土中	
DP15	土玉	1.3－1.4	1.9	0.3	3.23	長石・石英	明赤褐	表面ナデ　一方向からの穿孔　立面形楕形	堆積土中	
DP16	土玉	1.6	1.4	0.5－0.6	3.41	長石・石英	にぶい黄橙	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土中	
DP17	土玉	1.9－2.0	1.5	0.4	6.15	長石・石英・雲母	にぶい橙	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土下層	
DP18	土玉	1.8－1.9	1.6	0.6	5.03	長石・石英	橙	表面ナデ　指頭圧痕　一方向からの穿孔	堆積土中	
DP19	土玉	1.9－2.0	1.6	0.6	(5.44)	長石・石英	にぶい赤褐	表面ナデ　一方向からの穿孔　一部剥離	堆積土中	
DP20	土玉	2.0	1.8	0.5	6.45	長石・石英	橙	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土中	
DP21	土玉	2.0－2.1	1.7	0.4	7.22	長石・石英	にぶい黄橙	表面ナデ　指頭圧痕　一方向からの穿孔	堆積土中	
DP22	土玉	2.2	1.2	0.5	7.51	長石・石英	明赤褐	上・底面平坦　表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土中	
DP23	土玉	2.2－2.4	1.8	0.4	10.3	長石・石英	橙	上・底面平坦　表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土中	
DP24	土玉	2.0－2.1	1.7	0.5－0.6	6.23	長石・石英・雲母	明赤褐	表面ナデ　指頭圧痕　一方向からの穿孔	堆積土下層	
DP25	土玉	1.9－2.0	1.9	0.4	6.74	長石・石英	にぶい橙	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土中層	
DP26	土玉	2.0	1.9	0.6－0.7	7.57	長石・石英	明赤褐	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土上層	
DP27	土玉	2.0－2.2	1.7	0.4	8.56	長石・石英	明褐	上面平坦　表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土下層	
DP28	土玉	2.2－2.3	2.1	0.5－0.7	9.23	長石・石英	明赤褐	表面ナデ　指頭圧痕　一方向からの穿孔	堆積土下層	
DP29	土玉	2.1－2.2	1.9	0.7	9.32	長石・石英	明赤褐	上・底面平坦　表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土中層	
DP30	土玉	2.2－2.4	2.0	0.6	(10.3)	長石・石英	褐	表面ナデ　一方向からの穿孔　一部欠損	堆積土上層	
DP31	土玉	2.2－2.6	1.7	0.5	10.4	長石・石英	明赤褐	上・底面平坦　表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土下層	
DP32	土玉	2.3	2.2	0.6	10.9	長石・石英	にぶい褐	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土下層	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP33	土玉	2.3	1.9	0.4－0.6	11.0	長石・石英	にぶい赤褐	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土下層	
DP34	土玉	2.0－2.1	1.9	0.5	6.41	長石・石英・雲母	赤褐	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土下層	
DP35	土玉	2.2－2.3	2.5	0.3－0.4	11.3	長石・石英	にぶい褐	表面ナデ　指頭圧痕　一方向からの穿孔	堆積土下層	
DP36	土玉	2.2	2.1	0.4	(12.3)	長石・雲母	にぶい黄褐	上・底面平坦　表面ナデ　一方向からの穿孔　一部剥離	堆積土下層	
DP37	土玉	2.4－2.6	2.4	0.6	13.7	長石・石英・白色粒子	明赤褐	上・底面平坦　表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土中層	
DP38	土玉	2.4－2.5	2.3	0.7	14.0	長石・石英	にぶい赤褐	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土中層	
DP39	土玉	2.2－2.6	2.6	0.5	14.5	長石・石英・雲母	橙	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土上層	
DP40	土玉	2.6	2.3	0.5	(14.7)	長石・石英	明赤褐	上面端部面取り　表面ナデ　一方向からの穿孔　一部欠損	堆積土下層	
DP41	土玉	2.5－2.7	3.0	0.6－0.7	15.3	長石・石英	褐灰	表面ナデ　一方向からの穿孔　立面形楕形	堆積土下層	煤付着
DP42	土玉	2.6－2.7	2.5	0.7	17.1	長石・石英	明赤褐	上・底面平坦　表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土下層	
DP43	土玉	2.6－2.8	2.5	0.8	17.2	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	上・底面平坦　表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土下層	
DP44	土玉	2.8	2.1	0.8	17.5	長石・石英	にぶい褐	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土下層	
DP45	土玉	2.5－2.9	2.6	0.6－0.9	18.1	長石・石英	にぶい褐	表面ナデ　二方向からの穿孔	堆積土中層	
DP46	土玉	2.3	2.3	0.5	11.9	長石・雲母	にぶい橙	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土中	
DP47	土玉	(2.5－2.6)	(2.4)	0.5	(12.7)	長石・石英・雲母	にぶい橙	表面ナデ　一方向からの穿孔　一部欠損	堆積土中	
DP48	土玉	2.7	2.4	0.8	15.2	長石・石英	にぶい褐	表面ナデ　指頭圧痕　一方向からの穿孔	堆積土中	
DP49	土玉	2.6－2.8	2.5	0.2	16.7	長石・雲母	黄灰	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土中	
DP50	土玉	2.7	2.4	0.5	(17.1)	長石・雲母	橙	上・底面平坦　表面ナデ　指頭圧痕　一方向からの穿孔　一部剥離	堆積土中	
DP51	土玉	2.7－2.9	2.4	0.5	17.7	長石・石英・雲母	にぶい黄	上・底面平坦　表面ナデ　指頭圧痕　一方向からの穿孔	堆積土中	
DP52	土玉	2.9－3.0	2.4	0.7	(19.6)	長石	褐	上・底面平坦　表面ナデ　指頭圧痕　一方向からの穿孔　一部剥離	堆積土中	
DP53	土玉	2.8	2.5	0.5	20.2	長石・雲母	にぶい褐	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土中	
DP54	土玉	2.9－3.1	2.3	0.6	(20.4)	長石	にぶい褐	上・底面平坦　表面ナデ　指頭圧痕　一方向からの穿孔　一部剥離	堆積土中	
DP55	土玉	2.6－2.8	3.0	0.2－0.5	(20.9)	長石・石英・雲母	黒	表面ナデ　一方向からの穿孔　一部剥離	堆積土中	煤付着
DP56	土玉	2.7	3.1	0.4	21.7	長石・石英	オリーブ黒	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土中	煤付着
DP57	土玉	2.8－2.9	2.7	0.7	24.0	長石・石英	にぶい黄橙	上・底面平坦　表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土中	
DP58	土玉	3.1－3.2	2.7	0.6	28.1	長石・石英	オリーブ黒	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土中	煤付着
DP59	土玉	3.3－3.5	3.1	0.9－1.1	(32.9)	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	表面ナデ　指頭圧痕　一方向からの穿孔　一部欠損	堆積土中	
DP60	土玉	2.9	(2.3)	0.6	(17.1)	長石・石英	褐	表面ナデ　一方向からの穿孔　1/2 欠損	堆積土中	
DP61	土玉	3.2	2.5	0.7	(20.6)	長石・石英	にぶい橙	表面ナデ　一方向からの穿孔　一部欠損	堆積土中	
DP62	土玉	3.3－3.4	2.6	0.8	(23.4)	長石・石英・赤色粒子	オリーブ黒	表面ナデ　一方向からの穿孔　一部欠損	堆積土中	煤付着
DP63	土玉	3.5－3.6	3.1	0.9	(29.8)	長石・石英	橙	表面ナデ　一方向からの穿孔　一部欠損	堆積土中	
DP64	土玉	2.8－2.9	2.1	0.6	18.2	長石・石英	明赤褐	表面ナデ　指頭圧痕　一方向からの穿孔	堆積土中層	
DP65	土玉	2.7	2.6	0.5	19.0	長石・石英	灰黄褐	上・底面平坦　表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土下層	煤付着
DP66	土玉	2.6－2.9	2.6	0.3－0.6	19.6	長石・石英	黄橙	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土下層	
DP67	土玉	2.8－2.9	2.6	0.7	(19.8)	長石・石英	橙	表面ナデ　指頭圧痕　一方向からの穿孔　一部欠損	堆積土上層	
DP68	土玉	2.8－2.9	2.6	0.6	(20.6)	長石・石英・雲母	明褐	上・底面平坦　表面ヘラ削り　一方向からの穿孔　一部剥離	堆積土下層	
DP69	土玉	2.7－3.0	2.6	0.8	(20.7)	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	表面ナデ　一方向からの穿孔　一部欠損	堆積土下層	
DP70	土玉	2.9	2.6	0.6－0.7	(21.1)	長石・石英	にぶい橙	表面ナデ　一方向からの穿孔　一部剥離	堆積土下層	
DP71	土玉	2.8－3.0	2.6	0.5	21.4	長石・石英・雲母	にぶい橙	表面ナデ　指頭圧痕　一方向からの穿孔	堆積土下層	
DP72	土玉	2.8	2.8	0.6－0.7	21.5	長石・石英	にぶい褐	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土下層	
DP73	土玉	2.9	2.0	0.6	(22.0)	長石・石英	褐	上・底面平坦　表面ナデ　一方向からの穿孔　一部剥離	堆積土上層	
DP74	土玉	2.9－3.0	2.6	0.5－0.6	22.4	長石・石英・白色粒子	にぶい橙	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土中層	
DP75	土玉	2.7－2.9	2.7	0.5－0.6	(23.6)	長石・石英	明赤褐	上・底面平坦　表面ナデ　一方向からの穿孔　一部剥離	堆積土中層	
DP76	土玉	3.1	2.5	0.9－1.0	23.7	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	上・底面平坦　表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土下層	
DP77	土玉	3.0	3.0	0.7	25.5	長石・石英・雲母	にぶい橙	表面ヘラ削り　指頭圧痕　一方向からの穿孔	堆積土上層	
DP78	土玉	3.0－3.3	2.6	0.6	25.7	長石・石英	橙	上・底面平坦　表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土下層	
DP79	土玉	3.3	2.7	0.7	(27.1)	長石・石英	明赤褐	上・底面平坦　表面ナデ　一方向からの穿孔　一部欠損	堆積土中層	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP80	土玉	31～32	2.4	04～06	26.4	長石・石英	にぶい橙	上・底面平坦　表面ナデ　指頭圧痕　一方向からの穿孔	堆積土中層	
DP81	土玉	30～32	3.0	0.5	(27.4)	長石・石英	にぶい橙	表面ナデ　一方向からの穿孔　一部欠損	堆積土下層	
DP82	土玉	31～32	3.1	0.7	29.1	長石・石英	にぶい赤褐	表面ナデ　指頭圧痕　一方向からの穿孔	堆積土中層	
DP83	土玉	31～32	3.2	0.7	30.7	長石・石英	にぶい赤褐	表面ナデ　二方向からの穿孔	堆積土下層	
DP84	土玉	30～33	3.2	0.6	31.6	長石・石英	にぶい橙	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土下層	
DP85	土玉	3.2	2.9	0.7	32.3	長石・石英	にぶい橙	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土下層	
DP86	土玉	30～31	3.6	0.5	33.1	長石・石英	にぶい橙	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土下層	
DP87	土玉	32～35	3.3	0.8	(35.0)	長石・石英	にぶい褐	表面ナデ　指頭圧痕　一方向からの穿孔　一部剥離	堆積土下層	
DP88	土玉	33～34	3.2	06～07	35.4	長石・石英・白色粒子	明赤褐	表面ナデ　一方向からの穿孔	堆積土中層	
DP89	土玉	3.5	3.0	08～09	38.6	長石	にぶい橙	表面ナデ　指頭圧痕　一方向からの穿孔	堆積土下層	
DP90	土玉	29～32	3.1	0.6	(46.2)	長石・石英	明赤褐	表面ナデ　一方向からの穿孔　一部剥離	堆積土上層	
DP91	土玉	3.8	3.4	0.7	(48.9)	長石・石英	にぶい橙	表面ナデ　指頭圧痕　一方向からの穿孔　一部欠損	堆積土下層	
DP92	土玉	39～40	3.8	05～07	56.0	長石・雲母	にぶい黄橙	表面ナデ　指頭圧痕　一方向からの穿孔	堆積土中層	
DP93	土玉	38～41	3.8	05～06	61.6	長石・石英・雲母	明赤褐	表面ナデ　指頭圧痕　一方向からの穿孔	堆積土下層	

番号	器種	径	長さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP94	管状土錘	2.8	(7.4)	0.6	(47.6)	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	表面ナデ　指頭圧痕　一方向からの穿孔　一部欠損	堆積土下層	
DP95	管状土錘	29～31	6.4	0.7	65.5	長石・石英・赤色粒子	オリーブ黒	表面ナデ　指頭圧痕　一方向からの穿孔	堆積土下層	
DP96	管状土錘	3.4	6.6	08～11	(68.5)	長石・石英	にぶい黄橙	表面ナデ　指頭圧痕　一方向からの穿孔　一部欠損	堆積土中	
DP97	管状土錘	27～28	8.2	07～11	(59.8)	長石・石英・白色粒子	赤褐	表面ナデ　ヘラ削り　一方向からの穿孔　一部欠損	堆積土中	
DP98	管状土錘	30～32	8.2	1.0	76.2	長石・石英・雲母	明赤褐	表面ヘラ削り　一方向からの穿孔	堆積土上層	
DP99	管状土錘	34～35	8.4	10～12	91.5	長石・石英	明赤褐	表面ヘラ削り　指頭圧痕　一方向からの穿孔	堆積土中層	
DP100	管状土錘	37～39	8.9	11～12	98.0	長石・石英・赤色粒子	橙	表面指頭圧痕　一方向からの穿孔	堆積土下層	
DP101	管状土錘	3.7	10.7	1.2	113	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	表面指頭圧痕　一方向からの穿孔	堆積土下層	
DP102	管状土錘	37～38	12.5	1.2	178	長石・石英・雲母	にぶい橙	表面指頭圧痕　一方向からの穿孔	堆積土中層	
DP103	管状土錘	37～39	(3.3)	0.6	(53.7)	長石・石英	明赤褐	上面平坦　表面ナデ　一方向からの穿孔　下半部欠損	堆積土中	
DP104	管状土錘	3.4	(5.4)	10～13	(50.4)	長石・石英・雲母	橙	表面ヘラ削り　指頭圧痕　一方向からの穿孔　下半部欠損	堆積土中層	
DP105	管状土錘	3.1	(6.5)	0.3～05	(54.6)	長石・石英・黒色粒子	明赤褐	表面ナデ　一方向からの穿孔　下半部欠損	堆積土下層	
DP106	管状土錘	3.5	(6.4)	1.3	(73.7)	長石・石英	にぶい黄橙	表面ナデ　指頭圧痕　一方向からの穿孔　下半部欠損	堆積土中	
DP107	管状土錘	3.3	(7.9)	1.2	(89.5)	長石・石英	明赤褐	表面ナデ　一方向からの穿孔　下半部欠損	堆積土中	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP108	紡錘車	(4.2)	2.5	(0.8)	(25.9)	長石・石英	にぶい黄橙	上・底面ナデ　横面ヘラ削り　1/2欠損	堆積土中	
DP109	紡錘車	(4.8)	2.8	(0.3)	(28.8)	長石・石英・白色粒子	橙	表面ナデ　断面形台形　1/2欠損	堆積土中層	
DP110	紡錘車	(4.5)	1.4	04～07	(12.7)	長石・石英	黒	表面ナデ　断面形階段状　一方向からの穿孔　2/3欠損	堆積土中	

番号	器種	高さ	最小径	最大径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP111	支脚	13.1	4.5	7.5	(526)	長石・石英	明赤褐	上面平坦　横面ナデ　ヘラ削り　指頭圧痕　上面一部欠損	堆積土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	剥片	5.4	2.8	1.3	16.6	珪瑪	縦長剥片　打面は単剥離面　左縁縁使用痕	堆積土下層	旧石器時代。
Q2	剥片	3.9	2.5	1.3	9.10	チャート	縦長剥片　打面は単剥離面	堆積土中層	
Q3	磨製石斧	19.3	3.7	3.4	407	緑色岩	乳棒状　全面磨り調整　先端部使用痕	堆積土中層	
Q4	磨製石斧	(9.8)	5.0	2.3	(196)	緑色岩	全面磨り調整　刃部条線状の刻み　一部欠損	堆積土中	
Q5	磨石	12.4	7.5	4.7	690	安山岩	全面入念な磨り調整	堆積土中層	
Q6	凹石	7.6	(6.5)	4.0	(251)	砂岩	全面磨り調整　上面中央部に凹み　側縁部敲打痕	堆積土中層	敲石兼用
Q7	礫石	(5.4)	(3.9)	(4.2)	(67.6)	粘板岩	四面磨り面　一部欠損	堆積土中	

第6章　ま　　と　　め

1　はじめに

清水古墳群は平成22年度に発掘調査を実施し，調査面積は792㎡である。調査の結果，古墳１基（古墳時代），塚１基（江戸時代），地下式坑４基（室町時代），土坑92基（室町時代１，江戸時代１，時期不明90），溝跡４条（時期不明），ピット群３か所（時期不明）を確認した。

神屋遺跡は，平成23･24年度の２か年にわたって発掘調査を実施した。調査面積は平成23年度が3,523㎡，平成24年度が8,333㎡の計11,856㎡である。調査の結果，竪穴建物跡130棟（縄文時代２，古墳時代52，奈良時代19，平安時代56，時期不明１），掘立柱建物跡11棟（平安時代10，時期不明１），大型円形土坑４基（平安時代），陥し穴８基（縄文時代），方形竪穴遺構１基（室町時代），地下式坑１基（室町時代），火葬施設１基（室町時代），墓坑１基（時期不明），道路跡１条（江戸時代），粘土貼土坑３基（室町時代），土坑717基（縄文時代３，古墳時代13，奈良時代７，平安時代94，鎌倉時代１，室町時代１，江戸時代13，時期不明585），溝跡14条（時期不明）を確認した。

神屋南遺跡は平成24年度に発掘調査を実施し，調査面積は1,492㎡である。調査の結果，遺物包含層１か所を確認した。

これら３遺跡はその範囲が重複または隣接する関係にあり，同一の台地上とその斜面部に所在する遺跡群である。それぞれが関連性を有する一つの大きな遺跡ととらえ，各時代を概観する中で，当遺跡群の遺構や特徴的な遺物について述べていくこととしたい。なお，神屋南遺跡については，北斜面上に隣接する神屋遺跡から，遺構が確認された江戸時代までの遺物が断続的に流れ込むか投棄されて包含層が形成されており，各時代の詳細については割愛する。

2　旧石器時代

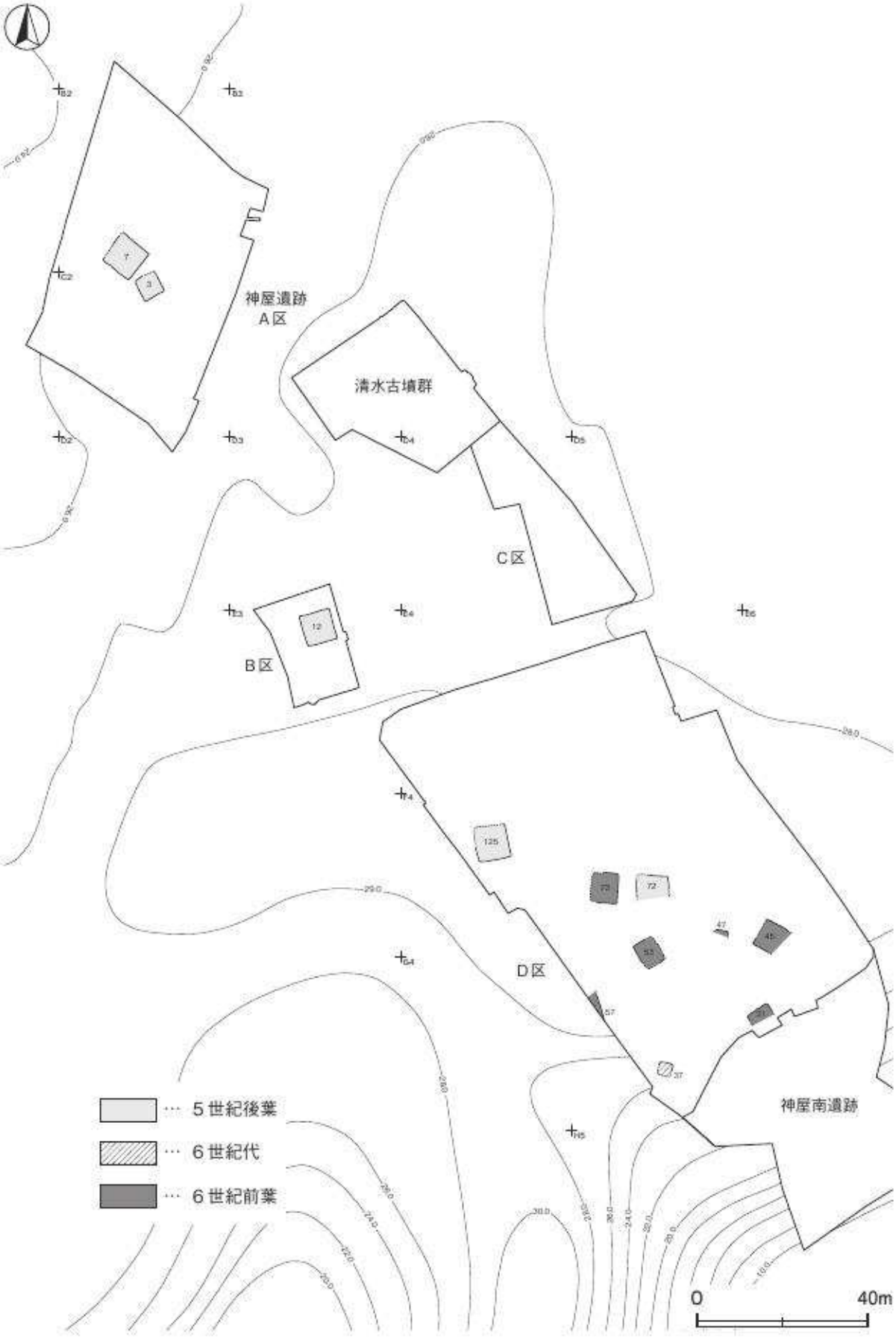
当遺跡群の３遺跡いずれからも当時代の遺構は確認されていないが，遺物は剥片９点が出土している。

神屋遺跡からは８点（頁岩２・瑪瑙２・玉髄２・黒曜石１・流紋岩１）が出土しており，それぞれ時代の異なる遺構や表土からの出土であることから，明確な位置や層位を確認することができなかった。当遺跡の石器剥離技法の特徴は，間接打法による大型の縦長剥片を作出していることがあげられる[1]。この大型の縦長剥片の作出は下総地域Ⅱ期前半の特徴とされ，層位ではＡＴを含む層から下層にあたる[2]。当遺跡から北西約３kmの位置に所在する中峰遺跡[3]からは，器種が多様化する下総地域Ⅱａ～Ⅱｂ期と考えられる石器類359点が出土していることから，当遺跡よりやや新しい時期の石器類と考えられる。当遺跡を含む旧江戸崎町域では，下総地域Ⅱ期には人々の活動が行われていたとみることができる。

なお，神屋南遺跡からは剥片１点（瑪瑙）が出土しており，当遺跡に形成されている遺物包含層には神屋遺跡からの遺物が流れ込んだと考えられることから，当遺跡の剥片１点についても，神屋遺跡のそれと時期を同じくするものと考えられる。

3　縄文時代

当時代の遺構は，神屋遺跡において竪穴建物跡２棟，陥し穴８基，土坑３基を確認した。



第 450 図　集落変遷図（5 世紀後葉～ 6 世紀前葉）

竪穴建物跡２棟はいずれも炉とピットを検出し，それらの配置から平面形を円形と推定したものであり，掘り込みや床面等はいずれも確認できなかった。当時代の遺構の中で出土土器から時期を判断できたのは土坑２基のみであり，１基は半截竹管による押引文が特徴の黒浜式期（前期中葉），もう１基は単節縄文施文後に紐線を貼付した加曽利Ｂ式期（後期後葉）である[4]。遺構外においては，清水古墳群から後期，神屋遺跡から前期・後期，神屋南遺跡から前期の土器片がそれぞれ出土している。当遺跡群が所在する神宮寺台地では，当時代の長い期間にわたって集落または狩猟場として，断続的に人々の暮らしが営まれていたと考えられる。

4　古墳時代

当時代の遺構は，清水古墳群において古墳１基，神屋遺跡において竪穴建物跡 52 棟，土坑 13 基を確認した。５世紀後葉から７世紀中葉までの集落の変遷を中心に述べながら，各時期を概観していきたい。なお，竪穴建物跡の規模については，小型・中型・大型に大別する。竪穴部の床面積は，７世紀前半では平均 30㎡程度であり[5]，近似値として一辺 5.5 ｍほどとなる。これを基準にして，一辺（長軸）が 4.5 ｍ未満を小型，4.5 ｍ以上 6.5 ｍ未満を中型，6.5 ｍ以上を大型とする。

５世紀後葉（第 450 図）

該期の竪穴建物跡は，第３・７・12・72・125 号竪穴建物跡の５棟である。

規模は中型が１棟（第３号竪穴建物跡），大型が４棟（第７・12・72・125 号竪穴建物跡）で，大型の割合が８割と高く，小型は確認できなかった。最大規模の建物は第７号竪穴建物跡で，長軸 8.04 ｍの方形である。主軸方向は５棟すべてが西に振れているが，その範囲はＮ－５－52°－Ｗと，ばらつきがある。

内部構造は，主柱穴を５棟すべてで検出したほか，出入り口ピット・貯蔵穴・壁溝を４棟，炉を３棟からそれぞれ検出している。そのほかに，第７号竪穴建物跡から間仕切り溝と梁太を検出している。調査区内での位置は，Ａ区に２棟，Ｂ区に１棟，Ｄ区中央部に２棟で，大きく３つのグループを確認している。

出土遺物は土師器，須恵器，土製品（土玉・管状土錘・紡錘車），石製品（臼玉），金属製品（釘）などである。

６世紀前葉（第 450 図）

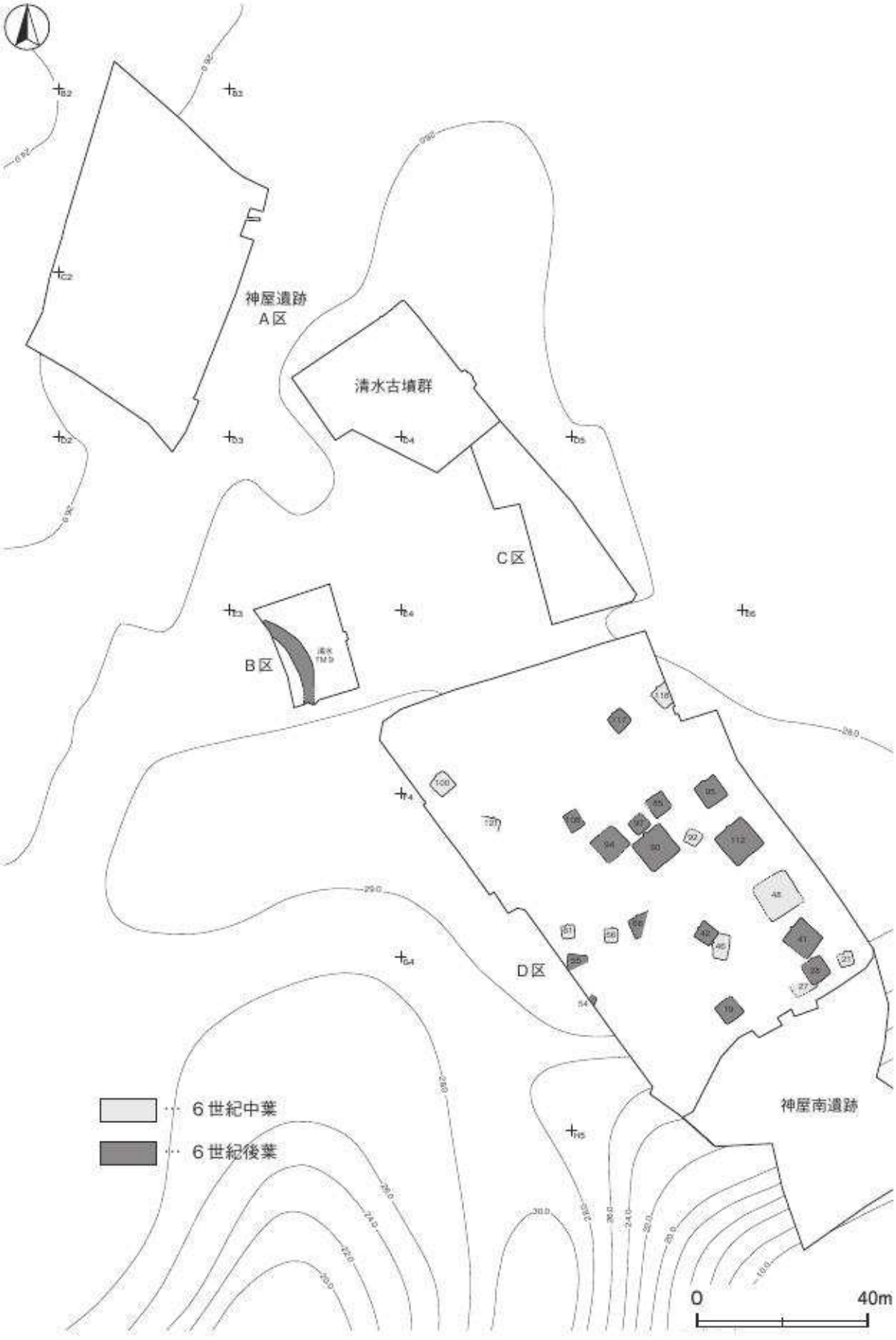
該期の竪穴建物跡は，第 31・45・47・53・57・73 号竪穴建物跡の６棟である。

規模は小型が２棟（第 47・57 号竪穴建物跡），中型が１棟（第 31 号竪穴建物跡），大型が３棟（第 45・53・73 号竪穴建物跡）で，５世紀後葉と同じく，大型の割合が５割である。最大規模の建物は第 73 号竪穴建物跡で，長軸 6.98 ｍの方形と推定される。主軸方向は東西いずれにも振れており，その範囲はＮ－29°－ＷからＮ－30°－Ｅと，規格性を見出すことはできない。調査区内での位置は，Ｄ区の中央部から南部に集約しており，前期とは異なる別の２グループが形成されたとみられる。該期の棟数は前期からほとんど変化がない。

内部構造は，５棟から主柱穴を検出したほか，出入り口ピット･貯蔵穴を１棟，壁溝を４棟，竈を３棟，炉を１棟からそれぞれ検出している。該期から，前期までは見られなかった竈が構築されるようになる。竈の付設は北壁・北東壁・北西壁とまちまちである。

出土遺物は土師器，須恵器，土製品（土玉・小玉・支脚），石器（紡錘車），石製品（小玉・臼玉），鉄滓などである。

６世紀中葉（第 451 図）



第 451 図　集落変遷図（6 世紀中葉～6 世紀後葉）

該期の竪穴建物跡は，第21・27・46・48・56・61・92・100・116・121号竪穴建物跡の10棟である。

規模は小型が5棟（第21・56・61・92・121号竪穴建物跡），中型が4棟（第27・46・100・116号竪穴建物跡），大型が1棟（第48号竪穴建物跡）である。小型・中型で9割を占めており，大型が半数以上を占めていた前期以前とは様相を異にしている。最大規模の建物は第48号竪穴建物跡で，長軸9.07ｍの方形と推定される。主軸方向は，第92・121号竪穴建物跡の2棟が東方向のＮ－32°・15°－Ｅで，それ以外の8棟の範囲はＮ－1～80°－Ｗと，規格性に欠ける。調査区内での位置は，Ｄ区の南部から北部にかけての広い範囲に所在しており，2～3棟で1つのグループを形成している。

内部構造は，主柱穴を8棟から検出したほか，出入り口ピット・壁溝・竈をそれぞれ9棟から，炉を1棟から検出している。第100号竪穴建物跡は，竈を作り替えているほか，間仕切り溝を設置している建物である。貯蔵穴は，該期の建物からは確認できなくなる。

出土遺物は土師器，須恵器，土製品（土玉・管状土錘・支脚），石器（砥石・金床石），石製品（臼玉），金属製品（刀子・鏃・鉸具），鉄滓などである。

該期は前期と比較して棟数が倍増する時期で，人々の当地域への流入が盛んな時期であったと想定できる。第46号竪穴建物跡は，当遺跡で竈と炉とをもつ唯一の建物跡で，金床石が出土していることから，工房跡の可能性がある。また，第100号竪穴建物跡からは500点以上の遺物とともに刀子や馬具の鉸具が出土していることから，有力者が居住していたと考えられる。

６世紀後葉（第451図）

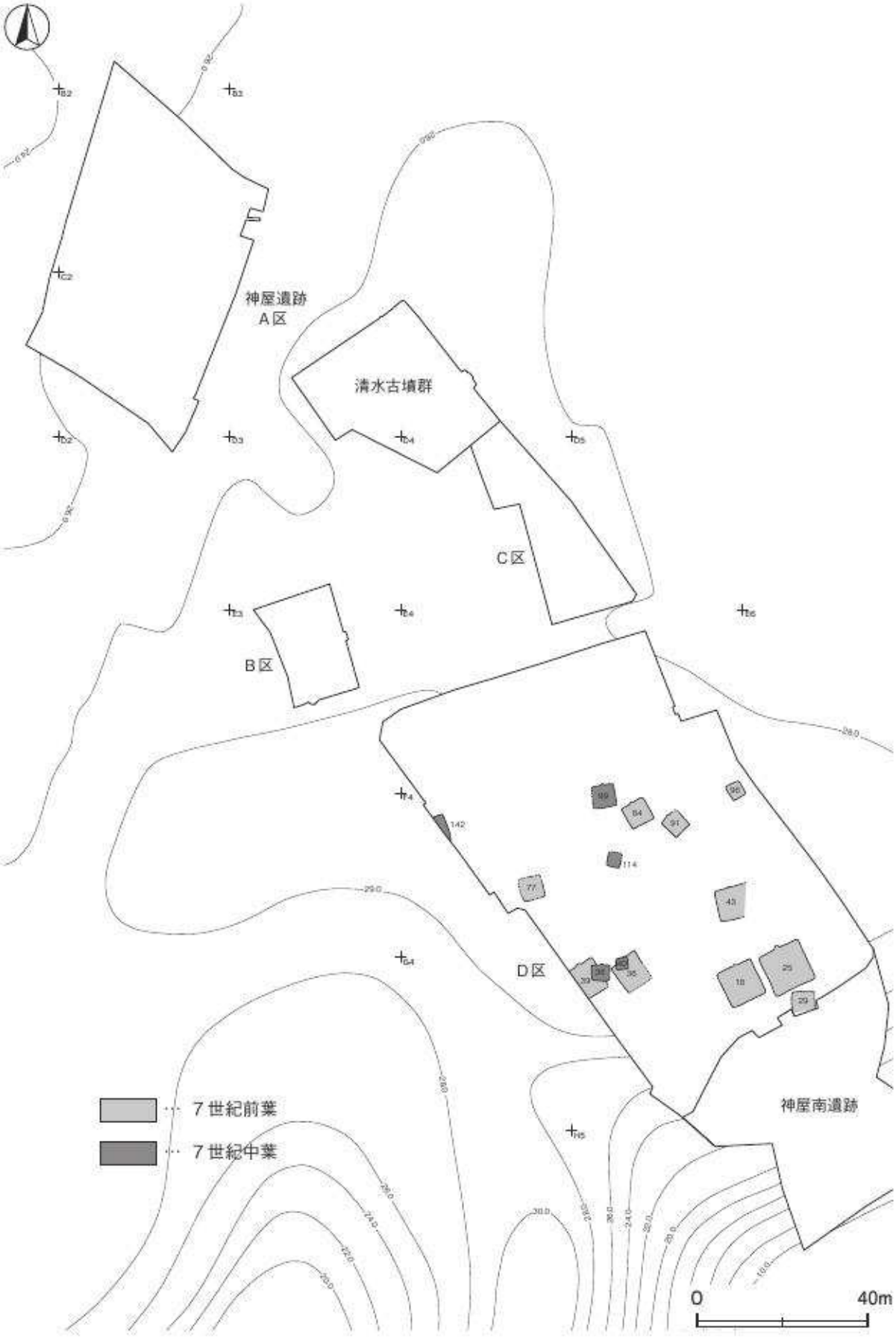
該期の竪穴建物跡は，前期よりさらに増加し，第19・28・41・42・54・55・68・85・90・94・95・97・108・112・117号竪穴建物跡の15棟である。

規模は小型が5棟（第42・54・97・108・117号竪穴建物跡），中型が6棟（第19・28・55・68・85・95号竪穴建物跡），大型が4棟（第41・90・94・112号竪穴建物跡）で，中型の割合が4割を占めている。最大規模の建物は第112号竪穴建物跡で，長軸8.28ｍの方形である。主軸方向は，第55号竪穴建物跡がＮ－8°－Ｅと東に振れているほかは，不明の1棟を除く13棟がＮ－23～55°－Ｗと，共通して北西方向に振れている様相が見られる。

内部構造は，主柱穴及び壁溝を14棟から検出したほか，出入り口ピットを12棟から，貯蔵穴を1棟から，竈を13棟からそれぞれ検出している。前期と同様に該期の竪穴建物は，Ｄ区の南部から北部にかけての広い範囲に所在しており，大型の建物1棟に対して，小型・中型の建物2～3棟で1つのグループを形成している。隣接している建物は同時期に機能していないと考えると，第41号竪穴建物跡と対応して第19・42号竪穴建物跡，第90号竪穴建物跡と対応して第68・117号竪穴建物跡，第94号竪穴建物跡と対応して第55・85・108号竪穴建物跡，第112号竪穴建物跡と対応して第28・95・97号竪穴建物跡といった組み合わせが想定される。

出土遺物は土師器，須恵器，土製品（土玉・管状土錘・勾玉・支脚・羽口），石器（砥石），石製品（臼玉・有孔円板），金属製品（刀子・鏃・鎌・釘・責金具），鉄滓などである。

該期は古墳時代の中で，竪穴建物の棟数が最も多くなる時期である。その中で第90号竪穴建物跡は，均等に配置された壁柱穴15か所を確認し，3,000点以上の遺物が出土するなど，他の建物跡とはその構造や出土遺物の数において突出している。また，第112号竪穴建物跡は，該期における最大規模の建物であるとともに約1,400点の遺物が出土していることから，いずれも当時代の集落において，中心的役割を担った建物の一つであったと考えられる。



第 452 図　集落変遷図（7 世紀前葉～7 世紀中葉）

7世紀前葉（第452図）

該期の竪穴建物跡は，第18・25・29・36・39・43・77・84・91・96号竪穴建物跡の10棟である。

規模は小型が1棟（第96号竪穴建物跡），中型が4棟（第29・77・84・91号竪穴建物跡），大型が5棟（第18・25・36・39・43号竪穴建物跡）で，大型が5割を占めている。最大規模の建物は第25号竪穴建物跡で，長軸10.22ｍの方形であり，該期及び当遺跡の中で最大規模の竪穴建物跡である。主軸方向は，第29号竪穴建物跡がほぼ真北であるほかは9棟が北西方向に振れ，その角度はN－15～44°－Wの範囲で，一定の規格性をもっていることが分かる。

内部構造は，主柱穴を10棟すべてで検出したほか，出入り口ピットを7棟から，壁溝を8棟から，竈を9棟からそれぞれ検出している。調査区内での位置は，D区の南部及び中央部の狭い範囲にまとまっており，2～4棟で1つのグループを形成している。

出土遺物は土師器，須恵器，土製品（勾玉・土玉・管状土錘・支脚・紡錘車・羽口），石器（鏃・砥石・紡錘車），石製品（臼玉・有孔円板），金属製品（刀子・釘）などである。

先に述べた第25号竪穴建物跡は，当遺跡における最大規模の竪穴建物跡であるとともに，約900点の遺物が出土しており，該期の中心的な建物であったと考えられる。

7世紀中葉（第452図）

該期の竪穴建物跡は，第38・40・99・114・142号竪穴建物跡の5棟である。

規模は小型が2棟（第38・40号竪穴建物跡），中型が2棟（第99・114号竪穴建物跡），大型が1棟（第142号竪穴建物跡）で，該期では小型・中型の割合で8割となっている。最大規模の建物は第142号竪穴建物跡で，長軸は現存値が6.8ｍで，方形もしくは長方形になる。主軸方向は，第38号竪穴建物跡がN－3°－Eと，ほぼ真北を示しているほかは，その角度はN－8～22°－Wと，規格性が見られる。

内部構造は，竈を4棟から検出したほか，主柱穴・壁溝を3棟から，出入り口ピットを2棟からそれぞれ検出している。位置はD区の中央部から北部にかけて点在しており，顕著な傾向は見られない。

出土遺物は土師器，須恵器，土製品（土玉・支脚），石器（砥石・紡錘車），石製品（臼玉・有孔円板），金属製品（釘）などである。

第99号竪穴建物跡からは666点の遺物が出土しており，該期における中心的な建物であると考えられる。なお，調査区域内においては，7世紀後葉の竪穴建物跡は確認できず，集落が一旦衰退した可能性がある。

古墳時代の概観

以上が古墳時代の様相であるが，概観してみると以下のような傾向が見られる。

神屋遺跡において当時代の竪穴建物が出現するのは5世紀後葉で，A区に2棟，B区に1棟，D区に2棟と，3つのグループが成立している。6世紀前葉以降になると，A・B区では当時代の集落は姿を消し，D区のみに集落がみられるようになる。6世紀前葉にはD区の南部と中央部に2棟ないし3棟の小グループが形成される。6世紀中葉になると集落がD区の南部から北部へと広がり，おおむね3つのグループが形成されるようになり，竪穴建物の棟数が倍増する。6世紀後葉は当時代の最盛期で，D区の南部と中央部を中心に，大型の建物1棟に小型もしくは中型の建物が3棟前後の組み合わせとなった集落が，4グループ程度形成されている。7世紀前葉になると棟数が減少に転じ，大型＋小型・中型の竪穴建物の組み合わせも見られなくなる。7世紀中葉では棟数がさらに減少し，D区の南部と中央部に1グループずつの集落となる。D区の西端に該期の竪穴建物跡を1棟確認しており，さらに西側に集落が広がる可能性があるが，今回の調査範囲からは不明である。7世紀中葉を最後に，当時代の竪穴建物跡が確認されないこ

第 453 図　竪穴建物跡規模別棟数一覧（5 ～ 10 世紀）

※小型·中型·大型については，古墳時代（5 ～ 7 世紀），奈良時代（8 世紀），平安時代（9·10 世紀）ごとに，基準が異なっている。

とから，他地域へ移動した可能性がある。

当時代における神屋遺跡は，５世紀後葉から７世紀中葉の集落であり，６世紀後葉に集落としての最盛期を迎えるものの，７世紀後葉には集落は一旦廃絶している可能性がある。当遺跡の約 500 m北西に所在する薬師後遺跡[6]においても，７世紀中葉から後葉にかけて集落が姿を消している。当遺跡の約 4.5km東には幸田遺跡・幸田台遺跡[7]が所在し，奈良・平安時代の竪穴建物跡がそれぞれ 61 棟・80 棟確認されている。いずれも同じ神宮寺台地上に所在することから，当遺跡や薬師後遺跡の人々が幸田遺跡や幸田台遺跡へ移動した可能性も否定できない。また，当遺跡周辺には古墳群が点在しており，古墳の築造と集落の盛衰は関連性も考えられるが，明確な時期については不明である。

清水古墳群第９号墳について

当時代は古墳群が形成される時期にあたり，清水古墳群第９号墳は，神屋遺跡の平成 23 年度における調査Ｂ区において確認した遺構である。周溝西側の大半が調査区域外に存在しているため，全体の規模は不明である。埴輪が未確認であることなどから，古くても７世紀以降に築造されたと考えられるが，本墳に伴う土器が出土していないことから，時期を明確にすることはできない。

清水古墳群では，これまで本墳を除く８基の古墳が周知されている[8]。第２号墳はすでに失われ，第７号墳は，今回の調査によって江戸時代に築造された塚であることを確認している。確認できた古墳は，本墳を含めて７基となる。墳形の内訳は，円墳が５基，前方部が削平された前方後円墳が１基で，古墳の規模は，円墳が直径９～ 25 m，前方後円墳の全長は推定 30 mとされている。今回調査を行った第９号墳は調査した範囲が狭いためにいずれも推定になるが，墳形は円墳，墳丘の規模が 24 mほどと，他の円墳５基と近似した特徴をもっており，墳形や規模から，清水古墳群における他の古墳との築造に大きな時期差はないものとみられる。

5　奈良時代

当時代の遺構は，神屋遺跡において竪穴建物跡 19 棟，土坑７基を確認した。

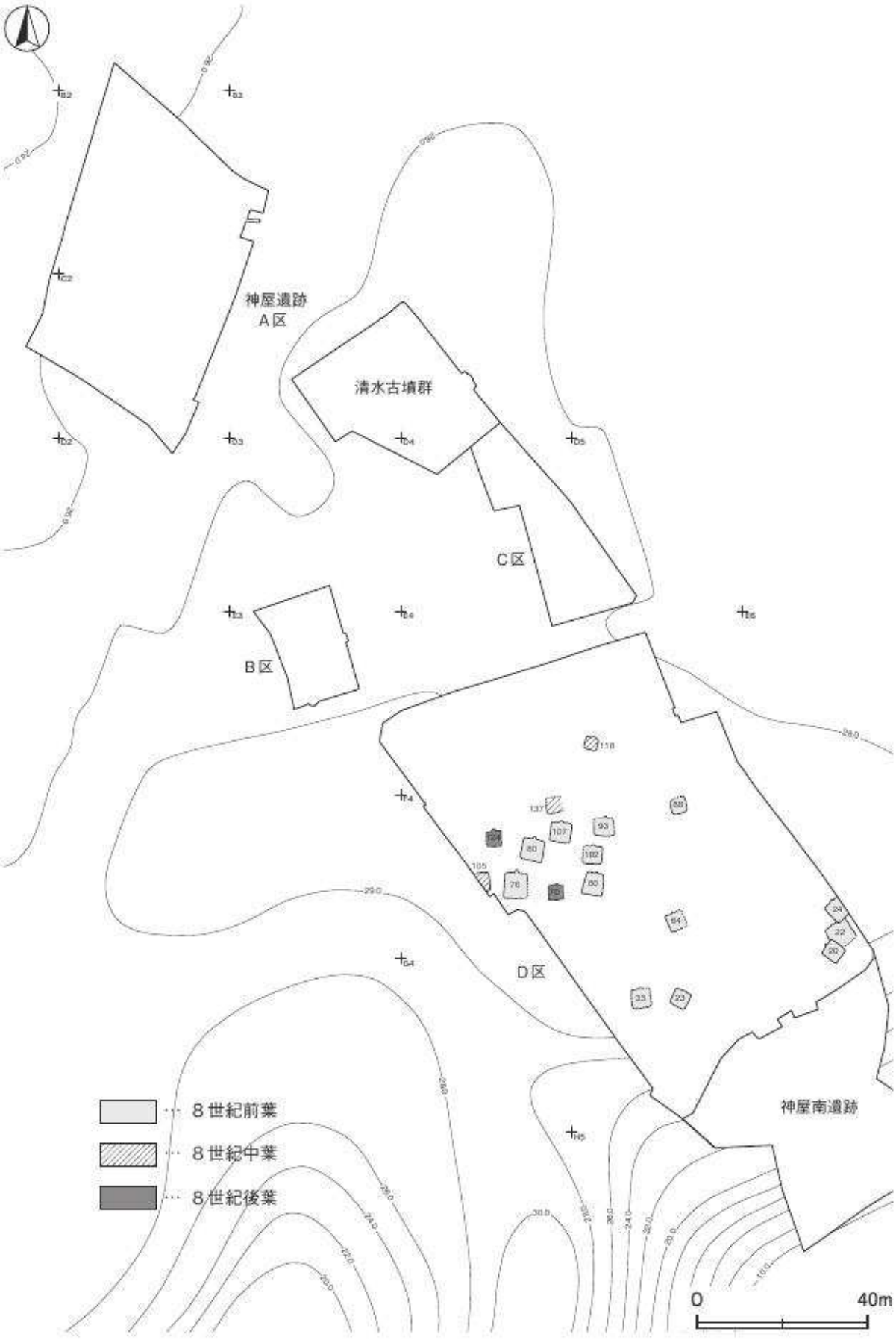
ここでは当時代の竪穴建物跡を確認した，８世紀前葉から後葉までの集落の変遷を中心に述べながら，各時期を概観していきたい。なお，古墳時代同様，竪穴建物跡の規模については，小型・中型・大型に大別する。竪穴部の床面積は，８世紀は平均 20㎡弱であり[9]，近似値として一辺 4.5 mほどとなる。これを基準にして，一辺（長軸）が 3.5 m未満を小型，3.5 m以上 5.5 m未満を中型，5.5 m以上を大型とする。

８世紀前葉（第 454 図）

該期の竪穴建物跡は，第 20・22 ～ 24・33・60・64・76・80・88・93・102・107 号竪穴建物跡の 13 棟である。

規模の内訳は中型が９棟（第 20・23・24・60・64・80・88・93・102 号竪穴建物跡），大型が４棟（第 22・33・76・107 号竪穴建物跡）である。小型に該当する建物はなく，中型が該期の建物の７割近くを占めている。最大規模の建物は第 76 号竪穴建物跡で，長軸 5.89 mの方形である。主軸方向はＮ－ 55°－ＷからＮ－ 11°－Ｅと幅は広いが，真北からやや北東方向を向く建物が半数近くを占めている。

内部構造は，主柱穴，出入り口ピット，壁溝，竈について，すべての竪穴建物で検出している。竈の付設は北東壁が１棟，北西壁が４棟で，ほかの８棟は北壁である。集落の位置は，当時代はＤ区にのみ展開しており，Ｄ区の南部から中央部にかけて，おおむね２～４棟で１つのグループを形成している。隣接している建物は同時期に機能していないと考えると，第 22 号竪穴建物跡と対応して第 23・64 号竪穴建物跡，第 33 号竪穴建物跡と対応して第 20・24・80・102 号竪穴建物跡，第 76 号竪穴建物跡と対応して第 60・



第 454 図　集落変遷図（8 世紀）

80・88・102号竪穴建物跡といった組み合わせが想定される。

出土遺物は土師器，須恵器，土製品（土玉・管状土錘・紡錘車・支脚・羽口），石器（砥石），金属製品（刀子・鎌$_{身}$・釘），鉄滓などである。

第22号竪穴建物跡が第20・24号竪穴建物に掘り込まれていることから，第22号竪穴建物跡については7世紀末から8世紀初頭にかけての建物であり，廃絶後間もなく第20・24号竪穴建物が構築されたと判断した。該期は律令期に伴い新たに形成された集落で，当時代の最盛期となる。第80・107号竪穴建物跡は近接しているものの，いずれも遺物が700点近く出土しており，該期における中心的な建物と考えられる。また，これらの南西に近接する第76号竪穴建物跡は，掘方調査によって拡張や柱の立て替えが判明しており，羽口や鉄滓を確認していることから，鍛冶に関わる施設の可能性がある。また，第93号竪穴建物跡からは土玉39点などが出土し，住人は漁労を生業としていた可能性が高い。

8世紀中葉（第454図）

該期の竪穴建物跡は，第105・118・137号竪穴建物跡の3棟である。

規模の内訳は小型が1棟（第118号竪穴建物跡），中型が2棟（第105・137号竪穴建物跡）で，大型に該当する建物はない。最大規模の建物は第105号竪穴建物跡で，長軸4.29 mの方形である。主軸方向はN－5°－WからN－83°－Eと広い範囲に振れており，規格性を見出すことはできない。

内部構造は，主柱穴・壁溝を3棟すべてで，竈を2棟から，出入り口ピットを1棟からそれぞれ検出している。竈の付設はどちらも北壁である。3棟とも位置はD区の中央部から北部の範囲にあり，グループを形成している。

出土遺物は土師器，須恵器，土製品（土玉・支脚・羽口），金属製品（釘$_{身}$），鉄滓などである。

該期は前期から竪穴建物の数が急減する時期である。当遺跡では全体的に土玉の出土が極めて多く，該期では3棟すべてで出土している。とりわけ第118号竪穴建物跡からは土玉16点が出土しており，住人は漁労を生業としていた可能性がある。

8世紀後葉（第454図）

該期の竪穴建物跡は，第70・124号竪穴建物跡の2棟である。

規模の内訳はどちらも中型で，小型及び大型に該当する建物はない。最大規模の建物は第124号竪穴建物跡で，長軸3.67 mの方形である。主軸方向は，N－2°・4°－Wと，ほぼ一致している。

内部構造は，どちらからも主柱穴・出入り口ピット・壁溝・竈を検出している。竈の付設はどちらも北壁である。調査区内での位置は，どちらもD区の中央部に所在している。

出土遺物は土師器，須恵器，土製品（土玉・管状土錘・羽口），金属製品（刀子・耳環）などである。

該期の第124号竪穴建物跡は，300点近い出土遺物の中で，羽口2点と鉄滓1点が出土しており，本跡またはその周辺で鍛冶に関わる遺構があった可能性があるが，今回の調査では確認できなかった。

奈良時代の概観

以上が奈良時代の様相であるが，概観してみると以下のような傾向が見られる。

当時代では8世紀前葉が13棟と，多くの棟数で形成された集落である。それが中葉・後葉にかけて3棟・2棟と急減することになる。集落が他の場所へ移動していった可能性もあるが，調査区域が道路幅であることから，調査区以外に当時代の集落が広がっていたとも考えられる。

時を同じくして，近接する薬師後遺跡では，竪穴建物跡から円面硯や東海産の須恵器，灰釉陶器などが複数出土しており，有力者の存在が想定されている。当時代は信太郡の郡寺とされている下君山廃寺の造

営や交通網の整備など，周辺地域は大規模な開発が相次いでいたと考えられる。それを支える様々な物資の供給が必要であり，当時代の薬師後遺跡は，集落の有力者と，生産活動に従事していた人々が構成した集落と考えられている[10]。

一方，当時代における神屋遺跡は，竪穴建物の棟数は多くは確認できなかったものの，羽口や鉄滓，管状土錘やおびただしい数の土玉が出土している。これらの遺物から，鉄製品の加工や漁労活動を通して，郡内の開発や整備を後押ししていた集落と位置づけることができよう。

6　平安時代

当時代の遺構は，神屋遺跡において竪穴建物跡56棟，掘立柱建物跡10棟，大型円形土坑4基，土坑94基を確認した。ここでは，当時代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡，大型円形土坑を確認している9世紀前葉から10世紀後葉までの集落の変遷を中心に述べながら，各時期を概観していきたい。なお，これまで同様，竪穴建物跡の規模については，小型・中型・大型に大別する。竪穴部の床面積は，9世紀は平均14㎡以下であり[11]，近似値として一辺3.8ｍほどとなる。これを基準にして，一辺（長軸）が3ｍ未満を小型，3ｍ以上5ｍ未満を中型，5ｍ以上を大型とする。

9世紀前葉（第455図）

該期の竪穴建物跡は，第30・58・71・83・104・132号竪穴建物跡の6棟である。

規模の内訳は中型が5棟（第30･58･71･83･132号竪穴建物跡），大型が1棟（第104号竪穴建物跡）で，中型が全体の8割以上を占めている。最大規模の建物は第104号竪穴建物跡で，長軸6.98ｍの方形である。主軸方向は，N－37°－WからN－87°－Eと幅広く，規格性を見出すことはできない。

内部構造は，壁溝を6棟すべてで検出したほか，竈を5棟，出入り口ピットを4棟，貯蔵穴を1棟からそれぞれ検出している。主柱穴は6棟すべてで確認し，1か所･4か所が各3棟となっている。竈の付設は，第30号竪穴建物跡が東壁で，ほか5棟は北壁である。集落はD区の南部に第30・83・104号竪穴建物跡，D区の中央部に第58・71・132号竪穴建物跡と，大きく2つのグループが確認できた。

次に，掘立柱建物跡については，第3～5号掘立柱建物跡の3棟が該当する。第3号掘立柱建物跡は3×3間の総柱建物，第4・5号掘立柱建物跡は3×2間の側柱建物である。桁行方向は，第3号掘立柱建物跡がN－74°－Wの東西棟のほか，第4・5号掘立柱建物跡はN－17°･11°－Eの南北棟で，桁行方向が真北からやや東に振れる方向で，2棟はほぼ揃っている。近接する竪穴建物とともに，高床と掘床の倉庫としての掘立柱建物が集落の構成に加わるようになる。税物を一時収納する倉庫として機能していたと考えられる。

出土遺物は土師器，須恵器，灰釉陶器（長頸瓶・甕），土製品（土玉・管状土錘・支脚），石器（砥石），金属製品（刀子・鏃・鎌），鉄滓などである。

該期は前期と比較して，竪穴建物の棟数が増加に転じるとともに，掘立柱建物が出現する時期である。第83号竪穴建物跡は，600点以上の遺物とともに，黒笹14号窯式の長頸瓶が出土しており，該期における中心的な建物と考えられる。また，該期から墨書土器が散見されるようになる。

9世紀中葉（第455図）

該期の竪穴建物跡は，第2・14・15・34・35・59・63・66・67・75・82・87・110・113・115・123・126・128・130・131・141号竪穴建物跡の21棟である。

規模の内訳は小型が3棟（第67・130・141号竪穴建物跡），中型が14棟（第2・14・15・35・59・

63・87・110・113・115・123・126・128・131号竪穴建物跡），大型が4棟（第34・66・75・82号竪穴建物跡）で，中型の割合が3分の2を占めている。最大規模の建物は第82号竪穴建物跡で，長軸6.78ｍの方形である。主軸方向は，Ｎ－54°－ＷからＮ－111°－Ｅとばらつきがあるが，真北からやや北東方向に振れる建物が全体の6割近くを占めており，一定の規格性をもった集落であることがみて取れる。

内部構造は，出入り口ピットを14棟，壁溝を18棟，竈を17棟からそれぞれ検出している。主柱穴は15棟で確認し，4か所が8棟，3か所が2棟，2か所が1棟，1か所が4棟となっている。竈の付設は東壁と西壁が各1棟で，ほか15棟は北壁に付設されている。調査区内での位置は，Ｄ区の中央部に16棟がまとまっているほかは，Ａ区の南部に3棟，Ｄ区の南部・北部に各1棟である。

掘立柱建物跡については，第1・6・10号掘立柱建物跡の3棟が該当する。第1・6号掘立柱建物跡は3×2間，第10号掘立柱建物跡は2×1間の，いずれも側柱建物である。桁行方向は，Ｎ－12～20°－Ｅの範囲で，前期の2棟と同様，真北からやや北東方向に振れている。該期も近接する竪穴建物と，倉庫としての掘立柱建物で集落が構成されている。

出土遺物は土師器，須恵器，灰釉陶器（皿・瓶・長頸瓶），土製品（土玉・管状土錘・支脚・紡錘車・羽口），石器（紡錘車），石製品（臼玉），金属製品（刀子・鎌・釘），鉄滓などである。

該期は平安時代において竪穴建物の棟数が急増した時期である。第34・66・82・128号竪穴建物跡は，600～2,000点以上に上る多量の遺物とともに黒笹14号窯式の灰釉陶器片が出土しており，該期における中心的な役割を担った建物群と考えられる。とりわけ第82号竪穴建物跡からは多数の墨書土器や円面硯などが出土していることから，有力者が居住していた可能性が高いと思われる。また，第67号竪穴建物跡からは「大刀自」と箆書された紡錘車が出土しており，その詳細については文字資料の項で述べることとする。

9世紀後葉（第455図）

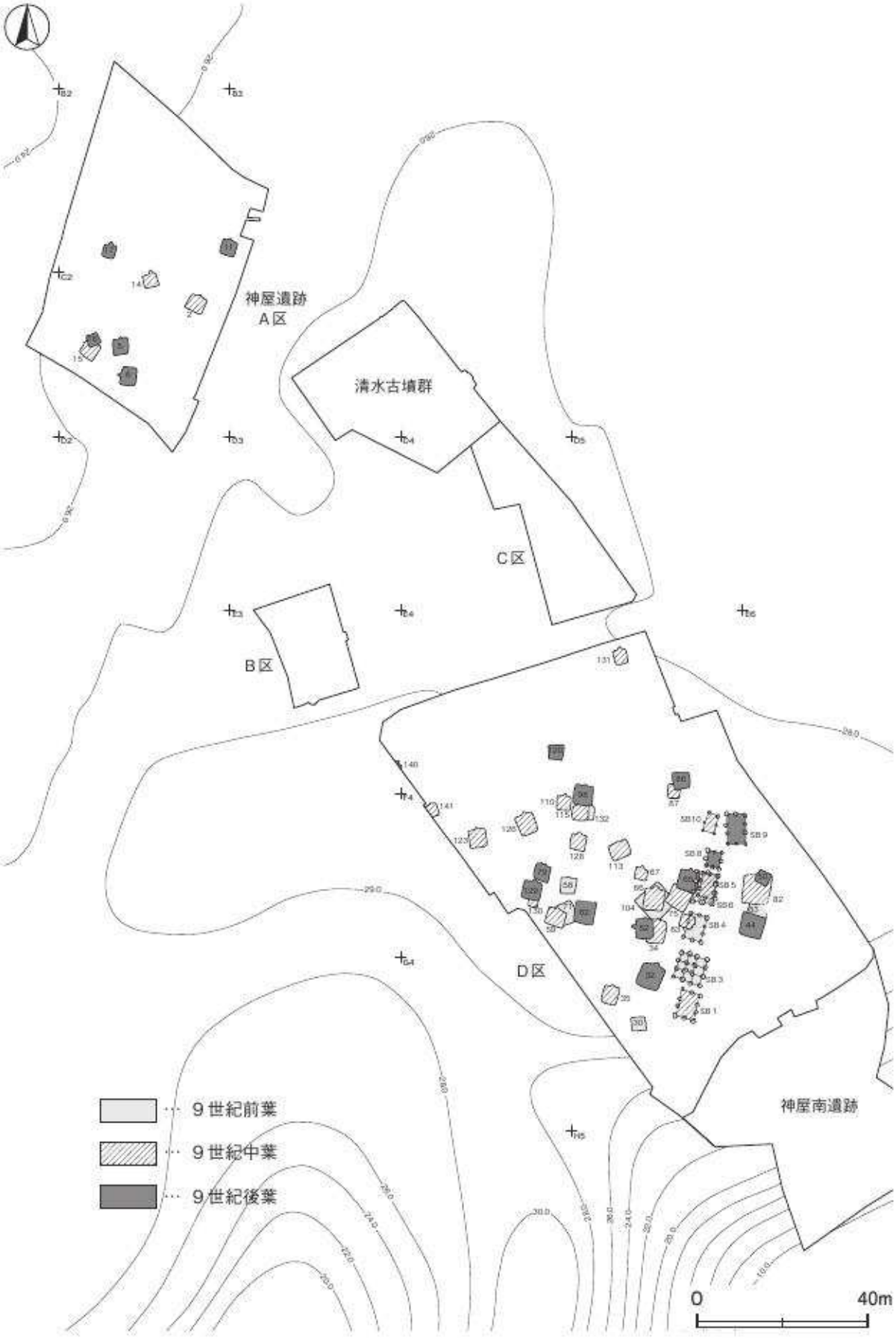
該期の竪穴建物跡は，第5・6・11・16・17・32・44・50・52・62・65・79・86・98・120・129・140号竪穴建物跡の17棟である。

規模の内訳は小型が3棟（第16・17・140号竪穴建物跡），中型が11棟（第5・6・11・50・52・65・79・86・98・120・129号竪穴建物跡），大型が3棟（第32・44・62号竪穴建物跡）で，中型の建物が3分の2近くを占めている。最大規模の建物は第32号竪穴建物跡で，長軸5.68ｍの方形である。主軸方向は，Ｎ－85°－ＷからＮ－30°－Ｅとばらつきが見られるが，真北からやや北東方向に振れる建物が全体の5割近くを占めており，該期においても一定の規格性をもった集落であることが分かる。

内部構造は，壁溝を16棟から，竈を15棟から，出入り口ピットを12棟からそれぞれ検出している。主柱穴は8棟で確認し，4か所が6棟，2か所・5か所が各1棟となっている。竈の付設は西壁・北西壁が各2棟，北東壁が1棟で，ほか11棟は北壁である。調査区内での位置は，Ａ区の北部に2棟，南部に3棟，Ｄ区の南部に1棟，中央部に9棟，北部に2棟と，前期と比較して棟数はやや減少したものの，より広範囲にわたっている。

掘立柱建物跡については，第8・9号掘立柱建物跡の2棟が該当する。第8号掘立柱建物跡は2×2間，第9号掘立柱建物跡は3×2間のいずれも側柱建物である。桁行方向はそれぞれ，Ｎ－7°－ＥとＮ－0°で，前期とほぼ変わらず，真北からやや北東に振れる範囲である。該期も近接する竪穴建物と，掘立柱建物で集落が構成されている。

出土遺物は土師器，須恵器，灰釉陶器（瓶・長頸瓶），緑釉陶器（椀），土製品（土玉・管状土錘・支脚・



第 455 図　集落変遷図（9 世紀）

紡錘車・羽口），石器（砥石），金属製品（刀子・鏃・鎌，釘・閂・引手金具），鉄滓などである。

該期は前期と比較して竪穴建物の棟数が若干減少しているものの，多くの棟数を確認している。第32・44・50・52・65号竪穴建物跡は，多量の遺物とともに灰釉陶器や墨書土器が出土しており，該期における中心的な役割を担った建物群と考えられる。特に第44号竪穴建物跡は，壁に粘土を貼り付けて補強していること，3,600点に上る出土遺物，その中でも多数の墨書土器と灰釉陶器などが出土していることから，該期における有力者の居宅であった可能性が高い。

10世紀前葉（第456図）

該期の竪穴建物跡は，第26・51・81・89・119・122号竪穴建物跡の6棟である。

規模の内訳は小型が2棟（第119・122号竪穴建物跡），中型が4棟（第26・51・81・89号竪穴建物跡）で，中型の建物が3分の2を占めている。大型に該当する建物はない。最大規模の建物は第81号竪穴建物跡で，長軸4.63ｍの方形である。主軸方向は，Ｎ－80°－Ｗから Ｎ－10°－Ｅとばらつきが見られ，主軸方向が大きく西に振れる建物が散見される点が，前期までと異なる。

内部構造は，竈を6棟すべてで検出したほか，壁溝を3棟から，出入り口ピットを1棟から，それぞれ検出している。主柱穴は4棟で確認し，4か所が2棟，1か所・2か所が各1棟となっている。竈の付設は北壁・北西壁・西壁が各2棟ずつとなっている。竪穴建物跡の位置は，Ｄ区の南部・中央部に4棟，北部に2棟となっており，北部の2棟がいずれも西竈であり，2つのグループが確認できる。

掘立柱建物跡については，第7・11号掘立柱建物跡の2棟が該当する。第7号掘立柱建物跡は2×1間，第11号掘立柱建物跡は3×2間のいずれも側柱建物である。桁行方向は，第7号掘立柱建物跡のＮ－7°－Ｅに対して，第11号掘立柱建物跡はＮ－87°－Ｗであり，前期までの真北からやや北東に振れる桁行方向に対してほぼ直交している。また，東妻・西妻の中柱がいずれもやや外側に外れていることから，棟持柱の構造を示している。該期も竪穴建物と掘立柱建物で集落が構成されている。第11号掘立柱建物跡は，桁行方向と構造から，倉庫以外の用途が想定される。

また，該期からは大型円形土坑が確認されるようになる。該期では第1・2・4号の3基が該当する。代表的な出土遺物は，第1号大型円形土坑では人面墨書が施された土師器鉢，第2号大型円形土坑では須恵器の大甕である。第4号大型円形土坑からは火熨斗が出土しており，規模が前の2基とやや異なる。大型円形土坑の詳細については後に述べることとする。

出土遺物は土師器，須恵器，灰釉陶器（瓶），緑釉陶器（小瓶），土製品（土玉・管状土錘・支脚・羽口・円筒形土製品），金属製品（刀子・鎌・釘・火熨斗），鉄滓，炭化米などである。

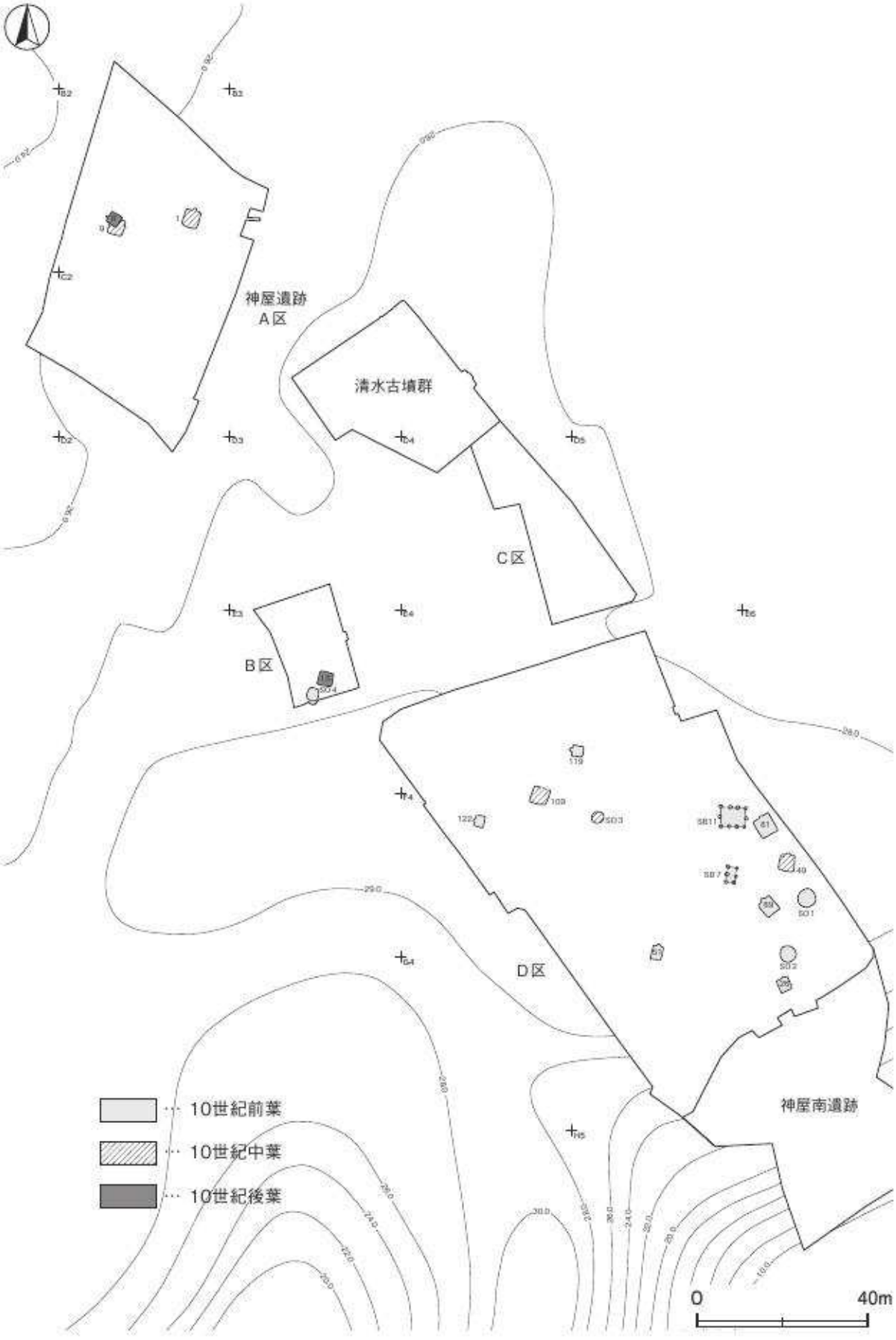
該期は集落としてのピークが過ぎ，前期と比較して竪穴建物の棟数が大きく減少している。また，該期を最後に掘立柱建物が姿を消す一方で，該期から大型円形土坑が見られるようになる。該期から集落が衰退していると考えられるが，第4号大型円形土坑の周囲に同時期の竪穴建物跡が見られないことから，調査区の西側に集落の一部が形成されている可能性もある。

10世紀中葉（第456図）

該期の竪穴建物跡は，第1・9・49・109号竪穴建物跡の4棟である。

規模の内訳は4棟すべてが中型で，小型及び大型に該当する建物はない。最大規模の建物は第109号竪穴建物跡で，長軸4.06ｍの方形である。主軸方向は，第9号竪穴建物跡が大きく東方向に振れており，他の3棟はＮ－8～19°－Ｅと，やや北東に振れている点で共通している。

内部構造は，壁溝及び竈を3棟，出入り口ピットを1棟からそれぞれ検出している。主柱穴は1棟で2



第 456 図　集落変遷図（10 世紀）

か所を確認した。竈の付設は1棟が東壁で，ほか2棟は北壁である。調査区内における竪穴建物跡の位置は，A区の北部に2棟，D区の中央部と北部に各1棟となっており，グループとしてのまとまりは認められなくなる。

大型円形土坑は第3号大型円形土坑の1基のみが該当する。総量約6kgの炭化材と，馬骨が出土している点が特徴として挙げられる。詳細については大型円形土坑の項において後述する。

出土遺物は土師器，灰釉陶器（皿・長頸瓶），土製品（土玉・管状土錘），鉄滓，炭化材などである。

該期も前期同様，竪穴建物の棟数が減少するとともに，掘立柱建物跡も見られなくなる。調査区の東部や北部で竪穴建物跡を確認していることから，調査区域外に集落の一部が移動している可能性もある。

10世紀後葉（第456図）

該期の竪穴建物跡は，第8・13号竪穴建物跡の2棟である。

規模の内訳はいずれも小型1棟（第8号竪穴建物跡），中型1棟（第13号竪穴建物跡）で，大型に該当する建物はない。最大規模の建物は第13号竪穴建物跡で，長軸3.35mの長方形である。主軸方向は，N－62°－WとN－100°－Eで，規格性は見られない。当遺跡群における，平安時代最後の竪穴建物跡である。

内部構造は，どちらも竈を検出し，第13号竪穴建物跡から主柱穴，出入り口ピット，壁溝，貯蔵穴をそれぞれ検出している。主柱穴は2か所となっている。竈の付設は西壁・東壁とまばらである。それぞれA区の北部とB区で確認している。

出土遺物は土師器，緑釉陶器（椀），土製品（土玉・紡錘車）などである。

平安時代の概観

以上が平安時代の様相であるが，概観してみると以下のような傾向が見られる。

当時代では，奈良時代に減少した竪穴建物が再び増加に転じ，9世紀前葉で6棟，中葉では21棟，後葉では17棟と，9世紀代の後半に集落としての全盛期を迎えている。特に，掘立柱建物跡を検出したD区の南部と中央部が，集落の中心部であったとみられる。掘立柱建物について，10世紀前葉の第11号掘立柱建物跡は，東西棟で棟持柱の構造で，他の掘立柱建物跡とは異なる用途の可能性がある。それ以外の掘立柱建物跡は，倉庫として使用されたものと思われる。10世紀に入ると竪穴建物の棟数が急減し，10世紀後葉の2棟を最後に見られなくなる。近接する薬師後遺跡では，11世紀前葉の1棟を最後に集落が途絶えていることから，集落の盛期から衰退期までをほぼ同じくしていることがわかる。

神屋遺跡で紡錘車や墨書土器，灰釉陶器などが多く確認されるのは，集落の盛期である9世紀後半の時期にあたる。当遺跡群が含まれる稲敷市清水地域は，和名類聚抄において小野郷に所属していたものと推定される。奈良時代における開発が進み，薬師後遺跡において想定されている有力者層が，平安時代には当遺跡群にも存在していたと考えられる。清水地域に隣接して，「桑山」との地名が現在も残っていることなどから，糸の生産や集積を担った人々とそれを統括する有力者によって栄えた集落ということができよう。火熨斗が出土した第4号大型円形土坑は10世紀前葉に廃絶した遺構である。火熨斗については，後の火熨斗の項で詳しく述べたい。また，第3号大型円形土坑からは馬骨が出土している。当時代には信太郡内に「信太馬牧」が設置されており，当遺跡から西に1kmほどの小野付近に所在していたと想定されている[12]。当遺跡群の北西500mほどに「駒塚」という地名も残されており，当遺跡出土の馬骨は，牧との関連を強くうかがわせる。

7　奈良・平安時代における特徴的な遺構や遺物について

(1) 在地産の須恵器について

須恵器の生産地編年をもとに各時期を区分するために，須恵器の産地同定を試みた。胎土の肉眼観察による分類を行った[13]。分類の基準となるものは以下の通りである[14]。

「新治窯跡群Ａ類」 …角をもつ白色粒子（長石）・角をもつ透明粒子（石英）・白雲母とも多量含まれている胎土

「新治窯跡群Ｂ類」 …角をもつ白色粒子（長石）・角をもつ透明粒子（石英）が多量，白雲母が微量含まれるか見られない胎土

「仮称稲敷窯跡群[15] Ａ類」 …小さな白色粒子（長石）・小さな透明粒子（石英）が少量，黒雲母（金雲母）・短い白色針状鉱物（海綿骨針）が微量含まれている胎土

「仮称稲敷窯跡群Ｂ類」 …白色粒子（長石）・透明粒子（石英）が少量，鉄分が噴き出したものと思われる黒色粒子が微量含まれている胎土

なお，10 世紀前葉以降は，新治窯跡群産須恵器はほとんど見られなくなるため，ここでは扱わない。

ア　８世紀前葉

新治窯跡群産須恵器については，永井寄居窯段階，一丁田１・２号窯段階の須恵器群を該期とした。胎土の肉眼観察による分類では，新治Ａ類 13 点，新治Ｂ類８点である。該期における稲敷系須恵器については確認できなかった。

イ　８世紀中葉

新治窯跡群産須恵器については，東城寺寄居前窯Ａ段階及び東城寺窯段階の須恵器群を該期とした。胎土の肉眼観察による分類では，新治Ａ類２点，新治Ｂ類４点である。前期同様，該期における稲敷系須恵器については確認できなかった。

ウ　８世紀後葉

新治窯跡群産須恵器については，東城寺桑木窯段階の須恵器群を該期とした。胎土の肉眼観察による分類では，新治Ｂ類は３点，稲敷Ａ類１点，稲敷Ｂ類１点である。該期から稲敷産須恵器を確認できるようになる。坏の体部下端の調整は，新治産が回転ヘラ削り，稲敷産が手持ちヘラ削りであり，違いが見られる。

エ　９世紀前葉

新治窯跡群産須恵器については，小高村内窯段階の須恵器群を該期とした。胎土の肉眼観察による分類では，新治Ａ類１点，新治Ｂ類２点，稲敷Ａ類３点，稲敷Ｂ類２点である。その他に木葉下産が１点確認されている。坏の底部の切り離し技法は，稲敷Ａ類が手持ちヘラ削りと回転ヘラ削り，稲敷Ｂ類が手持ちヘラ削りである。

オ　９世紀中葉

新治窯跡群産須恵器については，東城寺寄居前窯Ｂ段階及び小野１号窯段階の須恵器群を該期とした。胎土の肉眼観察による分類では，新治Ａ類６点，新治Ｂ類８点，稲敷Ａ類３点，稲敷Ｂ類２点である。坏の体部下端の調整は，新治Ａ類が手持ちヘラ削り，新治Ｂ類が回転ヘラ削り，稲敷Ａ類が回転ヘラ削りと手持ちヘラ削りで，８世紀後葉と共通した特徴とともにやや違いも見られる。

カ　９世紀後葉

新治窯跡群産須恵器については，小野１号窯に後続する段階（Ｘ３段階）の須恵器群を該期とした。胎土の肉眼観察による分類では，新治Ａ類４点，新治Ｂ類８点，稲敷Ａ類８点，稲敷Ｂ類１点である。

その他に木葉下産が1点確認されている。坏の調整は，稲敷A類は体部下端手持ちヘラ削りと底部一方向もしくは多方向のヘラ削りを施している。

以上，胎土の肉眼観察による須恵器の産地同定を試みた。当遺跡群北西に近接する薬師後遺跡では，8世紀前葉から稲敷産の須恵器が出土する一方で，神屋遺跡においては，8世紀後葉からとやや遅れている。また，薬師後遺跡では，9世紀に入ると稲敷産の須恵器が新治産の出土数を上回っているが，神屋遺跡においては新治産の須恵器がやや多いという結果になった。全体の資料数が多くはなかったため，分類や考察には不十分な点があったと思われる。今後の資料の増加による研究の進展を期待したい。

(2) 土玉及び管状土錘について（第457～462図）

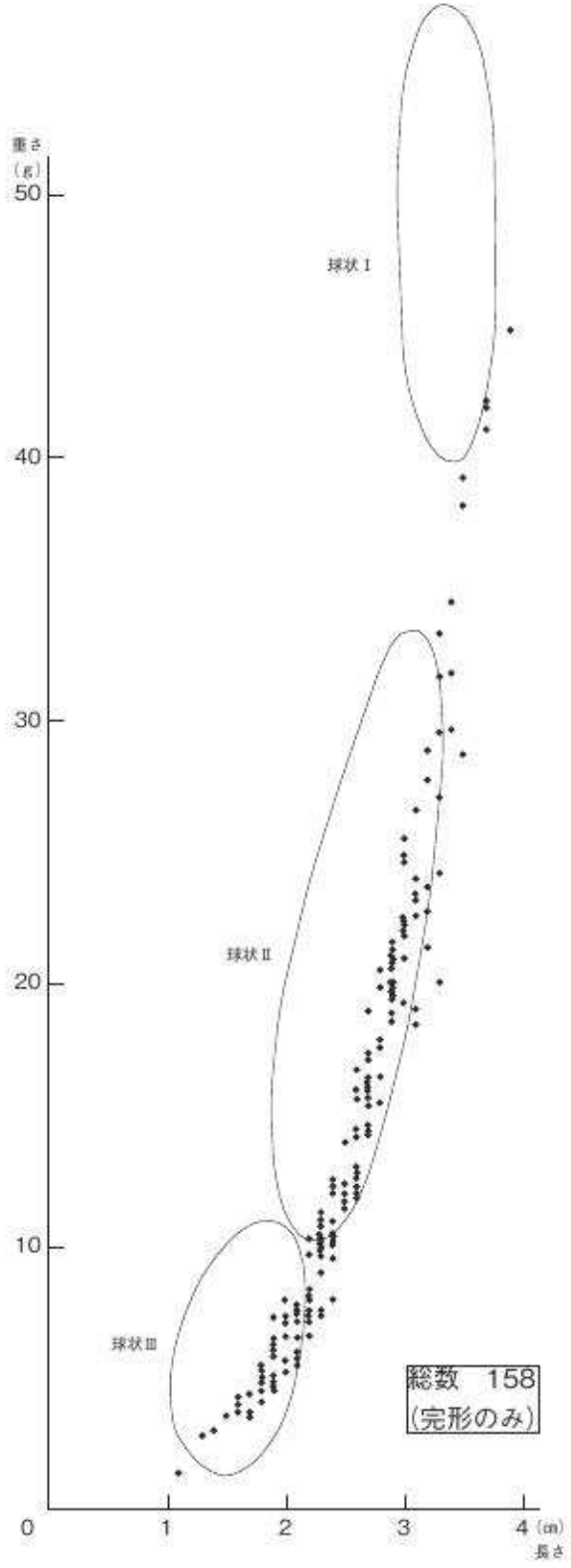
当遺跡群からは3遺跡合わせて土玉685点，管状土錘59点が出土している。土玉については用途が明確でない部分もあるが，本項では限定して土錘として扱うこととする。これまでの資料と当遺跡群出土の土錘について，若干の比較を行いたい。

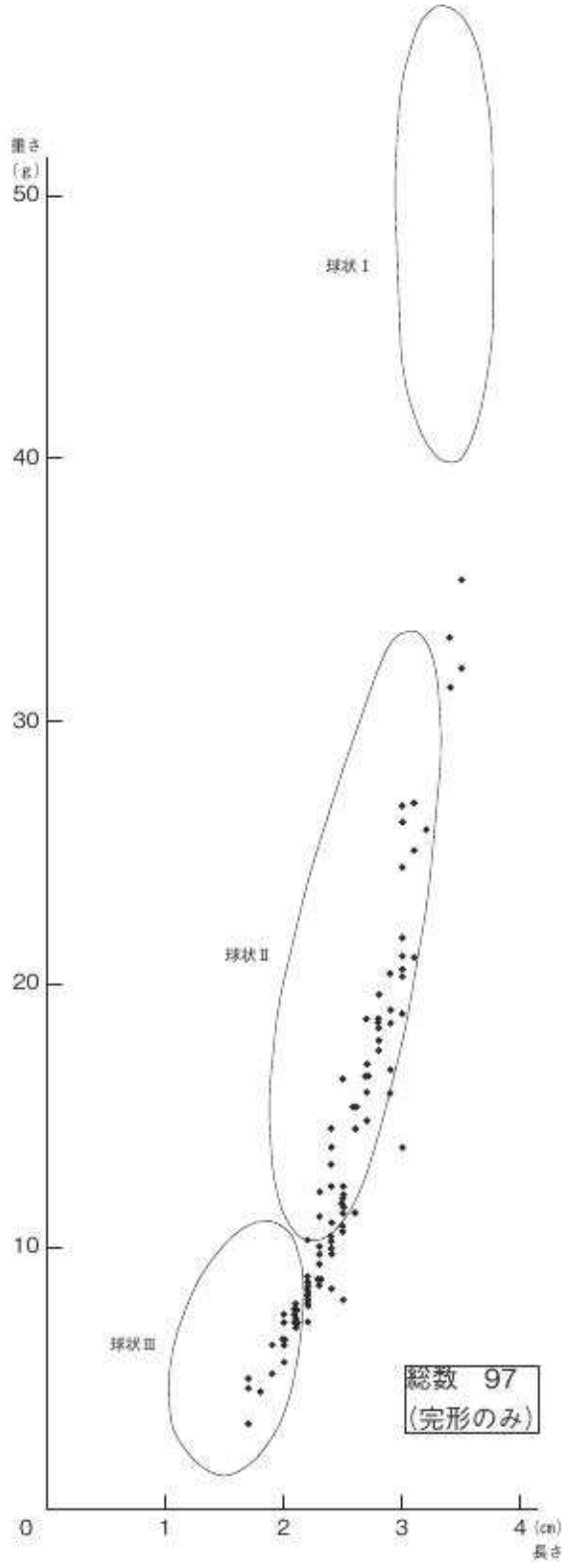
考古資料の土錘は，その形態から「管状土錘」と「球状土錘」に大別される。佐々木義則氏は，茨城県内出土の奈良･平安時代における管状土錘と球状土錘について，長さ（大きさ）と重量の分布域を調べ，「大型管状土錘」「管状ⅠA類」「管状ⅠB類」「管状ⅠC類」「管状Ⅱ類」「管状Ⅲ類」「細形管状Ⅰ類」「細形管状Ⅱ類」「球状Ⅰ類」「球状Ⅱ類」「球状Ⅲ類」の11類型に分類している[16]。また，早川麗司氏は，佐々木氏の類型に属さない資料から，新たに「管状ⅡA類」を設定している[17]。以上の管状9類型，球状3類型から当遺跡群の土錘について比較したい。なお，作成した分類表については，土玉･管状土錘ともに，神屋遺跡の古墳・奈良・平安の各時期が決定できる遺構から出土した完形品を集計しており，遺構外から出土したものについては集計から除外している。また，管状土錘については完形の出土資料が少ないことから，欠損しているものについても，参考のため分類表に加えている。

まず土玉については，古墳・奈良・平安のいずれの時代においても，その大半が球状Ⅱ・Ⅲ類に分類されている。重量が40ｇを超える球状Ⅰ類については，古墳時代の4点が類型の枠に近く，それに分類されるほかは，平安時代に1点を確認するのみである。次に管状土錘については，古墳・平安の両時代において管状ⅠA～ⅠC類が半数以上を占めていることがわかる。しかも当遺跡出土の資料は欠損したものが多く，長さ・重量の数値ともに増加する可能性があるため，いずれの時代でも管状Ⅱ・Ⅲ類に近い欠損のものがⅠ類に分類されることも想定される。

これらの分類表の結果から，古墳・奈良・平安の各時代での集計に顕著な違いは見られないということである。管状・球状ともにⅠ類はマスやコイなどといった比較的大形の魚を捕らえる曳網に使用し，同じくⅡ・Ⅲ類はそれより小形の魚を捕らえる刺網に使用したとされている。神屋遺跡においては古墳時代から平安時代をとおして，管状土錘を用いた漁法は主として曳網漁で，大形の魚を捕らえていたと考えることができる。その一方で，土玉については，全体の集計数から比較すると，Ⅰ類に分類されるものはごくわずかで，ほとんどがⅡ・Ⅲ類に分類されることから，当遺跡群周辺で土玉を用いた漁法は主に刺網漁で，穏やかな内海等での漁に適していたと考えることができる。

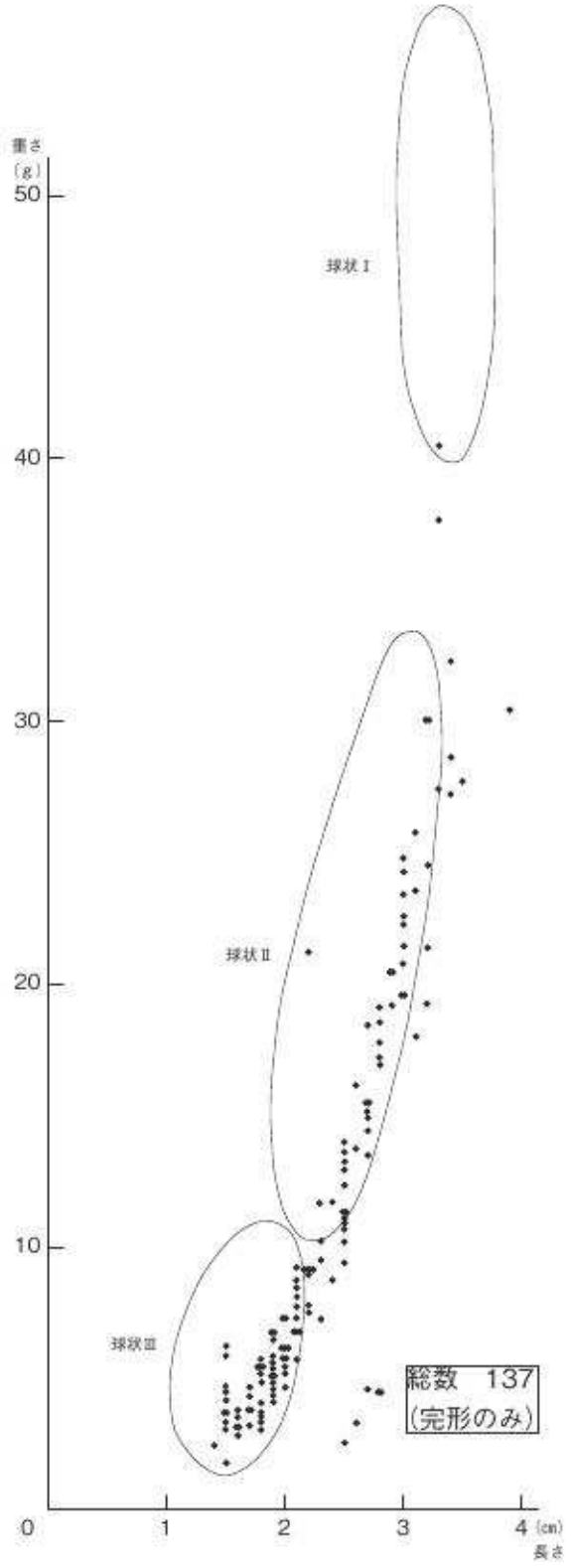
神屋遺跡出土の土玉と管状土錘から，漁労具の錘としての分類と用途の想定を試みた。古墳時代から平安時代の数百年間，土玉に類型の変化が見られなかったこと，管状土錘と比較して土玉の出土が相当多いこと，さらに大半の孔周辺には摩滅した痕が見られず，錘の予備として大量に準備していた理由など，いくつかの疑問点は残る。今回，一つのデータとして提示することで，今後の研究の判断材料となれば幸いである。



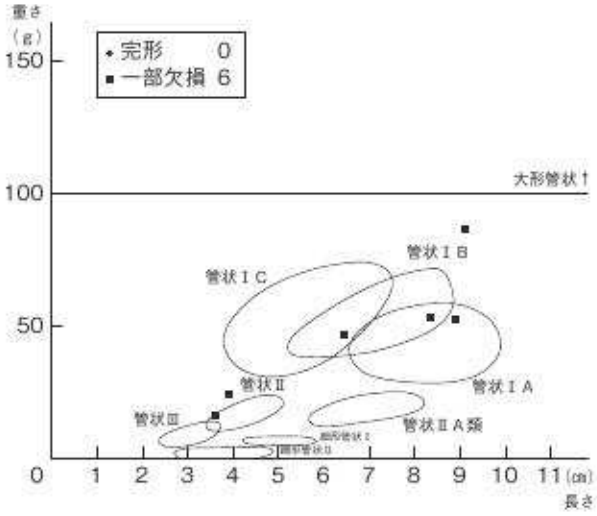


第 457 図　神屋遺跡土玉分類表（古墳時代）　　**第 458 図**　神屋遺跡土玉分類表(奈良時代)

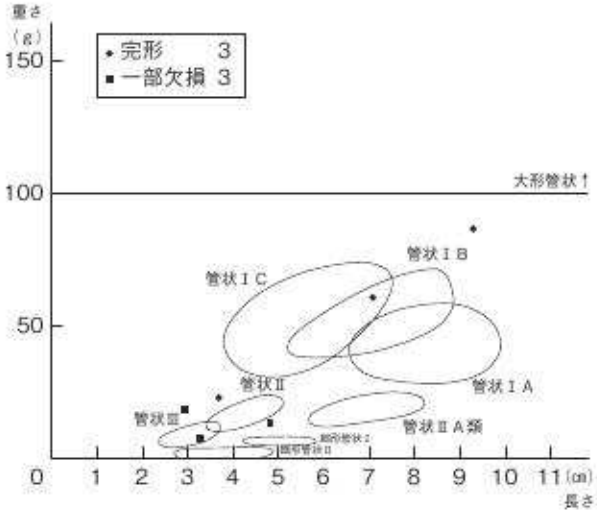
※第 457 ～ 462 図中の類型の枠は，佐々木・早川両氏が分類した資料[18]から転載している。



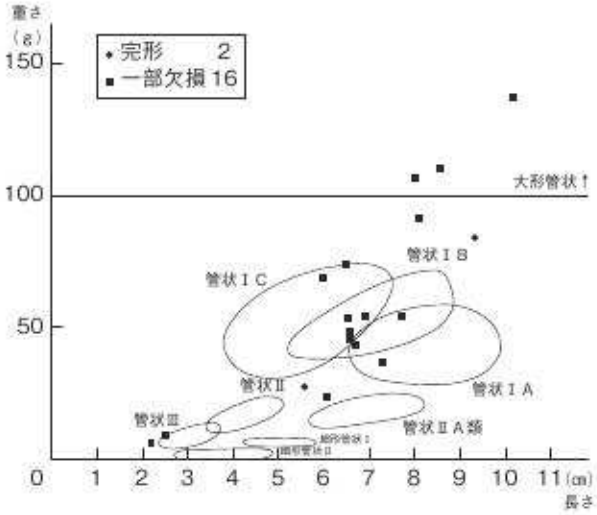
第459図　神屋遺跡土玉分類表(平安時代)



第460図　神屋遺跡管状土錘分類表(古墳時代)



第461図　神屋遺跡管状土錘分類表(奈良時代)



第462図　神屋遺跡管状土錘分類表(平安時代)

(3) 文字資料について

今回の調査によって神屋遺跡で確認できた文字資料は109点である。遺構別では，竪穴建物跡からの出土が65点，掘立柱建物跡から2点，大型円形土坑から7点，土坑から10点で，すべて平安時代である。このほかに，遺構外から25点確認している。また，神屋南遺跡では7点確認し，すべて遺物包含層からの出土である。

種別では，墨書107点，刻書6点，箆書2点，墨書及び箆書が1点である。確認できた墨書は，「西居」「居一」「居二」「西」「居」が28点，「田」「田口」「□田」が23点，「一」「－」が11点，「二」「＝」が4点，「冨福」「大」「家」「□家」「口代」「口」「志」「仁」「高罡」「＃」「中□」が各1点である。確認できた刻書および箆書は，「×」が3点，「田」が2点，「大刀自」「＃」「𠂉𠂉」，「⨯𠂉」が各1点である。

墨書内容の分類について平川南氏は，①官司・官職名，②人名，③地名，④吉祥句，⑤土器の器種，⑥方角，⑦数字，⑧習書などがあるとしている[19]。これに照らせば，最も出土点数が多かった「西居」「居一」「居二」「西」「居」については，地名，方角，数字が当てはまり，建物の場所や位置を指し示しているものとみられる。「西」が本調査区の西側を指しているのか，東側からみた場所が本調査区なのかは明確でない。

一方，出土点数が少ない釈文の「大」「家」「□家」「中□」「志」であるが，地名を表す文字を想定すれば，この地，小野郷と同じ信太郡内に所在する「大野郷」「中家郷」「志万郷」に所属する器であることを示すものと考えることができる。また，出土点数が多い「田」「□田」は，農耕や稲作を示す文字の可能性もあるが，同じく信太郡内の「高田郷」に所属する器であることを示すものと考えることができる。これらの墨書土器の出土は，律令期における，近隣の郷との多角的な交流を示唆するものといえる。

刻書の「大刀自」は，土製紡錘車に刻まれていたものである。「刀自」は，女性の主人やリーダーといった意味で使用される[20]。それに「大」が冠されていることを考えると，一定の集団を束ねる地位にある女性か，役人など権力者である女性，もしくは権力者を夫にもつ女性を指したものと思われる。その敬称が紡錘車に刻まれていることから，糸や布の生産や集積に影響を及ぼしていた人物が所持していた可能

表22　神屋遺跡出土文字資料一覧表

番号	図版	遺物番号	釈　文	種　別	材　質	器　種	部位・方向	遺　構	時　期	備　考
1	232	DP359	×。	刻書	土製品	紡錘車	上部	SI 5	9C後	
2	249	302	富福	墨書	土師器	椀	体部・左	SI17	9C後	
3	255	314	田。	墨書	土師器	坏	底部	SI32	9C後	
4	255	315	田	刻書	土師器	坏	体部・正位	SI32	9C後	
5	255	316	田	墨書	土師器	坏	体部・正位	SI32	9C後	
6	255	317	田	墨書	土師器	坏	体部・正位	SI32	9C後	
7	255	318	□	墨書	土師器	坏	体部・不明	SI32	9C後	
8	255	319	田。	墨書	土師器	坏	体部・正位	SI32	9C後	
9	255	320	田。	墨書	土師器	坏	底部	SI32	9C後	
10	255	322	西居	墨書	土師器	高台付椀	底部	SI32	9C後	
11	265	340	居二。	墨書	土師器	坏	体部・左	SI44	9C後	
12	265	341	□	墨書	土師器	坏	体部・不明	SI44	9C後	
13	265	342	－	墨書	土師器	坏	体部・不明	SI44	9C後	
14	265	343	□	墨書	土師器	坏	体部・不明	SI44	9C後	
15	266	344	－	墨書	土師器	坏	体部・不明	SI44	9C後	
16	265	345	－	墨書	土師器	坏	体部・正位	SI44	9C後	

番号	図版	遺物番号	釈　文	種　別	材　質	器　種	部　位・方　向	遺　構	時　期	備　考
17	265	346	−	墨書	土師器	坏	体部・正位	SI44	9C後	
18	265	347	□	墨書	土師器	坏	体部・不明	SI44	9C後	
19	265	348	「大。」	墨書	土師器	坏	底部	SI44	9C後	
20	265	349	−	墨書	土師器	坏	体部・正位	SI44	9C後	
21	265	350	一。	墨書	土師器	坏	底部	SI44	9C後	
22	265	351	□	墨書	土師器	坏	底部	SI44	9C後	
23	265	354	□	墨書	土師器	椀	体部・不明	SI44	9C後	
24	265	355	居一	墨書	土師器	椀	体部・左	SI44	9C後	
25	266	358	「□家」	墨書	土師器	皿	体部・左	SI44	9C後	
26	273	389	□	墨書	土師器	坏	体部・不明	SI51	9C後	
27	275	393	居二	墨書	土師器	坏	体部・左	SI52	9C後	
28	275	395	田。	墨書	土師器	坏	体部・不明	SI52	9C後	
29	275	396	田。	墨書	土師器	坏	体部・正位	SI52	9C後	
30	275	397	□	墨書	土師器	坏	底部	SI52	9C後	
31	275	398	□	墨書	土師器	坏	底部	SI52	9C後	
32	278	405	居。	墨書	須恵器	坏	底部	SI58	9C前	
33	285	415	西居	墨書	土師器	坏	底部	SI65	9C後	
34	285	416	×／二。	箆書／墨書	土師器	坏	底部	SI65	9C後	
35	285	417	居二	墨書	土師器	坏	底部	SI65	9C後	
36	285	418	西。	墨書	土師器	坏	底部	SI65	9C後	
37	285	419	□	墨書	須恵器	坏	体部・不明	SI65	9C前	
38	285	420	居。	墨書	土師器	高台付椀	底部	SI65	9C後	
39	289	431	田。	墨書	土師器	坏	体部・不明	SI66	9C中	
40	292	DP425	大刀自	箆書	土製品	紡錘車	下部	SI67	9C中	
41	297	452	口代。	墨書	土師器	坏	底部	SI79	9C後	
42	297	454	口。	墨書	土師器	坏	体部・不明	SI79	9C後	
43	297	455	田	墨書	土師器	坏	底部	SI79	9C後	
44	300	461	□	墨書	土師器	坏	体部・不明	SI81	9C後	
45	303	464	居二	墨書	土師器	坏	底部	SI82	9C前	
46	303	465	居二	墨書	土師器	坏	底部	SI82	9C前	
47	303	467	居一。	墨書	土師器	坏	底部	SI82	9C前	
48	303	468	田	墨書	土師器	坏	体部・正位	SI82	9C前	
49	303	469	一。	墨書	土師器	坏	体部・不明	SI82	9C前	
50	303	470	一。	墨書	土師器	坏	底部	SI82	9C前	
51	303	471	□	墨書	土師器	坏	体部・不明	SI82	9C前	
52	303	472	二。	墨書	土師器	坏	底部	SI82	9C前	
53	303	475	居	墨書	土師器	高台付坏	底部	SI82	9C前	
54	305	DP447	#	刺書	土製品	紡錘車	側面	SI82	9C前	
55	307	484	志。	墨書	須恵器	坏	底部	SI83	9C前	
56	312	496	一。	墨書	土師器	坏	体部・左	SI87	9C中	
57	312	497	□	墨書	土師器	皿	体部・不明	SI87	9C中	
58	318	508	居。	墨書	土師器	坏	底部	SI98	9C後	
59	318	515	田	墨書	土師器	皿	体部・正位	SI98	9C後	
60	320	521	田	刺書	土師器	皿	体部・正位	SI104	9C前	
61	329	537	□	墨書	土師器	坏	体部・不明	SI115	9C中	
62	329	538	□	墨書	土師器	坏	体部・不明	SI115	9C中	
63	343	559	田。	墨書	土師器	坏	底部	SI129	9C後	

番号	図版	遺物番号	釈　文	種別	材質	器種	部位・方向	遺構	時期	備考
64	343	560	□	墨書	土師器	坏	底部	SI129	9C後	
65	343	561	西居	墨書	土師器	坏	底部	SI129	9C後	
66	359	580	居二	墨書	土師器	坏	底部	SB5	9C前	
67	362	584	宀	墨書	土師器	坏	底部	SB7	10C前	
68	371	594	□	墨書	土師器	坏	体部・不明	SO1	10C前	
69	374	605	□	墨書	土師器	坏	体部・不明	SO2	10C前	
70	379	622	□	墨書	土師器	坏	体部・不明	SO3	10C中	
71	379	623	□	墨書	土師器	坏	体部・不明	SO3	10C中	
72	382	628	□	墨書	土師器	坏	体部・不明	SO4	10C前	
73	382	629	□	墨書	土師器	坏	体部・不明	SO4	10C前	
74	382	630	仁	墨書	土師器	坏	体部・正位	SO4	10C前	
75	386	636	×	刻書	土師器	坏	体部内面	SK56	9C代	
76	387	637	田口	墨書	土師器	高台付椀	底部	SK78	9C後	
77	389	639	□	墨書	土師器	坏	体部・不明	SK159	9C後	
78	390	640	西居	墨書	土師器	坏	底部	SK299	9C代	
79	396	650	高里	墨書	土師器	坏	体部・正位	SK468	10C前	
80	399	659	□	墨書	土師器	坏	体部・不明	SK563	10C中	
81	399	660	□	墨書	土師器	坏	体部・不明	SK563	10C中	
82	400	662	居二	墨書	土師器	皿	体部・右	SK617	9C後	
83	401	663	田	墨書	土師器	坏	体部・逆位	SK621	9C後	
84	404	666	×	刻書	土師器	高台付椀	体部内面	SK679	10C前	
85	435	684	田	墨書	土師器	坏	体部・正位	表土	－	遺構外
86	435	685	田	墨書	土師器	坏	体部・正位	SI112	－	遺構外
87	435	686	西居	墨書	土師器	坏	底部	表土	－	遺構外
88	435	687	居二	墨書	土師器	坏	体部・左	表土	－	遺構外
89	435	688	井	墨書	土師器	坏	体部・右	表土	－	遺構外
90	435	689	一	墨書	土師器	坏	体部・正位	SI112	－	遺構外
91	435	690	田	墨書	土師器	坏	体部・正位	表土	－	遺構外
92	435	691	□	墨書	土師器	坏	体部・不明	SK709	－	遺構外
93	435	692	田	墨書	土師器	坏	体部・正位	表土	－	遺構外
94	435	693	一	墨書	土師器	坏	体部・正位	SI46	－	遺構外
95	435	694	□田	墨書	土師器	坏	体部・正位	表土	－	遺構外
96	435	695	田	墨書	土師器	坏	体部・正位	表土	－	遺構外
97	435	696	□	墨書	土師器	坏	体部内面	表土	－	遺構外
98	435	697	田	墨書	土師器	坏	体部・正位	表土	－	遺構外
99	435	698	□	墨書	土師器	坏	体部・不明	表土	－	遺構外
100	435	699	居	墨書	土師器	坏	体部・右	SK316	－	遺構外
101	435	700	二	墨書	土師器	坏	底部	表土	－	遺構外
102	435	701	西	墨書	土師器	坏	底部	表土	－	遺構外
103	435	702	居	墨書	土師器	坏	底部	表土	－	遺構外
104	435	703	□	墨書	土師器	坏	体部・不明	SK463	－	遺構外
105	435	704	□	墨書	土師器	坏	底部	表土	－	遺構外
106	435	705	□	墨書	土師器	坏	底部	表土	－	遺構外
107	436	707	中□	墨書	土師器	高台付坏	底部	表土	－	遺構外
108	436	708	居	墨書	土師器	高台付坏	底部	表土	－	遺構外
109	436	710	田	墨書	土師器	皿	体部・正位	表土	－	遺構外

表 23　神屋南遺跡出土文字資料一覧表

番号	図版	遺物番号	釈　文	種　別	材　質	器　種	部　位・方　向	遺　構	時　期	備　考
1	443	67	二。	墨書	土師器	坏	体部・正位	遺物包含層	平安。	
2	443	68	田	墨書	土師器	坏	底部	遺物包含層	平安。	
3	443	69	居	墨書	土師器	坏	底部	遺物包含層	平安。	
4	444	70	家	墨書	土師器	坏	底部	遺物包含層	平安。	
5	443	71	居	墨書	土師器	坏	底部	遺物包含層	平安。	
6	444	73	西	墨書	土師器	高台付坏	底部	遺物包含層	平安。	
7	444	74	西□	墨書	土師器	高台付坏	底部	遺物包含層	平安。	

性が高い。さらにこの紡錘車には赤彩や黒色処理を施してあり，単に糸を紡ぐためだけに使用するならば，このような外面の処理は不要なものである。このようなことから，この紡錘車は実用品としてではなく，所有者の威信材として用いられていた可能性が高い。なお，「大刀自」については，先述の地名を記した墨書土器と同様に，「大」が「大野郷」を表したとすれば，大野郷の女性豪族と解することも考えられる。周辺地域における今後の調査を期待したい。

墨書と刻書で１点ずつ確認している「＃」は，漢字の「井」ではなく記号とみる説もある。道教には悪霊を祓うとされる呪符が，縦４本・横５本の格子状の記号で表される。「＃」はその縦四横五を省略した記号と解すことができる。また，刻書および箆書で「×」を３点確認しており，「×」は「＃」に対応するものとして悪霊の封じ込めを意味すると考えられる。さらに，土製紡錘車１点には「＃」の刻書がされていたことから，養蚕を行う集団が，生産向上を願う「機織」祭祀に伴って刻字されたと考えられる[21]。黒澤秀雄氏は「刻書紡錘車の出土遺跡については，一般の集落とは異なること，刻書の釈文から祭祀的意味合いが深いこと等の傾向が見られることが指摘できる[22]。」と述べていることから，これらは祓いや清めといった儀礼的行為に使用されたものとみられる。

(4)　火熨斗について（第 463 図）

火熨斗は柄杓のような形をした金属器で，炭を入れる火皿と持ち手の柄からなる。電気式や炭火のアイロンが普及する以前に近代まで使用されていた古い形のアイロンである。火皿に入れた炭火の熱を利用して，布や衣装の皺を伸ばす，折目や襞をつける，刺繍の仕上げをするなどといった，洗濯・裁縫用具の一つとして利用されていた[23]。

神屋遺跡において出土した火熨斗は，柄の木質部のみ腐朽した，金属部分はほぼ完形品である。瀧瀬芳之氏が分類した４類型[24]における「鋲留式」で，火皿と柄を別々に製作し，それらを鋲状の金具で接続したものである。当遺跡の火熨斗は，接続部以外にも鋲状の金具痕が見られることから，当初使用していた柄が外れたか折損したことにより，接続位置を変えて柄を付け直したものとみられる。

火熨斗が出土した調査Ｂ区の第４号大型円形土坑は，共伴する土器から 10 世紀前葉に比定される。現時点では，平安時代における火熨斗の出土例はこれまで全国で 10 例あり，当遺跡の火熨斗が 11 例目，本県では初出となる。これまでに平安時代の火熨斗が確認された遺跡は，報告された順に，長野県箕輪町の木下北城遺跡[25]，京都府京都市の平安京弁天島経塚群[26]，栃木県上三川町の多功南原遺跡[27]，神奈川県平塚市の神明久保遺跡[28]，東京都日野市の落川遺跡[29]，長野県御代田町の川原田遺跡[30]，埼玉県和光市の花ノ木遺跡[31]，長野県塩尻市の和手遺跡[32]，埼玉県上里町の中堀遺跡[33]，長野県長野市の南宮遺跡[34]の 10 遺跡である。各遺跡における火熨斗の出土状況や遺跡の性格から，当遺跡群との共通点を明らかにしつつ，当遺跡群の性格に迫っていきたい。

① 長野県箕輪町　木下北城遺跡
② 京都府京都市　平安京弁天島経塚群
③ 栃木県上三川町　多功南原遺跡
④ 神奈川県平塚市　神明久保遺跡
⑤ 東京都日野市　落川遺跡
⑥ 長野県御代田町　川原田遺跡
⑦ 埼玉県和光市　花ノ木遺跡
⑧ 長野県塩尻市　和手遺跡
⑨ 埼玉県上里町　中堀遺跡
⑩ 長野県長野市　南宮遺跡
⑪ 茨城県稲敷市　神屋遺跡

※数字は報告書が刊行された順

第 463 図　平安時代における火熨斗の出土例（11 例）

木下北城遺跡では，第22号住居址の北壁床面近くから逆位で出土している。火皿は95％以上残存[35]しており，柄は装着部から欠失している。共伴する遺物は土師器椀・鉢・甕，須恵器椀・瓶・甕，灰釉陶器瓶などである。時期は11世紀前半を想定している。ただし，本跡については床面が平坦でないこと，竈がないこと，大小の不整ピットがあることなどから，住居として調査したものの，祭祀遺構の可能性があることを指摘している。

平安京弁天島経塚群では，実測図等の記録がないことから，ここでは割愛する。

多功南原遺跡では，46号住居址の北東壁際から出土している。火皿の口縁部が欠損した60％程度の残存である。共伴する遺物は土師器坏・台付甕，須恵器坏・高台付坏・盤などである。当遺跡は規模が大きく，墨書土器，紡錘車，鉄製品が多く出土している。8世紀後葉から10世紀初頭を中心に栄えた，官衙的性格を有する集落跡としている。

神明久保遺跡では，C－5号竪穴住居址から出土している。火皿のみ60％程度の残存である。共伴する土器は土師器坏・甕，須恵器坏・壺・転用硯，灰釉陶器椀・壺などである。出土土器や重複関係から，本跡は9世紀代と考えられている。当遺跡は土錘・紡錘車・刀子・釘・鎌・墨書土器などの出土も少なくないものの，とりわけ鉄滓の出土量が多いことから，鍛冶工房の可能性を示唆している。

落川遺跡では，四面廂をもつ総柱建物である第124号掘立柱建物址の柱穴内上部から出土している。火皿は95％以上残存しており，柄は装着部から欠失している。時期は11～12世紀代と考えられており，他の遺構からは円面硯，墨書土器，紡錘車などが出土している。

川原田遺跡では，H－4号住居址の西壁際床面から出土している。火皿のみ60％程度の残存である。共伴する土器は土師器坏・甕，須恵器甕などで，10世紀初頭に位置づけられている。他の遺構からは，墨書土器や転用硯が出土しており，平安時代の集落内寺院と推定されている。

花ノ木遺跡では，第7号住居跡の壁際から正位の状態で出土し，内部に藁状の炭化物が多量に付着していた。火皿70％程度の残存で，柄は装着部を除いて欠損している。共伴する主な遺物は須恵器短頸壺・長頸瓶・鉄製紡錘車・鍵などで，9世紀後葉に比定されている。当遺跡は地域の拠点集落とみられ，第7号住居跡は当遺跡の中でも中心的な住居と考えられている。

中堀遺跡では，表土から出土している。火皿の口縁5％の残存で，穿孔があるため装着部と思われる。他の遺構からは漆紙文書，墨書土器，灰釉陶器，鉄製紡錘車など，膨大な数の遺物が出土しており，9世紀後葉を中心とした，勅旨田経営の拠点集落と寺院の可能性を指摘している。

和手遺跡では，106号住居址の北壁寄りの炭化した板材の上から出土している。火皿・柄ともに90％ほど残存し，共伴する主な遺物は灰釉陶器，緑釉陶器，青磁などで，9世紀後葉に比定されている。他の遺構からも青磁・白磁・墨書土器などが出土しており，平安時代の拠点集落として位置付けられている。

南宮遺跡では，B区115号住居址から出土している。火皿70％程度の残存で，柄は装着部から欠失している。時期は10世紀後葉と考えられている。他の遺構からは巡方，銅鏡，異形緑釉陶器などが出土し，10世紀前葉から中葉に盛期を迎える，郷の中心集落ととらえられている。

各遺跡の様相を集約すると，出土遺物では，墨書土器が5遺跡から，灰釉陶器・紡錘車（土製・鉄製）が4遺跡から，円面硯･転用硯が3遺跡からそれぞれ出土している。これらの他に緑釉陶器，白磁，青磁，巡方，銅鏡，漆紙文書など，特徴的な遺物の出土は多岐にわたっている。遺跡の性格は，集落内寺院，官衙関連施設，鍛冶工房等があるが，地域の中心的な集落との位置付けがなされている遺跡が多い。神屋遺跡についても紡錘車や墨書土器，円面硯などと共通する出土遺物は多い。これらの類例から，当遺跡は糸

の生産と集積に関わる豪族が居住し，近隣の薬師後遺跡と並び，小野郷の中心的な集落の一つであったと考えられる。

火熨斗が出土した遺構については，表土と掘立柱建物跡からが各１例，ほか７例は竪穴建物跡からの出土とされている。神屋遺跡については大型円形土坑からの出土であること，残存率が非常に高いこと（火皿はほぼ100%，柄も90%以上[9]）が他の遺跡との相違点として挙げられる。

各遺跡の火熨斗の，底部の使用痕の有無について比較していく。底部が残存していない，または底部についての記述がないのは５遺跡である。火皿内部に炭化物の付着を明記しているのは，神明久保遺跡・花ノ本遺跡の２遺跡のみである。残りの３遺跡は，火皿内部に残滓等は見られない，底部表面が極めて滑らかに磨かれている，香炉の可能性を含む等，火熨斗としての使用痕が認められないことを示唆している。

当遺跡の火熨斗については，出土当時に付着していた炭化物は，保存処理での分析の結果，使用による付着物ではなく，埋め戻しの堆積土に混入していたものであった。底面の摩滅や荒れなども認められていない。しかしながら柄が付け直されていることから，実用品として繰り返し使用されていたことが想定できるとともに，糸の生産を管理する豪族の威信材であった可能性がある。

火熨斗の科学的調査については，落川遺跡，川原田遺跡，和手遺跡で実施されている。いずれも鉛同位体比及び蛍光X線分析法による測定を行っており，その結果，機器の違いを考慮してもよく似た化学組成を示し，日本産の鉛が利用されていると推論されている。また，平安時代の同材料によく見られる値を示したことから，日本産の原料を利用していると結論づけている[36]。当遺跡も３遺跡同様，日本産の原料であるとされており，詳細については付章を参照されたい。

(5) 大型円形土坑について

神屋遺跡において確認した４基の大型円形土坑について，若干の考察を加えていきたい。

まず，調査D区において確認した，第１～３号大型円形土坑についてである。いずれも平面形が径2.6～4.4ｍの大型の円形または楕円形で，確認面から円筒状に掘り込まれていたことから，井戸を想定して調査を行った。掘り込みは1.6ｍ弱から２ｍほどで底面に達し，湧水する深さではないことや，底面が平坦かつ硬く締まっていることなどから，井戸跡ではなく大型円形土坑とした。

次に，出土遺物から遺構の性格について考察する。３基ともに出土遺物は極めて多く，第１号大型円形土坑では2,000点を超える。２次焼成を受けた痕が見られる土師器甕の破片が，底面から覆土上層の広い範囲に出土しており，別の場所で破砕され火熱を受けた後で投棄されている。また，本跡からは人面墨書土器（土師器鉢）が出土している。人面墨書土器については，畿内では厄払いのため，自分の息を土器に吹き込み，紙で蓋をして水に流す祭祀のための道具として使われている。平川氏は，「人面墨書土器は畿内中心にみたあり方だけでなく，在地においては多様な祭祀形態の中で活用されたといえるのではないだろうか[37]。」と述べており，当遺跡は台地上にあることから，本跡において，水に流す行為を土坑に投げ込む行為に代え，除災や延命などの祭祀が行われたものと考えられる。

第２号大型円形土坑の出土遺物は1,000点を超える。底面で炭化米及び火熱を受けた範囲を確認している。底面から出土した土器に２次焼成を受けた痕が見られないことから，米が焼かれた後で，土器が投げ込まれているとみられる。また，本跡から須恵器の大甕が２個体出土している。１個体は多くの破片から体部の大部分が接合したものの，接合関係にある口縁部から頸部にかけての破片は見つからなかった。もう１個体については，口縁部から頸部の大部分が接合したものの，接合関係にある体部の破片は見つからなかった。さらに，これら大甕の破片に２次焼成痕が見られること，出土位置が底面から覆土中層など，

層位が異なっていることなどから，２個体の大甕は，別の場所で破砕され火熱を受けてから，本跡に投棄されたとみられる。幸田台遺跡では，大型の土坑から頸部を欠損した状態で灰釉陶器浄瓶が出土し，祭祀行為の可能性が指摘されている[38]。本跡においても，土器の一部を打ち欠いて投棄する行為や，火を使った行為が認められることなどから，何らかの祭祀が行われたと考えられる。

第３号大型円形土坑では，その出土遺物は実に5,000点を超える。本跡の特徴は，大多数の遺物が覆土中層から出土していることである。そこには炭化材約６kgや馬骨も含まれていることから，下層が埋め戻された段階で火を放ち，その後土器や馬などを投棄して埋め戻す際に祭祀的行為が行われたとみられる。

一方，これまでの３基と比較すると，第４号大型円形土坑は様相が異なる。平面形は３×2.6ｍの楕円形で他の３基と大差ないものの，その深さは95cmと，1.6～２ｍの３基と比較すると浅い。また出土遺物は約700点と，1,000～5,000点の３基と比較すると多くはない。本跡は調査Ｂ区において確認しており，Ｄ区で確認した他の大型円形土坑３基とはやや距離が離れる。３基を構築した集団とは別の集団によって本跡が構築されているため，確認した場所や規模がやや異なるものと想定できる。

本跡が機能していた10世紀前葉は，９世紀代からの天変地異や俘囚の反乱などから東国の治安が悪化していた時期にあたり，下総国を中心として関東一円に勢力を広げた，平将門の一連の動きと時期を同じくしている[39]。当時の不安定な情勢も影響してか，当集落は10世紀に竪穴建物が激減し，それにより種々の生産活動が困難な状況になったと思われる。本跡が下層まで埋め戻されたところに，役割を終えた火熨斗が置かれ，中層から上層が埋め戻されている。平安時代における他の10例よりも本跡の火熨斗の残存率が高いのは，火熨斗が硬く締まっていない覆土に置かれたことと，火熨斗が袋でなく木箱などに入れて埋め戻されたためと想定でき，それにより火熨斗の変形を防ぐとともに腐朽を遅らせた可能性がある。

火熨斗を埋め戻した覆土中層及び上層からは多くの遺物が出土している。中でも緑釉陶器小瓶と円筒形土製品は，どちらも特徴的な遺物である。いずれも覆土中層のやや離れた位置から出土した２点ないし３点の破片が接合しており，出土状況から，本跡以外の場所で破砕されたものとみられる。火熨斗の残存状況が良好であることから，本跡は廃棄土坑ではなく，遺物が投げ込まれる際に祭祀的行為が行われたと考えるのがより妥当であろう。ただ今回の調査において，火熨斗の周囲から木箱の痕跡は確認できず，あくまで推測の域を出ない。今後の火熨斗に関わる類例の増加が待たれるところである。

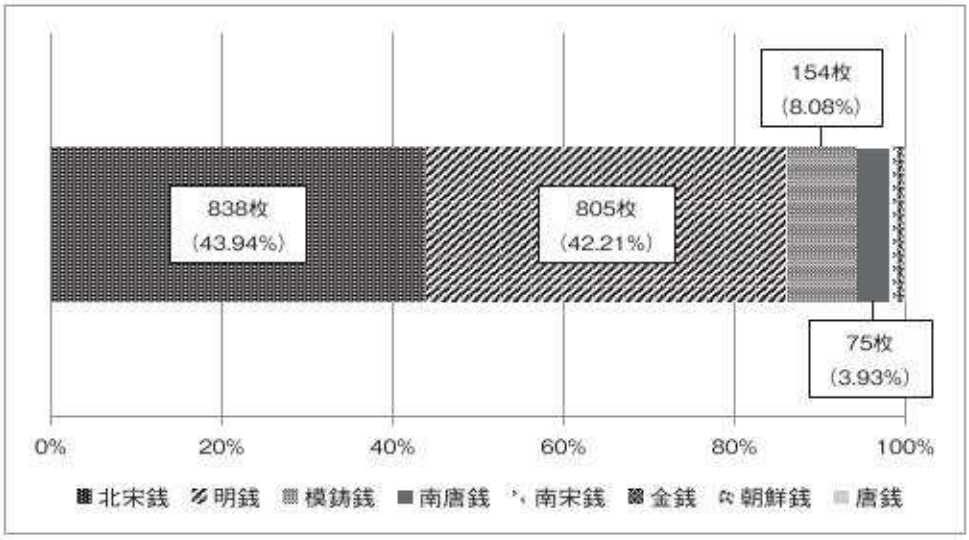
８　鎌倉・室町時代

(1)　清水古墳群（第464～466図）

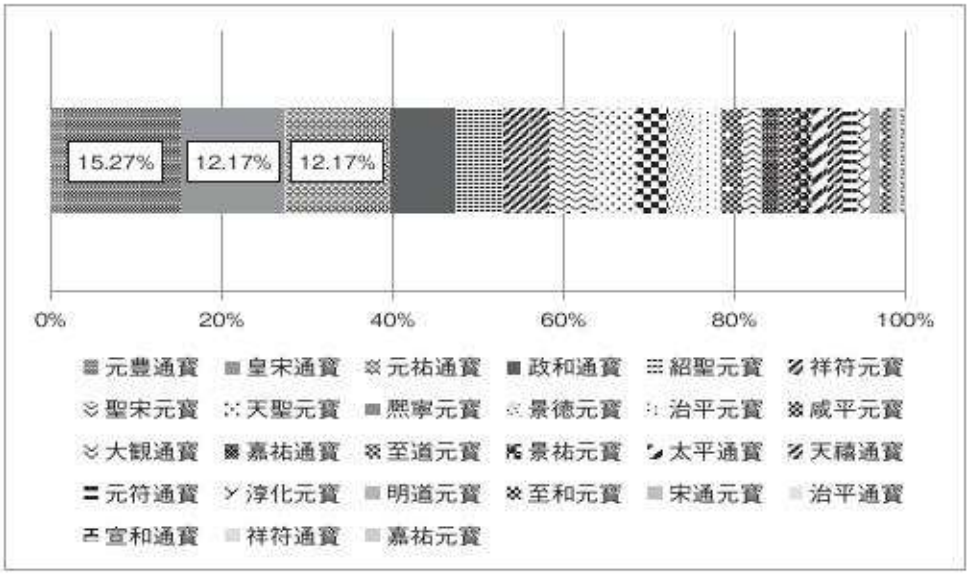
清水古墳群において鎌倉・室町時代の遺構は，地下式坑４基，土坑１基を確認した。ここでは，第１号地下式坑から出土した緡銭について若干の考察を加えることとする。

第１号地下式坑から出土した銭貨のうち，最古銭は唐の乾元重寶（初鋳758年），最新銭は明の宣徳通寶（初鋳1433年）である。緡銭の主な組成は北宋銭が中心であり，全体の43.94％を占め，次いで，明銭が42.21％であった。そのほかは，模鋳銭8.08％，南唐銭が3.93％，南宋銭が0.89％，金銭が0.42％，朝鮮銭が0.26％，唐銭が0.16％の順である（第464図）。

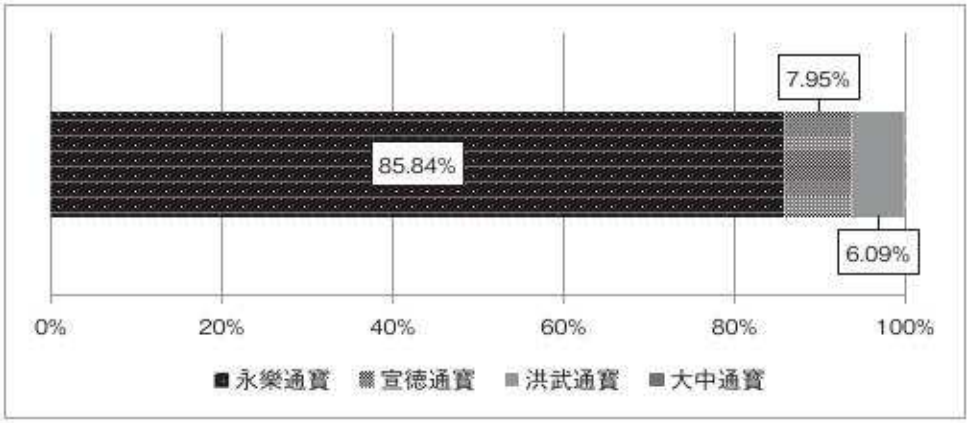
北宋銭の銭種別の比率（第465図）は，元豊通寶15.27％，皇宋通寶12.17％，元祐通寶12.17％，政和通寶7.76％，紹聖元寶5.64％，祥符通寶5.41％，聖宋元寶5.17％，天聖元寶4.94％，熙寧元寶3.64％，景徳元寶3.17％，咸平元寶2.94％，治平元寶2.94％，治平通寶0.16％，景祐元寶2.12％，大観通寶2.12％，天禧通寶2.00％，嘉祐通寶2.00％，至道元寶1.88％，太平通寶1.76％，元符通寶1.65％，淳化元寶1.41％，



第 464 図　清水古墳群出土緡銭組成図



第 465 図　北宋銭銭種別図



第 466 図　明銭銭種別図

表24　清水古墳群　第1号地下式坑出土銭貨枚数・比率一覧表

銭貨	国・王朝	初鋳年	本銭		模鋳銭		総枚数（枚）
			枚数（枚）	比率（%）	枚数（枚）	比率（%）	
乾元重寶	唐	758	4	0.21	1	0.05	5
唐国通寶	南唐	959	1	0.05	0	0.00	1
開元通寶	南唐	960	74	3.88	8	0.42	82
宋通元寶	北宋	960	7	0.37	1	0.05	8
太平通寶	北宋	976	15	0.79	1	0.05	16
淳化元寶	北宋	990	12	0.63	0	0.00	12
至道元寶	北宋	995	16	0.84	2	0.10	18
咸平元寶	北宋	998	22	1.15	5	0.26	27
景德元寶	北宋	1004	26	1.36	3	0.16	29
祥符元寶	北宋	1008	45	2.36	11	0.58	56
祥符通寶	北宋	1008	1	0.05	1	0.05	2
天禧通寶	北宋	1017	15	0.79	10	0.52	25
天聖元寶	北宋	1023	42	2.20	12	0.63	54
明道元寶	北宋	1032	10	0.52	0	0.00	10
景祐元寶	北宋	1034	16	0.84	10	0.52	26
皇宋通寶	北宋	1038	102	5.35	25	1.31	127
至和元寶	北宋	1054	10	0.52	2	0.10	12
嘉祐元寶	北宋	1056	1	0.05	0	0.00	1
嘉祐通寶	北宋	1056	17	0.89	5	0.26	22
治平元寶	北宋	1064	26	1.36	0	0.00	26
治平通寶	北宋	1064	3	0.16	2	0.10	5
熙寧元寶	北宋	1068	30	1.57	9	0.47	39
元豊通寶	北宋	1078	128	6.71	18	0.94	146
元祐通寶	北宋	1086	102	5.35	13	0.68	115
紹聖元寶	北宋	1094	47	2.46	2	0.10	49
元符通寶	北宋	1098	15	0.79	1	0.05	16
聖宋元寶	北宋	1101	44	2.31	5	0.26	49
大観通寶	北宋	1107	18	0.94	1	0.05	19
政和通寶	北宋	1111	65	3.41	2	0.10	67
宣和通寶	北宋	1119	3	0.16	0	0.00	3
正隆元寶	金	1157	5	0.26	0	0.00	5
大定通寶	金	1178	3	0.16	0	0.00	3
淳熙元寶	南宋	1174	5	0.26	0	0.00	5
紹熙元寶	南宋	1190	1	0.05	0	0.00	1
慶元通寶	南宋	1195	2	0.10	0	0.00	2
嘉泰通寶	南宋	1201	3	0.16	0	0.00	3
嘉定通寶	南宋	1208	2	0.10	1	0.05	3
紹定通寶	南宋	1228	1	0.05	0	0.00	1
淳祐元寶	南宋	1241	2	0.10	0	0.00	2
皇宋元寶	南宋	1253	2	0.10	0	0.00	2
大中通寶	明	1361	1	0.05	0	0.00	1
洪武通寶	明	1368	49	2.57	0	0.00	49
永楽通寶	明	1408	691	36.23	3	0.16	694
宣徳通寶	明	1433	64	3.36	0	0.00	64
朝鮮通寶	朝鮮	1423	5	0.26	0	0.00	5
計	−	−	1753	91.92	154	8.08	1907

明道元寶 1.18%，至和元寶 1.06%，宋通元寶 0.82%，治平通寶 0.47%，宣和通寶 0.35%，嘉祐元寶 0.12%である。明銭の銭種別の比率（第 466 図）は，永樂通寶 85.84%，宣德通寶 7.95%，洪武通寶 6.09%，大中通寶 0.12%である。

銭種別では，明銭の永樂通寶が 689 枚と最も数が多いが，比率でみると，明銭 42.21%に対し，北宋銭が 43.94%と高い（第 464 図）。北宋銭は銭種別では数が少ないものの，全体では多い比率である。このことから，北宋銭が多く流通していたことがうかがえる。

当時は 97 枚前後で一緡とする「省百法」を用いている。中には，97 枚に充たない緡があり，もともと一つだった緡と切れてしまったものと考えられるが，どの緡と綴られていたかは判然としない。

緡銭は，第 1 号地下式坑の天井部崩落土の直上から出土している。また，緡銭に付着していた繊維を同定した結果，イネ藁で作られた袋状のものか筵でくるまれていたことが判明した。甕や木箱に納められていないことから，長時間を想定した備蓄の意図は考えられない。土地神への祭祀として埋納されたとも想起できるが，周囲には関連する遺構はなく，その可能性は低い。これらのことから，天井部の崩落後にできたくぼみに，一時的に置かれた可能性がある。

(2) 神屋遺跡

神屋遺跡において鎌倉・室町時代の遺構は，方形竪穴遺構 1 基，地下式坑 1 基，火葬施設 1 基，粘土貼土坑 3 基，土坑 2 基を確認した。出土土器から時期を判断できたものは地下式坑 1 基と土坑 2 基で，それ以外は重複関係や遺構の形状などから，当時代の範疇であると判断した。

土坑 2 基からは，土師質土器の小皿が出土している。小皿の器形から，それぞれ 13 世紀代と 15 世紀代に比定できる。地下式坑については，覆土中から常滑 10 型式の鉢が出土しているため 15 世紀後半と考えたが，同じ覆土中から常滑 6 b 型式の甕が出土しており，時期差が 100 年以上あることになる。近接する薬師後遺跡の 15 ～ 17 世紀と考えられる溝跡からも常滑 6 b 型式の陶器片が出土しており，伝世したものととらえていることから，本跡についても同様に 15 世紀後半に廃絶したと考える。火葬施設は，焚口部から燃焼部の向きを主軸方向とし，N － 64° － E となる。燃焼部の横幅が 1.17 m であることから，被葬者は膝を折り曲げた状態で火葬されたと思われる。釈迦が入滅したときの姿「頭北面西右脇臥」に倣い，頭を北方向にして，焚口部を向いた方向に横たわると顔は西を向くことになる。この姿勢で荼毘にふされたと考えることができる。

このように，当時代の神屋遺跡は，墓域としての様相を垣間見る遺構を検出している。近接する薬師後遺跡においても方形竪穴遺構，火葬土坑，地下式坑，土坑など，当遺跡と共通する遺構を検出している。当時代は，神屋遺跡・薬師後遺跡を含む広い範囲に墓域が点在していたものと思われる。

9 江戸時代

(1) 清水古墳群

清水古墳群において江戸時代の遺構は，塚 1 基，土坑 1 基を確認した。ここでは，当初第 7 号墳として調査し，調査段階で変更した第 1 号塚について若干の考察を加えることとする。

塚頂部には石祠型の石塔が奉られており，石塔の刻文から，薬師石堂一基が奉られたことが判明した。この石塔は，坂本与右衛門なる人物の願いにより，清水村の人々が薬師石堂を造立したことを周知しているもので，これとは別に薬師石堂が所在していたことが推測できる。薬師とは，薬師如来のことを意味していると考えられる。薬師如来は人々の病苦を救い，古代以来治病神として崇められている。隣接する桑

山地区に所在する西泉寺では，延宝４年（1676）に薬師如来堂を造立している[40]。この地域では石塔造立以前から薬師信仰が盛んであったことがわかる。願主坂本与右衛門は薬師信仰の熱心な信者で，西泉寺の檀徒であった可能性がある。

石塔の刻文には「安永三甲午」（1774）と記されている。この石塔を造営する２年前，明和９年（1772）には水害，さらにその２年前の明和７年（1770）には干魃が発生している。自然災害による食糧難や衛生状態の悪化などから，伝染病などが発生していたであろう。当時の村の人々が医薬の仏である薬師如来に救いの手を求めたことは，時代背景から当然の所作であったといえる。

(2) 神屋遺跡

神屋遺跡において江戸時代の遺構は，道路跡１条，土坑13基を確認した。第１号道路跡は，硬化面を２面確認したことから，２時期にわたって使用されていたことが明らかになった。第１期はローム層を掘り込んで構築され，構築土に含まれる陶磁器片の特徴から，17世紀代に使用されていたと考えられる。その後，第１期の路面上に構築土を重ねて第２期の路面としている。堆積土に混入していた煙管の特徴が古泉編年Ⅳ期[41]にあたり，18世紀後半には廃絶していたと考えられる。本跡の東側に位置する清水古墳群第１号塚の造営と，時期が近いものと思われる。本跡は現道にほぼ平行する位置で確認されており，道路が廃絶した後，東に隣接する現道に重なる形で道路が機能し，今日に至るものと考えられる。現道に接して文化13年（1830）の道標があり，「此方つちうら　えどさき」，「此方あば　かしま」と刻まれている。当遺跡Ａ区東側を南北に通る現道は，江戸時代からの主要な交通路であり，当時代から現在に至るまで，途切れることなく道路として利用されていたとみられる。

10　おわりに

今回の調査は清水古墳群・神屋遺跡・神屋南遺跡の所在する神宮寺台地上の中でも限られた範囲であったため，調査によって得られた情報には断片的なものも少なくない。その中で明らかになったことと，そこから推測できることを以下に述べる。

当遺跡群では，剥片の出土により，後期旧石器時代から人々が生活していた手がかりを得ることができた。縄文時代には前期及び後期に，集落や狩猟場としての跡を残していた。古墳時代の５世紀後葉から人々は集落を形成し，６世紀後葉には当時代において最も大きな集落となった。同じ頃，当集落とその周辺には多くの古墳が築造されるようになり，今回確認した第９号墳も，その頃に築造されたうちの１基である。

一旦集落が縮小した奈良時代にも人々の暮らしは連綿と続き，平安時代には，当集落における第２の盛期を迎える。９世紀の中葉から後葉には大集落が形成され，稲作や漁労，そして糸の生産や集約で賑わいを見せたことが想定できる。現在でも奈良の正倉院には信太郡の大野郷と鳴津郷，法隆寺には同じく中家郷から納められた調布が保管されており[42]，当地で生産された糸を使用して仕上げられた調布が他の産物とともに，水運や陸路を利用して中央へと送られたであろう。当遺跡群は10世紀に入ると集落の栄えた姿を失い始め，11世紀にはその終焉を迎えた。

空白期間を経て，鎌倉・室町時代には墓域としてこの地が利用され始めた。地下式坑に眠っていた1,900枚に上る緡銭は，当遺跡群周辺に有力者が存在していたことを示唆している。

江戸時代には道路が構築され，他地域との重要な交通路となっていた。この頃，道路の東側には人々の願いや祈りの対象として塚が造営された。地元の人だけでなく，道行く人々の中にも足を止め，祈りを捧げた人もいたことであろう。

当遺跡群は糸の生産や集積に関わる集落として，平安時代を中心に，近接する薬師後遺跡とともに栄えたことが明らかになった。当遺跡群と薬師後遺跡は，古墳時代後期の６世紀中葉から７世紀前葉にかけてと，平安時代の９世紀中葉から後葉にかけての２時期に，集落の盛期を迎えていることが共通している。一方で，古墳時代の盛期における竪穴建物跡の棟数については，神屋遺跡の35棟に対して，薬師後遺跡ではその２倍の70棟を検出している。また，円面硯については，神屋遺跡が９世紀中葉の１点に対し，薬師後遺跡では８世紀前葉・後葉，９世紀中葉・後葉に各１点の計４点が出土しており，当遺跡群と比較して，薬師後遺跡ではより長期間にわたって識字層が居住していたことを示している。

当遺跡群の今回の調査から，弥生土器片が数点出土しているものの，同時期の遺構については検出していない。古墳時代の末に竪穴建物跡が一旦姿を消しており，当時の人々が他地域へ移動したのか，調査区域外に隣接して集落が継続していたのかについては不明である。平安時代の集落廃絶後から，緡銭が出土した室町時代の地下式坑，そして江戸時代の塚など，時代の変遷とその関連性については考察していない。検討すべき課題は少なくないが，今回の調査成果が少しでも当地域における歴史解明の一助となれば幸いである。

結びに，当遺跡群の所在する神宮寺台地上には，古代の駅路が通っていたことが種々の研究から推定されており，当集落から駅路への往来が容易であったと考えられる。都と地方とを繋ぐ駅路に近接する集落として，当集落は繁栄していったと想定される。現在は，この神宮寺台地を首都圏中央連絡自動車道（圏央道）が縦貫し，人や物を乗せた車が日々絶え間なく行き交っている。人や物が行き交うことによって生活が潤い豊かになるのは，昔も今も変わることはない。このことを，清水の土地と共に生きた人々は，今も私たちに教えてくれている。この土地に生きた数多の先人たちに感謝しつつ，本稿を閉じたい。

註

1）小菅将夫　西井幸雄「三　関東地方北部」『講座日本の考古学１　旧石器時代（上）』青木書店　2010年４月

2）橋本勝雄「茨城県における旧石器時代の編年」『茨城県における旧石器時代研究の到達点－その現状と課題－』発表要旨・資料集　茨城県考古学協会　2002年12月

3）本橋弘巳「中峰遺跡　児松遺跡　一般国道468号線首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第286集　2008年３月

4）縄文土器の編年については以下の文献に依拠した。
大川清　鈴木公雄　工楽善通編『日本土器事典』雄山閣　1996年12月

5）文化庁文化財部記念物課『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』同成社　2010年５月

6）a成島一也　大関武　齋藤和浩　鹿島直樹　早川麗司「薬師後遺跡　一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第308集　2009年３月
b大久保隆史「薬師後遺跡２　一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第350集　2012年３月

7）岡宮政光『幸田遺跡　幸田台遺跡　東台団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』幸田台遺跡発掘調査会・東村教育委員会　1995年３月

8）東町史編纂委員会『東町史　通史編』　2003年３月

9）註５）に同じ

10）註６）bに同じ

11）註５）に同じ

12）上高津貝塚ふるさと歴史の広場『よみがえる古代の信太郡』　2009年３月

13) つくば市立百合ヶ丘学園筑波西中学校教諭　大関武氏に一部の土器を実見の上，ご教示いただいた。

14) 赤井博之　佐々木義則「茨城県における須恵器の流通－供膳器を中心とした須恵器の肉眼観察による産地同定と今後の課題－」『婆良岐考古』第28号　婆良岐考古同人会　2006年5月

15) 稲敷窯については，稲敷市周辺に存在を想定しているが，未だ窯跡の確定には至っていない。よって本書においては，稲敷窯と想定される須恵器について，遺物観察表の備考の欄に「稲敷産$_{?}$」との表記で統一した。

16) 佐々木義則「奈良・平安時代の漁網錘－ひたちなか市出土土錘の類型について－」『ひたちなか埋文だより』第38号　ひたちなか市埋蔵文化財調査センター　2013年3月

17) 比毛君男　早川麗司『下高津小学校遺跡　宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』土浦市教育委員会　2013年6月

18) a註16）に同じ
b註17）に同じ

19) 平川南『墨書土器の研究』吉川弘文館　2000年11月

20) 田中広明『豪族のくらし－古墳時代～平安時代－』すいれん舎　2008年12月

21) 高島英之『古代出土文字資料の研究』東京堂出版　2000年9月

22) 黒澤秀雄「水戸市二の沢B遺跡（古墳群）出土刻書紡錘車について」『婆良岐考古』第25号　婆良岐考古同人会　2003年5月

23) 桑野一幸「熨斗と火熨斗」『河内古文化研究論集』柏原市古文化研究会　1997年10月

24) 瀧瀬芳之「4　熨斗（火のし）について」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第134集　1994年3月

25) 箕輪町教育委員会『北城遺跡－緊急発掘調査報告書－』　1977年3月

26) a京都市埋蔵文化財研究所『平安京発掘資料選』　1980年
b京都市埋蔵文化財研究所『平安京発掘資料選二』　1986年

27) 前沢輝政『多功南原遺跡　奈良・平安時代の集落址』上三川町教育委員会　1986年3月

28) 平塚市遺跡調査会「神明久保遺跡－第1地区－」『平塚市埋蔵文化財シリーズ19』平塚市教育委員会　1991年3月

29) 日野市落川遺跡調査会『日野市落川遺跡調査概報Ⅶ』　1992年3月

30) 御代田町教育委員会『川原田遺跡　長野県北佐久郡御代田町川原田遺跡発掘調査報告書　平安・中世編』　1993年3月

31) 西井幸雄　新屋雅明　石坂俊郎　金子直行　瀧瀬芳之「花ノ木・向原・柿ノ木坂・水久保・丸山台　東北縦貫自動車道（東京外環自動車道）関係埋蔵文化財発掘調査報告」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第134集　1994年3月

32) a小松学　小林康男　小口達志『和手遺跡　カインズホーム建設に伴う緊急発掘調査報告書Ⅰ』塩尻市教育委員会　1997年3月
b神村透　桐原健　直井雅尚　平尾良光　榎本淳子　早川康弘　小松学『和手遺跡　カインズホーム建設に伴う緊急発掘調査報告書Ⅱ』塩尻市教育委員会　1997年3月

33) 田中広明　末木啓介「中堀遺跡　御陣馬川堤調節池関係埋蔵文化財発掘調査報告」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第190集　1997年12月

34) 矢口忠良　千野浩　鳥羽英継「南宮遺跡Ⅱ　南長野運動公園建設地」『長野市の埋蔵文化財』第96集　長野市教育委員会　2002年2月

35) 各遺跡から出土した火熨斗の残存率は，各報告書の実測図から坂本が判断した数値である。

36) 註32）bに同じ

37) 註19）に同じ

38) 註7）に同じ

39) 註8）に同じ

40) 江戸崎町史編さん委員会編『江戸崎町史』江戸崎町　1993年3月

41) 江戸遺跡研究会編『図説江戸考古学研究事典』柏書房　2001年4月

42) 註8）に同じ

参考文献

・芝山町教育委員会・芝山町史編纂室『芝山町史　石造物編』2013年3月

・永井久美男『新版　中世出土銭の分類図版』高志書院　2002年4月

・芳賀友博　寺内久永「村松白根遺跡Ⅰ　大強度陽子加速器施設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第250集　2005年3月

・鈴木公雄『銭の考古学』吉川弘文館　2002年5月

・葛飾区郷土と天文の博物館「埋められた渡来銭」『平成12年特別展図録－中世の出土銭を探る－』2000年10月

・茨城県史編さん原始古代史専門委員会編『茨城県史料　考古資料編　古墳時代』茨城県　1974年2月

・茨城県史編さん原始古代史部会編『茨城県史料　古代編』茨城県　1968年11月

・茨城県立歴史館編『茨城県史料　考古資料編　奈良・平安時代』茨城県　1995年3月

付　章 1

稲敷市清水古墳群出土緡銭付着繊維の繊維素材同定

鈴木三男・小林和貴（東北大学植物園）
株式会社パレオ・ラボ

1　はじめに

稲敷市の清水古墳群の調査で出土した緡銭について，通し紐と銭をくるんでいた袋状繊維の繊維素材同定を行った。

2　試料と方法

試料は，清水古墳群の中世の地下式坑から出土した緡銭の紐と銭をくるんでいた袋状繊維である。緡銭の紐は，銭の通し孔の中に残存していた。また，袋状繊維は土坑内に置かれた銭を包んでいたと考えられる植物遺体で，銭や周囲の土に付着していた。

方法は，まずルーペ，光学反射顕微鏡，デジタルマイクロスコープで表面構造を観察した後，試料の一部を切り取り，樹脂で包埋してミクロトームで切断し，染色して光学顕微鏡で観察した。

3　結果

同定の結果，緡銭の紐と袋状遺物はいずれもイネ藁であった。

以下に，製品ごとに記載を示し，図版にデジタルマイクロスコープおよび光学顕微鏡の写真を示して同定の根拠とする。

(1)　緡銭の紐：イネ藁

緡銭の紐はより紐で，径は２～３㎜程である（図版１−１）。

素材の表面をデジタルマイクロスコープで観察した。縦筋がほぼ等間隔で平行に走り，筋の間の面は平坦である（図版１−２）。この縦筋を高倍率で観察すると，径の短い四角形の細胞が１細胞幅で密に配列している（図版１−３）。現生のイネでも，葉と葉鞘の裏面に同様の縦筋がみられる（図版１−４，５）。したがって，縦筋はイネの葉や葉鞘の裏面の表皮の短細胞の列であると考えられる。

また，紐の一部から採取した横断面の観察では，組織が壊れつぶれて変形しているが，ところどころに変形したイネ科特有の維管束と，大小様々な形をした空隙が多数見られた（図版２−６，７）。イネ科の維管束は，中心側に原生木部腔が一つ，外側に篩部が一つ，左右に後生木部道管が１対の４つの部位で構成される。現生のイネでも，葉鞘が重なった部分の横断面には，維管束と大小様々な細胞間隙が見られる（図版２−８，９）。紐の横断面は組織が大きく損傷しており，組織がどのように連なっているのかは判然としないが，イネ科の葉鞘が幾重にも重なった部分が乾燥収縮してできたものであると推定される。

なお，イネとイネ以外のイネ科の種（例えば，コムギ，ススキなど）とは，短細胞の細胞列の配置，維管束と厚壁組織との関係などで区別されるため，この紐の素材はイネ藁であると同定した。

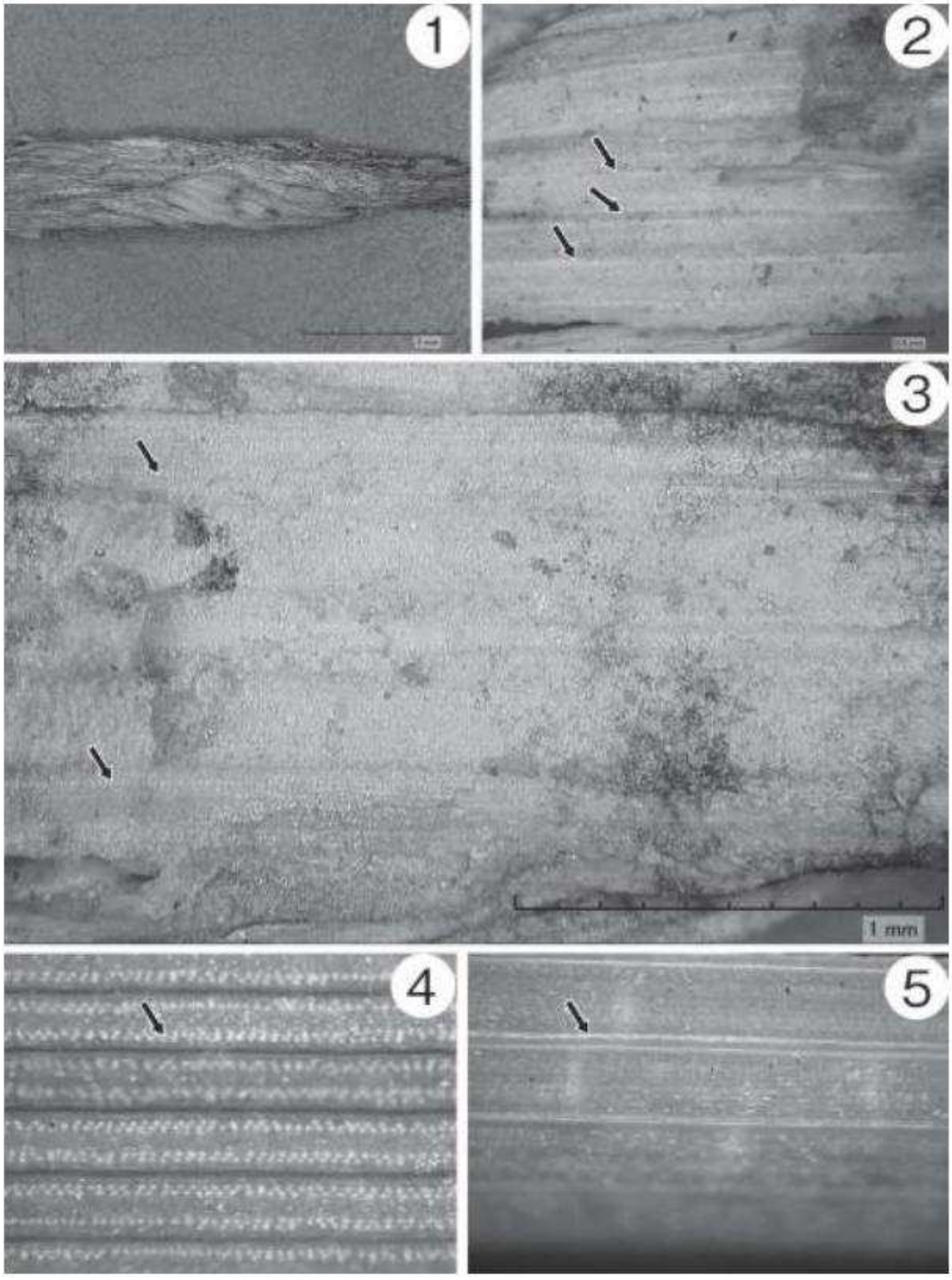
(2) 袋状繊維：イネ藁

幅１～数㎜の細長い物質が様々な方向に重なり合っており，編んだり組んだりした形跡は認められなかった（図版３－10）。

表面をデジタルマイクロスコープ及び反射顕微鏡で観察すると，ところどころに節の形態をした部分が見える（図版３－11）。平滑な部分を拡大すると，縦方向（写真では左右方向）に並んだ長細胞とその間に単細胞がみられ，毛状突起がある（図版３－13）。また，細胞壁は波状である。これはイネの葉，葉鞘，稈の表皮の長細胞と短細胞，毛状突起の形態と一致する（図版３－16）。なお，観察した平滑な部分では，紐のイネ藁で観察された様な短細胞からなる縦筋は見られないため，この部分は葉や葉鞘ではなく稈（茎）の表面と判断される（図版３－12）。

袋状繊維の横断面の切片では，組織が扁平に連なった部位で，一つの原生木部腔，２本の丸い後生木部道管，１つの篩部からなるイネ科特有の維管束が認められた（図版３－14）。これを拡大すると，上にある１細胞層の表皮（図版３－15の上側の黒い部分）の下に数細胞層からなる厚壁組織が左右に連続してあり，厚壁組織層が厚くなった部分に維管束が位置している。これはイネの稈（茎）の最外部分である表皮，およびその直下の数細胞層からなる厚壁組織群と，それに含まれる維管束部分の形態と一致する（図版３－17，18）。つまり，イネの稈の組織のうち脆弱な内側の厚い部分（図版３－18の線部分）の組織が消失したものと推測される。

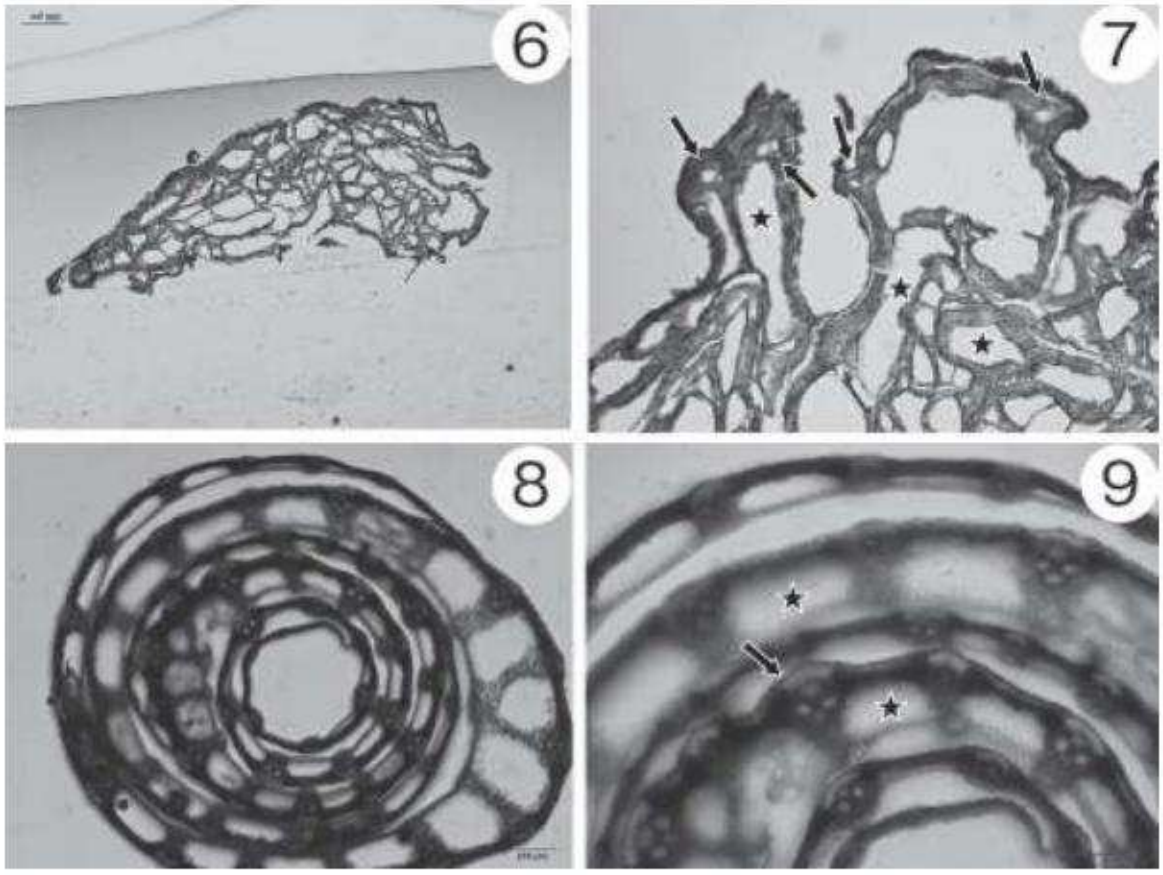
以上から，袋状繊維にもイネの葉鞘や稈の組織と形態が認められ，袋状繊維はイネ藁を敷いたものであると同定した。なお，図版３－13に示した表皮細胞の形態や図版３－14，15に示した厚壁組織からなる外層の特徴などは，袋状繊維が他のイネ科植物ではなくイネであるとの結論を強く支持している。



図版 1　褌銭の紐の表面のデジタルマイクロスコープ写真と現生イネの葉と葉鞘の裏面の顕微鏡写真

1−3：褌銭の紐（1：全体，2：拡大 a，3：拡大 b），4−5：現生イネ（4：葉の裏面，5：葉鞘の裏面の外側に露出している面）

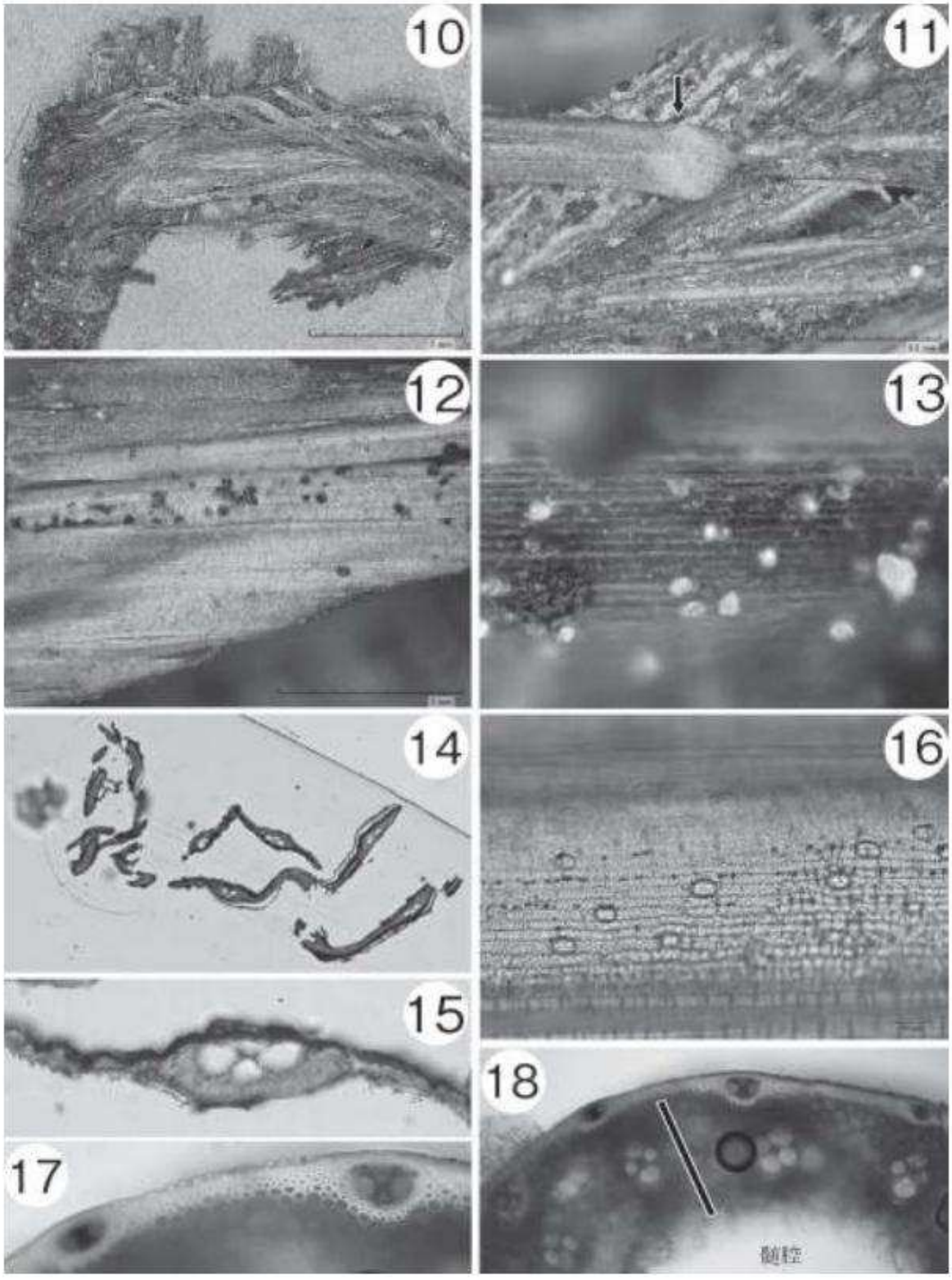
矢印：縦筋（表皮の短細胞の列）



図版２　緋銭の紐とイネ葉鞘の断面の顕微鏡写真

６−７：紐の横断面（６：全体，７：一部拡大），８−９：現生イネの葉鞘束の断面（８：全体，９：拡大）

矢印：維管束の例示，★：細胞間隙の例示



図版３　袋状繊維と現生イネのデジタルマイクロスコープ写真と顕微鏡写真

10－13：袋状繊維（10：全体，11：節構造，12：平坦部分，13：平坦部分の拡大），14－15：袋状繊維の横断面（14：全体，15：拡大），16－18：現生イネ（16：葉鞘裏面の外側に露出している面，17：桿の断面大 a，18：桿の断面拡大 b）

矢印：節構造，線：表皮直下の厚壁組織群と維管束

付　章 2

稲敷市神屋遺跡出土銅製火熨斗の鉛同位体比測定結果

国立歴史民俗博物館研究部教授　齋藤　努

1　はじめに

茨城県稲敷市の神屋遺跡から出土した鉄柄付銅製火熨斗の鉛同位体比分析を行った結果を報告する。

2　資料

平安時代前期（9世紀後葉～10世紀前葉）と考えられる第10号住居跡（第1号不明遺構）から出土した鉄柄付銅製火熨斗を対象として分析を実施した。X線透過検査によって，外縁部と火室との間に隙間が観察されたので，鉛同位体比からもそれを確認するために，①外縁部，②火室上部，③火室下部の3カ所から分析試料を採取した。

3　分析方法

3カ所とも，刃を使い捨てにするマイクロナイフを使って表面から錆粉末を採取して分析試料とした。試料から，高周波加熱分離法で鉛を単離して硝酸溶液とし，鉛200ng相当量の試料溶液を分取して，リン酸・シリカゲルとともにレニウム・シングル・フィラメント上に塗布した。表面電離型質量分析装置（Finnigan MAT 262）を用いて，フィラメント温度1200℃で鉛同位体比を測定した（齋藤，2001；齋藤ほか，2002）。

4　結果

表1に鉛同位体比測定結果を示した。

馬淵・平尾は弥生時代から平安時代までの多くの青銅器についてデータを蓄積した結果，その鉛同位体比の変遷は下記のようにグループ分けできると報告している（馬淵・平尾，1982，1983，1987）。

A：弥生時代に将来された前漢鏡が示す数値の領域。弥生時代の国産青銅器の多くがここに入る。

B：後漢・三国時代の舶載鏡が示す数値の領域。古墳出土の青銅鏡の大部分はここに入る。

C：日本産の鉛鉱石の領域。

D：多鈕細文鏡や細形銅剣など，弥生時代に将来された朝鮮半島系遺物が位置するライン。

図1は，神屋遺跡出土銅製火熨斗の測定値を，馬淵・平尾の示した領域B，C，Dとともに示したものである。測定結果の表示には，必要に応じて$^{206}Pb/^{204}Pb$比と$^{207}Pb/^{204}Pb$比の関係（b式図）が併用される場合もあるが，ここでは$^{207}Pb/^{206}Pb$比と$^{208}Pb/^{206}Pb$比の関係（a式図）のみを表示した。

得られたデータはいずれも日本産原料の領域内にある。ただし①と②・③とで数値に相違がみられた。②・③は奈良・平安時代の青銅製品や緑釉に頻出する数値範囲を中心とする領域，すなわち，齋藤（2001），齋藤ほか（2002），高橋（2001）で提示され，山口県長登銅山や蔵目喜鉱山が原料供給地ではないかと推定されている，グループ「I」の範囲の中に分布しているが，①はその範囲から外れている。

まず，①については，X線透過検査の結果とも併せると，②・③とはやや異なる原料で鋳造され，それらを組み合わせて一つの製品にしたとみなしてよいであろう。

一方，②と③のデータは近接しているものの，これらが一体で鋳造されたものなのか，それとも２回にわけて別個に鋳造されたものなのかを判定するのは難しい。まったく異なる資料の場合であっても，同一産地の原料を使用していれば，数値はこれらよりもよく一致するからである。X線透過検査で隙間などが見られなかったため明確にはいえないが，鉛同位体比分析の結果だけからみる限りでは，同一資料を繰り返し分析した時の誤差範囲を超えており，火室の上部と下部は連続して別個に鋳込んだと考えた方がよさそうである。

表１　茨城県稲敷市・神屋遺跡出土鉄柄付銅製火熨斗の鉛同位体比測定結果

No.	資料名	分析番号	$^{207}Pb/^{206}Pb$	$^{208}Pb/^{206}Pb$	$^{206}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{204}Pb$	$^{208}Pb/^{204}Pb$
1	①外縁部	B11401	0.8488	2.0945	18.383	15.604	38.503
2	②火室上部	B11402	0.8467	2.0891	18.430	15.603	38.502
3	③火室下部	B11403	0.8471	2.0901	18.414	15.599	38.486

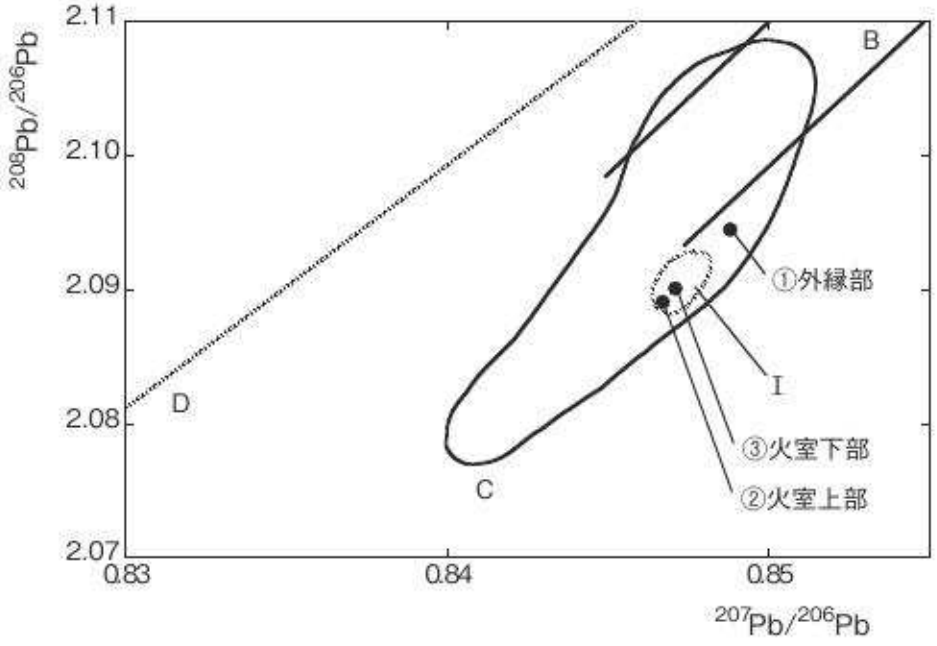


図１　茨城県稲敷市・神屋遺跡出土鉄柄付銅製火熨斗の鉛同位体比分析結果

参考文献

・齋藤努（2001）「日本の銭貨の鉛同位体比分析」，『国立歴史民俗博物館研究報告』86，pp.65-129.

・齋藤努，高橋照彦，西川裕一（2002）「古代銭貨に関する理化学的研究　―「皇朝十二銭」の鉛同位体比分析および金属組成分析―」，『IMES Discussion Paper』No.2002-J-30，日本銀行金融研究所．

・高橋照彦（2001）「日本における銭貨生産と原料調達」，『国立歴史民俗博物館研究報告』86，pp.131-184.

・馬淵久夫，平尾良光（1982）「鉛同位体比からみた銅鐸の原料」，『考古学雑誌』68(1)，pp.42-62.

・馬淵久夫，平尾良光（1983）「鉛同位体比による漢式鏡の研究（二）」，『MUSEUM』382，pp.16-26.

・馬淵久夫，平尾良光（1987）「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比-青銅器との関連を中心に-」，『考古学雑誌』73(2)，pp.199-245.

付　章 3

稲敷市神屋遺跡出土火熨斗のＸ線的調査

元国立歴史民俗博物館研究部教授　永嶋正春

1　はじめに

古代の火熨斗の出土例は少なく，古墳時代を含めても十数例しか知られていない。したがって，標記の火熨斗についての理化学的な調査情報は，本資料の実体を知りまた出土の意味合いを考える上でも重要である。そのため，筆者の元では非破壊調査を前提としたＸ線的手法による二つの調査を実施した。Ｘ線透過検査と蛍光Ｘ線分析である。前者により，資料の製作技術に関わる情報や腐食・損壊状態に関わる情報が得られることが期待され，また間接的ではあるが素材に関する知見も獲得できる。後者では，素材に関する元素情報を得ることができ，類品との比較検討が可能となる。

本火熨斗は，出土後程なくして民間機関による保存処理並びに修復がおこなわれたが，標記の調査は基本的には保存処理前に実施するとともに，処理後においても再確認の意味での調査をおこなった。

非破壊という制約のなかでの調査ではあるが，肉眼観察だけでは不可能な有益な結果が得られているので，ここに要約して報告したい。

2　調査方法

Ｘ線透過検査　工業用Ｘ線透過検査装置により，Ｘ線透過写真フィルム画像を撮影した。透明ベース・片面乳剤のフィルム（フジグラビアフィルム GC-100）に作成したＸ線透過像を，フィルムデジタイザー（アレイ 2905）により 508dpi のデジタル画像とし，パソコン観察用とした。本報告では，白黒反転画像（印画紙対応）としたので，Ｘ線像上で，より黒色に見える部分がよりＸ線を透し難い（Ｘ線不透過性が高い）ものと理解されたい。

蛍光Ｘ線分析　エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（日本電子 JSX-3201M）を使用した。Ｘ線管球のターゲットはロジウム（Rh）で，約 14mm φの範囲を測定対象とした（空気通路下，50kV，電流は自動設定）。測定時間は 5 分 or10 分。本法は表面分析法であり，得られた結果は資料の極表面部についての元素情報であることに注意する必要がある。火熨斗受け皿の外底面がおおむね平であることは測定上有利な点であるが，一方埋没中に錆化が進行することで本来の地金成分からは変質していくことになり，その分定量的な扱いが困難になる。これらの点を考慮しながら，測定結果を読み解く必要がある。

3　調査結果

表面付着物について　上記の調査に並行して光学顕微鏡による表面部の観察をおこなったが，鉄製取っ手の端部に残された木質痕（木の柄の痕跡）以外には有意な痕跡は確認されなかった。本資料が布に包まれていたとすれば，どこかには明瞭な布痕が見いだせるのであり，それが無かったことをもって布には包まれていなかったものと判断する。

素材について　外観的に見ても，受け皿部は銅あるいは青銅製，取っ手部は鉄製と判断できるのであるが，X線透過像もこのことを納得させるものである。X線透過像の詳細については後述するので，ここでは主に蛍光X線分析の結果について検討する。なお参考として，本文末に分析結果の図表を掲げたので参照されたい。

図表に掲げたのは装置に内蔵されたソフトによる見かけの定量値であるが，古代の銅・青銅製品で主成分・副成分・少量あるいは微量成分として検出され，資料の素材を特徴づける重金属元素６種，すなわち銅（Cu），ヒ素（As），鉛（Pb），スズ（Sn），アンチモン（Sb），銀（Ag）の合計を100％（質量％）として算出させた数値である。本来は少量の鉄（Fe）も検出されるが（本資料では１％前後），土などの付着物に由来するものとの区別が困難であるため，あえて除外した。またケイ素（Si），塩素（Cl），イオウ（S），カルシウム（Ca），チタン（Ti）なども検出されているが，その多くは土や腐食生成物に由来すると思われ，これも除外した。以上の結果として，本火熨斗の受け皿部分の素材は，主要３成分としては，銅，ヒ素，鉛からなるものと判断できる。スズは１％ほどと少ないものの有意には存在する。銅の値は，保存処理後では小さくなっているが，これは銅が選択的に溶脱して生成した緑青錆が，保存処理時に除去された結果と考えられ，おおむねこの銅の減少分が鉛の増加分となっている。保存処理後の分析結果がより元の素材内容に近いと考えれば，火熨斗受け皿部は，銅が70％強，鉛が20％弱，ヒ素が６～７％，スズが１％程，アンチモンと銀がそれぞれ0.3％程から成る青銅製品と理解できる。

平安期の火熨斗の蛍光X線分析事例を見ると，長野県御代田町川原田遺跡，東京都日野市落川遺跡の２例については，銅・ヒ素・鉛からなる青銅製品であり，少量のアンチモン・銀・鉄を含むとされている。スズはほとんど含まれていない。分析方法の相違はあるものの，神屋遺跡の火熨斗の素材内容と同類のものと考えてよかろう。

X線透過像から分かること（図版１～４参照）　大きくは３つの事柄が把握できる。まずは，受け皿の底面部に見える鬆（す）状の欠陥である。鋳造時に生じた鬆と考えられるが，あるいは使用に伴う腐食損傷の可能性も排除できない。次に，同心円状に配置される厚みの変化である。これは，鋳造後に轆轤挽きによる成形加工をしたことの証であり，突帯状円周文の表現もこれによっている。最後は，取っ手の付け替え補修の問題である。

現存する鉄製取っ手部は後補であり，鉄製の３鋲（鉄鋲６，７，８）によって本体に固定されている。取っ手の基部に鋲を通し，受け皿側（受け皿上面）でカシメたものである。当初時の取っ手は，後補部に隣接して存在するやや大きめの２孔（鋲孔１，２）を用いて本体に固定されていたのであり，X線の透過性からは鉄鋲がその用に供されていたことがわかる。この鉄鋲１，２はそのまま残されており，受け皿裏面側に見える当時の鋲頭には，一部に取っ手から千切れ取れた鉄片（錆片）が認められる。当初も，鉄製の取っ手が付いていたのである。鋲孔１，２で下方に向けて放射状に発生している本体のひび割れは，火熨斗の使用経過に伴って鉄製の取っ手に緩み（ガタツキ）が発生したことを意味している。それへの対応のため，新たな小孔３及び４，５を開け，取っ手基部での補強を図ったものと考えられる。この３孔を使って針金などでの結束補強による取っ手のガタツキ止めをおこなったのであろう。応急処置としての対応である。しかしながらいずれ破綻して取っ手を新調することとなるが，それが今に残る取っ手である。この新たな取っ手は，以前の反省を踏まえたのか，３鋲での固定方法を採用している。

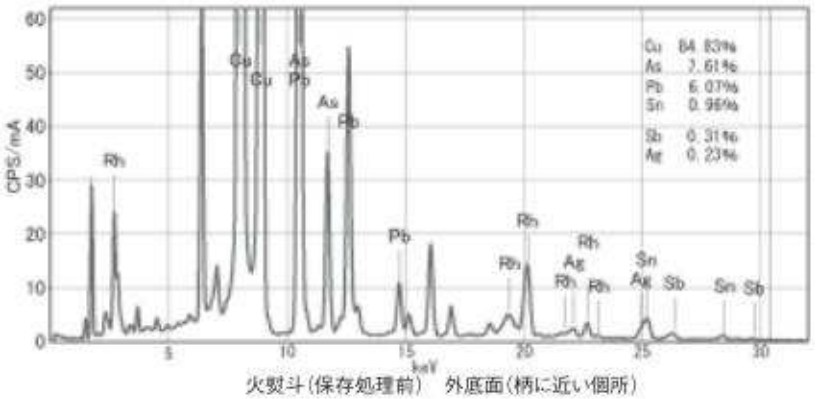
4　おわりに

本火熨斗の素材内容，すなわち銅・ヒ素・鉛を主要な成分とし，スズも少し含まれていること，アンチモンや銀も銅中の不純物としてそれなりに存在することは，日本における古代の青銅製品としては一般的なものであり，国産の青銅製品として矛盾は無い。轆轤挽き加工の技術も優れており，端正な仕上がりを見せており，加えて，取っ手の補修履歴にみられるよう，実用品としての位置づけもしっかりしている。

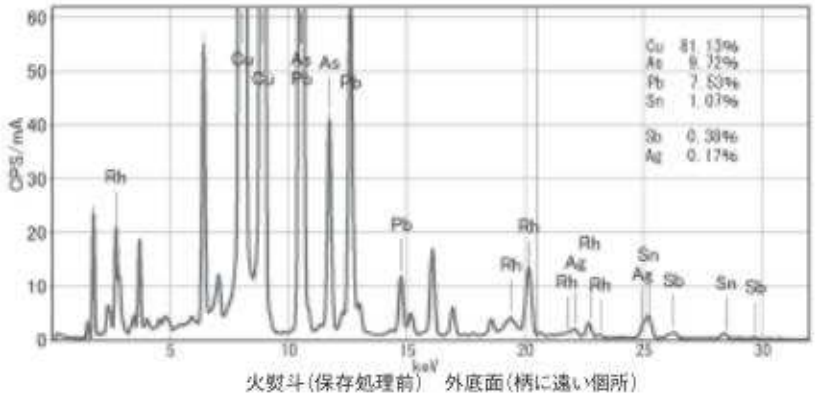
以上のことより，神屋遺跡出土の火熨斗は，大変大きな資料的価値を有するものと考えたい。

参考文献

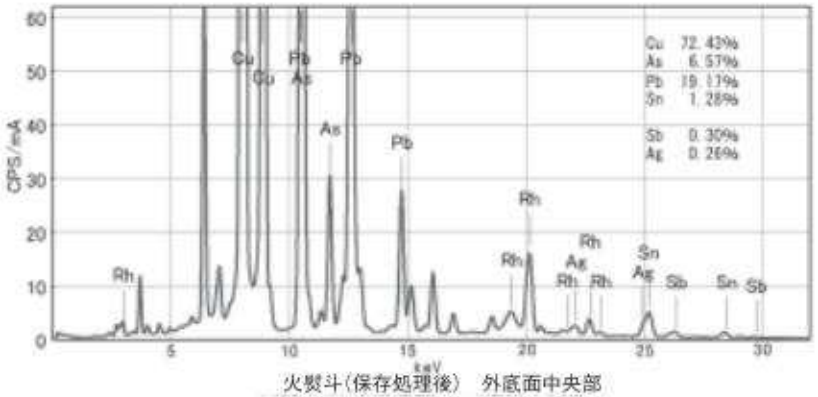
・「長野県御代田町川原田遺跡から出土した銅製火熨斗の科学的調査」平尾良光・瀬川富美子（『塩野西遺跡群 川原田遺跡出土火熨斗の科学的調査―長野県北佐久郡御代田町川原田遺跡科学分析報告書―』御代田町教育委員会,1997）



火熨斗（保存処理前）　外底面（柄に近い個所）

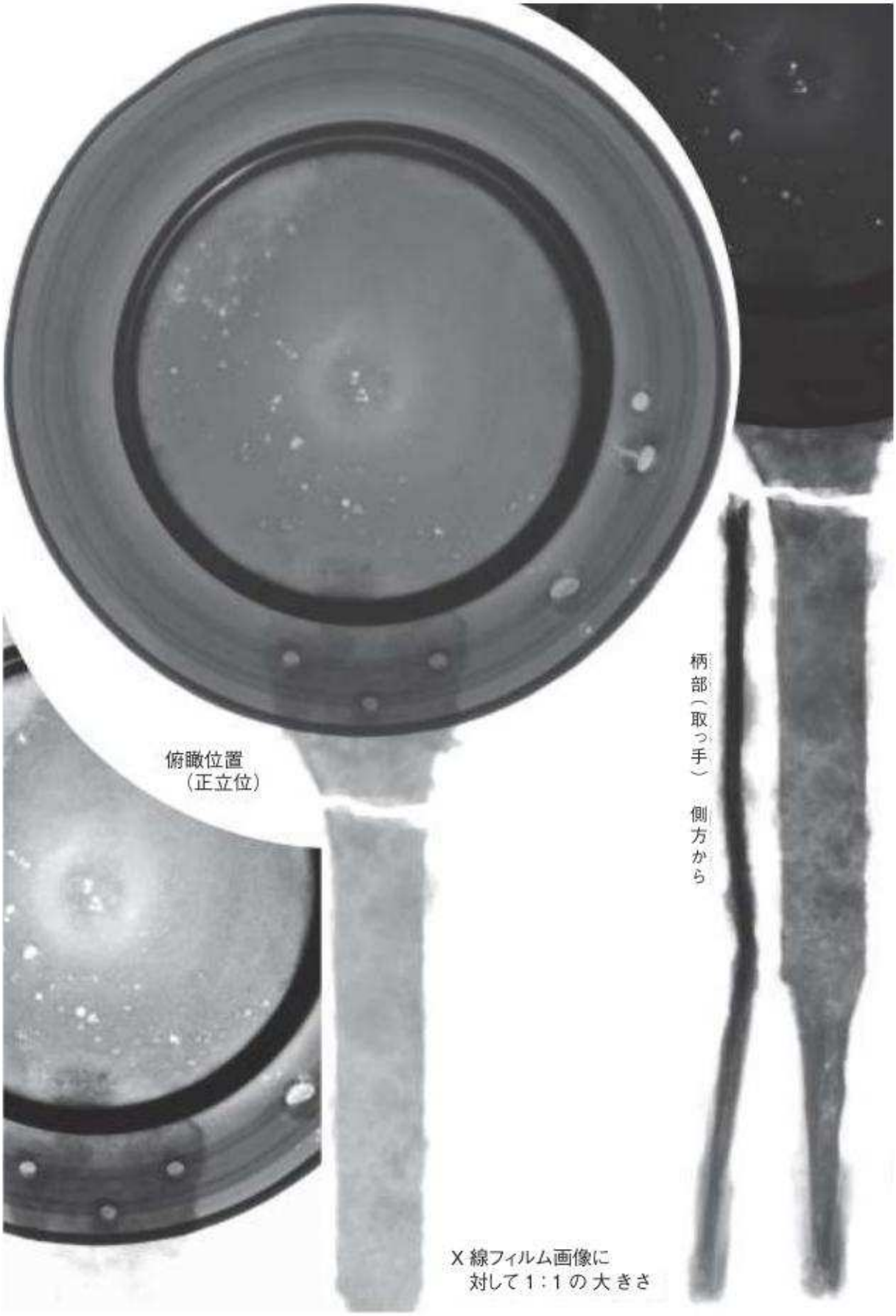


火熨斗（保存処理前）　外底面（柄に遠い個所）



火熨斗（保存処理後）　外底面中央部

図表　火熨斗の蛍光X線分析結果



図版1　火熨斗X線透過像(1)　出土時（保存処理前）

図版2　火熨斗X線透過像(2)　出土時（保存処理前）

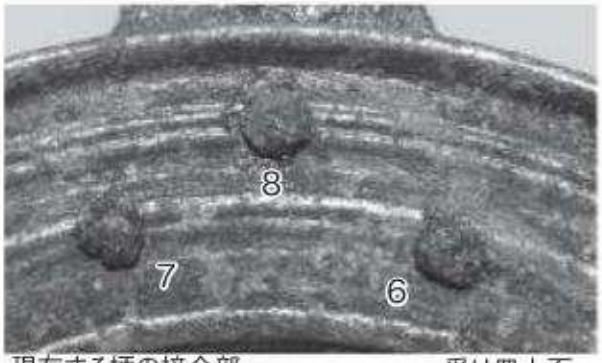
図版３　火熨斗Ｘ線透過像（3）　保存処理後

俯瞰（正立位）

製作当初時の接合部

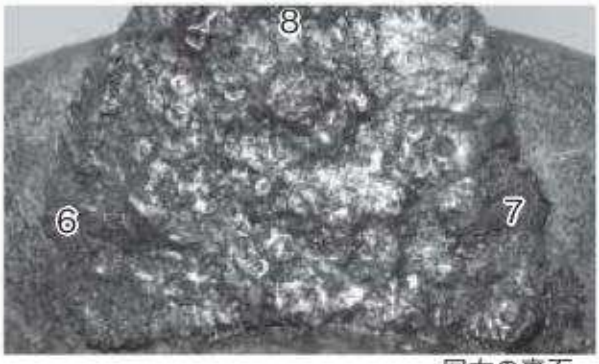
受け皿上面

同左の裏面



現存する柄の接合部

受け皿上面



同左の裏面

製作当初時の鋲１　頭部（受け皿の裏面）

製作当初時の鋲２　頭部（受け皿の裏面）

図版４　火熨斗全姿（保存処理前）と柄（取っ手）の接合部（保存処理後）

写　真　図　版

清　水　古　墳　群
神　　屋　　遺　　跡
神　屋　南　遺　跡

神屋遺跡　第４号大型円形土坑出土遺物

PL1

調査区遠景（北から）

調査区全景

PL2

第　9　号　墳
周溝完掘状況①

第　9　号　墳
周溝完掘状況②

第　9　号　墳
土　層　断　面

PL3

第１号地下式坑
緡銭出土状況

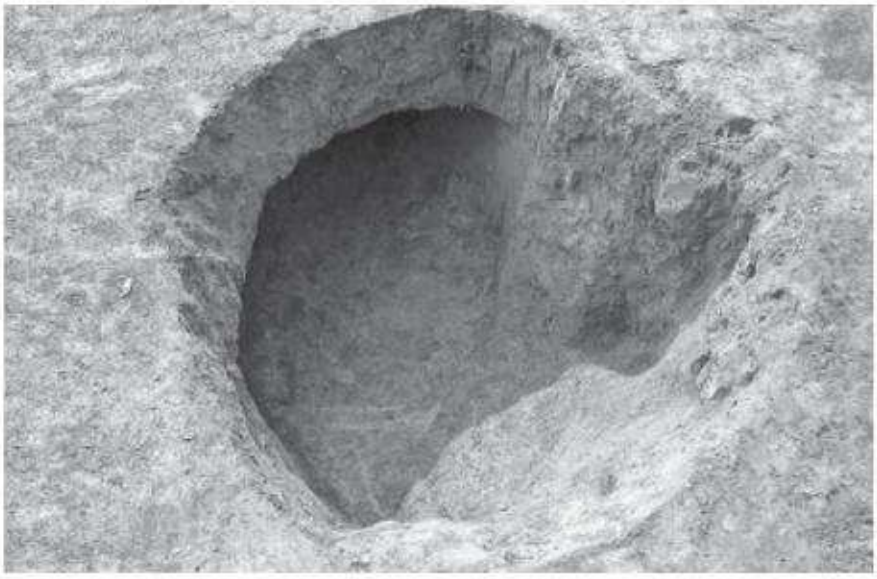
第１号地下式坑
完掘状況

第１号塚
全景

PL4

第 1 号 塚
石塔確認状況

第 1 号 塚
土 層 断 面



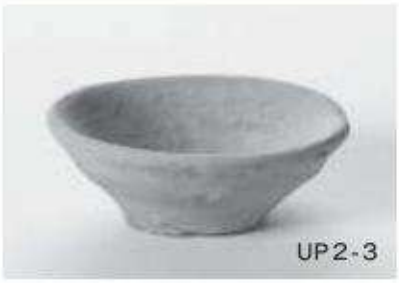
第 59 号 土 坑
完 掘 状 況

PL5

UP2-4

UP2-5

UP2-6


UP2-3

SK61-8

第1号塚-11

第1号塚-9

第1号塚-13

第1号塚-14

第1号塚-16

第1号塚-15

第1号塚-17

第２号地下式坑・第61号土坑・第１号塚出土土器

PL6

遺構外 -18

遺構外 -23

遺構外 -26

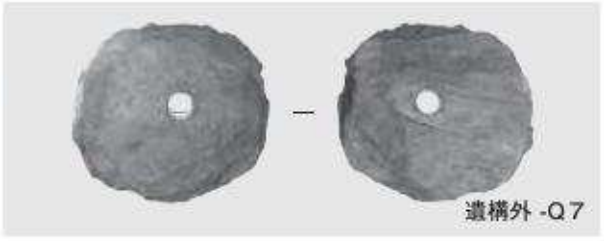
遺構外 -TP4　遺構外 -TP5

遺構外 -DP6

遺構外 -DP11

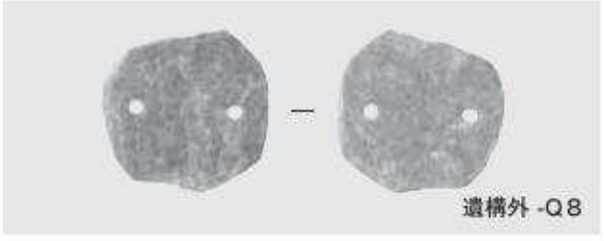
遺構外 -DP7

遺構外 -DP8


遺構外 -Q7

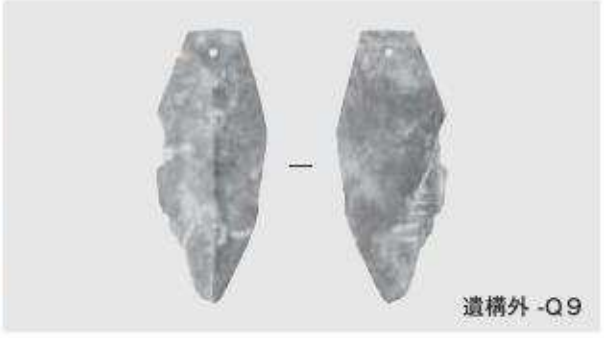
遺構外 -DP9

遺構外 -DP10


遺構外 -Q8

遺構外 -DP12

UP2-DP5


遺構外 -Q9

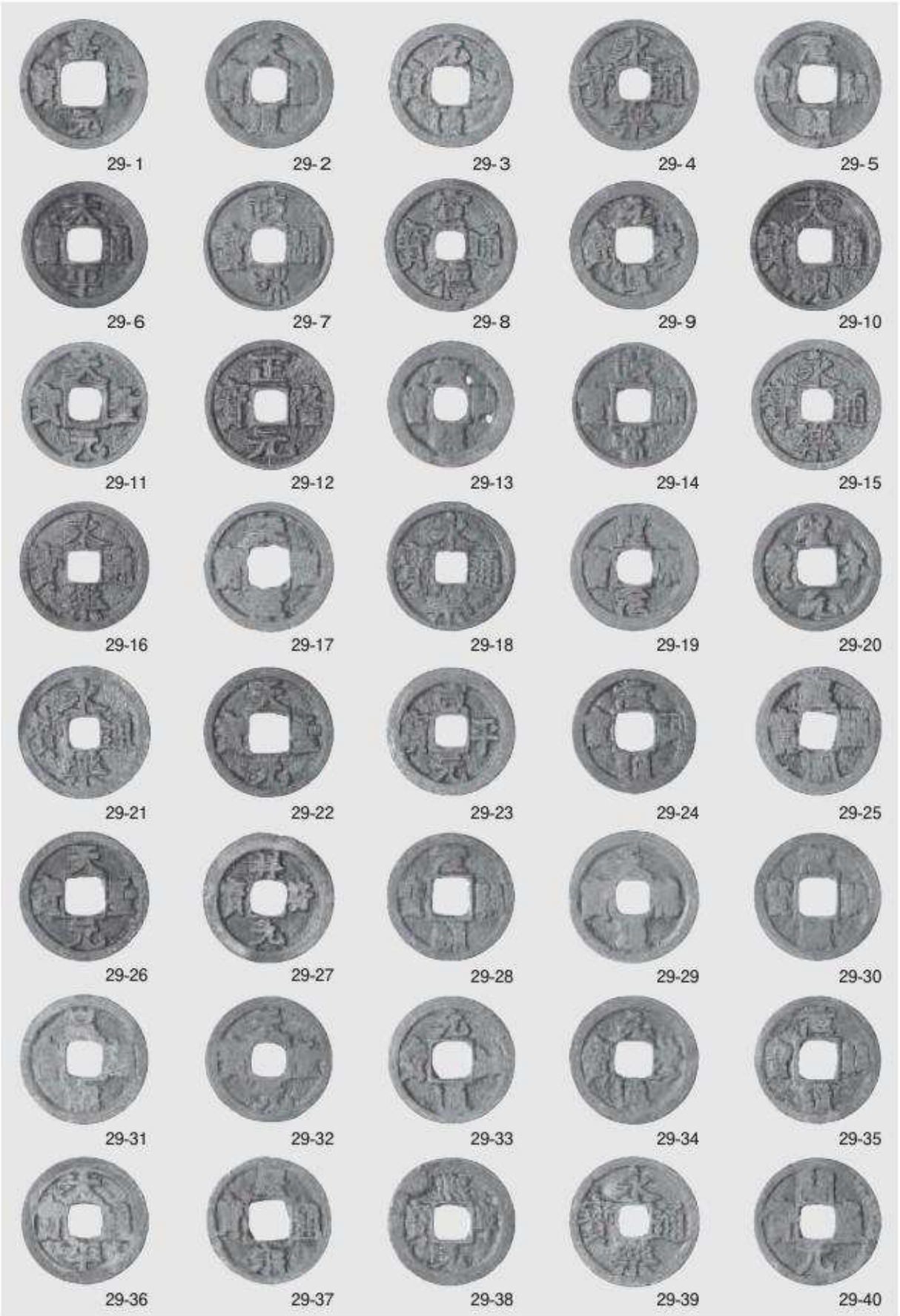
第2号地下式坑・遺構外出土土器，土製品，石器・石製品

PL7

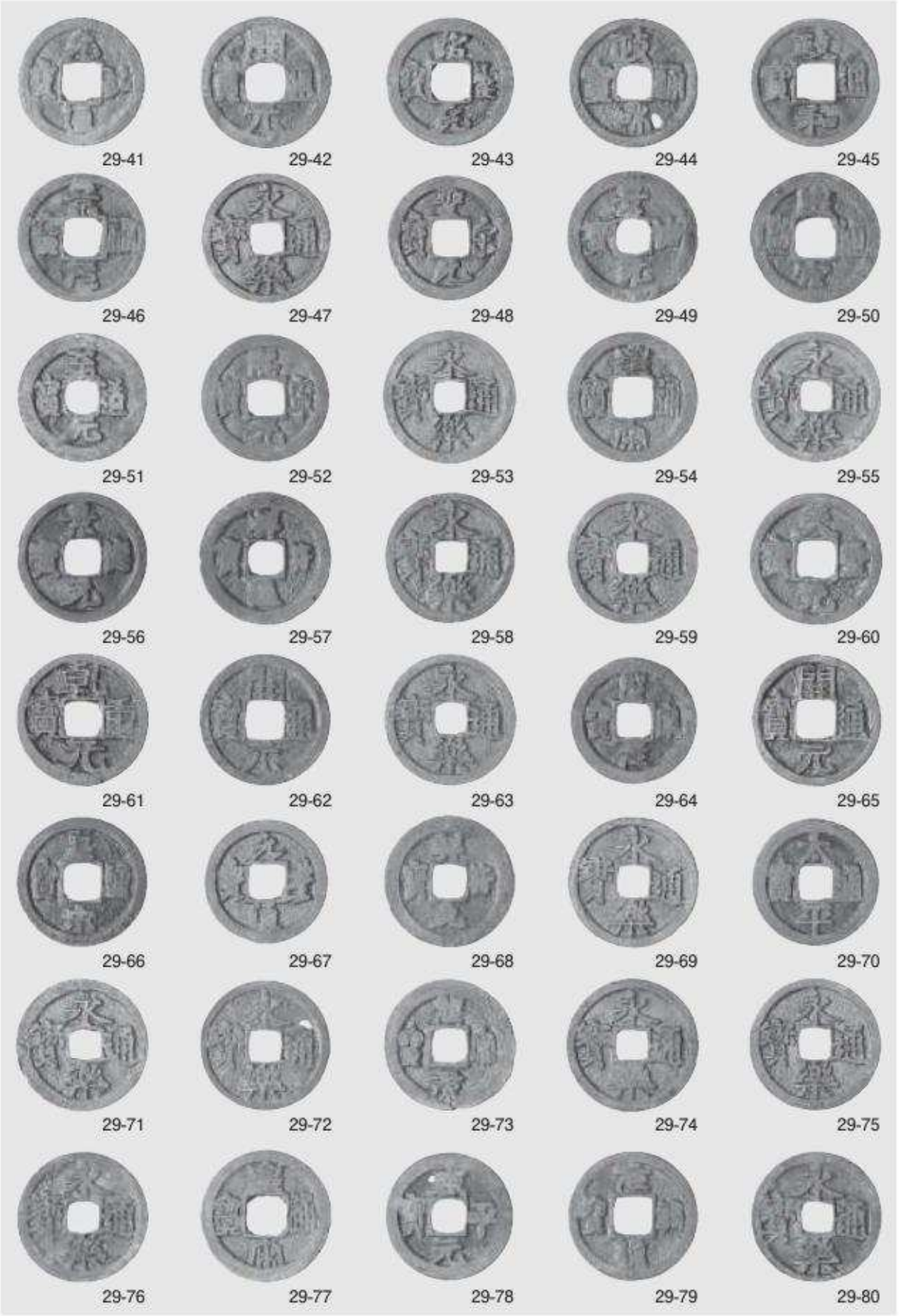
Q3

第 1 号塚出土石製品（石塔）

PL8

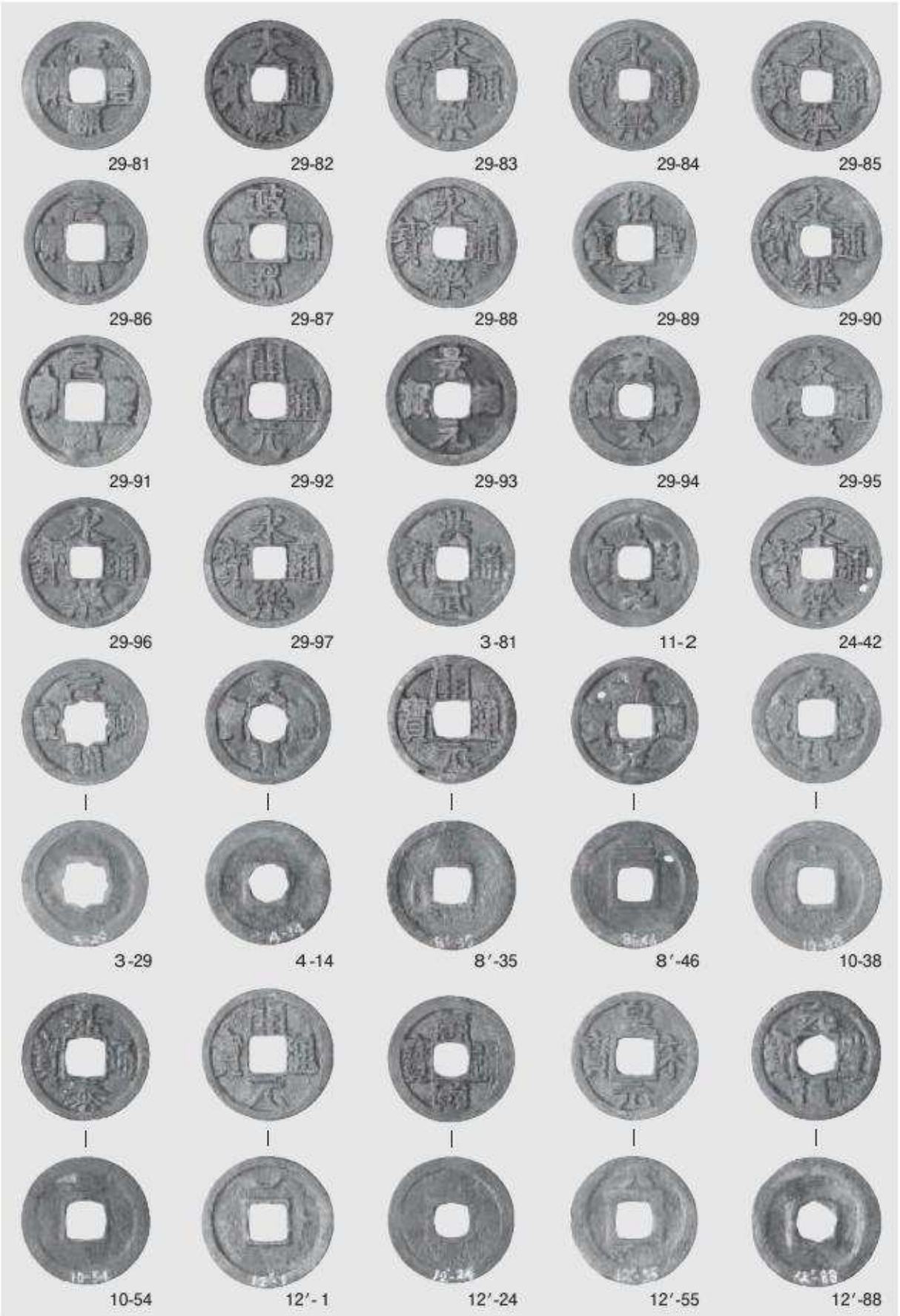


第 1 号地下式坑出土銭貨



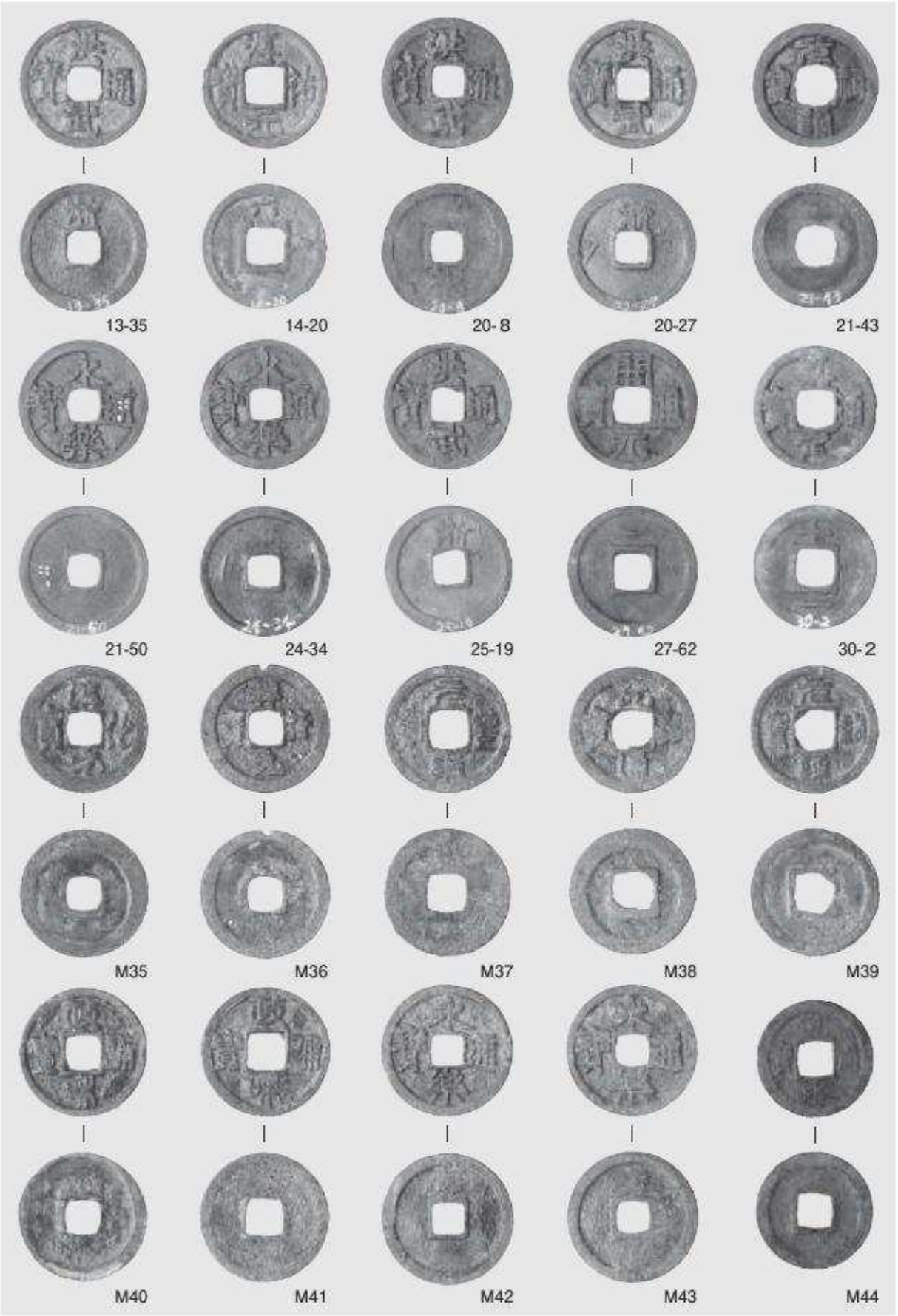
第 1 号地下式坑出土銭貨

PL10



第１号地下式坑出土銭貨

PL11



第１号地下式坑，第１号塚出土銭貨

神屋遺跡調査Ａ区全景

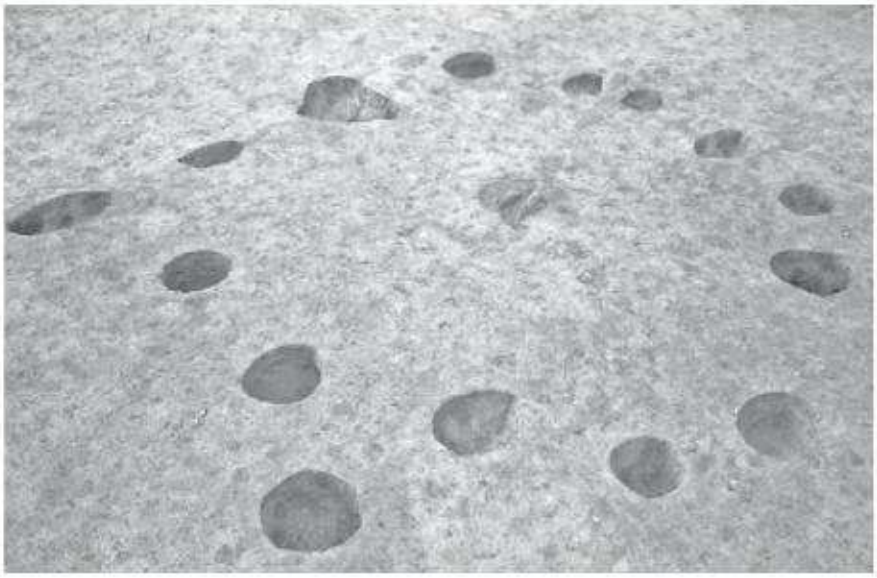
神屋遺跡調査Ｂ区全景（東から）

PL13

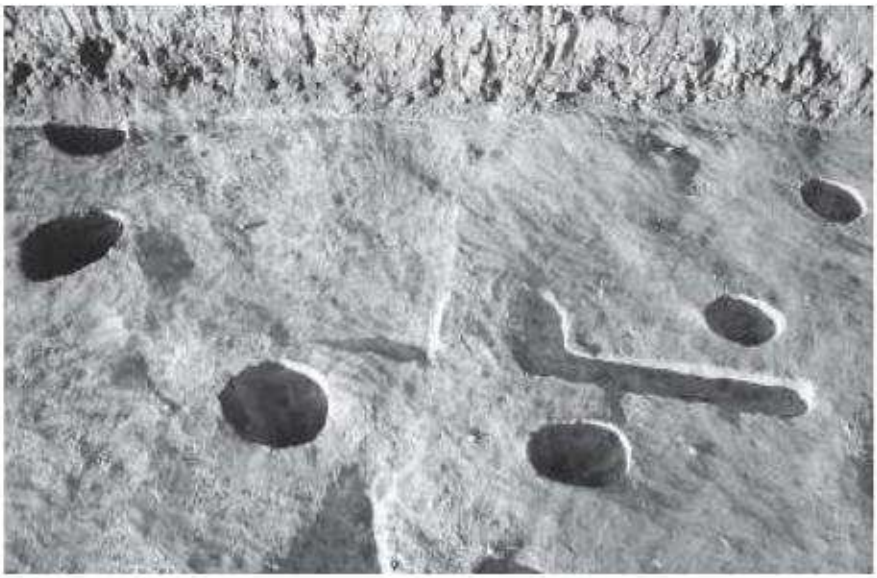
神屋遺跡調査C・D区遠景（北から）

神屋遺跡調査D区全景

PL14



第133号竪穴建物跡
完　掘　状　況



第134号竪穴建物跡
完　掘　状　況

第 1 号陥し穴
完　掘　状　況

PL15

第５号陥し穴
完　掘　状　況

第３号竪穴建物跡
遺物出土状況

第７号竪穴建物跡
遺物出土状況

PL16

第７号竪穴建物跡
貯　　蔵　　穴
遺 物 出 土 状 況

第７号竪穴建物跡
完　掘　状　況

第12号竪穴建物跡
遺 物 出 土 状 況

PL17

第18号竪穴建物跡
遺物出土状況

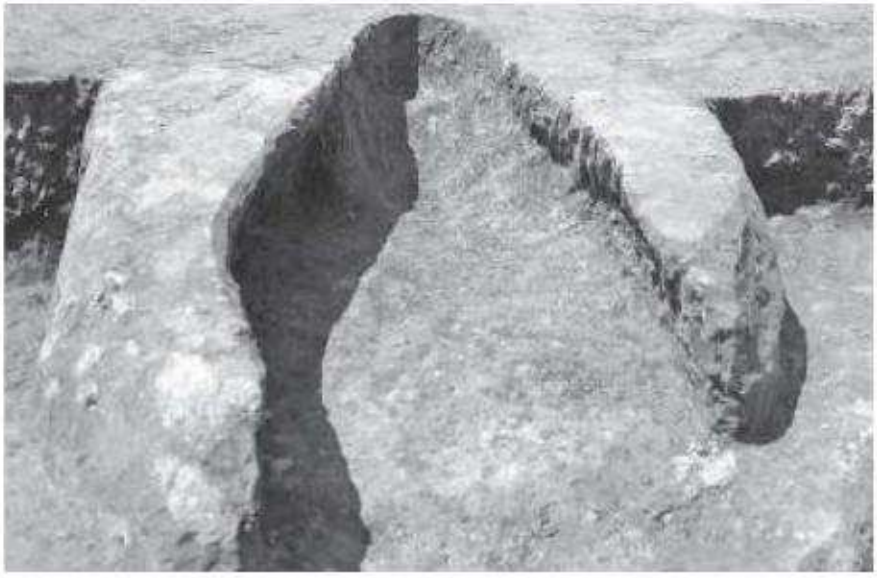
第19号竪穴建物跡
遺物出土状況

第19号竪穴建物跡
完掘状況

PL18

第21号竪穴建物跡
完　掘　状　況

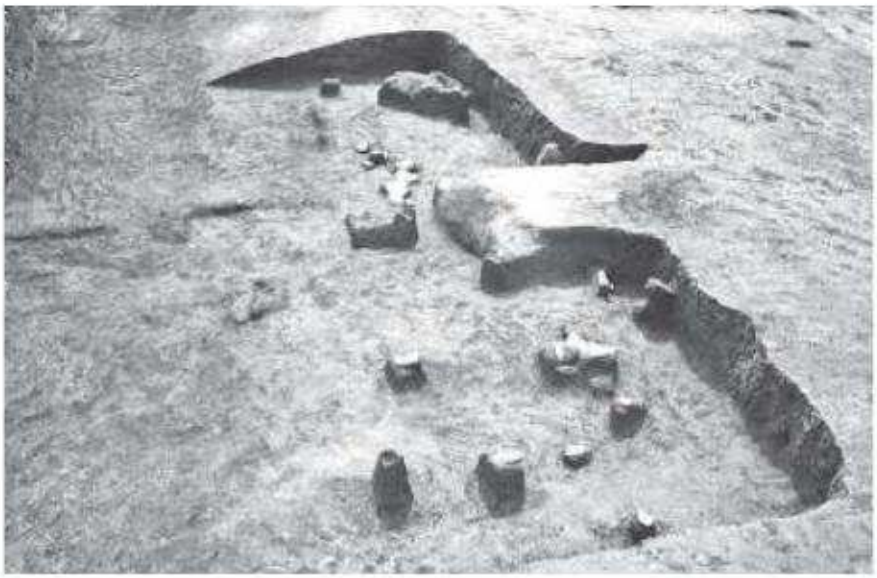
第25号竪穴建物跡
遺物出土状況



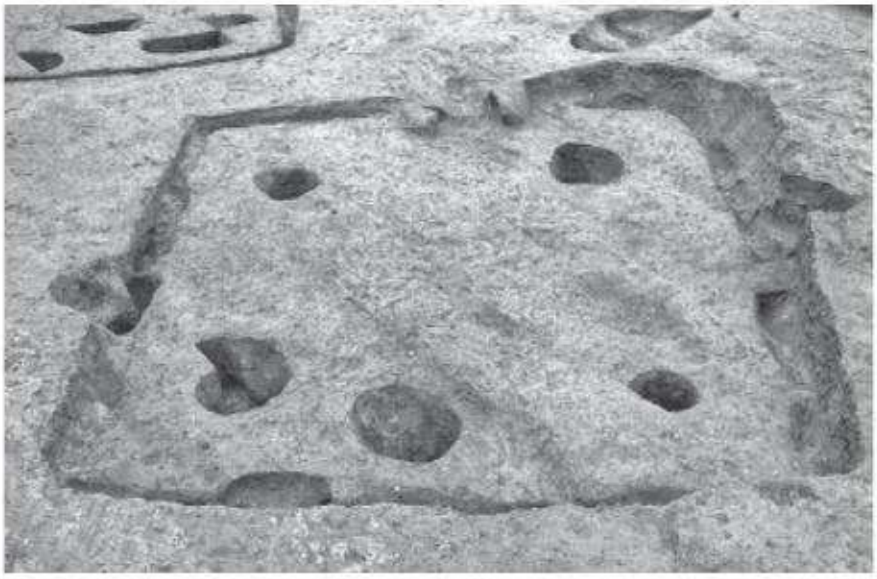
第25号竪穴建物跡
竈　完　掘　状　況

PL19

第28号竪穴建物跡
完　掘　状　況



第31号竪穴建物跡
遺物出土状況



第38号竪穴建物跡
完　掘　状　況

PL20

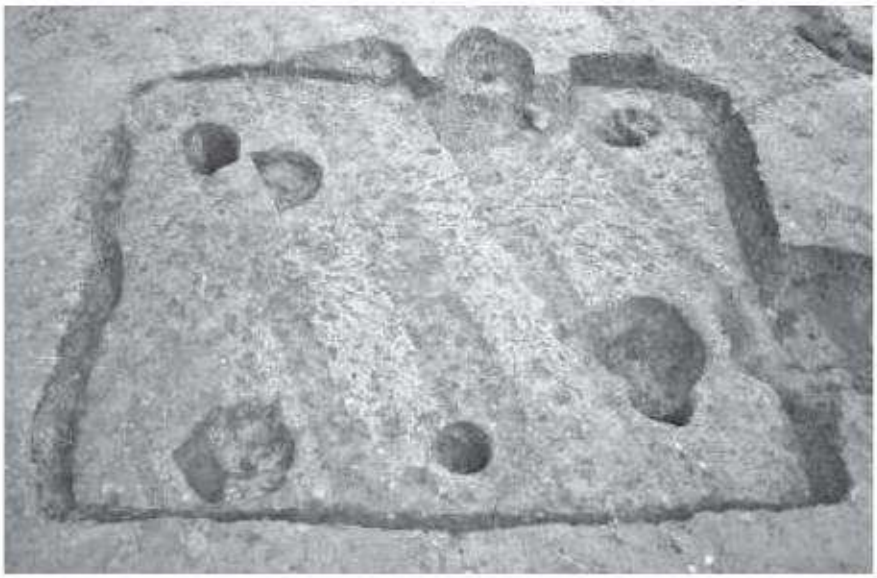
第39号竪穴建物跡
馬骨出土状況

第41号竪穴建物跡
遺物出土状況

第45号竪穴建物跡
竈遺物出土状況

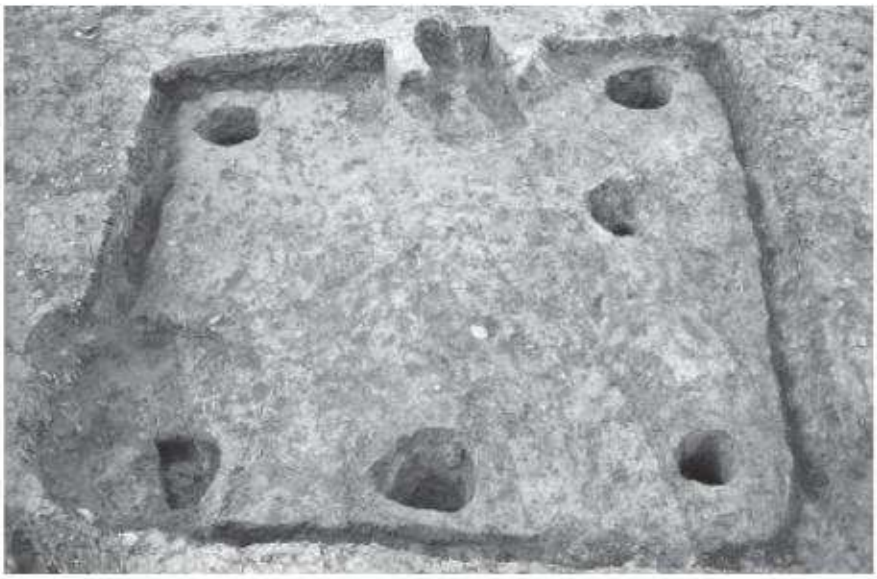
第46号竪穴建物跡
竈遺物出土状況

第53号竪穴建物跡
完　掘　状　況



第56号竪穴建物跡
完　掘　状　況

第61号竪穴建物跡
遺物出土状況

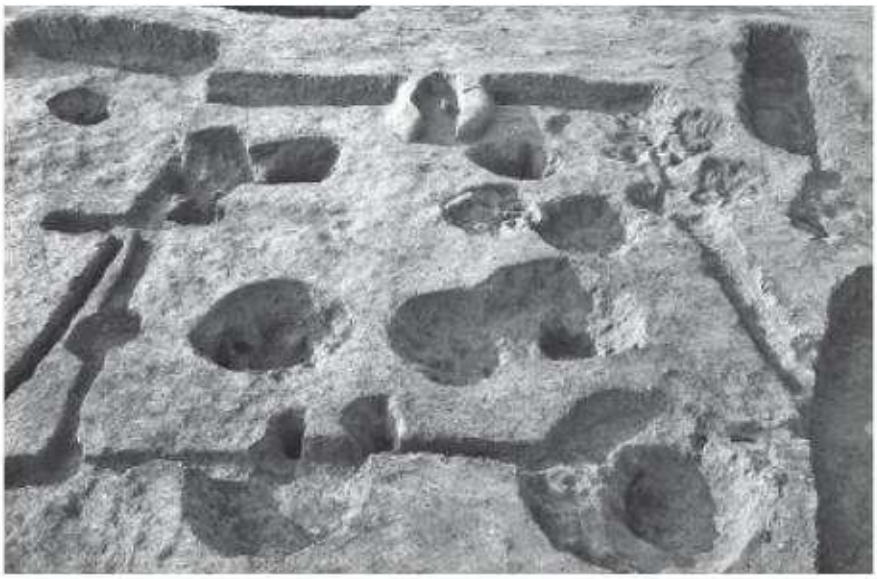


第61号竪穴建物跡
完掘状況

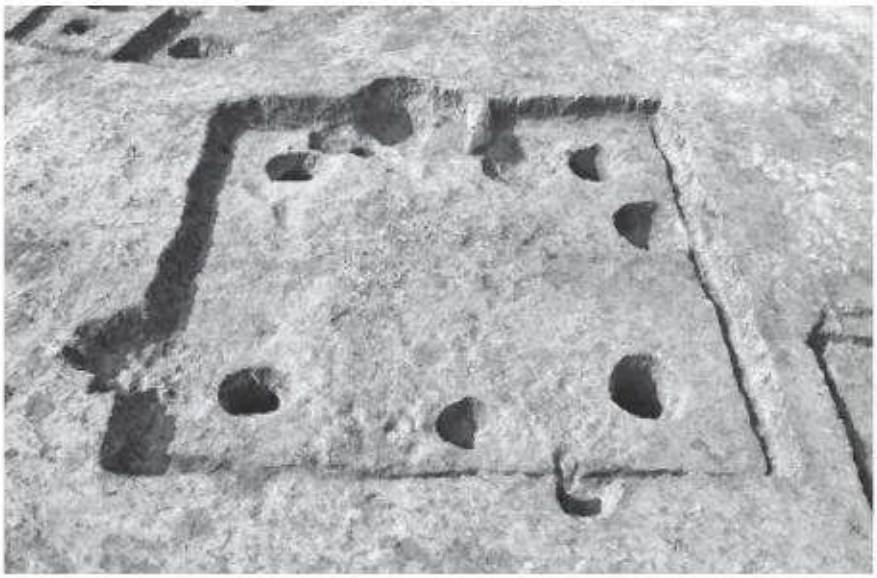
第72号竪穴建物跡
完掘状況

PL23

第77号竪穴建物跡
遺物出土状況



第85号竪穴建物跡
完掘状況



第95号竪穴建物跡
完掘状況

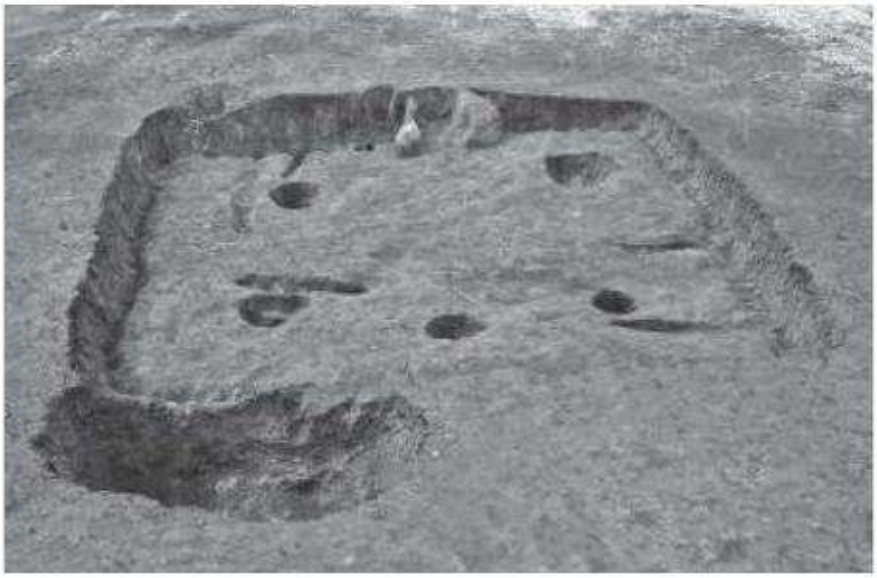
PL24

第96号竪穴建物跡
遺物出土状況

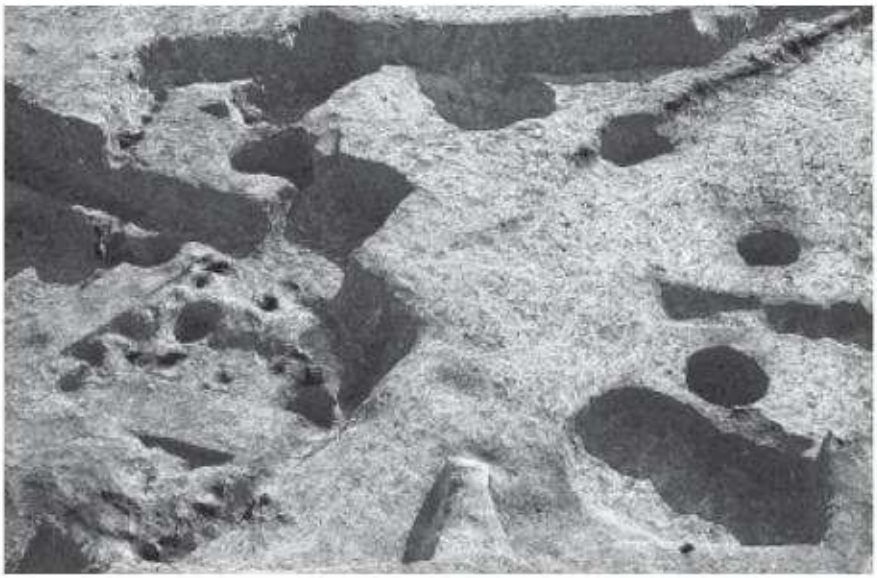
第99号竪穴建物跡
完掘状況

第100号竪穴建物跡
遺物出土状況

PL25



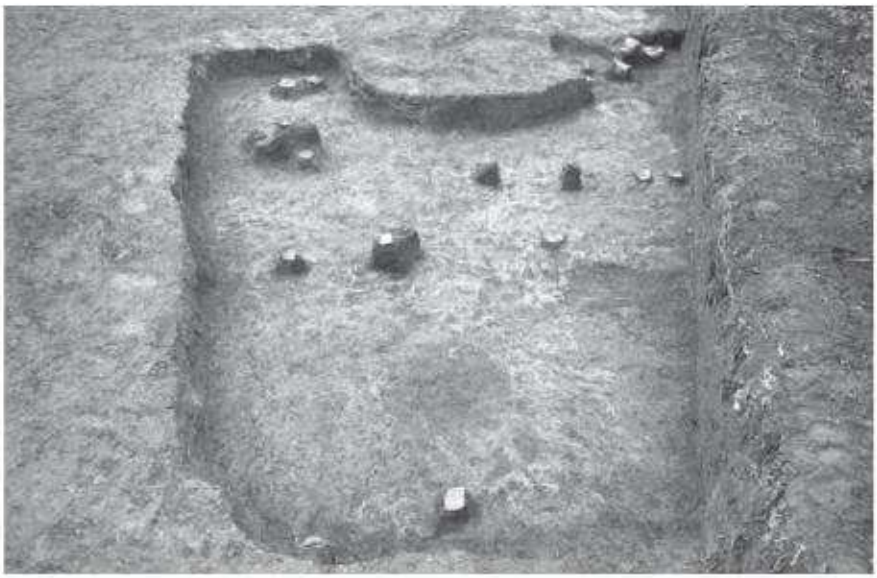
第100号竪穴建物跡
完　掘　状　況



第108号竪穴建物跡
完　掘　状　況

第112号竪穴建物跡
完　掘　状　況

第114号竪穴建物跡
完　掘　状　況



第116号竪穴建物跡
遺 物 出 土 状 況

第116号竪穴建物跡
完　掘　状　況

PL27

第117号竪穴建物跡
完　掘　状　況

第121号竪穴建物跡
遺 物 出 土 状 況

第121~125号竪穴建物跡
完　掘　状　況

PL28

第 753 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況

第20号竪穴建物跡
竈 完 掘 状 況

第20号竪穴建物跡
完 掘 状 況

PL29

第22号竪穴建物跡
遺物出土状況①

第22号竪穴建物跡
遺物出土状況②

第23号竪穴建物跡
完掘状況

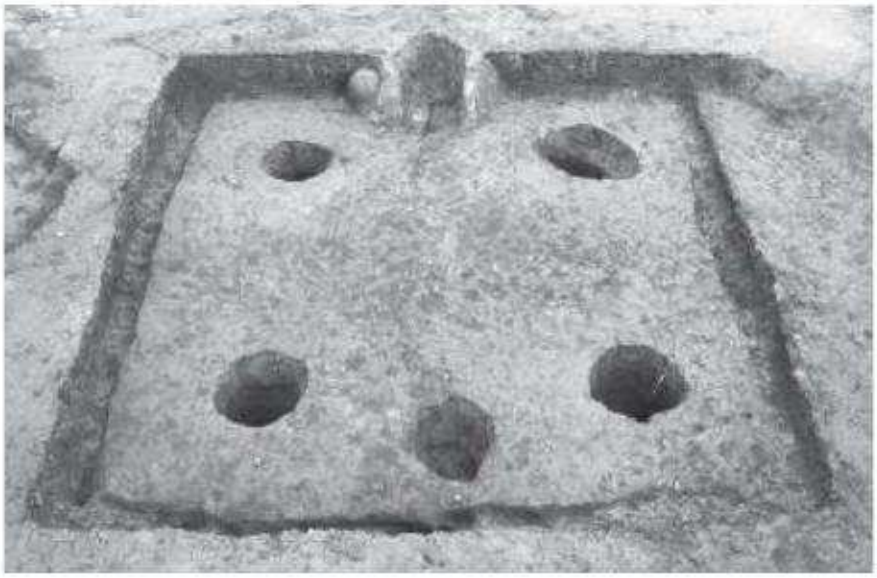
PL30

第24号竪穴建物跡
竈遺物出土状況

第24号竪穴建物跡
完　掘　状　況

第33号竪穴建物跡
遺物出土状況

PL31



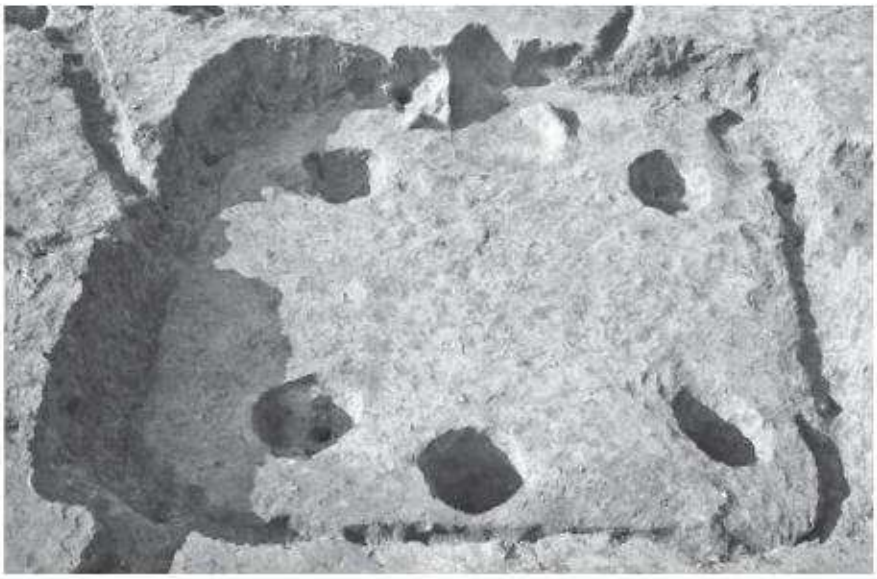
第64号竪穴建物跡
完　掘　状　況

第70号竪穴建物跡
遺 物 出 土 状 況

第76号竪穴建物跡
完　掘　状　況

PL32

第80号竪穴建物跡
完　掘　状　況



第88号竪穴建物跡
完　掘　状　況

第107号竪穴建物跡
遺 物 出 土 状 況

PL33

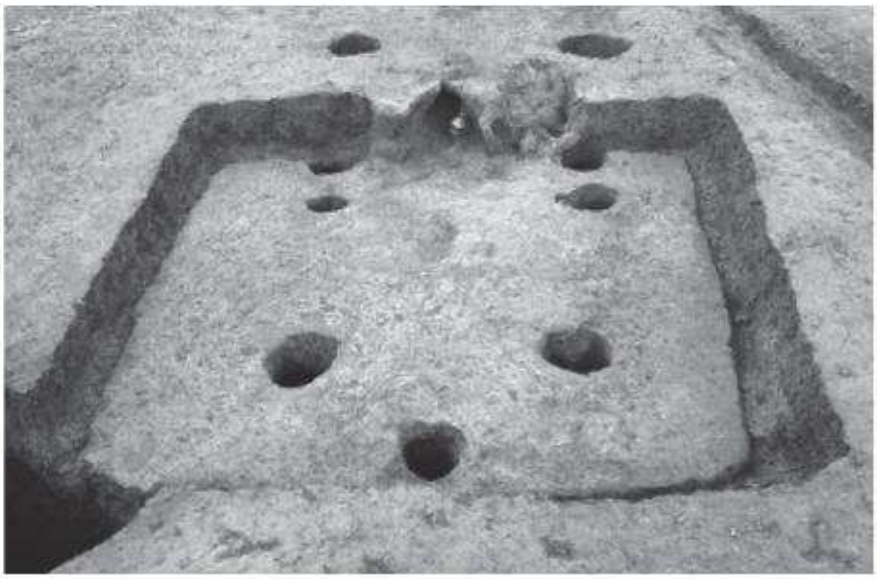
第118号竪穴建物跡
遺物出土状況

第118号竪穴建物跡
完掘状況

第137号竪穴建物跡
完掘状況

PL34

第２号竪穴建物跡
竈 完 掘 状 況

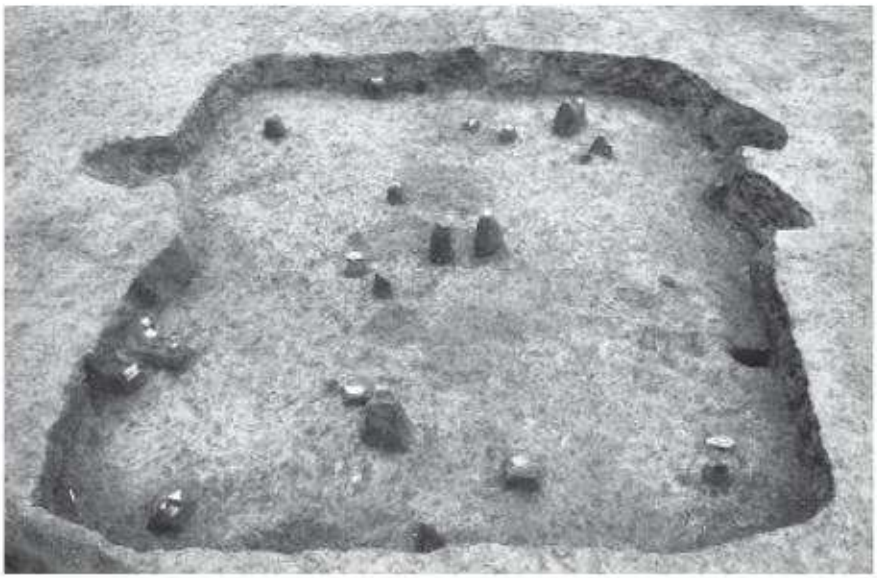


第２号竪穴建物跡
完 掘 状 況

第５号竪穴建物跡
遺 物 出 土 状 況

PL35

第５号竪穴建物跡
完　掘　状　況



第６号竪穴建物跡
遺物出土状況①

第６号竪穴建物跡
遺物出土状況②

PL36

第６号竪穴建物跡
完　掘　状　況

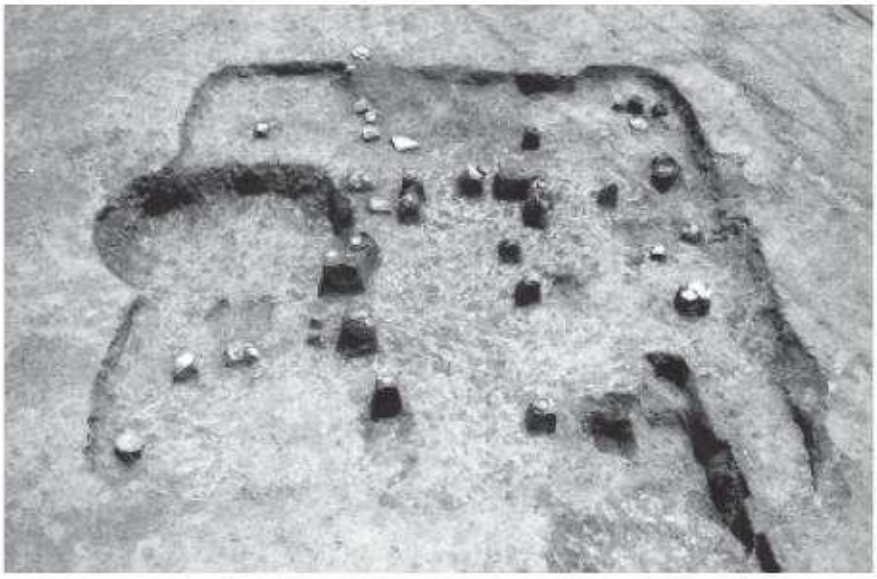
第８号竪穴建物跡
遺 物 出 土 状 況

第９号竪穴建物跡
遺 物 出 土 状 況

PL37

第11号竪穴建物跡
遺物出土状況

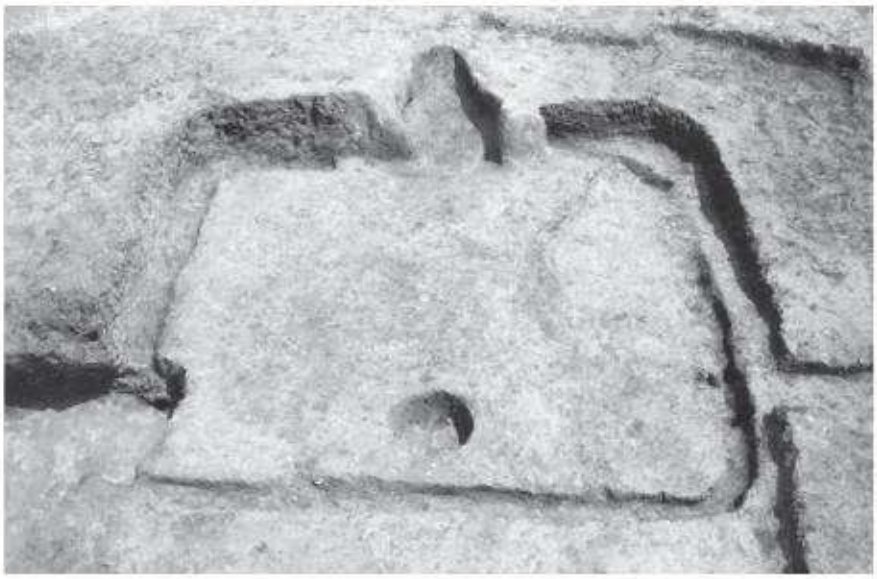
第11号竪穴建物跡
完掘状況



第13号竪穴建物跡
遺物出土状況

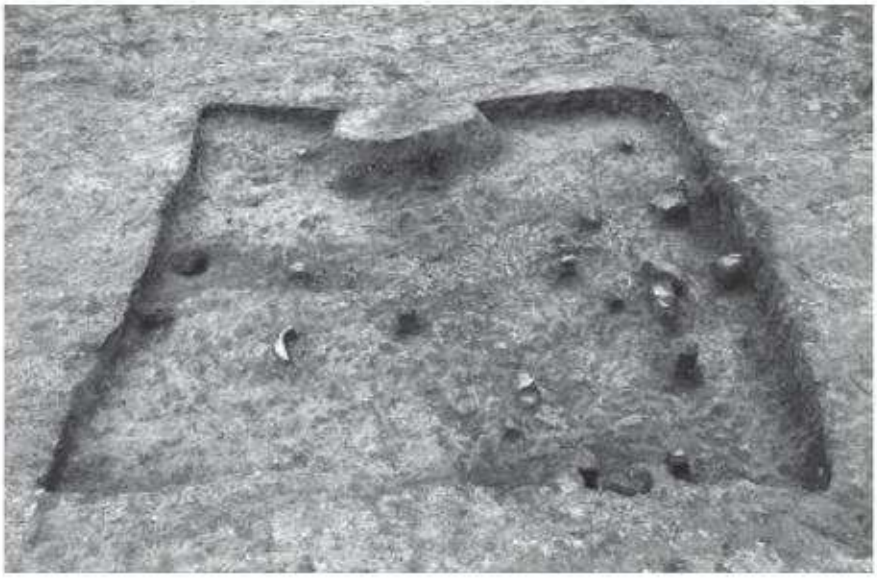
第14号竪穴建物跡
遺物出土状況

第17号竪穴建物跡
竈完掘状況

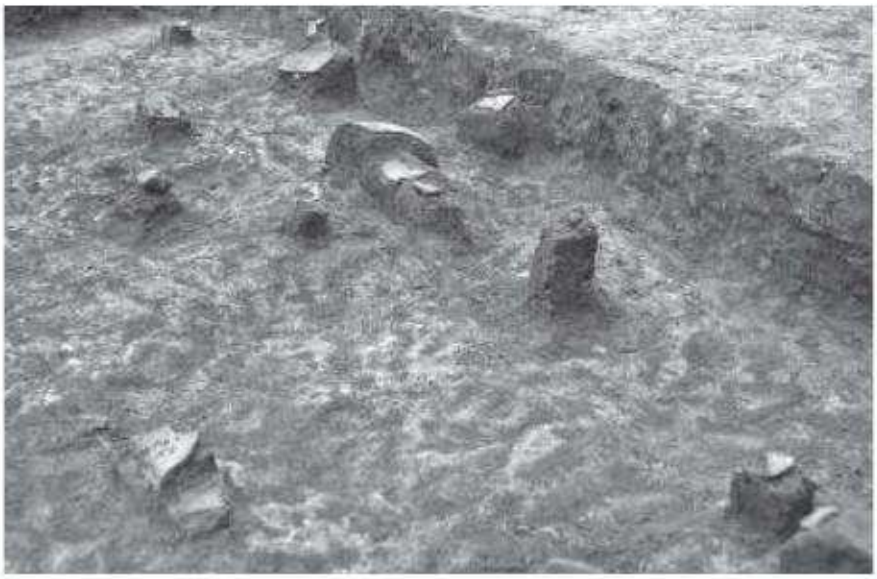


第17号竪穴建物跡
完掘状況

PL39



第30号竪穴建物跡
遺物出土状況①



第30号竪穴建物跡
遺物出土状況②

第32号竪穴建物跡
遺物出土状況

第32号竪穴建物跡
完　掘　状　況

第44号竪穴建物跡
遺 物 出 土 状 況

第44号竪穴建物跡
完　掘　状　況

PL41

第49号竪穴建物跡
遺物出土状況

第50号竪穴建物跡
遺物出土状況

第51号竪穴建物跡
完掘状況

PL42

第59号竪穴建物跡
竈遺物出土状況

第65号竪穴建物跡
遺物出土状況

第65号竪穴建物跡
完掘状況

PL43

第66号竪穴建物跡
遺物出土状況

第71号竪穴建物跡
完掘状況

第79号竪穴建物跡
完掘状況

PL44

第98号竪穴建物跡
竈遺物出土状況

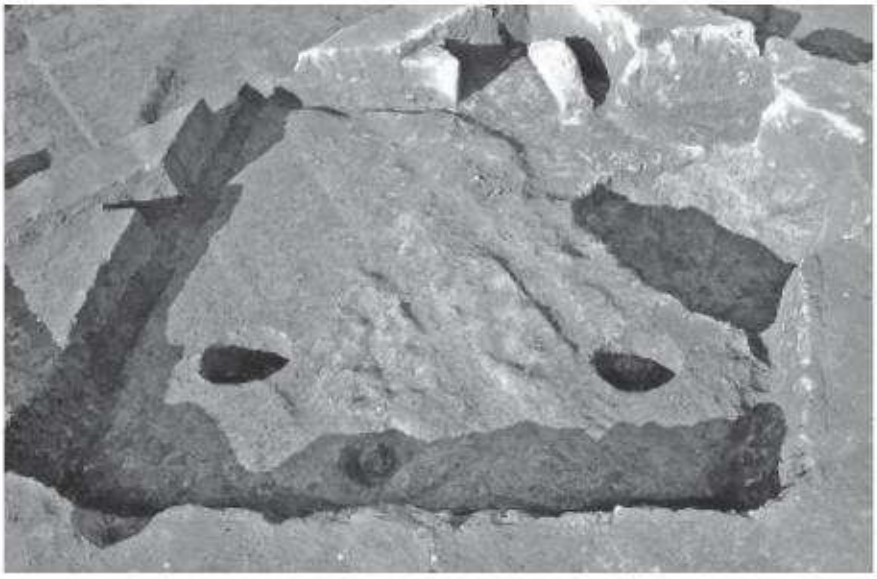
第104号竪穴建物跡
完　掘　状　況

第109号竪穴建物跡
遺物出土状況

PL45

第110号竪穴建物跡
遺物出土状況

第110号竪穴建物跡
完掘状況

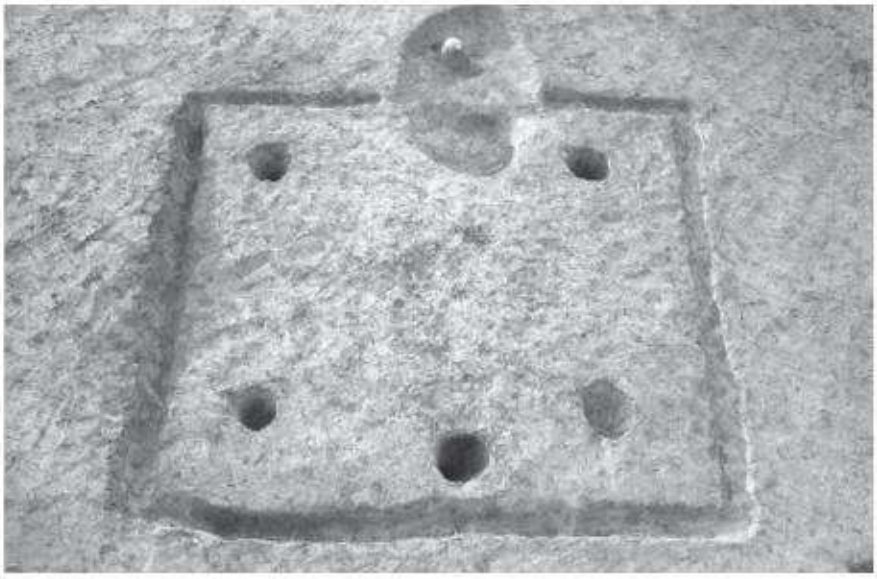


第113号竪穴建物跡
完掘状況

PL46

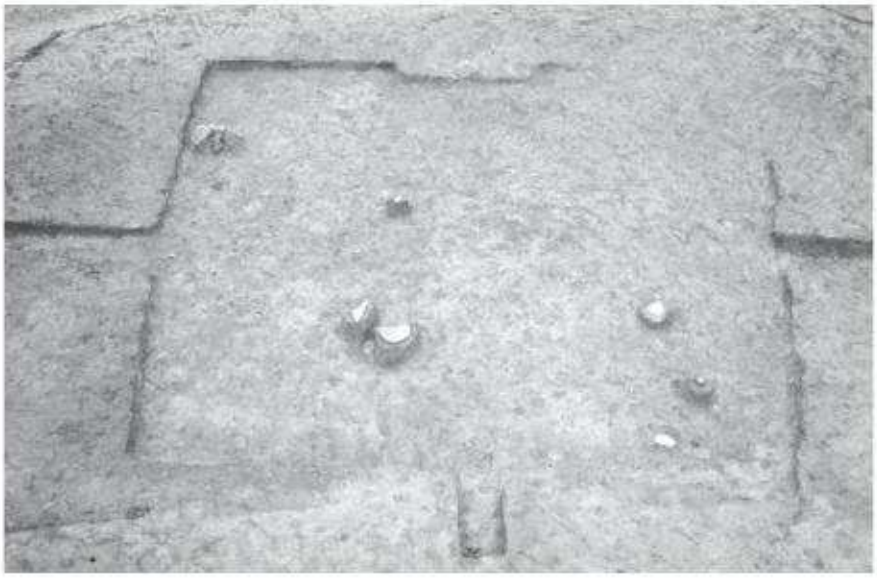
第115号竪穴建物跡
完　掘　状　況

第119号竪穴建物跡
遺 物 出 土 状 況



第119号竪穴建物跡
完　掘　状　況

PL47



第120号竪穴建物跡
遺物出土状況

第122号竪穴建物跡
遺物出土状況

第123号竪穴建物跡
竈完掘状況

PL48

第123号竪穴建物跡
完　掘　状　況

第126号竪穴建物跡
完　掘　状　況

第128号竪穴建物跡
遺 物 出 土 状 況

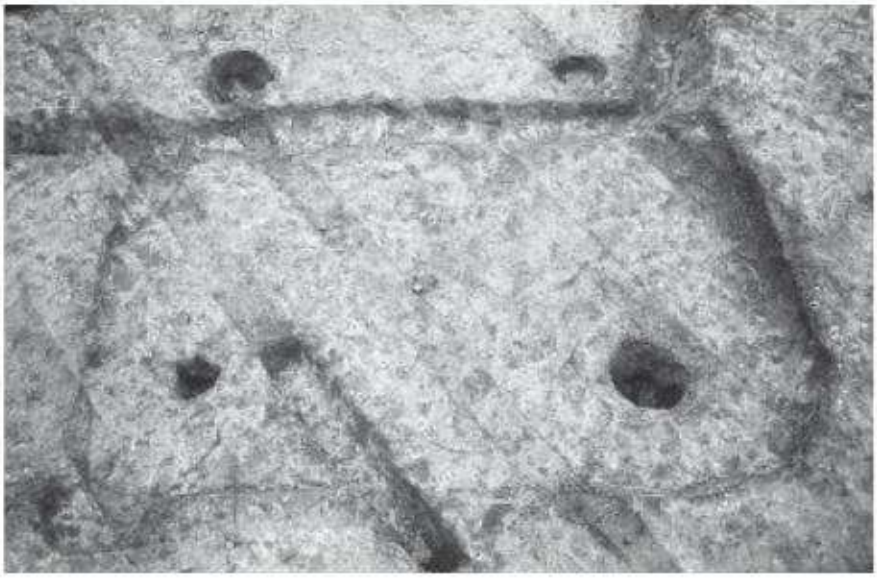
PL49

第128号竪穴建物跡
完　掘　状　況

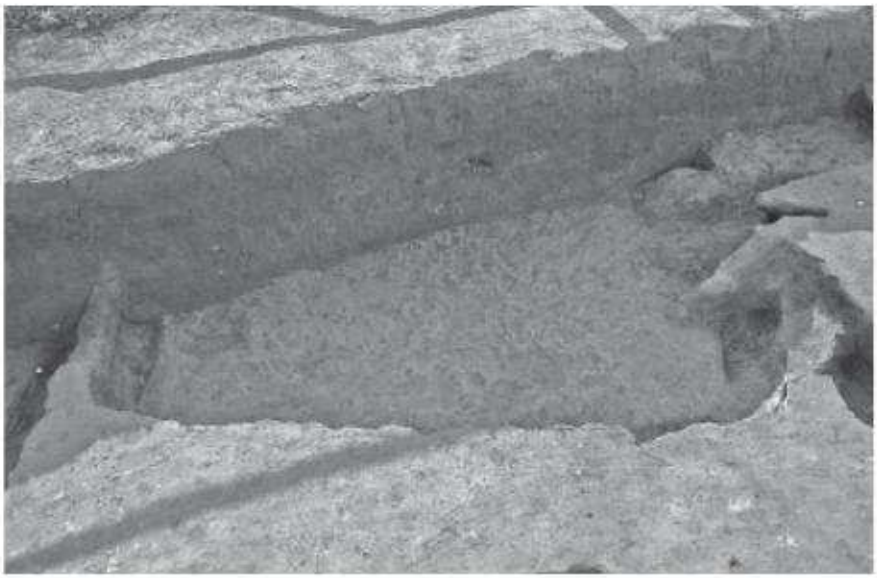
第129号竪穴建物跡
竈遺物出土状況

第129号竪穴建物跡
完　掘　状　況

PL50



第130号竪穴建物跡
完　掘　状　況



第141号竪穴建物跡
完　掘　状　況

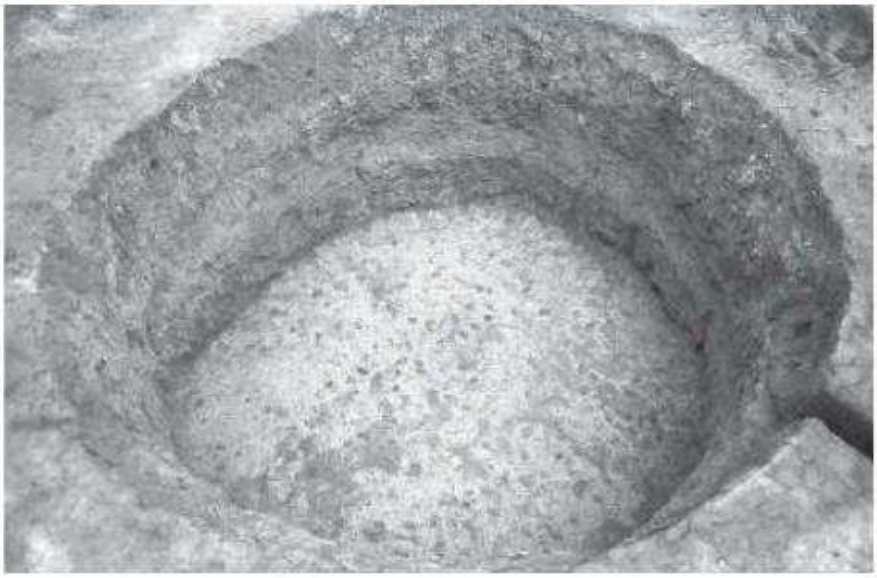
第1号掘立柱建物跡
完　掘　状　況

PL51

第5号掘立柱建物跡
完　掘　状　況

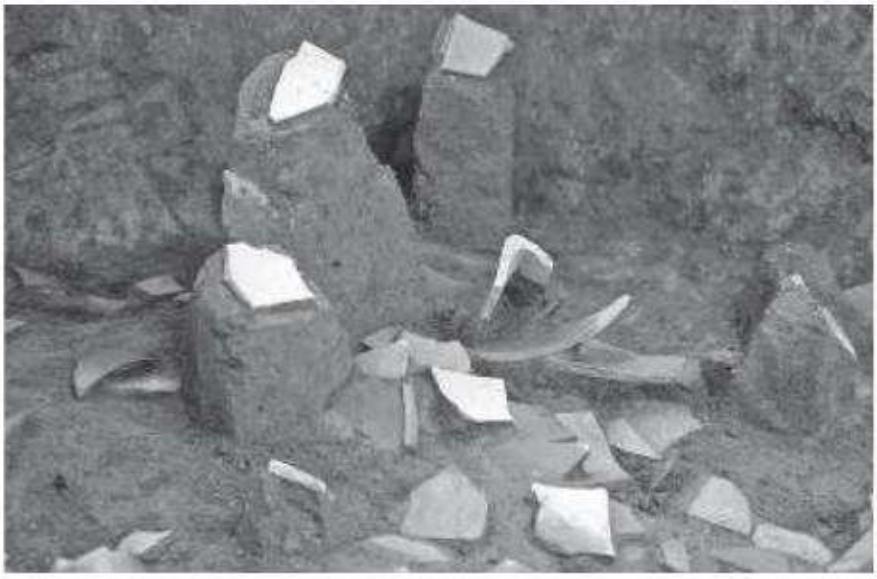
第1号大型円形土坑
遺物出土状況①

第1号大型円形土坑
遺物出土状況②



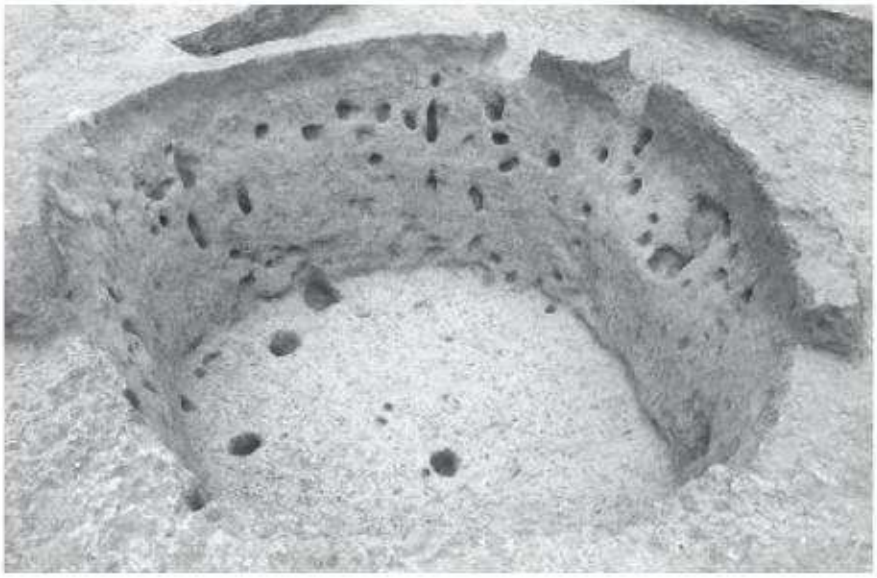
第1号大型円形土坑
完　掘　状　況

第2号大型円形土坑
遺物出土状況①



第2号大型円形土坑
遺物出土状況②

PL53



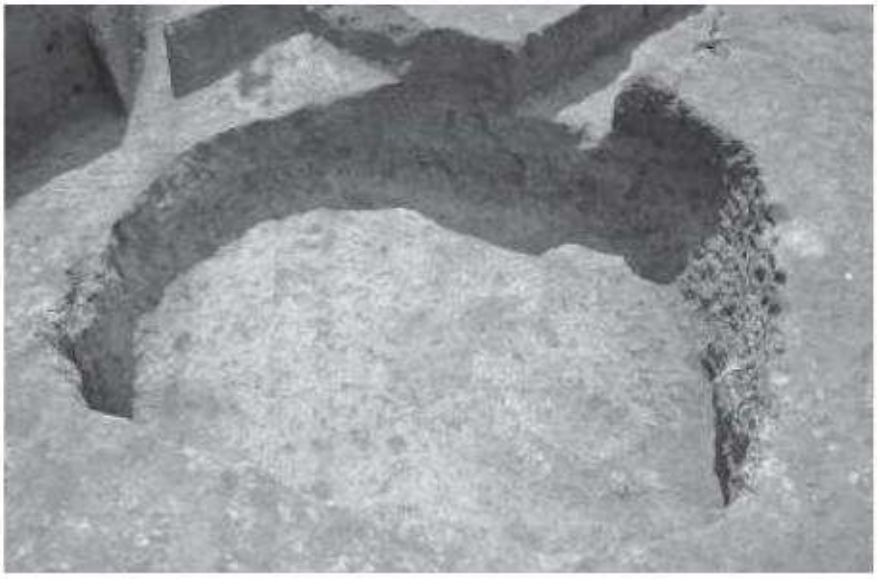
第2号大型円形土坑
完　掘　状　況

第3号大型円形土坑
遺物出土状況

第3号大型円形土坑
完　掘　状　況

第4号大型円形土坑
遺物出土状況①

第4号大型円形土坑
遺物出土状況②



第4号大型円形土坑
完掘状況

PL55

第 47 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況

第 400 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況

第 445 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況

PL56

第 548 号　土　坑
遺 物 出 土 状 況

第 563 号　土　坑
遺 物 出 土 状 況

第 648 号　土　坑
遺 物 出 土 状 況

PL57

第744号 土坑
遺物出土状況

第1号地下式坑
完掘状況

第1号火葬施設
完掘状況

第 317 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況

第 1 号 道 路 跡
第 1 面 確 認 状 況

第 1 号 道 路 跡
第 2 面 完 掘 状 況

PL59

SI 7-6

SI 7-7

SI 7-11

SI 7-12

SI 12-15

SI 12-18

SI 12-16

SI 18-19

SI 18-20

第7・12・18号竪穴建物跡出土土器

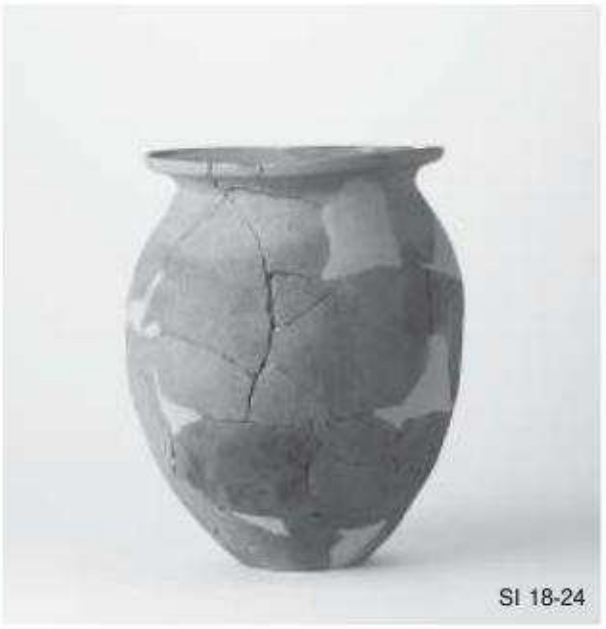
SI 18-23

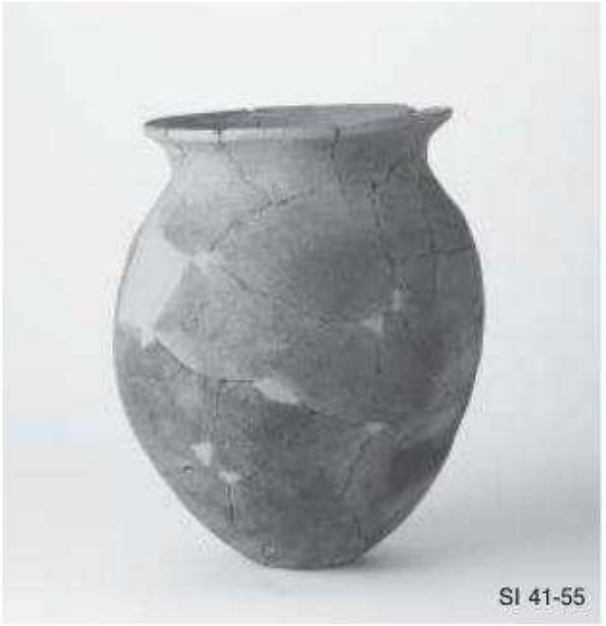
SI 39-48

SI 27-33

SI 27-32

SI 29-39


SI 18-24


SI 41-55

第18・27・29・39・41号竪穴建物跡出土土器

PL61

SI 42-58

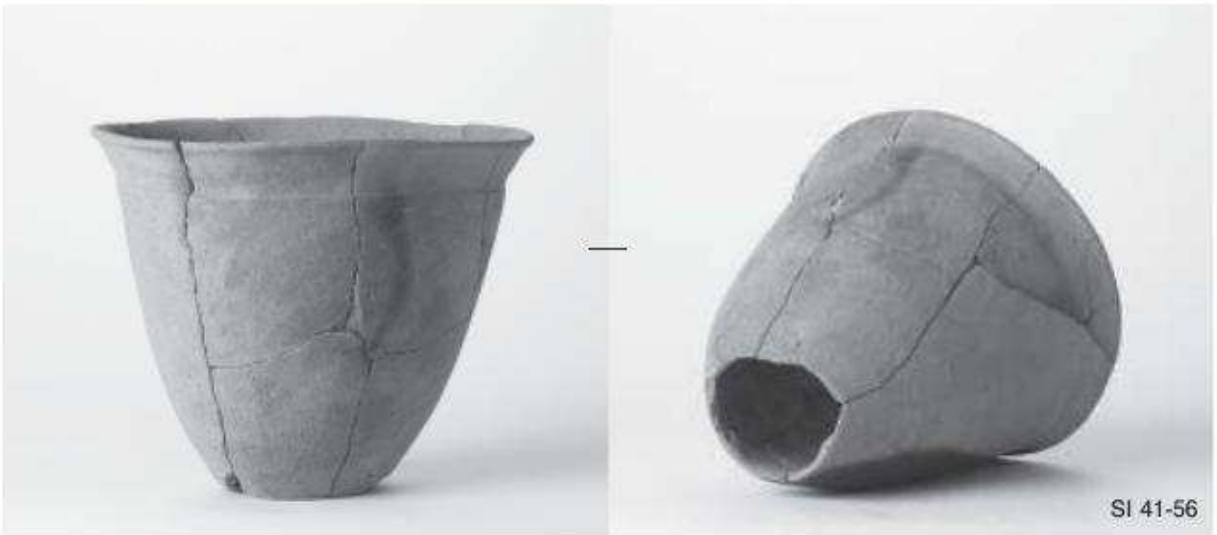
SI 43-63

SI 43-64

SI 43-65

SI 43-66

SI 43-67


SI 41-56

第41～43号竪穴建物跡出土土器

PL62

SI 45-70

SI 45-75

SI 43-69

SI 45-71

SI 45-72

SI 72-97

SI 72-96

SI 73-102

第43・45・72・73号竪穴建物跡出土土器

PL63

SI 77-103

SI 84-108

SI 84-109

SI 94-130

SI 84-112

SI 85-114

SI 112-157

SI 94-129

SI 100-144

SI 90-120

第77・84・85・90・94・100・112号竪穴建物跡出土土器

SI 114-162

SI 114-159

SI 117-167

SI 121-171

SI 121-169

SI 121-170

SI 121-172

SI 121-173

SI 112-156

第112・114・117・121号竪穴建物跡出土土器

PL65

SI 22-197

SI 102-229

SI 107-236

SI 105-234

SK619-248

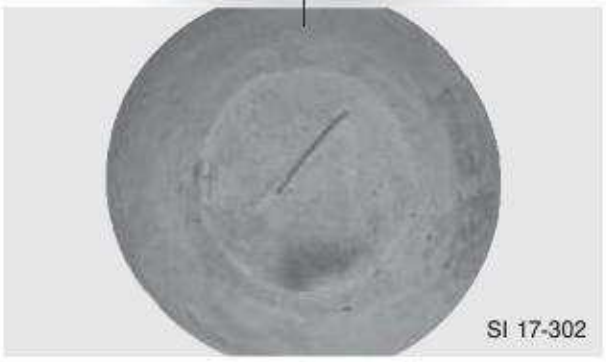
SI 22-198

SI 137-242

SI 64-213

SI 64-212

第22・64・102・105・107・137号竪穴建物跡，第619号土坑出土土器


SI 17-302

SI 44-335

SI 44-336

SI 44-337

SI 44-352

SI 44-353

SI 44-354

SI 44-356

第17・44号竪穴建物跡出土土器

PL67

SI 44-357

SI 49-368

SI 50-374

SI 50-375

SI 52-390

SI 52-391

SI 65-415

SI 66-427

第44・49・50・52・65・66号竪穴建物跡出土土器

SI 66-437

SI 66-428

SI 66-432

SI 81-458

SI 82-463

SI 82-473

SI 82-464

SI 82-478

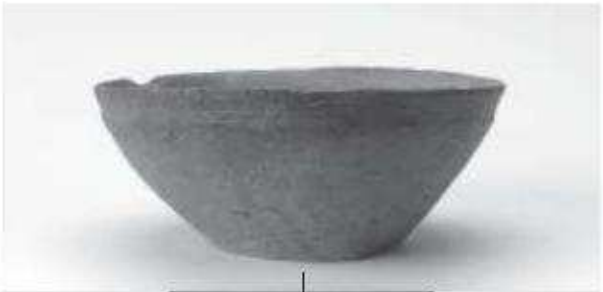
SI 82-479

第66・81・82号竪穴建物跡出土土器

PL69

SI 82-476

SI 83-483



SI 83-484

SI 83-489

SI 83-487

SI 83-485

SI 83-488

SI 83-491

第82・83号竪穴建物跡出土土器

PL70

SI 89-499

SI 98-505

SI 98-507

SI 98-512

SI 98-513

SI 104-522

SI 98-504

SI 98-506

SI 98-509

SI 98-510

SI 109-529

第89・98・104・109号竪穴建物跡出土土器

PL71

SI 109-525

SI 109-526

SI 109-527

SI 109-528

SI 113-533

SI 115-539

SI 115-535

SI 115-540

SI 115-536

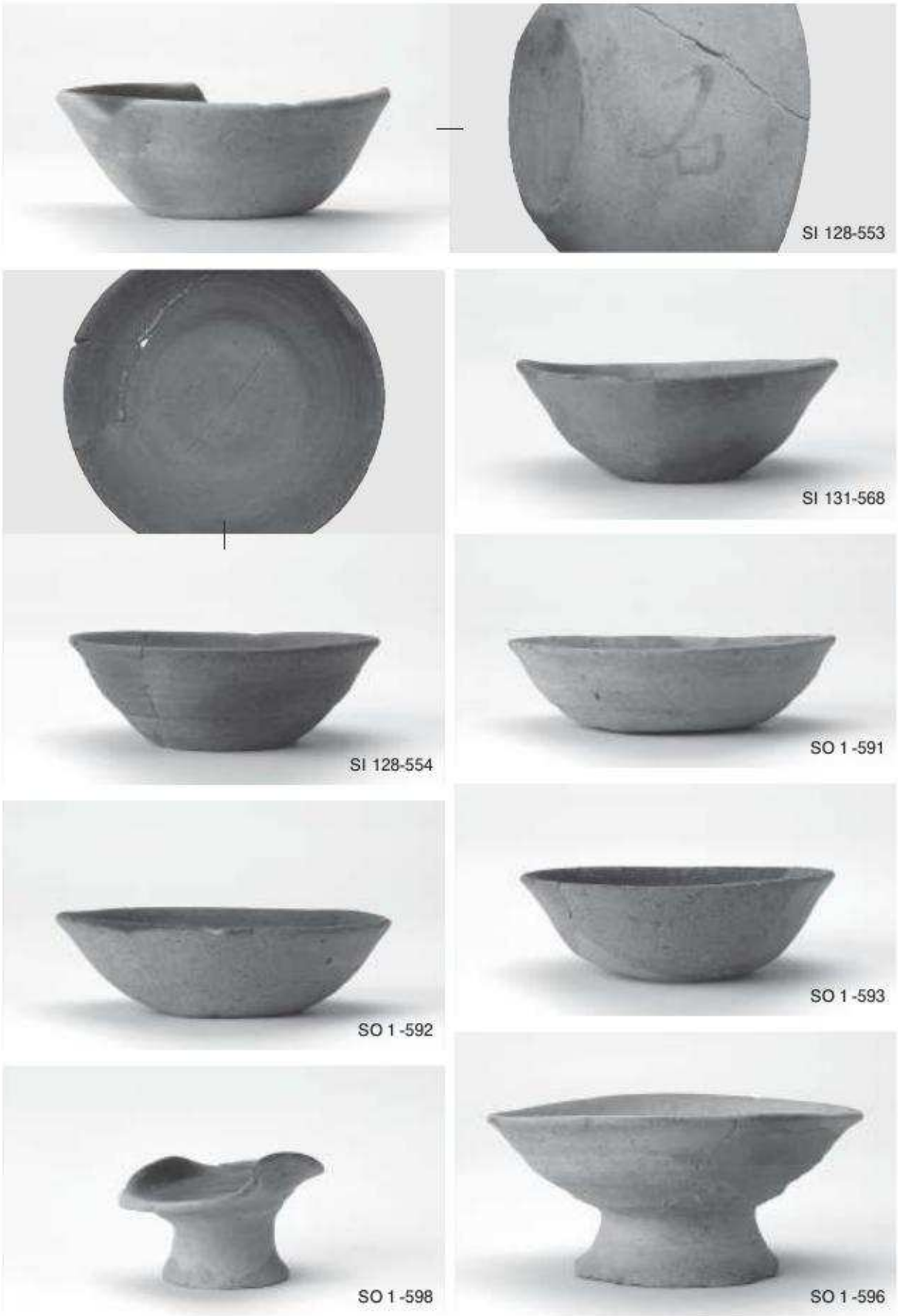
SI 120-544

SI 122-547

SI 129-558

第109・113・115・120・122・129号竪穴建物跡出土土器

PL72



第128・131号竪穴建物跡，第１号大型円形土坑出土土器

PL73

第２号大型円形土坑出土土器

SO2-603

SO3-612

SO3-613

SO3-614

SO3-615

SO3-616

SO3-617

SO3-618

SO1-599

第１～３号大型円形土坑出土土器

PL75

第３・４号大型円形土坑，第400・430・445号土坑出土土器

PL76

SK445-648

SK459-649

SK533-651

SK548-653

SK548-654

SK548-655

SK548-656

SK548-657

SK548-652

SK623-664

SK648-665

SK679-666

第445・459・533・548・623・648・679号土坑出土土器

PL77

SK744-667

SK744-668

SK801-670

遺構外-683

遺構外-709

遺構外-712

SK766-669

SK317-674

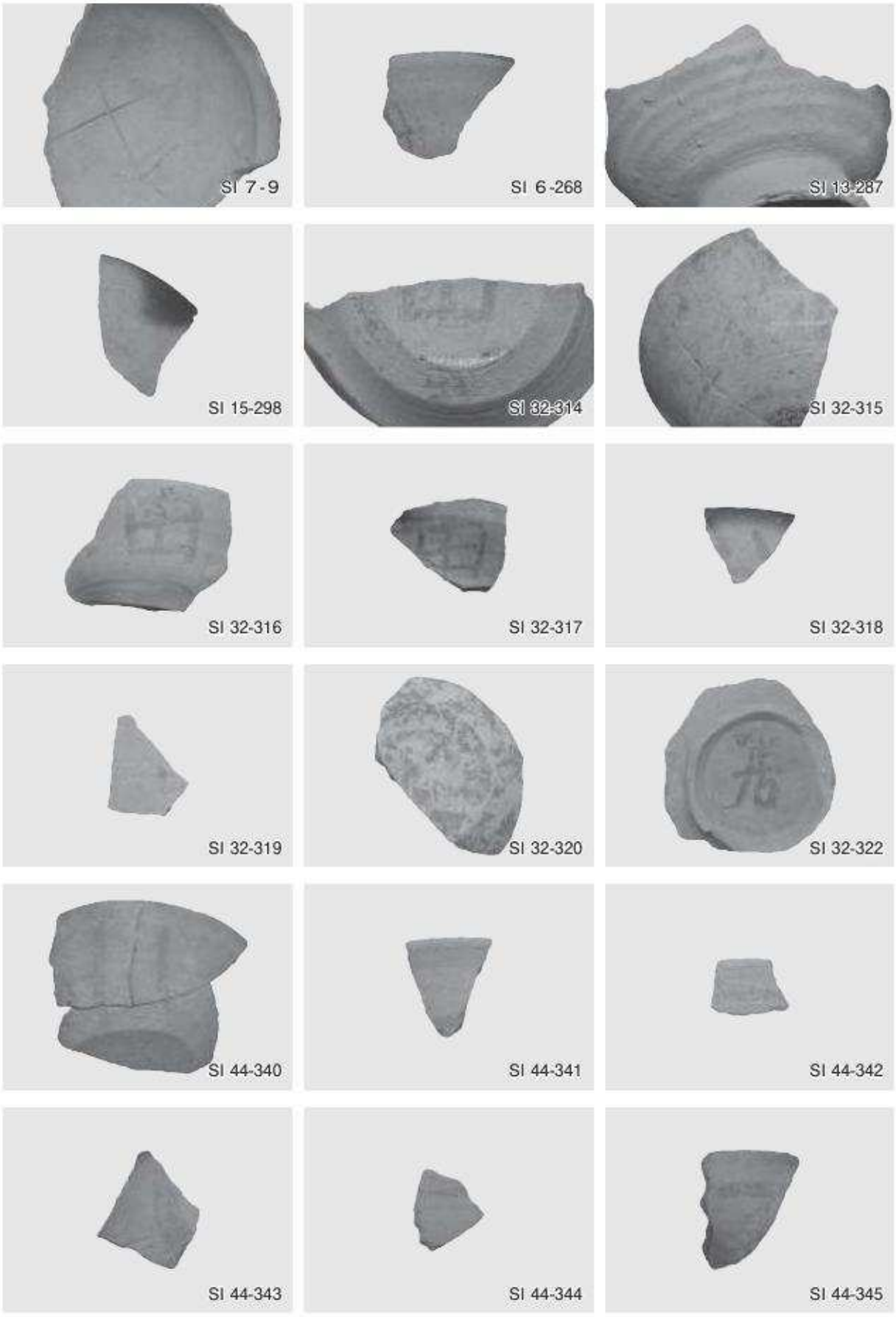
SK317-675

遺構外-718

遺構外-717

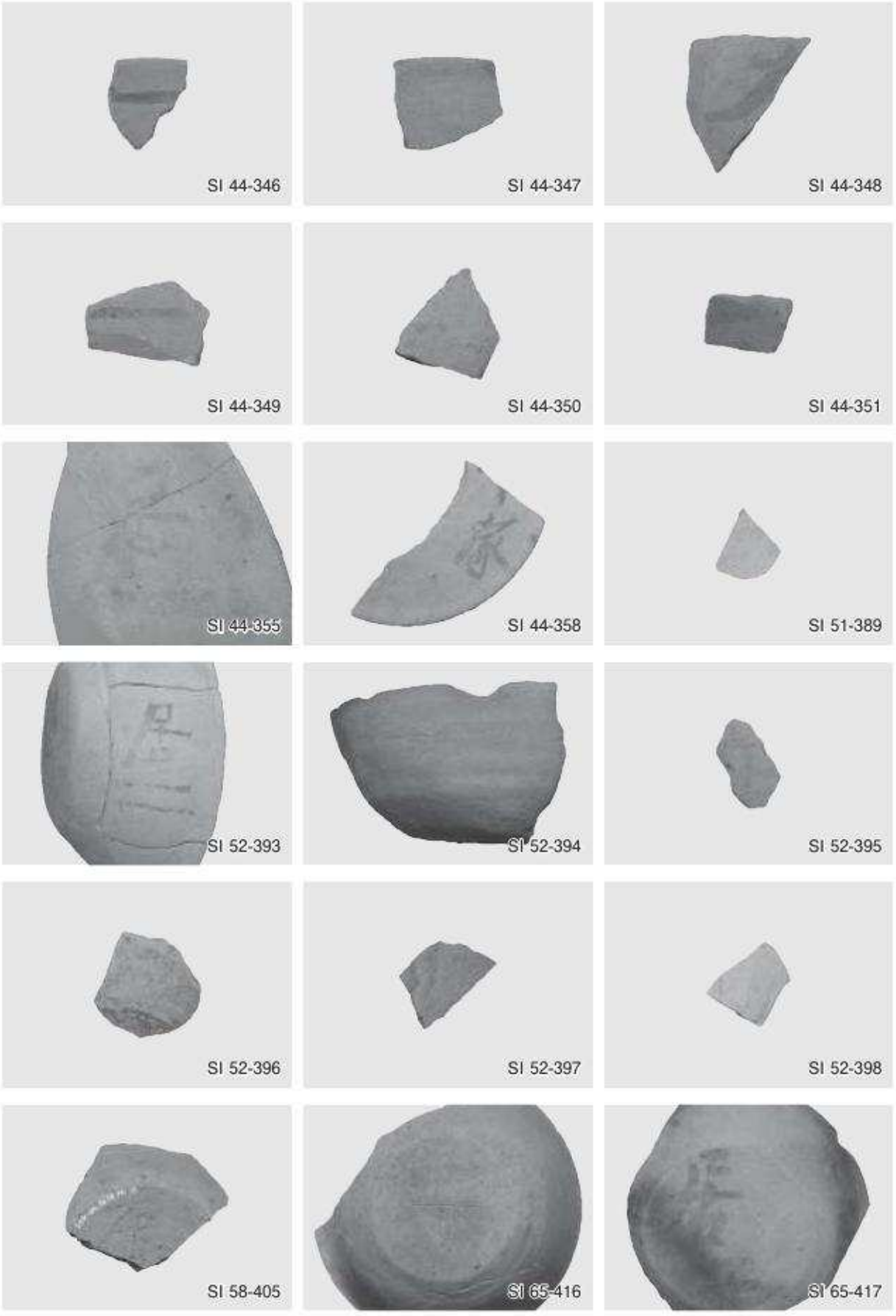
UP 1 -673

第317・744・766・801号土坑，第 1 号地下式坑，遺構外出土土器

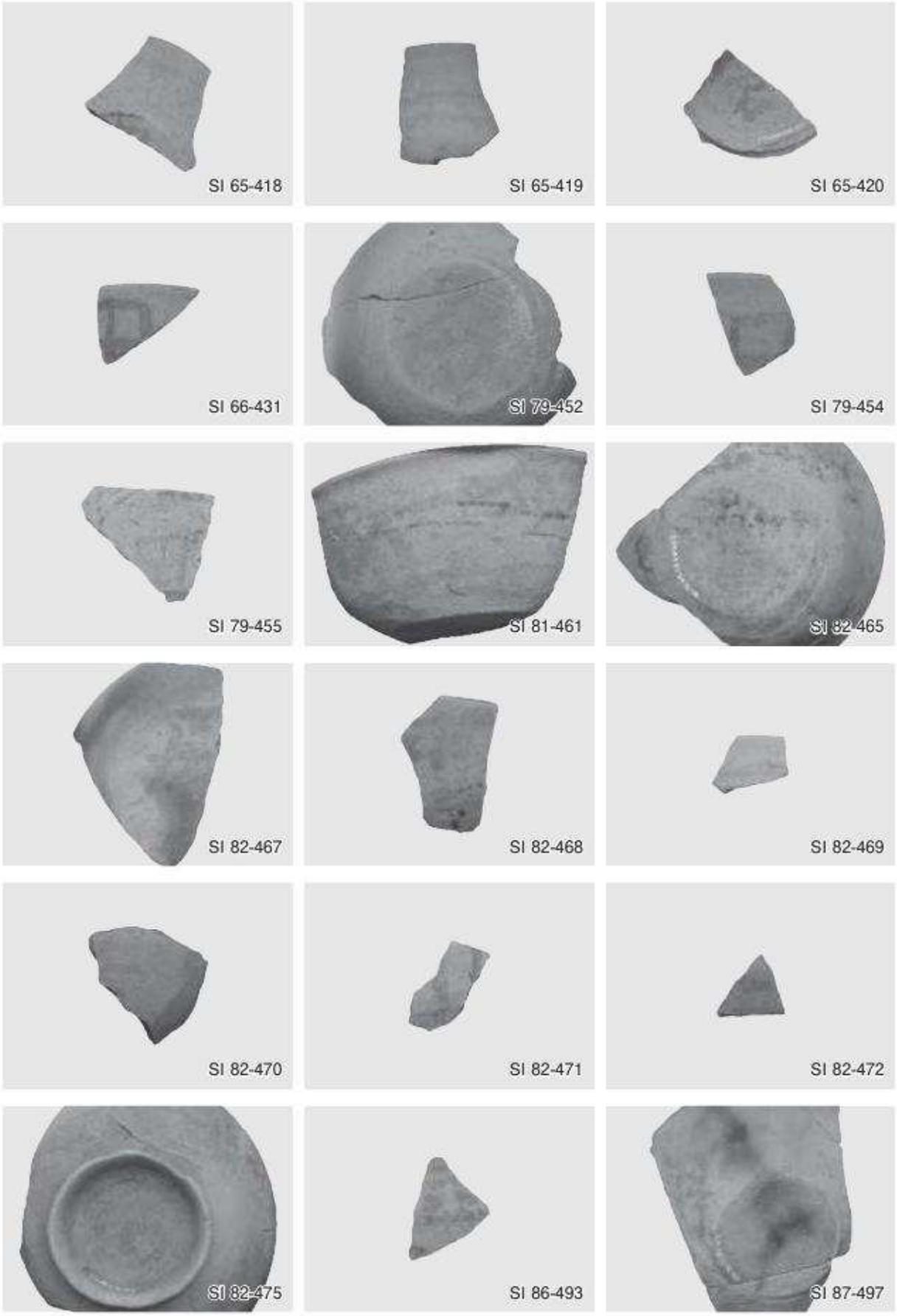


第6・7・13・15・32・44号竪穴建物跡出土土器

PL79

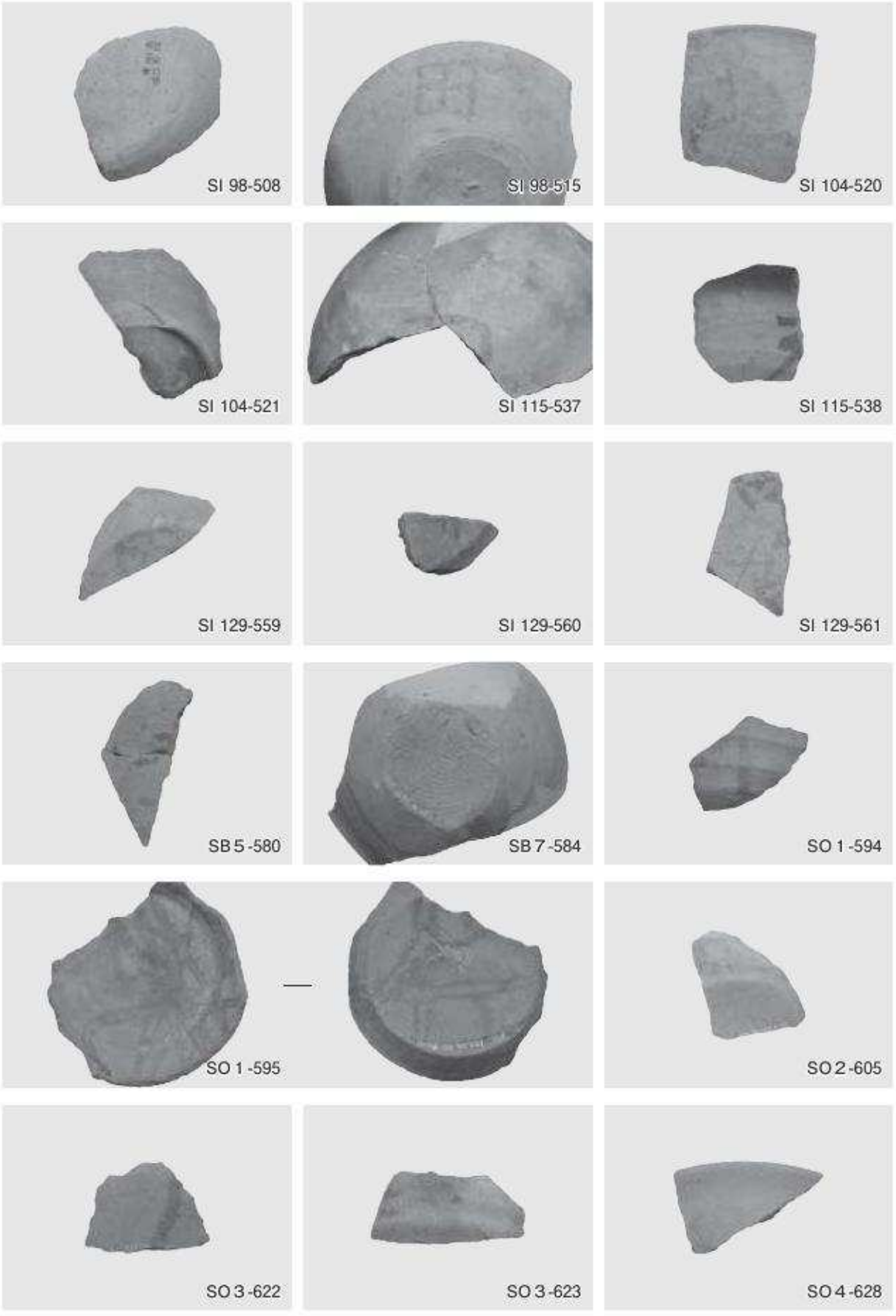


第44・51・52・58・65号竪穴建物跡出土土器

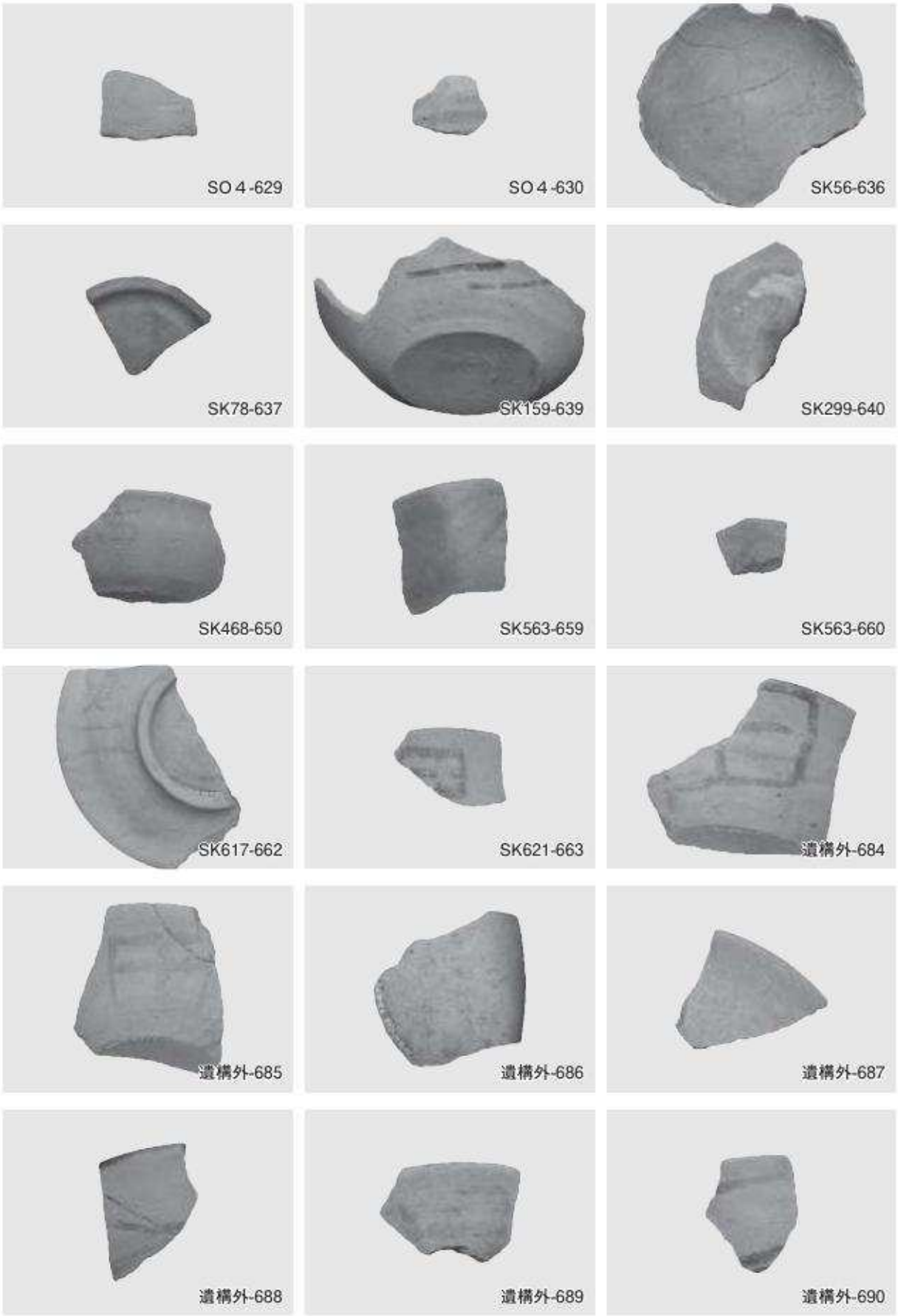


第65・66・79・81・82・86・87号竪穴建物跡出土土器

PL81

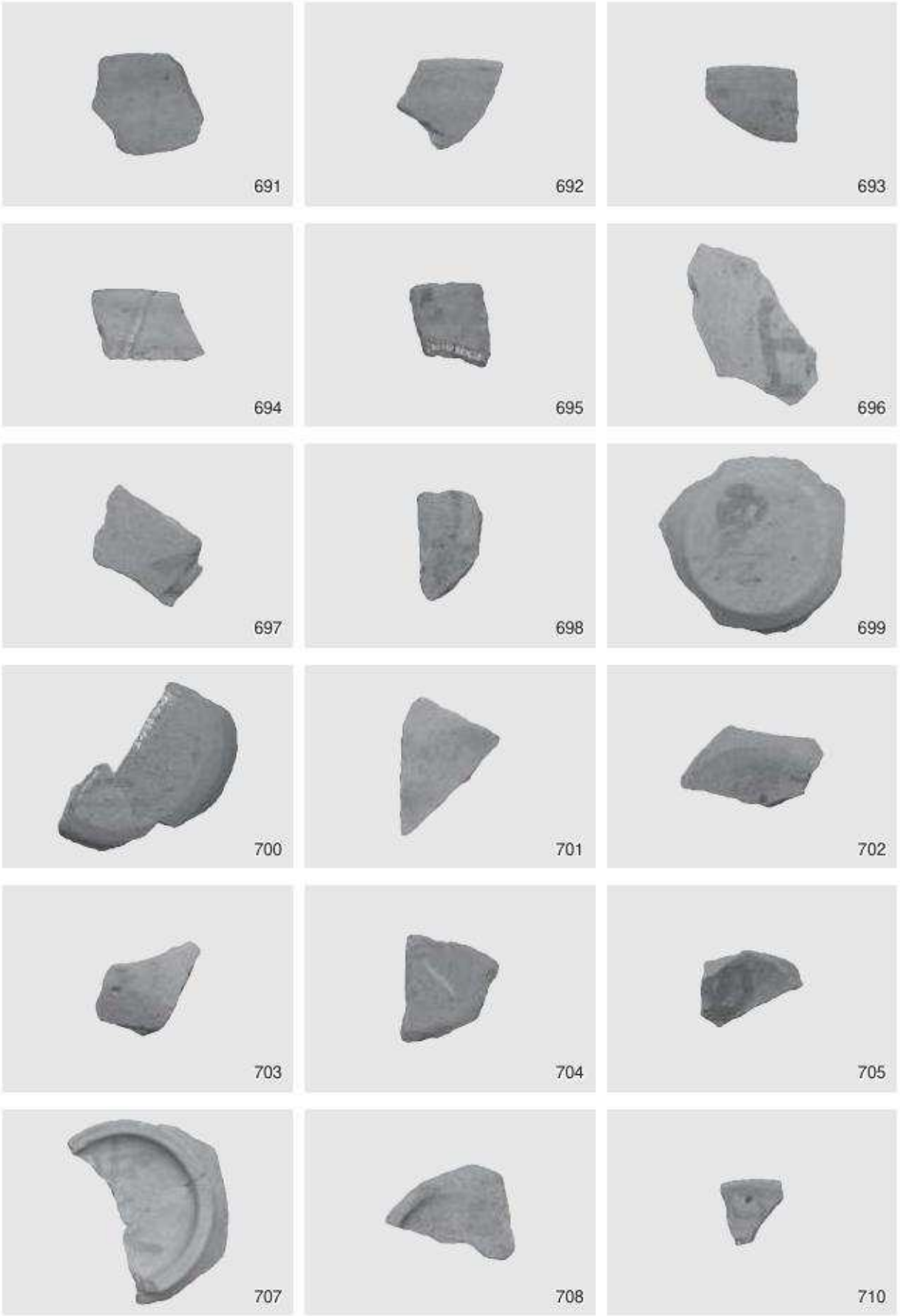


第98・104・115・129号竪穴建物跡，第５・７号掘立柱建物跡，第１～４号大型円形土坑出土土器



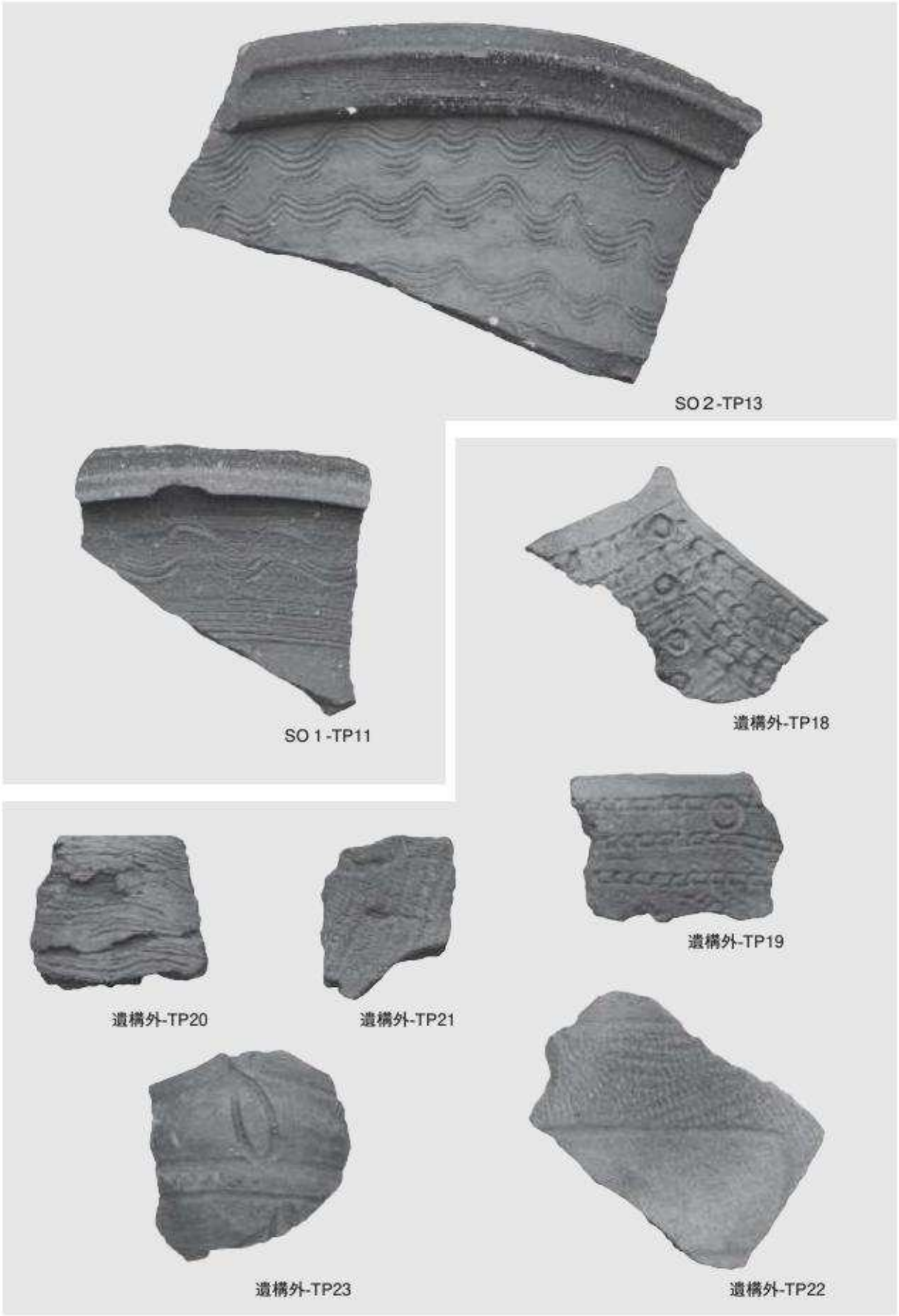
第４号大型円形土坑，第56・78・159・299・468・563・617・621号土坑，遺構外出土土器

PL83



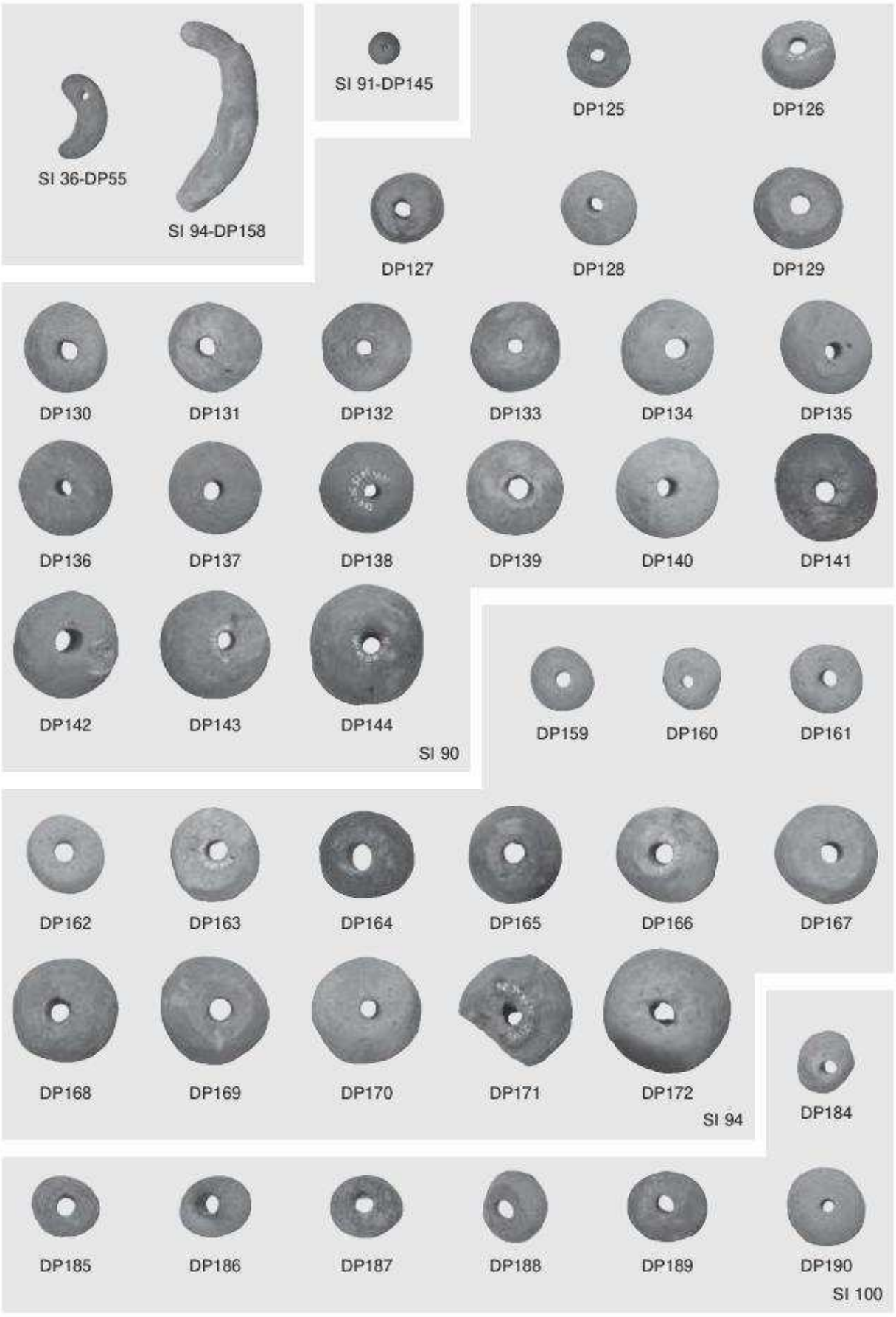
遺構外出土土器

PL84

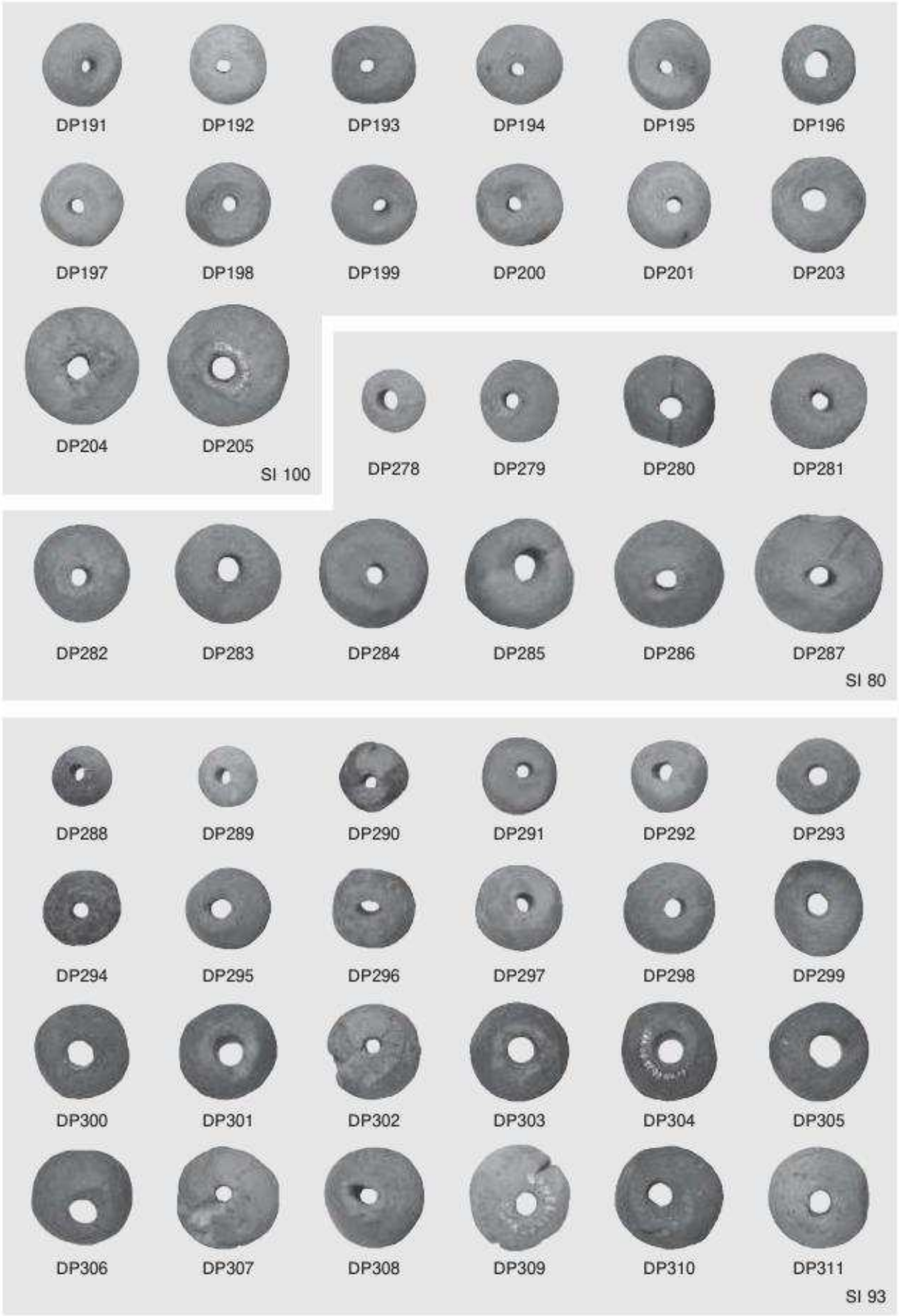


第１・２号大型円形土坑，遺構外出土土器

PL85

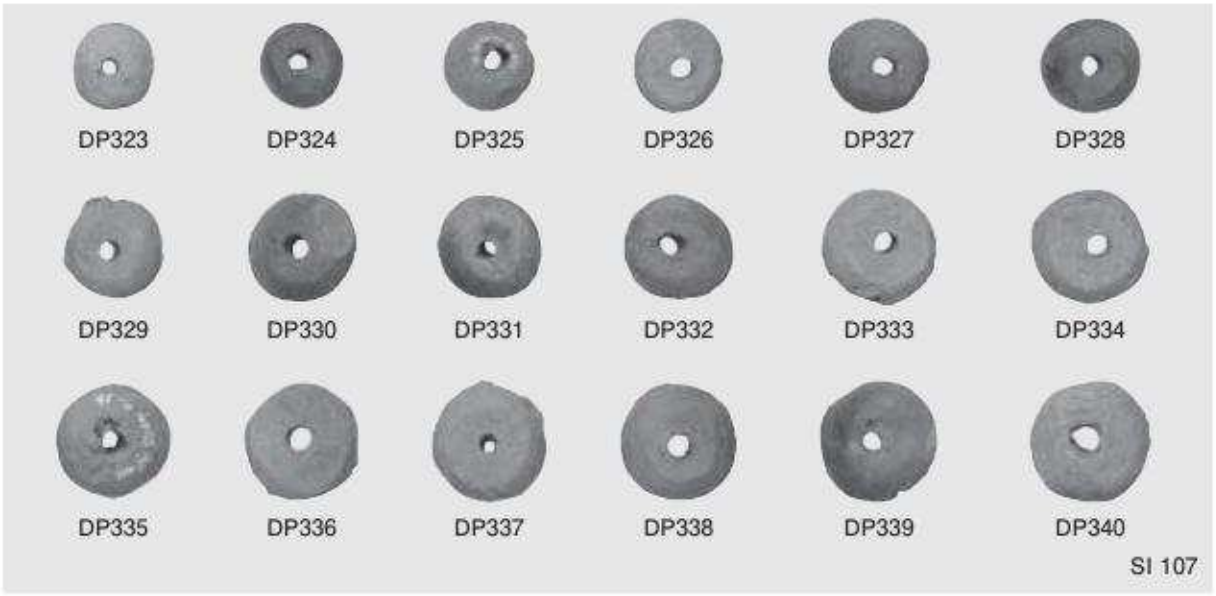


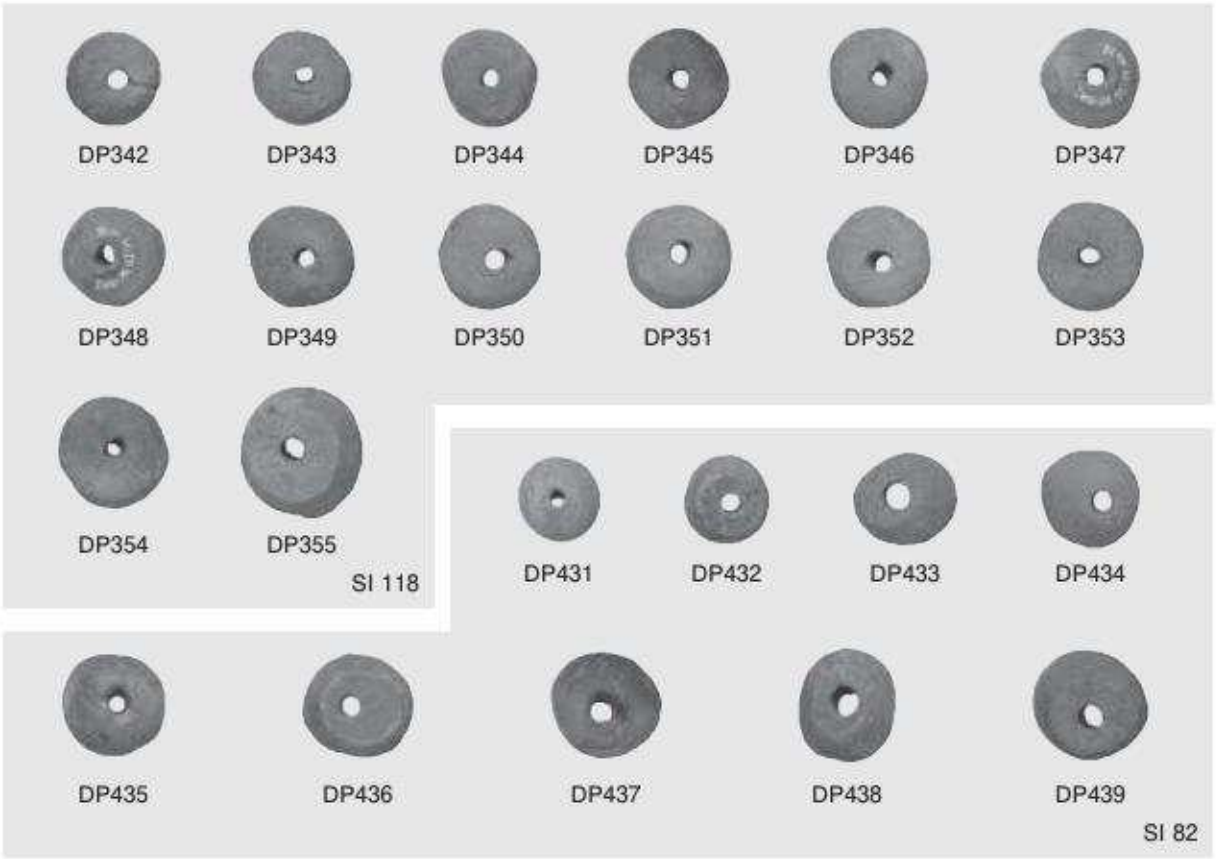
第36・90・91・94・100号竪穴建物跡出土土製品

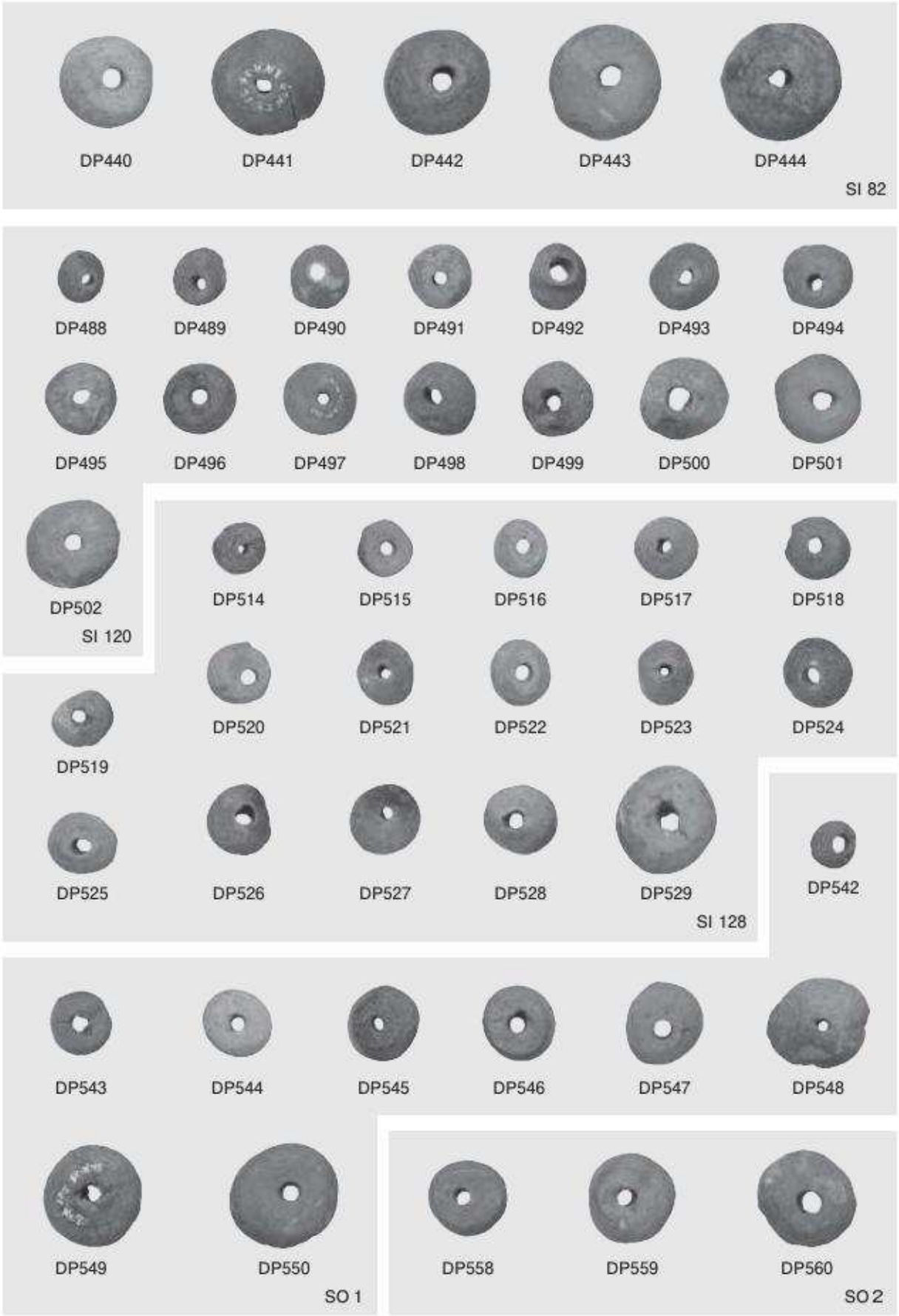


第80・93・100号竪穴建物跡出土土製品

PL87





第82・93・107・118号竪穴建物跡出土土製品

第82・120・128号竪穴建物跡，第１・２号大型円形土坑出土土製品

PL89

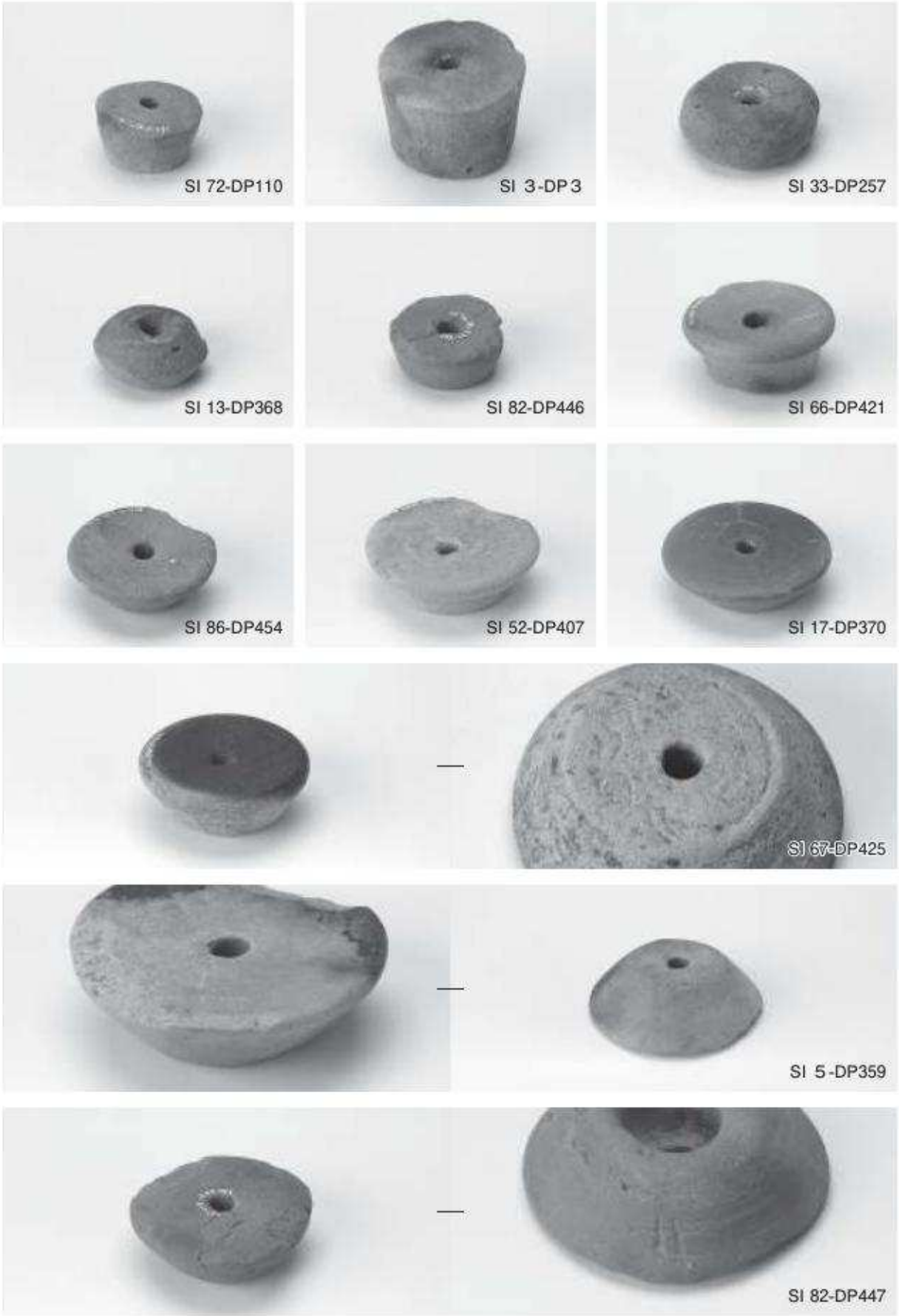
第２～４号大型円形土坑，遺構外出土土製品

第33・42・44・48・50・70・82・102・131・139号竪穴建物跡，第３号掘立柱建物跡，
第１・２号大型円形土坑出土土製品

PL91

第131号竪穴建物跡，第１号大型円形土坑，遺構外出土土製品

PL92



第3・5・13・17・33・52・66・67・72・82・86号竪穴建物跡出土土製品

PL93

SI 98-DP470

遺構外-DP715

SK108-DP597

SI 89-DP464

SI 82-DP448

遺構外-DP716

SO 4 -DP587

SK47-DP589

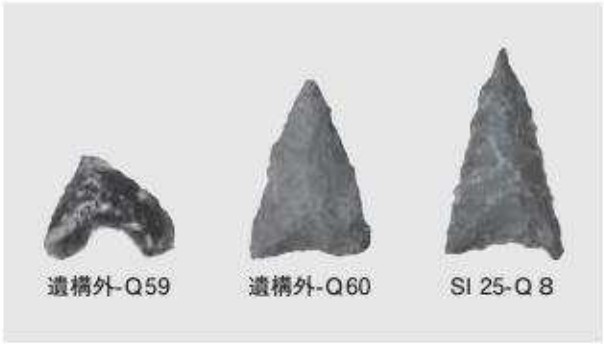
SI 31-DP53

SI 84-DP121

SI 89-DP461

第31・82・84・89・98号竪穴建物跡，第４号大型円形土坑，第47・108号土坑，遺構外出土土製品

PL94

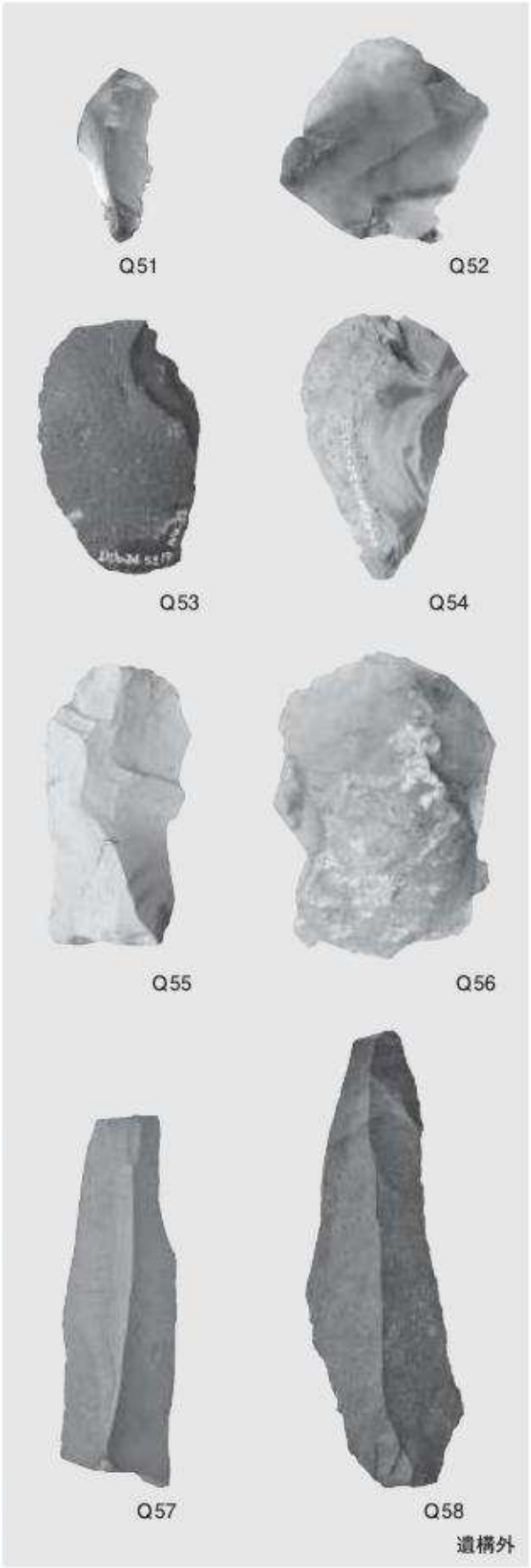

遺構外-Q59　遺構外-Q60　SI 25-Q 8

SI 85-Q28

遺構外-Q61

遺構外-Q62

SI 7-Q 2


Q51　Q52　Q53　Q54　Q55　Q56　Q57　Q58　遺構外

第７・25・85号竪穴建物跡，遺構外出土石器

PL95

SI 117-Q38

SI 90-Q29

SI 108-Q37

SI 43-Q19

SI 91-Q33

SI 121-Q39

SI 97-Q35

SI 68-Q26

SI 68-Q25

SI 23-Q41

SI 126-Q47

SI 98-Q46

SI 44-Q44

SF 1-Q50

遺構外-Q64

第23・43・44・68・90・91・97・98・108・117・121・126号竪穴建物跡，第1号道路跡，遺構外出土石器

遺構外-Q67

遺構外-Q65

遺構外-Q66

SI 45-Q20

SI 84-Q27

SI 76-Q43

SI 128-Q48

遺構外-Q73

SI 45-Q23

SF 1-Q49

SI 7-Q3

SI 45-Q21

SI 45-Q22

SI 142-Q40

SI 27-Q9

SI 27-Q10

SI 27-Q11

SI 27-Q12

SI 27-Q13

SI 19-Q5

SI 19-Q6

SI 3-Q1

SI 36-Q18

遺構外-Q68

遺構外-Q69

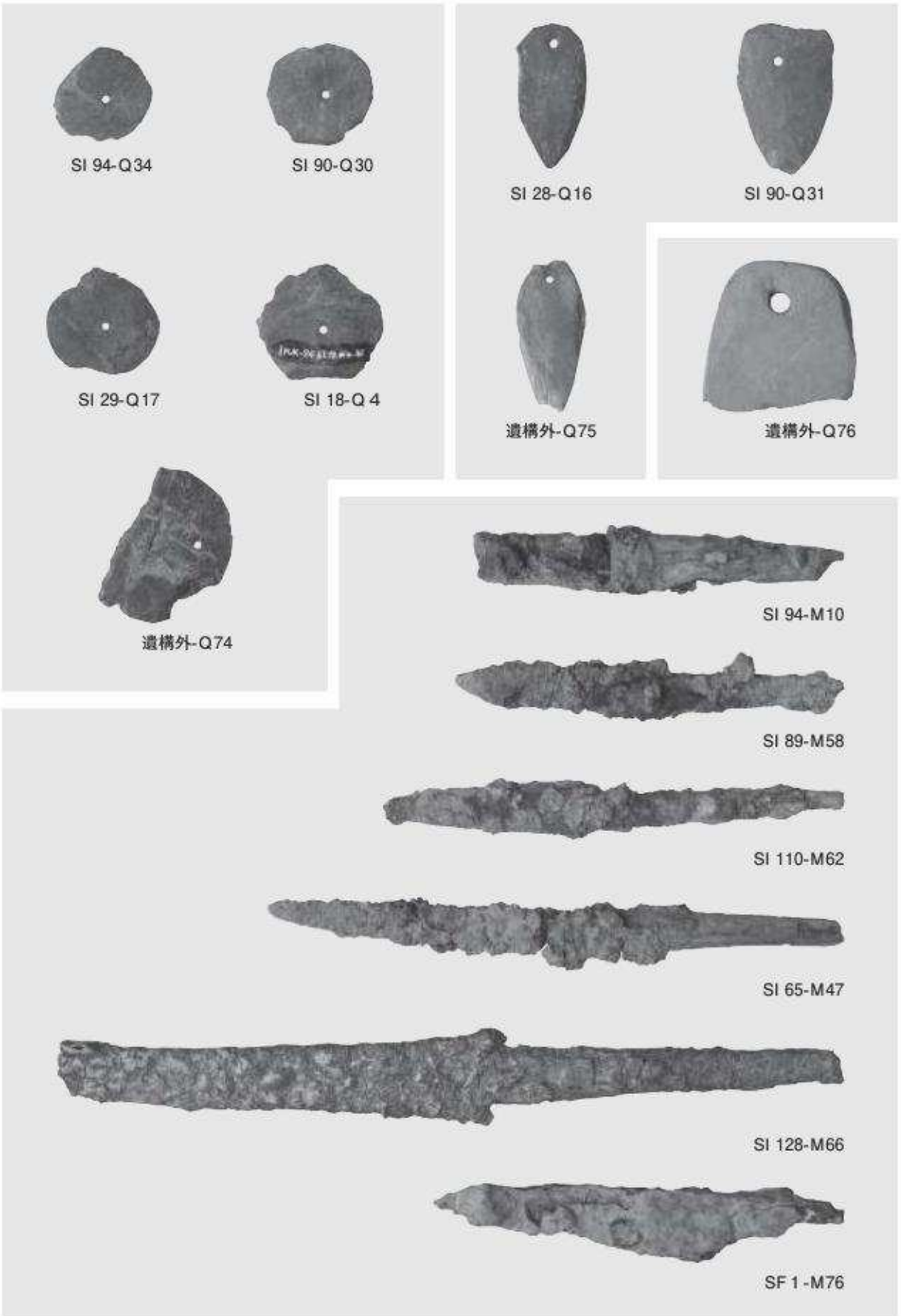
遺構外-Q70

遺構外-Q71

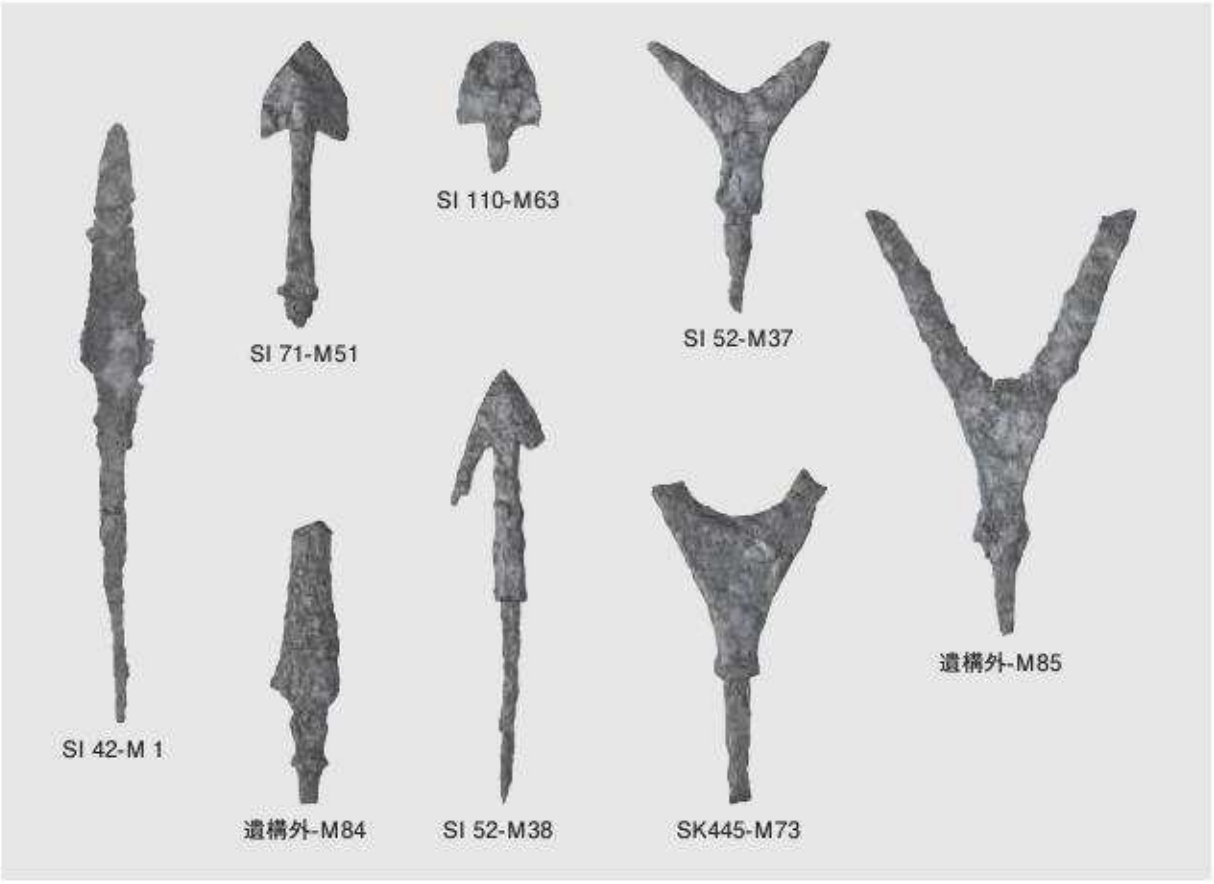
遺構外-Q72

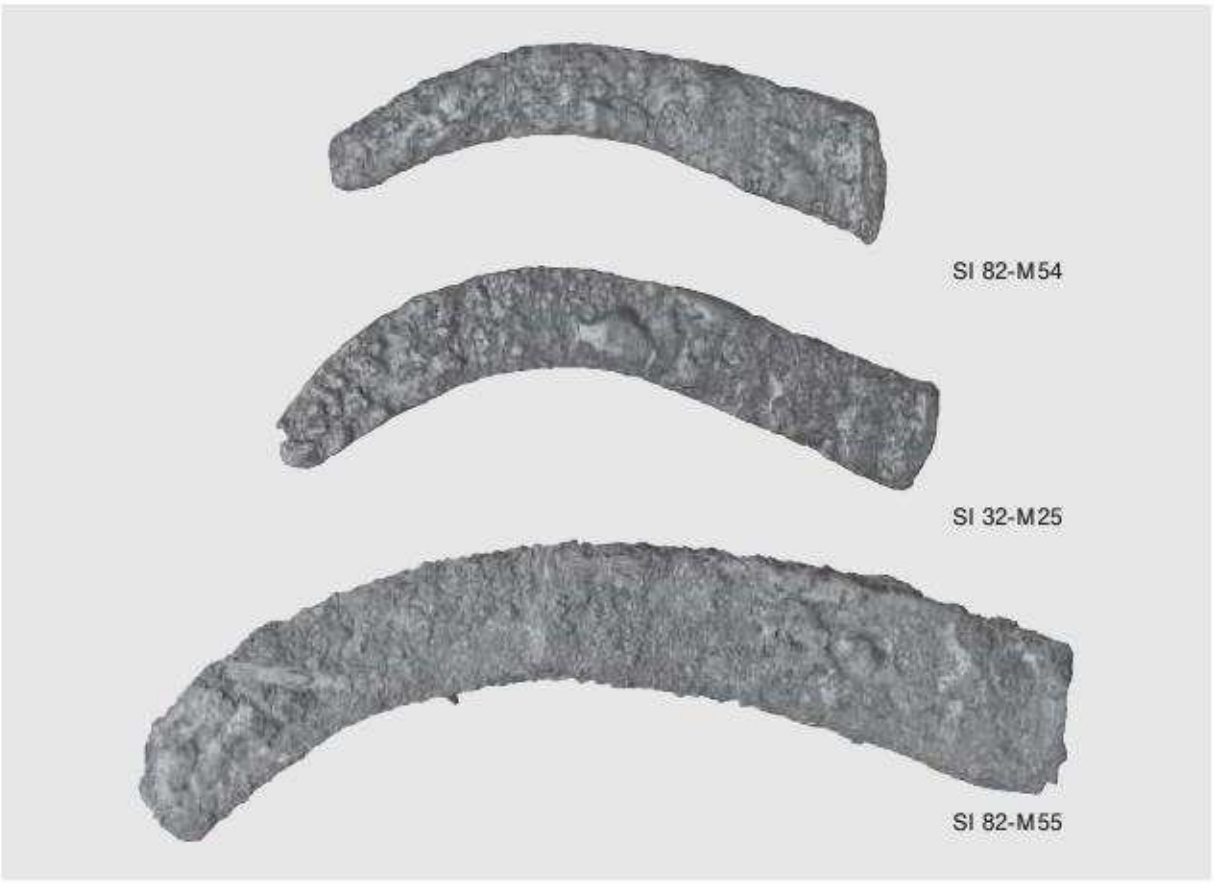
第3・7・19・27・36・45・76・84・128・142号竪穴建物跡，第1号道路跡，遺構外出土石器・石製品

PL97



第18・28・29・65・89・90・94・110・128号竪穴建物跡，第 1 号道路跡，遺構外出土石製品，金属製品





第32・42・52・71・82・110号竪穴建物跡，第445号土坑，遺構外出土金属製品

PL99

第44・70・76・89・99・100号竪穴建物跡，第１号方形竪穴遺構，第１号地下式坑，
第１・３号大型円形土坑，第１号道路跡，遺構外出土金属製品

PL100

第13・66・120・129号竪穴建物跡，第２・４号大型円形土坑，遺構外出土土器，金属製品

PL101

トレンチ掘削状況

調査終了状況①

調査終了状況②

1

2

19

20

26

38

39

92

17

106

第１号遺物包含層出土土器

抄　　録

ふりがな	しみずこふんぐん　かみやいせき　かみやみなみいせき
書名	清水古墳群　神屋遺跡　神屋南遺跡
副書名	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道建設事業地内埋蔵文化財調査報告書
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第405集
著者名	齋藤和浩　坂本勝彦　田中万里子　海老澤稔
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団
所在地	〒310－0911　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　　TEL 029－225－6587
発行日	2016（平成28）年3月18日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
清水古墳群	茨城県稲敷市 大字清水字神屋 884番地ほか	08 441－160 449－037	36度 55分 57秒	140度 20分 33秒	27 ～ 28m	20110101 ～ 20110228	792㎡	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道建設事業に伴う事前調査
神屋遺跡	茨城県稲敷市 大字清水字神屋 800番地ほか	08449 － 038	36度 55分 54秒	140度 20分 36秒	27 ～ 28m	20110401 ～ 20110831 20120406 ～ 20130331	3,523㎡ 8,333㎡	
神屋南遺跡	茨城県稲敷市 大字清水字入谷 427番地2ほか	08449 － 039	36度 55分 52秒	140度 20分 38秒	10 ～ 27m	20120801 ～ 20130331	1,492㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
清水古墳群	墓域	古墳	古墳　1基	土師器（坏・甕・小形甕・甑），土製品（土玉），石器（紡錘車）	室町時代の第1号地下式坑からは，銭種45種類，総枚数1,907枚の銭貨が，緡銭と想定される状態で出土した。
	その他	室町	地下式坑　4基 土坑　1基	土師質土器（小皿・内耳鍋），陶器（天目茶碗），土製品（管状土錘），石器（磨石），緡銭（乾元重寶・開元通寶・皇宋通寶・元豊通寶・元祐通寶・洪武通寶・永樂通寶・宣徳通寶ほか）	
		江戸	塚　1基 土坑　1基	陶／磁器（瓶・灯明皿・小杯・小椀・鉢・箱蓋・急須・大鉢・擂鉢），石塔（石祠型），銅製品（煙管），銭貨（淳化元寶・祥符元寶・元豊通寶・元祐通寶・政和通寶・寛永通寶）	
		時期不明	土坑　90基 溝跡　4条 ピット群　3か所	縄文土器（深鉢），土師器（高台付坏），土師質土器（内耳鍋），陶器（灯明皿$_3$），土製品（土玉・管状土錘），石器・石製品（敲石・砥石・紡錘車・有孔円板・剣形品）	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神屋遺跡	狩猟場	縄文	陥し穴 8基	縄文土器（深鉢）	平安時代の第4号大型円形土坑からは，県内初となる火熨斗が，ほぼ完形の状態で出土した。
	集落跡	縄文	竪穴建物跡 2棟 土坑 3基	縄文土器（深鉢）	
		古墳	竪穴建物跡 52棟 土坑 13基	土師器，須恵器，土製品（勾玉・土玉・管状土錘・支脚・紡錘車・羽口），石器（石錘，鎌・砥石・金床石・紡錘車），石製品（臼玉・小玉・有孔円板・剣形品），金属製品（刀子・鏃・釘・鉸具・責金具）	
		奈良	竪穴建物跡 19棟 土坑 7基	土師器，須恵器，土製品（土玉・管状土錘・紡錘車・支脚・羽口），石器（磨石・砥石），石製品（剣形品），金属製品（刀子・鎌，釘・耳環）	
		平安	竪穴建物跡 56棟 掘立柱建物跡 10棟 大型円形土坑 4基 土坑 94基	土師器，須恵器，灰釉陶器（皿・瓶・長頸瓶・甕），緑釉陶器（椀・小瓶），土製品（土玉・管状土錘・支脚・紡錘車・羽口・円筒形土製品），石器（砥石・紡錘車），金属製品（刀子・鏃・鎌・釘・閂・引手金具・火熨斗・耳環・小鈴）	
	墓域その他	鎌倉・室町	方形竪穴遺構 1基 地下式坑 1基 火葬施設 1基 粘土貼土坑 3基 土坑 2基	土師質土器（小皿・鍋・内耳鍋），陶器（碗・端反皿・鉢・片口鉢・甕），金属製品（釘），雲母片岩，骨片	
	その他	江戸	道路跡 1条 土坑 13基	土師質土器，瓦質土器，陶器，磁器，石器，石製品，金属製品，ガラス製品，瓦	
		時期不明	竪穴建物跡 1棟 掘立柱建物跡 1棟 墓坑 1基 土坑 585基 溝跡 14条	縄文土器，土師器，須恵器，土師質土器，陶器，磁器，土製品，石器，石製品，金属製品，銭貨，鉄滓，人骨，瓦	
神屋南遺跡	その他	縄文～江戸	遺物包含層 1か所	縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，土師質土器，土製品，石器，剥片	

要約

清水古墳群では，古墳の周溝を検出し，周知の第９号墳であることを確認した。室町時代の地下式坑からは銭貨が緡銭の状態で出土している。第７号墳については調査の結果，江戸時代に造営された塚であることが明らかになった。

神屋遺跡は，縄文時代から江戸時代までの複合遺跡である。集落の盛期は古墳時代後期と平安時代で，平安時代の竪穴建物跡からは緑釉陶器・灰釉陶器や，刀子・円面硯・墨書土器などが出土しており，信太郡小野郷の中心的な集落の一つであったと考えられる。紡錘車も数多く出土し，糸の生産を行っていた可能性が高い。大型円形土坑からは多量の遺物が出土し，祭祀が行われた遺構であると考えられる。

神屋南遺跡は，神屋遺跡の南斜面に隣接しており，神屋遺跡と同時期の遺物が長い期間にわたって流れ込むか投棄されたことにより，遺物包含層が形成されたものとみられる。

印 刷 仕 様

編　集	ＯＳ	Microsoft Windows 7 Home Premium ServicePack 1
	編集	Adobe InDesign CS6
	図版作成	Adobe Illustrator CS6
	写真調整	Adobe Photoshop CS6
	Scanning	6×7 film　Nikon SUPER COOLSCAN9000
	図面類	EPSON ES－10000G
使用Font		OpenType　リュウミンPro・L
写　真	線数	モノクロ175線以上　カラー210線以上
印　刷		印刷所へは，Adobe InDesign CS6でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第405集

清水古墳群
神屋遺跡
神屋南遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
建設事業地内埋蔵文化財調査報告書

下　巻

平成28（2016）年　3月15日　印刷
平成28（2016）年　3月18日　発行

発行　公益財団法人茨城県教育財団
〒310－0911　水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL　029－225－6587
ＨＰ　http://www.ibaraki-maibun.org

印刷　株式会社あけぼの印刷社
〒310－0804　水戸市白梅1丁目2番11号
TEL　029－227－5505

付図　清水古墳群・神屋遺跡・神屋南遺跡遺構全体図（『茨城県教育財団文化財調査報告』第 405集）